大宰府跡　2

－特別史跡大宰府跡（客館地区）の調査－

【大宰府条坊跡第 267 次調査】

令和 4 年
(2022)
太宰府市教育委員会

Ⅰ期整備された特別史跡大宰府跡（客館地区）
南から政庁跡・大野城跡がある四王寺山を望む

Ⅰ期整備された特別史跡大宰府跡（客館地区）
上が北東

序

本書は、太宰府市朱雀３丁目、西鉄二日市駅の北西側に所在した西日本鉄道㈱の二日市操車場跡地での埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

当該地は、日本古代における最大の地方官司大宰府にあった大規模な都市遺跡・大宰府条坊跡のほぼ中央に位置し、本書において報告するように奈良時代から平安時代にかけての人びとの生活痕跡が遺構ならびに遺物として確認できました。特に検出された建物遺構や出土した輸入陶磁器、金属製食器は大宰府内でも政庁跡を含む地域に匹敵するほどの規模と質・量を持つことが明らかになりました。

これらの成果に基づき当該地は、西日本鉄道㈱と協議を重ね、史跡指定の合意に至り、平成 26（2014）年 10 月に特別史跡大宰府跡に追加指定され、その後、公有化を行っています。整備計画立案に関しては、近隣自治会の住民の皆さまとワークショップを行うことで様々なご提案・ご意見をいただきながら、令和元年度に建物跡や条坊路を地上標示する第Ⅰ期整備を行いました。また、併せて関連計画事業である「太宰府市歴史的風致維持向上計画」に基づく便益施設整備を行い、展望所を備えた便益施設とともに大型バス駐車が可能な多目的広場を併設し、令和２（2020）年４月より「特別史跡大宰府跡（客館跡）」として供用を開始しています。

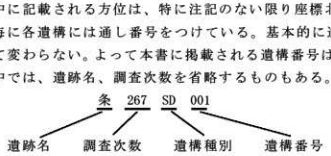
本書が、学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、文化財愛護の精神が高まることを心より願っております。
結びになりますが、本調査に対しご理解ご協力いただきました関係各位ならびに諸機関の方々に心から感謝申し上げます。

令和４年３月

太宰府市教育委員会
教育長　樋田　京子

例言

1. 本書は、太宰府市朱雀3丁目305番7の一部、305番8の一部で行った、大宰府条坊跡第267次調査の埋蔵文化財発掘調査に関する報告書である。
2. 本書の構成は、遺構・遺物の報告をまとめている。
3. 調査整理は本市で作成した調査指針に則って行っている。
4. 調査に至る経緯については、Ⅲ．調査の経緯、保存に至る経緯を参照いただきたい。
5. 調査は井上信正、柳智子、端野晋平、下高大輔、大塚正樹が行った。
6. 遺構実測図および遺構配置図は、全て国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。したがって、図中に記載される方位は、特に注記のない限り座標北（G.N.）を指している。
7. 調査次毎に各遺構には通し番号をつけている。基本的に遺構番号は調査整理報告保管まで一貫して変わらない。よって本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお報告の中では、遺跡名、調査次数を省略するものもある。



8. 本書に使用した分類は、基本的に以下のものによっている。

土器　『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財第7集　太宰府市教育委員会　1983年

陶磁器　『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
　太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会　2000年

瓦　『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』九州歴史資料館 2000年

石鍋　森田　勉　「滑石製容器」『佛教芸術』148号　毎日新聞社　1983年

灰釉陶器　藤澤良祐　「東海地方における窯業生産の転換期について」『世界陶磁全集』1990年

分類は各担当者で行った。

9. 出土品について、佐波理については小栗昭彦（奈良県立橿原考古学研究所）、木村法光（元宮内庁正倉院事務所）、成瀬正和・西川明彦・山片唯華子（宮内庁正倉院事務所）、西谷正（九州大学名誉教授）、三輪嘉六（九州国立博物館館長）の各氏、奈良三彩について巽淳一郎（京都橘大学）、高橋照彦（大阪大学）の各氏、畿内産土師器について林部均氏（国立奈良文化財研究所）にご教示いただいた。第277次調査出土の木製品については、調度品類・建築部材について箱崎和久（（独）奈良文化財研究所）、扇崎由（岡山市教育委員会）、山口譲治（福岡市鴻臚館事務所）、山岸常人（京都大学大学院教授）、木村法光（元宮内庁正倉院事務所）の各氏にご教示いただき、木簡については坂上康俊（九州大学）、渡辺晃宏ほか（独）奈良文化財研究所史料調査室の各氏をはじめ、多くの方々にご指導ご教示いただいた。この他の出土品についても多くの方々にご指導ご教示をいただいた。

10. 出土品の材質分析については、鳥越俊行（九州国立博物館）、田上勇一郎（福岡市埋蔵文化財センター）、降幡順子（（独）奈良文化財研究所）の各氏にご協力いただいた。

木簡の赤外線撮影についても、田上勇一郎（福岡市埋蔵文化財センター）、松川博一（九州歴史資料館）の各氏にご協力いただいた。

11.　既刊行報告書掲載分を除くと、遺物図版作成については、遠藤茜が、製図・浄書は福井円、今岡一恵、吉富千春ほかが、デジタルトレースは井上のほか、瀬戸口みな子、市川晴美、吉村有紀、久味木理恵が行った。

12.　出土遺物および図面、写真、デジタルデータ等の記録類は、太宰府市教育委員会が保管している。

13.　本書の執筆は、調査担当者ならびに中島恒次郎が行い、編集は中島が行った。

目　次

Ⅰ．調査の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅱ．調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅲ．調査報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

第 267 次調査

（1）調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

（2）基本層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

（3）第 1 調査面検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

（4）第 1 調査面検出遺構出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

（5）第 2・3 調査面検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61

（6）第 2・3 調査面検出遺構出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66

（7）第 4 調査面検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95

（8）第 4 調査面検出遺構出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95

Ⅴ．自然科学分析

（1）大宰府条坊跡第 267 次調査出土動物遺存体分析報告・・・・・・・・・・・・161

（2）大宰府条坊跡第 267 次出土獣骨の同定・・・・・・・・・・・・・・・・・・162

Ⅵ．まとめ

（1）条坊路関係遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・164

（2）左郭一坊路と十四条路の交差点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165

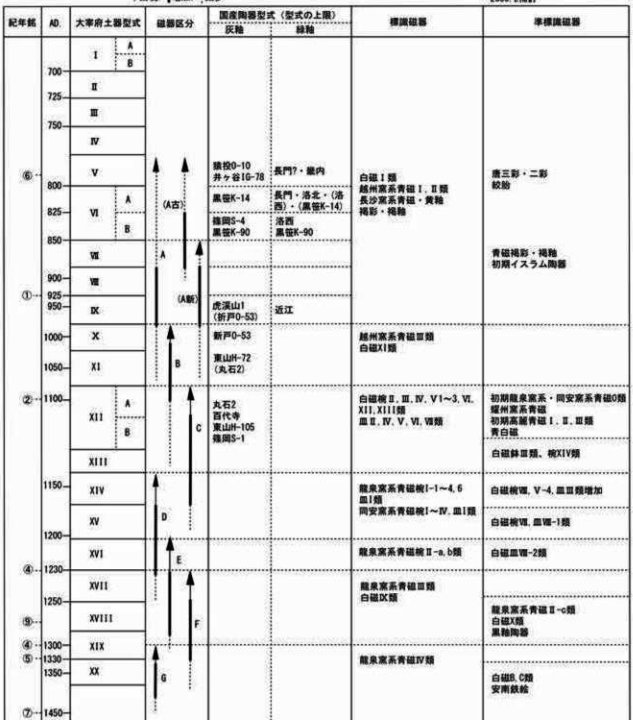
（3）奈良時代の大型掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165

（4）白玉製丸鞆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・165

写真図版

遺構　Pl. 1 ～ 3

遺物　Pl. 4・5



紀年銘資料

①A.D. 927　延長5年、大宰府74次SD205A溝
②A.D. 1091 寛治5年、平安京左京4条1坊SE8井戸
③A.D. 1224 貞応3年、大宰府33次SD605溝
④A.D. 1304 嘉元2年、大宰府109. 111次SD3200溝
⑤A.D. 1330 元徳2年、大宰府45次SX1200池
⑥A.D. 784　延暦3年、長岡京102次SD10201溝
⑦A.D. 1459・1465 長禄3・寛正5年、福岡市井相田C11・SG16池
⑧A.D. 1501 文亀元年、大宰府70次SD1805溝
⑨A.D. 1265 文永2年、博多62次713土壙

文献

①九州歴史資料館　「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
②田辺昭三・吉川義彦　「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊」1975 平安京調査会
③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
⑥長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
⑦福岡市教育委員会「井相田C遺跡II」「福岡市埋蔵文化財調査報告書179」1988
⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
⑨福岡市教育委員会「博多48」「福岡市埋蔵文化財調査報告書397」1995

大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁編年

Fig.1 調査地と周辺調査地点（1/5,000）

Ⅰ．遺跡の位置と環境

太宰府市（以下「本市」とする）は福岡県の中央部、福岡市から南東約16km付近に位置し、北は四王寺山、北東に宝満山があり、市の北部を東西に流れる御笠川は、宝満山に源を発し鷺田川、大佐野川と合流し、特別史跡水城跡を越えて、博多湾に注いでいる。地理的には南北の山稜に挟まれた峡間地で、福岡市から久留米に抜ける交通路の要所に位置している。

こうした地理的環境にある本市では、現在確認されている資料から後期旧石器時代以降、現在にいたるまで継続的に人びとの活動があったことが分かっている。特に本市の歴史を特徴づけるのは、本市の名の由来ともなる地方最大の官司「大宰府」置かれた日本古代で、その後の本市の歴史を形づくる上で重要な出来事といえる。この大宰府が置かれたことで東西・南北を碁盤の目のように区画したいわゆる条坊制が敷かれ大宰府条坊と呼称される都市が広がっていたことが考古資料ならびに文献資料から伺うことができ、現在も旧地形を残す地域では条坊路の痕跡を踏襲する道路や地割りが残されている。大宰府の機能が失われた平安時代後期から江戸時代にかけても太宰府天満宮を中心に様々な歴史の舞台となり、埋蔵文化財としても本市の東部に偏在しつつ色濃く残されている。

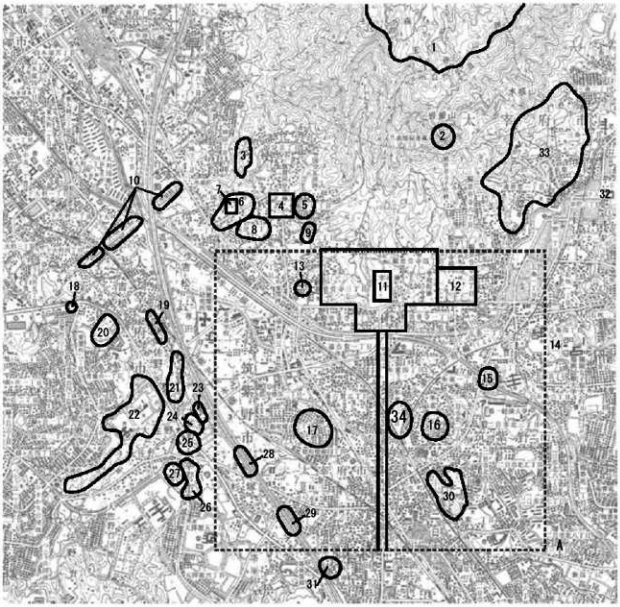
本報告で記述する大宰府条坊跡第267次調査区は、本市の南にある筑紫野市の市境にあり、周知の遺跡である大宰府条坊跡（鏡山猛復元）の中心近く、左郭13・14条2坊に位置し、条坊跡の中心をつらぬく朱雀大路の東側に隣接している。北には菅原道真の謫居地として知られる府の南館（現在の榎社）に近く、東には古代の般若寺が置かれた丘陵と隣接している。

Ⅱ．調査組織

調査は、平成19（2007）年度から平成20（2008）年度に、整理作業は令和2（2020）年度から令和3（2021）年度に、以下の体制で行った。

（平成19／2007年度）

統括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松永栄人（～9月30日）
		松田幸夫（10月1日～）
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信（～9月30日）
		菊武良一（10月1日～）
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一
		齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	髙橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	柳　智子
		下髙大輔



1. 大野城跡
2. 岩屋城跡
3. 陣ノ尾遺跡
4. 筑前国分寺跡
5. 辻遺跡
6. 国分松本遺跡
7. 筑前国分尼寺跡
8. 国分千足町遺跡
9. 御笠団印出土地
10. 水城跡
11. 大宰府政庁跡
12. 観世音寺
13. 遠賀団印出土地
14. 五条遺跡（峯薬師）
15. 君畑遺跡
16. 般若寺跡
17. 市ノ上遺跡
18. 神ノ前窯跡
19. 原口遺跡
20. 篠振遺跡
21. 前田遺跡
22. 宮ノ本遺跡
23. 雛川遺跡
24. フケ遺跡
25. 尾崎遺跡
26. 脇道遺跡
27. 殿城戸遺跡
28. 剣塚遺跡
29. 唐人塚遺跡
30. 峯・峯畑遺跡
31. 橋田山遺跡
32. 太宰府天満宮(安楽寺跡)
33. 原遺跡
34. 客館地区（報告地点）
A　大宰府条坊跡（鏡山案）

Fig.2　太宰府市とその周辺の遺跡（1/30,000）

		大塚正樹
		端野晋平

（平成 20 ／ 2008 年度）

統括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松田幸夫
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	菊武良一
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一
		齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	髙橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	柳　智子
		下高大輔
		大塚正樹

（令和 2 ／ 2020 年度）

統括	教育長	樋田京子
庶務	教育部長	菊武良一
	文化財課長	友添浩一
	保護活用係長	中島恒次郎
	主任主査	井上信正
		髙橋　学
		城戸康利（再任用）
	主任主事	岡部大治（再任用）
	主事	豊増慧大
調査	調査係長	山村信榮
	技術主査	遠藤　薗
		沖田正大
	主任技師	中村茂央
	技師	木村純也
	主任主査	宮崎亮一（都市計画課 景観・歴史のまち推進係）

（令和 3 ／ 2021 年度）

統括	教育長	樋田京子
庶務	教育部長	藤井泰人
	文化財課長	友添浩一
	文化財課副課長	中島恒次郎

	保護活用係長	井上信正
	主任主査	高橋　学
		城戸康利（再任用）
	主任主事	岡部大治（再任用）
	主事	篠田由梨
調査	調査係長	山村信榮
	技術主査	遠藤　茜
		沖田正大
	主任技師	中村茂央
		木村純也
	主任主査	宮崎亮一（都市計画課 景観・歴史のまち推進係）

Ⅲ．調査報告

（１）調査に至る経過

西鉄の開発に先立って、埋蔵文化財記録保存のための発掘調査を実施したものである。調査は、井上信正、柳智子、端野晋平、下高大輔、大塚正樹が担当した。

調査地番は、太宰府市朱雀３丁目 305-7。調査期間は平成 19(2007) 年２月１日～平成 20(2008) 年９月 26 日。調査面積は 2,310 ㎡。

（２）基本層位

表土から基盤層までの大まかな層序は、上位から表土・茶褐色土・橙褐色粘土（Ⅰ面形成層）・黒灰色土（Ⅱ面形成層）・灰茶色土（Ⅲ面形成層）・黄灰色シルト（Ⅳ面形成層）であり、調査グリッド内において Fig.3 に示す各種土層が観察できており、上下に列記した土層については上位・下位の関係にあるものの、横軸に記した土層の上下関係については明らかにし難い。

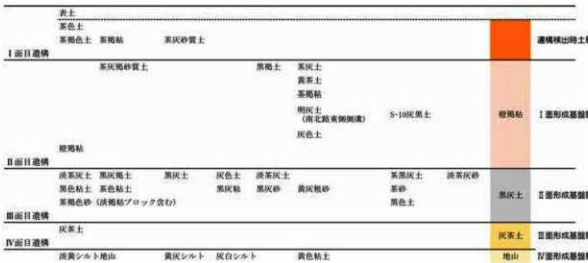


Fig.3　基本層位模式図

（３）第１調査面検出遺構

a. 掘立柱建物

267SB140（Fig.4）

Fig.4 第1調査面における主要遺構配置図（S=1/350）

調査区西壁付近のY～AA28・29で検出された2間×1間以上の建物である。267SX020除去後に検出し、267SK030に切り込む。a～fの6基の柱穴を確認し、b・cを除く柱穴では、根石もしくは礎石を検出している。柱穴の埋土は橙褐色土である。

267SB440（Fig.4）

調査区北東のAM～AO20～23で検出された4間×3間の建物である。畝状の溝と考えられる267SD415・420・430・512の上に展開し、最も新しい時期（平安後期建築）の掘立柱建物である。柱間は平均2.2mで、建物面積は46.17㎡である。

柱穴および抜き取り痕は大量の土器片と炭を含む黒灰色土で、掘方埋土は灰色粘土もしくは黒灰色粘土の粘質土であった。

267SB475（236SB340）（Fig.4）

調査区北東際のAH～AJ19で検出された南北棟の建物である。東側に隣接する第236次調査で検出した掘立柱建物236SB340の続きで、6間×3間の建物となる。本調査区では建物西端の南北方向6間分の柱列とその東側1列のうちの柱穴1基を検出した。

a～gの7基の柱穴を検出し、a～c・gで柱痕の木片や根石などを検出している。d・fは柱痕プランが確認できたが、深さが10㎝で、他の柱穴に比べて浅い。柱間はa-b間が1.04m、b-c間が1.16m、c-d間が1.16m、d-e間が0.9m、e-f間が1.1m、f-g間が1.0mである。

267SB791（Fig.4）

調査区東側のAD19～20で検出された1×2間の東西棟。

調査区中央東側のAD19～20で検出された1×2間の東西棟である。a～fの6つの柱穴を検出した。ただし、a・d・fは黒灰色土、b・cは灰褐色土、eは茶色土と埋土に違いがあり、建築時期や廃絶時期、ないしは修理時期などによる土色の違いを考慮する必要がある。廃絶時期として可能性が高い、柱穴埋没時期は平安時代前半～中頃が考えられる。

b. 溝

267SD015（045）（Fig.4）

調査区南のAB26～29で検出された東西溝である。AB21～24で検出された267SD045も同一遺構と考えられる。たまり状遺構267SX010・020に切り込む。埋土は茶褐色土で、遺物を多く含む。

267SD028（298・754）

AF23～27で検出された東西溝である。遺構の位置関係や埋土から、267SD028・754と同一遺構と考えられる。溝の幅は0.46m、深さ0.36mを測り、茶灰褐色土の埋土である。畝状の溝の可能性がある。

267SD034（048・372）

調査区中央のAE20～30で検出した東西溝である。撹乱で分断されているが、267SD048・372と同一遺構と考えられる。埋土は土器片を多く含む茶黒色土である。畝状の溝の可能性がある。

267SD042（267SD070・611）（Fig.4）

調査区北側のAH29～32で検出された東西溝である。267SD043と併行し、畝状の溝の可能性がある。埋土や位置関係から267SD070・611と同一遺構と考えられる。埋土は細かな土器片や炭を多く含む茶黒色土である。

267SD043（075・612）（Fig.4）

調査区北側のAH29～32で検出された東西溝で、畝溝の可能性がある。埋土や位置関係から、267SD075・612と同一遺構の可能性がある。埋土は細かな土器片や炭を多く含む茶黒色土である。

267SD069 (Fig.4)

調査区南側のY26・27で検出された東西溝である。267SD015と267SD115とに挟まれた位置関係にあり、畝状の溝か区画溝の可能性がある。埋土は茶褐色土である。

267SD115 (Fig.4)

調査区南側のX18～28で検出された東西溝である。調査区を東西に貫く東西溝で、この溝より南では東西方向の溝が検出されないことから、畝状の溝の境か区画溝の可能性がある。幅0.8 m、深さ0.4 mで、埋土は黄色粘土がブロック状に混入する灰黄色土である。

267SD455 (Fig.4)

AH～A018～34で検出した溝。幅3.50～4.20 m、深さ0.20～0.30 m。埋土は最上層から橙褐色粘土、橙褐色粘土、茶灰色土、黄茶色土、灰色粘土、淡茶色砂、黒灰色粘土、黄灰色土と堆積し、最上層の橙褐色粘土層と同一で、堆積土の状況から同時に埋没の可能性がある。

c. 井戸

267SE060 (Fig.5)

調査区中央東壁際のAB・AC18で検出されたもので、遺構の半分が調査区壁内であり、全体プランは確定できなかったものの、確認できる遺構形状から方形プランを呈するものと考えられる。東西に伸びるたまり状遺構267SX050が遺構全体を覆う位置関係にある。一辺3.0 m、深さ1.02 mを測る。井戸枠は検出プランから一辺1.5 mと推定される。枠板は腐食して残存していなかったが、板留の桟木が残存していた。埋土は沈み込みとみられる茶色土の下に、井戸枠内に上から順に黒色土、黒灰色土、フショク土の順に堆積し、裏込は茶黄色土として取り上げを行った。枠内最上位にあたる黒色土では井戸廃絶時とみられるⅩⅡ期に属する遺物の一括廃棄が観察できた。

267SE065 (Fig.5)

267SE060の北側、調査区東壁際のY・AA18・19で検出されたもので、遺構の1/3程度は調査区壁内で全体プランは確定できなかったものの、検出されたプランから南北に長い楕円形と想定され、長径3.36 m、深さ1.4 mを測る。井戸の部材は腐食が著しく、確認することができなかった。埋土は沈み込みとみられる黒色土の下に、井戸枠内には上から黒褐色土、灰褐色土の順で堆積し、裏込は茶褐色砂で取り上げを行った。枠内である黒褐色土中からは椀と思われる漆製品が出土している。

267SE085 (Fig.6)

調査区中央のAB22・23で、267SX020除去後に検出された井戸である。北東側の267SE090に切り込む位置関係にある。北西側にテラスを持つ楕円形状で、長径2.5 m、深さ1.4 mを測る。埋土は上から順に黒茶色土・黒色土（枠内）・茶灰色砂（枠内）・黒黄色粘土（裏込）の順に堆積し、取り上げを行った。

267SE090 (Fig.6)

調査区中央のAB22・23で、267SX020除去後に検出された井戸である。南西側の267SE085に切られる位置関係にある。楕円形状で、長径1.4 m、短径1.3 m、深さ1.6 mを測る。井戸枠は一辺0.5～0.6 mの方形で、底部分に径0.28 mの曲物が据えられていた。井戸枠は縦板を二段の桟木によって支える構造となっていた。四隅の軸木は腐食が著しく交差部分の構造を確認することができなかった。埋土は上位から暗灰色粘土（枠内）・黒灰色土（枠内）・灰色粘土（枠内）・黄色土（枠内）・茶色砂（曲物内）・茶灰色砂（曲物裏込）・黒黄色土（裏込）・黄灰色土（裏込）の順に堆積し、層序にしたがい遺物取り上げを行った。

267SE120 (Fig.6)

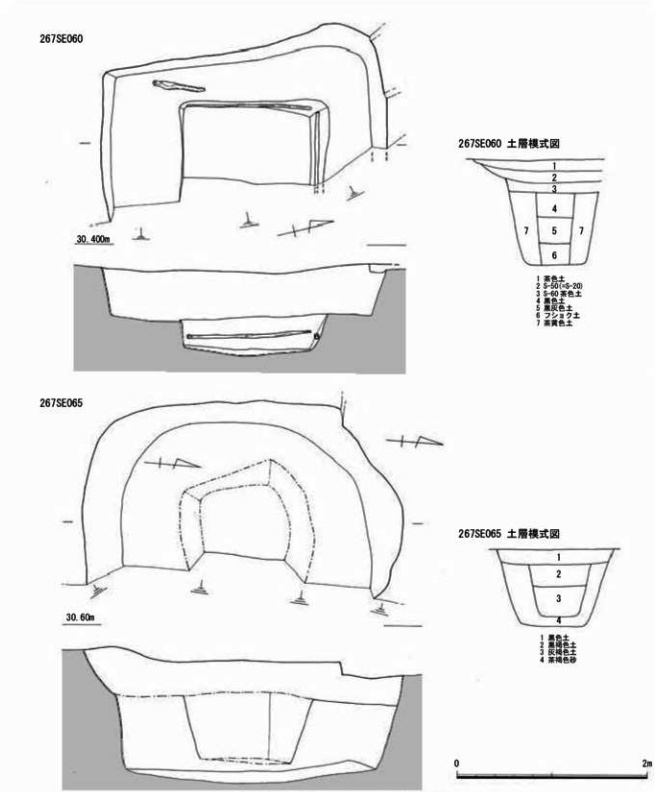


Fig.5　267SE060・065 遺構実測図

調査区南の T23 で、257SE110 で一部掘下げている。南北に長い楕円形状を呈し、長径 2.5 m、短径 2.3 m、深さ 1.4 m を測る。井戸枠は非常に残りが悪いが、一辺 0.9 m の方形と推定される。井戸枠底部には挙大の礫が敷かれ、直径 18 cm 程度の曲物が出土した。埋土は上位から淡黒色土（枠内）・淡灰色土（枠内）・灰色粘土（枠内）・灰黄色土（裏込）・暗青褐色粘土（裏込）の順に堆積し、層序にしたがい取り上げを行った。

267SE145（Fig.6）

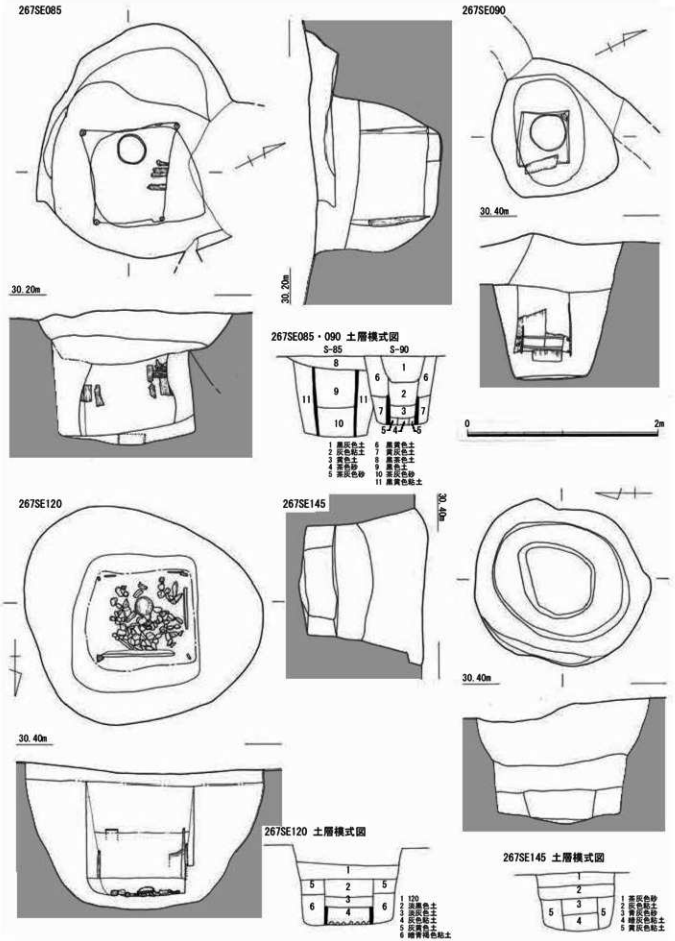


Fig.6　267SE085・090・120・145 遺構実測図

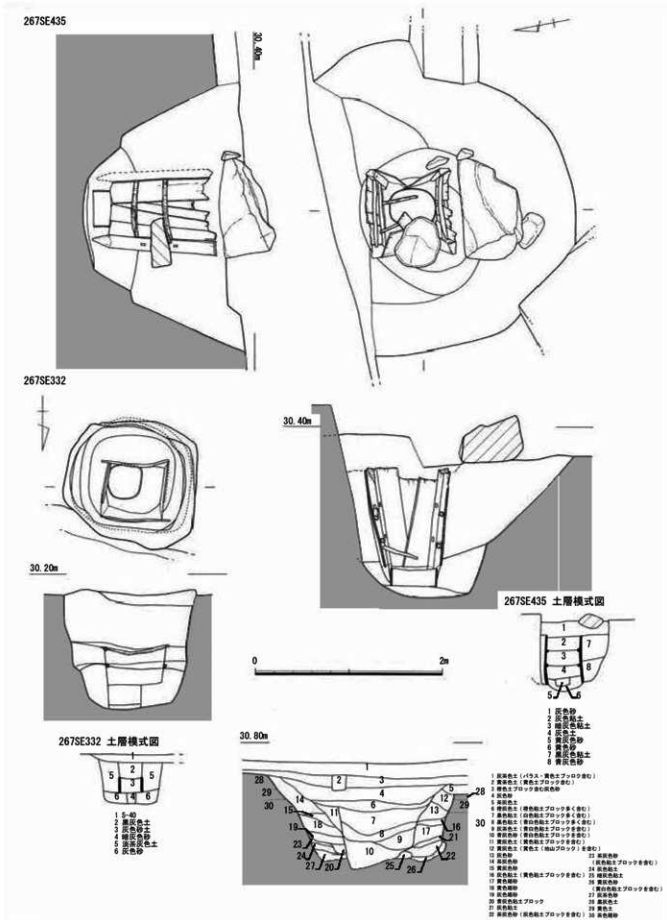


Fig.7　267SE332・435遺構実測図

調査区中央のAE21で検出した井戸である。やや南北に長い楕円形を呈し、長径1.8 m、短径1.76 m、深さ1.36 mを測る。井戸枠や曲物などの部材の痕跡は確認できなかった。埋土は上位から茶灰色砂・灰色粘土・青灰色砂（枠内）・暗灰色粘土（枠内）・黄灰色粘土（裏込）の順に堆積している。

267SE332 (Fig.7)

AC26で上層のたまり状遺構267SX040黒灰色粘土を除去後に検出された遺構で、北側は削平を受けている。長径1.4 m、短径1.3 m、深さ1.28 mを測る。井戸枠は枠板の痕跡のみで、板材は残っていない。板材を支える桟木が2段確認されたが、5本しかなく腐食がかなり進んでいる。横木の痕跡から井戸枠の規模は一辺0.7 mの方形プランと推定される。井戸最下位に据えられた曲物は井戸枠の南東側に偏る位置から検出された。井戸は淡黄灰色粘土と灰茶色粗砂の地山との境で壁がえぐれており、この位置で滞水上面があったことが伺われる。埋土は上位から黒灰色土・灰色砂土・暗灰色砂・淡茶灰色土・灰色砂・黒茶褐色土の順に堆積、取り上げを行っている。

267SE435 (Fig.7)

調査区北壁のA024で検出された井戸である。調査区の北壁に掘方の一部が入っており、全体プランは明らかにできていない。井戸枠の南にはタテ1.08 m、ヨコ0.7 m、厚さ0.6 mを測る石が廃棄されていた。掘方には多くの石が含まれており、井戸枠も西側からの掘方内の石の崩落によって変形し崩落している。井戸枠は最下部中央に直径0.35mの円形の曲物を配し、複数の縦板を使用した方形プランが確認できた。四隅には断面三角形の軸木があり、縦板を留める桟木が入るホゾ穴が2方向に穿孔されている。穴の位置は2方向とも同じで貫通していない。桟木は2段組で、井戸枠が崩落している東西方向が原位置を留めていない。井戸枠の規模は一辺0.80mと推定される。埋土は上から灰色砂、〔黒黄色土・黒灰色土〕、灰色粘土（枠内）、暗灰色粘土（枠内）・灰色土（枠内）・黄灰色砂（曲物内）・黄色砂（曲物掘方）・黒灰色粘土（裏込）・青灰色砂（裏込）の順に堆積し、遺物の取り上げを行った（〔 〕内の土色は層序不明）。

d. 土坑

267SK030 (Fig.8)

調査区南壁付近のAA28･29で検出した。左郭1坊路面埋設後に掘削された土坑で、267SB140に切られる。調査区壁際での検出のため全体形状は不明だが、現状で長径3.0 m、深さ0.1 mを測る。埋土は1坊路の道路敷時の遺物を多く含み、上位から茶褐色土・淡茶灰色粘土・淡黄灰色シルトの順に堆積している。

267SK105 (257SK140) (Fig.8)

調査区南のT24・25で検出された土坑である。南に隣接する調査区、第257次調査の257SK140と同一遺構である。南北に長い楕円形を呈し、長径3.6 m、短径3.2 m、深さ1.3 mを測る。埋土は上から淡茶色砂質土・暗青灰色土・淡茶色砂・暗灰土・淡黄灰色土の順に堆積している。

267SK110 (Fig.8)

調査区西端中央部のU26で検出した。南北方向に長い隅丸方形状を呈し、長軸長0.85 m、短軸長0.60 m、深さ0.22 mを測る。

267SK485 (Fig.8)

調査区東側のAJ22で検出された土坑で、畝状の溝と考えられる267SD511・524を切る。長径2.6 m、短径2.2 m、深さ0.22 mを測る。埋土は上位から茶褐色土・灰茶色粘土・炭層・灰色粘土の順に堆積し、炭層は埋土の一部に確認できる程度であった。瓦質で瓦塔の宝珠部分が出土している。

267SK576 (Fig.4)

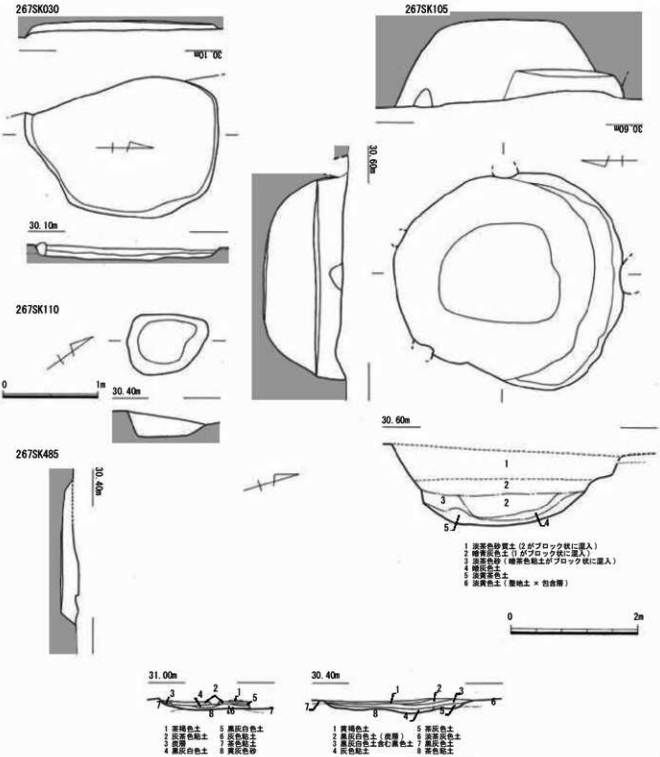


Fig. 8　267SK030・105・110・485 遺構実測図

調査区北東側の AK22 で検出された。畝溝と考えられる 267SD533 に切り込む位置関係にある。東西に長い楕円形を呈し、長軸長 0.7 m、短軸長 0.6 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m を測る。埋土は炭を含む茶色土で、礎石状の石が据えられていた。石は短軸長 0.48 m、長軸長 0.68 m、厚さ 0.24 m を測る花崗岩製である。周囲に並ぶようなピット及び礎石は検出されなかった。

267SK679 (Fig. 4)

調査区北側の AJ25 で検出された土坑である。南北方向の畝溝 267SD633 に切り込む位置関係にある。東西に長い楕円形を呈し、長軸長 0.98 m、短軸長 0.82 m、深さ 0.14 m を測る。埋土は茶黒色土である。

土坑の中央に花崗岩製の礎石が天地逆の状態で埋没していた。礎石は短軸長 0.48 m、長軸長 0.8 m、厚さ 0.3 m を測る。礎石の中央に窪みがあり、その直径 20 cm、深さ 6 cmを測り、その窪みの周囲には直径 25 cm程度の柱痕跡が残っていた。何らかの目的で使用されていた施設を利用した廃棄土坑と考えられる。

e. その他の遺構

267SX010 (Fig.4)

調査区南の AA・AB28 で検出され、267SX025 や左郭 1 坊路の東側溝 267SD560 上面に広がる堆積層の取り残しと考えられる。埋土は黒色土の単層である。

267SX020 (Fig.4)

調査区南側の AA・AB22 ～ 28 で検出された東西にのびるたまり状遺構である。埋土や遺構の位置関係から 267SX050 と同一遺構である。22 ラインから西を 267SX020、東を 267SX050 として遺物の取り上げと調査を行っている。たまり状遺構 267SX040 が切り込む位置関係にある。埋土は、上から橙褐色粘土・茶褐色粘土・茶色粘土・茶色土・灰茶色土の順に堆積している。

267SX025 (Fig.4)

調査区南西の AB・AC29 で検出された土坑状遺構である。東側に広がるたまり状遺構 267SX010 より一段窪んでいるところを 267SX025 として調査した。西鉄操車場時の基礎により一部撹乱されているが、南北に長い楕円形状を呈す。長軸長 2.5 m、短軸長 2.1 m を超え、深さ 0.3 m を測る。埋土は土器を多量に含む黒色土である。

267SX040 (Fig.4)

調査区南側の AC・AE22 ～ 27 で検出され、東側を 267SX080 に切り込まれ、南側は東西に広がる 267SX020・050 に切り込む位置関係にある。267SX020 とは切り合いは確認されているが、出土遺物の時期や遺構プランの形状などから同時に掘削された可能性がある。埋土は上から砂を多く含む暗茶褐粘質土・黒灰色粘土・淡黄灰色シルトブロックを含む黒灰色粘土で堆積している。

267SX050 (267SX020 に統合する必要あり) (Fig.4)

調査区南東側の Y ～ AB18 ～ 21 で検出した東西に伸びるたまり状遺構である。北側を 267SX080 に切り込まれ、西に伸びる 267SX020 と同一遺構である。埋土は上から茶褐色土・黒色土・茶褐色土・黒灰色土の順に堆積し、遺物の取り上げを行った。

267SX080 (Fig.4)

調査区南東側の AB・AC20・21 で検出した東西に広がるたまり状遺構である。西側の 267SX040 と南側の 267SX050 に切り込む位置関係にある。埋土は上から黒色土で、下層は北側が茶灰色土、南側が灰黒色土で切り合いはない。

267SX135 (Fig.4)

調査区南側の W23 で検出した土器溜まり遺構である。楕円形状を呈し、長軸長 3.2 m、短軸長 2.3 m、深さ 0.26 m を測る。埋土は茶褐色土である。

267SX480 (Fig.4)

調査区北東側の AL21・22 で検出したたまり状遺構である。畝溝と考えられる 267SD512・521・522 を切る位置関係にある。埋土は上から黄灰色シルト・黒色土・黒茶色粘土・暗灰色粘土の順に堆積し、取り上げを行っている。瓦転用硯が 267SD533 と接合する。

（４）第１調査面遺構出土遺物

a. 掘立柱建物

267SB140（Fig.9）

267SB140 出土資料で、1がｂ柱痕、2がｂ掘方、3がｃで、4がｆ出土。

土師器

小皿ａ（3・4）　いずれも底部から口縁部の破片資料で、内外面ともに器面摩耗のため成形・調整ともに不明。

椀（1）　やや丸みを有する体部形態で、内外面ともに器面摩耗のため成形・調整ともに不明。

器台（2）　脚部の破片資料で、内外面ともに器面摩耗のため成形・調整ともに不明。

267SB440（Fig.9）

267SB440 出土資料で、5はａ灰色粘土、6はｂ黒灰色土、7および8はｃ黒茶色土、9はｅ黒灰色粘土、10はｆ茶灰色土、11はｇ黒灰色粘土、12はｋ灰色土、13はｌ灰色土、14～16はｒ灰色粘土（柱痕）、17はｒ茶灰色粘土（掘方）、18はｑ、19～21はSB440の柱穴の特定ができていない。

土師器

小皿ａ（7・11・15・16・17・18）　7・15・16については推定口径9.2cm・9.1cm・8.8cmを測る。11のみ底

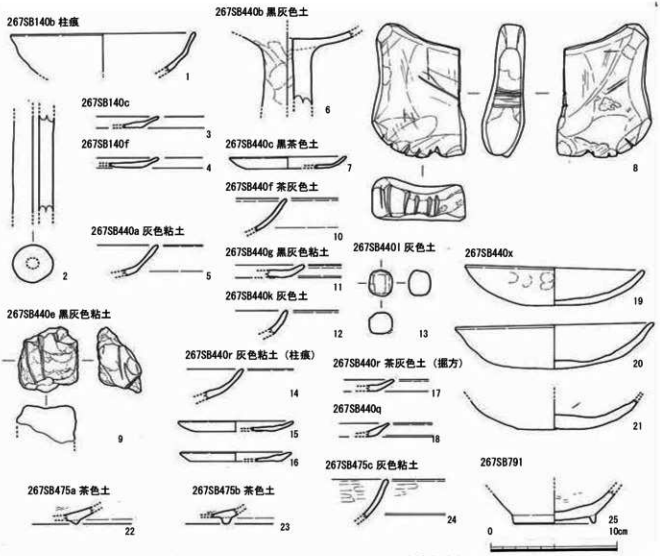


Fig.9　267SB140・440・475・791 出土遺物実測図

部外面の切り離しは回転ヘラ切り、他は内外面ともに器面摩耗のため成形・調整ともに不明。

丸底坏（5・10・12・14・19～21）　5、10、12および14は、底部押し出しによる丸底化が観察できることから、丸底坏と判断した。内外面ともに器面摩耗のため成形・調整ともに不明。19は、口縁部外面に指頭圧痕が観察でき、21は内面にミガキｂ痕跡が残る。底部外面の処理は、器面摩耗のため成形・調整ともに不明。

器台（6）　坏部から脚部の破片資料で、坏部中央に穿孔がある。脚部外面には貼り付けのための不定方向のナデ痕跡がある。

土製品

土玉（13）　略立方体を有するもので、外面にナデ痕跡様のものが観察できる。摺り痕跡の可能性もある。

焼土塊（9）　灰黄色を呈し、芯の部分は黒色。スサと考えられる痕跡が観察できる。

石製品

砥石（8）　4面に使用痕が観察できるもので、摺り痕跡があることから砥石と判断した。材質は砂岩。

267SB475（Fig.9）

267SB475出土資料で、22はａ茶色土、23はｂ茶色土、24はｃ灰色粘土からそれぞれ出土している。

黒色土器Ａ類

椀ｃ（23）　高台のみの破片資料で全形は不明。見込み部分にミガキｃが観察できる。

黒色土器Ｂ類

椀×皿（22）　断面三角形の高台形状を有し、見込み部分にミガキ痕跡が僅かに観察できる。

椀（24）　24は丸みを帯びた口縁部の破片資料で、内外面にミガキｃ痕跡が観察できる。

267SB791（Fig.9）

267SB791c出土遺物。

黒色土器Ａ類

椀ｃ（25）　高台を貼付しやや直線的に外方へ開く体部形態を有する。

b. 溝

267SD015（Fig.10）

土師器

丸底坏（1）　推定口径14.8cmを測り、内面にミガキｂの痕跡が観察できる。

小皿a1（2・3）　口縁部を直線的に外方へ引き出すもので、底部外面は回転ヘラ切り。

白磁

椀（4・5）　4は、口縁端部外面を玉縁に肥厚させる椀Ⅳ類。5は、高台高を高く作り出す椀Ⅴ類。

267SD027（Fig.10）

土製品

塼（6）　2面を欠損する無文塼。

267SD033（Fig.10）

土師器

小皿a1（7）　口縁端部を直線的に外方へ引き出すもので、底部をやや外方へ押し出す形状をとる。底部外面は回転ヘラ切り。

白磁

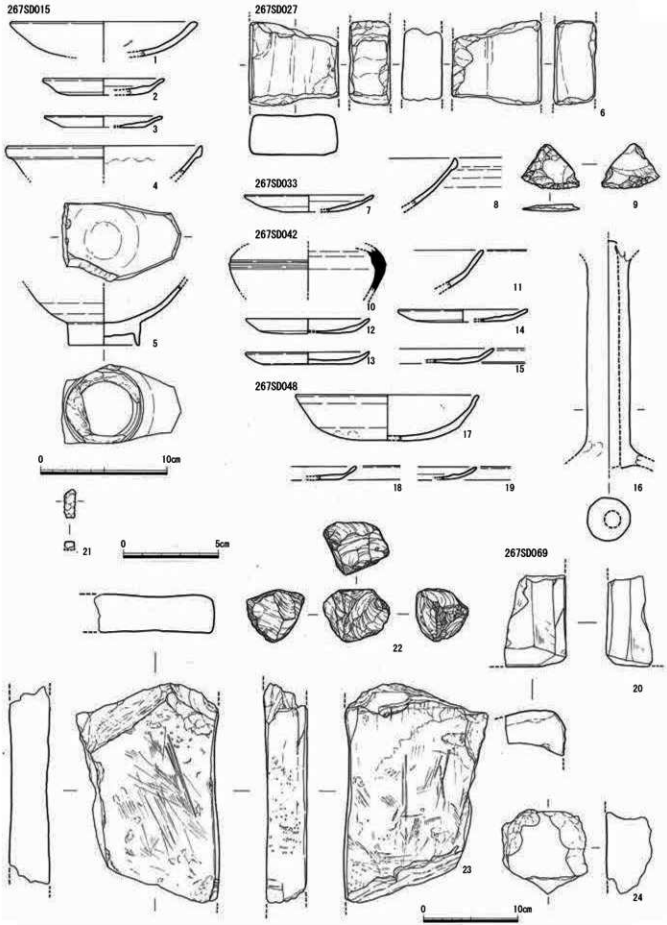


Fig. 10　267SD015・027・033・042・048・069 出土遺物実測図

椀（8）　口縁端部を外方に玉縁に肥厚させる椀Ⅳ類。

石製品

用途不明（9）　剥片で、刃部らしき成形痕跡が観察できる。材質は安山岩。

267SD042（Fig.10）

須恵器

蓋（10）　体部のみの破片で、全形については明らかにし難い。体部外面中位に二条の沈線を描く。

土師器

丸底坏（11）　体部上位から口縁部の破片資料で、器面摩耗のため詳細は不明。

小皿a1（12～15）　12～14については口径が復元できるものの、15については小破片のため法量を復元するには至らなかった。14は底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

267SD048（Fig.10）

土師器

器台（16）　脚部の資料で、手づくねによる凹凸が観察できる。断面形状は、おおむね円形を呈する。

丸底坏a（17）　復元口径14.0cm、器高3.6cmを測り、底部外面に指頭圧痕がわずかに観察できる他は、器面摩耗のため詳細は不明。

小皿a1（18・19）　破片資料であり、かつ器面摩耗のため詳細は不明。

土製品

用途不明（20）器表面を削り状の痕跡が観察できるもので、破片資料であることから用途が判然としない。

金属製品

用途不明（21）断面長方形を呈するもので、釘の可能性も残るが明らかにできない。

石製品

石核（22）　全面に剥離した痕跡が観察でき、石核と考えられる。材質は、黒曜石製。

砥石（23）　擦った痕跡が3面観察でき、部分的に敲打痕が残る。材質は粘板岩製。

267SD069（Fig.10）

土製品

塼（24）　器表面が1面のみ残るもので、器面摩耗のため詳細は不明。

267SD075（Fig.11）

須恵器

小蓋（1）　小型の薬壺に付帯する蓋と考えられ、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

土師器

丸底坏（2～7）　復元口径12.4cm～15.8cmを測り、6のみ内面にミガキcの痕跡が観察でき、丸底坏cの可能性を残す。残りのものについては器面摩耗のため、詳細は不明。

小皿a1（8～14）　復元口径9.0cm～11.0cmを測り、10のみ底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

椀c（15）　高台が焼成によるものか下方へつぶれており、つぶれた畳付部分に板状圧痕が観察できる。残りの器表面については摩耗のため詳細不明。

用途不明（16）　破片資料のため用途不明。器表面も摩耗していることから詳細は不明。

把手（17）　鉢などへの貼付する把手と考えられ、断面隅丸長方形を呈する。

黒色土器B類

椀c（18）　外方へ開く高台形状を呈し、外面のみ回転ナデ調整が観察できる。椀部の詳細な形状につ

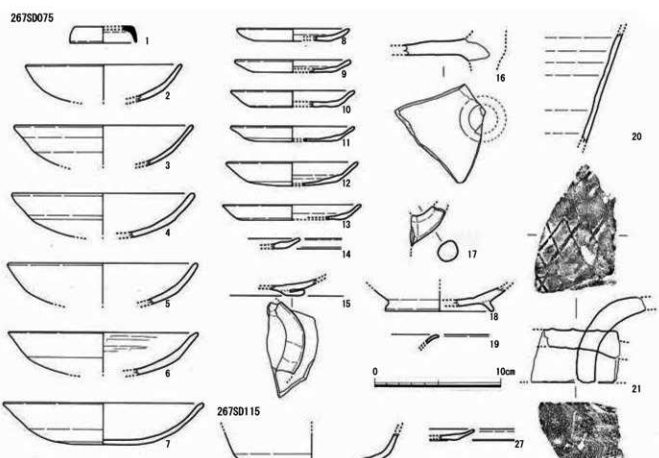


Fig.11　267SD075・115出土遺物実測図

いては明らかにし難い。

灰釉陶器

皿（19）　口縁端部の小破片。内外面に施釉。

朝鮮系無釉陶器

壺（20）　器厚が極めて薄いもので、体部破片であることから全形について明らかにし難い。

瓦

丸瓦（21）　凸面に斜格子タタキ、凹面に布目が残る。

金属製品

刀子（22）　刃部を有していると考えられ、刃と柄の境界部分の破片と考えられる。

用途不明（23・24）　断面方形を呈するもので、曲げられた釘とも解せる資料である。

267SD115（Fig.11）

土師器

丸底坏c（25）　丸底坏に高台を貼付したもので、腕部口径に対し、高台径が小さい。

小皿a1（26・27）　口縁端部を直線的に引き出すもので、器面摩耗のため詳細は不明。

小皿c（28）　外方へ開く高台を貼付する皿で、器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

白磁

皿（29）　外方へ大きく開く口縁部形態を有し、外面に縦方向の櫛状の文様が観察できる。皿V2b類と

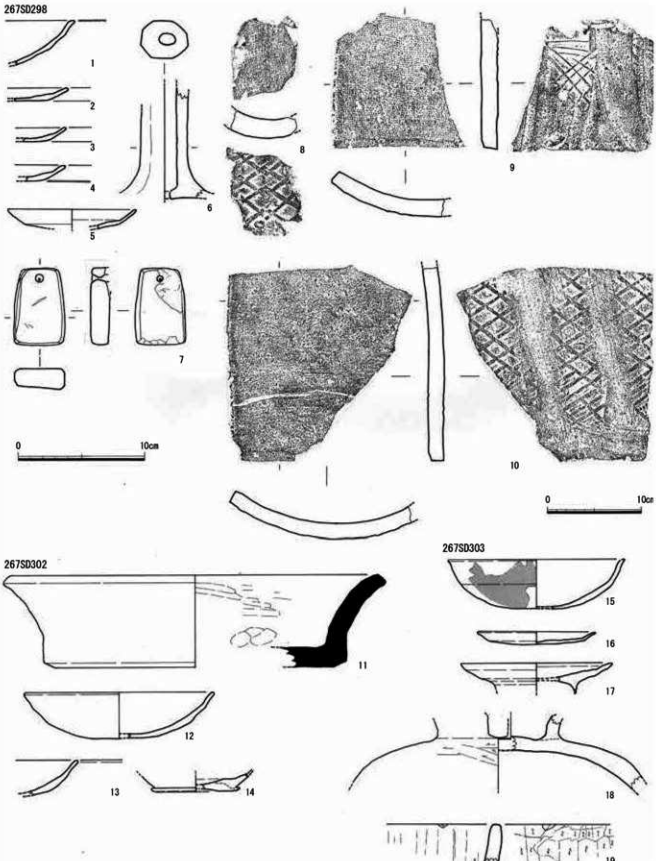


Fig. 12　267SD298・302・303出土遺物実測図

考えられる。

267SD298 (Fig. 12)

土師器

丸底坏（1）　体部から口縁部の破片資料で、器面摩耗のため詳細は不明。

小皿 a1（2～5）　口縁部を直線的に外方へ引き出すもので、5のみ底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

器台（6）　脚部の資料で、断面八角形を呈している。

土製品

權（7）　瓦質のもので、1箇所穿孔している。重さは、53.0gを量る。

瓦

丸瓦（8）　凸面に斜格子タタキ、凹面に布目が観察できる。

平瓦（9・10）　いずれも凸面に斜格子タタキ、凹面に布目が観察できる。斜格子の型式は、九州歴史資料館分類で9が902E、10は919型式と考えられる（九州歴史資料館、2000）。

267SD302（Fig.12）

須恵器

火舎（11）　復元口径30.0cmを測る大型のもので、底部外面はヘラ削り、内外面ともに回転ナデにより成形・調整し、内面にミガキcが観察できる。

土師器

丸底坏a（12・13）　12は、復元口径15.0cmを測り、両者とも器面摩耗のため詳細は不明。

小皿a（14）　回転台成形時の粘土板の状況が観察できるもので、器表面については摩耗のため詳細を明らかにし難い。

267SD303（Fig.12）

土師器

丸底坏a（15）　復元口径14.0cmを測り、器表面は摩耗のため詳細は不明だが、外面にスス状炭化物が付着している。

小皿a1（16）　口縁端部を直線的に引き出すもので、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

小皿c（17）　高台端部を欠損するもので、復元口径12.0cmを測る。器面摩耗のため詳細は不明。

蓋（18）　大型の蓋として認識したが、器の可能性も残す。外面に削り痕跡を観察できるが、他の部位については器面摩耗のため詳細を明らかにし難い。

石製品

石鍋（19）　口縁部の破片で、森田勉氏分類によるA群の可能性が高いものの、鍔を下方に削り出すものもあるため、B群の可能性もある。外面にスス状炭化物が付着しており、石鍋として使用したことが分かる（森田、1983）。

267SD304（Fig.13）

土師器

小皿a1（1・2）　いずれも口縁部を直線的に外方へ引き出すもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡が観察できない。2については底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

蓋（3）　小型の蓋で、ツマミ部分をナデによって成形し、外面にスス状炭化物が付着している。

器台（4・5）　4は受部で、底部外面に脚部を貼付しつつ剥離した痕跡を有していることから丸底坏を転用したものと考えられる。器面調整については器面摩耗のため不明。5は、脚部のみの破片資料で、手づくねによる指頭圧痕が観察できる。

黒色土器B類

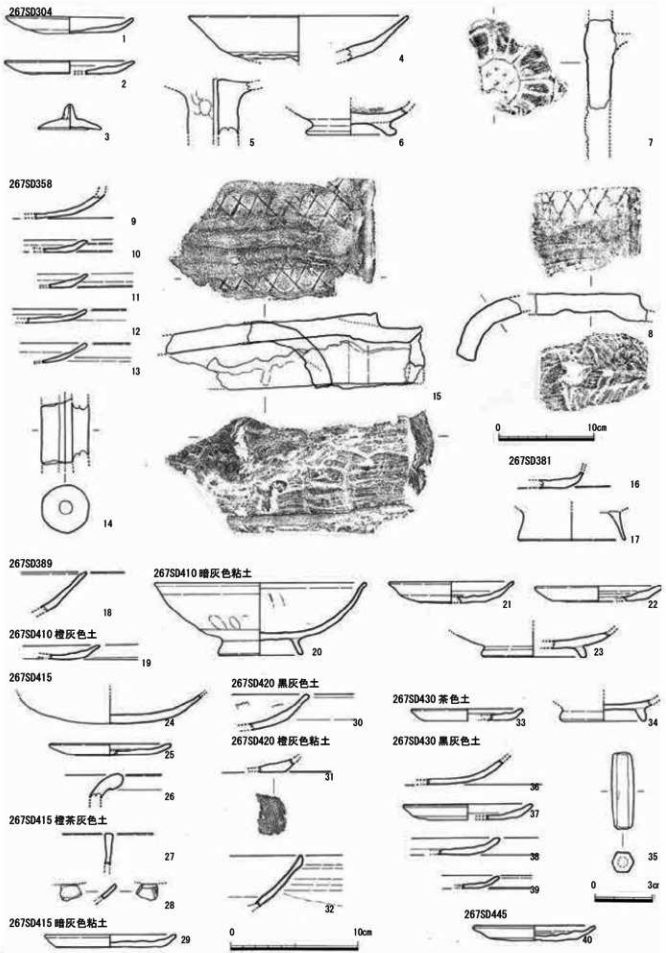


Fig. 13 267SD304・358・381・389・410・415・420・430・445出土遺物実測図

椀 c (6)　高台を付す底部破片で、見込み部分にはミガキ c が観察でき、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が残る。

瓦

軒丸瓦 (7)　瓦当のみの破片資料、複弁八葉と推定され、中房に 1+6 の蓮子が観察できる。九州歴史資料館分類に見当たらず未分類と考えられる。

丸瓦 (8)　凸面に格子タタキ、凹面に布目が観察できる。

267SD358 (Fig.13)

土師器

丸底坏 (9)　底部の破片資料で、器面摩耗のため詳細は不明。

小皿 a1 (10 ～ 13)　復元口径が定かではない破片資料で、器面摩耗のため成形・調整技法についても明らかにできない。

器台 (14)　脚部の破片で、断面形状は円形。器表面は摩耗のため不明。

瓦

丸瓦 (15)　玉縁部分が残存する破片資料で、凸面に格子タタキ、凹面に布痕跡が観察できる。斜格子タタキは九州歴史資料館分類の 901 型式に該当するものと考えられる（九州歴史資料館、2000）。

267SD381 (Fig.13)

土師器

坏×皿 (16)　破片資料で、かつ器面摩耗のため詳細は不明。

高台 (17)　高脚の高台で、外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

267SD389 (Fig.13)

土師器

丸底坏 (18)　口縁部の破片資料で、器面摩耗のため詳細は不明。

267SD410 橙灰色土 (Fig.13)

土師器

小皿 a1 (19)　口縁部を直線的に外方へ引き出すもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

267SD410 暗灰色粘土 (Fig.13)

土師器

椀 c2 (20)　推定口径 16.6cm、高台径 6.1cm、器高 5.65cm を測るもので、体部外面下位に押し出しのための指頭圧痕が、椀内面にはミガキ b が観察できる。

小皿 a1 (21・22)　いずれも底部外面を回転ヘラ切りするもので、他の部位については器面摩耗のため明らかにできない。

黒色土器 B 類

椀 c (23)　外方へ開く高台を付すもので、椀部の形状については残存状況がわるく明らかにできない。外面については回転ナデ痕跡が観察できる。

267SD415 (Fig.13)

土師器

丸底坏 (24)　底部の破片資料で、器面摩耗が著しく成形・調整痕跡を明らかにできない。

小皿 a1 (25)　推定口径 9.6cm、推定底径 5.6cm、器高 0.9cm を測るもので、直線的に外方へ口縁部を開く。器面摩耗のため、成形・調整痕跡は明らかにできない。

鍋 (26)　口縁端部を丸く肥厚させるもので、全体形状については明らかにできない。器面摩耗が著し

く成形・調整痕跡は明らかにできない。

267SD415 橙茶灰色土 (Fig.13)

灰釉陶器

用途不明 (27)　口縁端部に平坦面をもつ形状と推定され、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。器種については明らかにできない。

白磁

皿 (28)　口縁端部の破片資料で、内外面に施釉。

267SD415 暗灰色粘土 (Fig.13)

土師器

小皿a1 (29)　推定口径10.2cm、推定底径8.4cm、器高1.0cmを測り、体部外面から内面にかけては回転ナデによって成形・調整されている。底部外面の切り離し処理は器面摩耗のため不明。

267SD420 黒灰色土 (Fig.13)

土師器

丸底坏 (30)　底部から口縁部までの破片資料で、内面にミガキbの痕跡が観察できる。

267SD420 橙灰色粘土 (Fig.13)

坏a (31)　底部の破片で、底部外面に回転糸切り痕跡が観察できる。

白磁

椀 (32)　体部下位から口縁部の破片資料で、口縁部に大きめの玉縁を形成する椀Ⅳ類。内面から体部外面上位までに施釉。

267SD430 茶色土 (Fig.13)

土師器

小皿a1 (33)　推定口径8.8cm、推定底径6.6cm、器高0.9cmを測り、器面摩耗のため詳細は不明。

黒色土器B類

椀c (34)　外方へ「ハ」の字に開く高台形状を呈し、見込み部分にはミガキcが観察できる。

土製品

錘 (35)　断面六角形を呈するもので、器面摩耗のため詳細は不明。

267SD430 黒灰色土 (Fig.13)

土師器

丸底坏a (36)　底部の破片資料で、器面摩耗のため詳細は不明。

小皿a1 (37～39)　37は、推定口径10.2cm、推定底径8.6cm、器高1.15cmを測り、38ならびに39は、口径を推定できるまでには至らない破片資料。器面摩耗が著しく、詳細は不明。

267SD455 淡茶色砂 (Fig.14)

土師器

丸底坏a (1)　底部押し出しによって丸底化したもので、口縁部内面にミガキbの痕跡が観察できる。

小皿a1 (2～6)　口径10.0cm～10.2cmを測り、いずれも底部切り離しは回転ヘラ切りである。口縁部を直線的に引き出している。5・6は、見込み部分に墨痕が観察できる。

土製品

羽口 (7)　小破片資料であり全形を明らかにし難い。

267SD455 黒灰色粘土 (Fig.14)

緑釉陶器

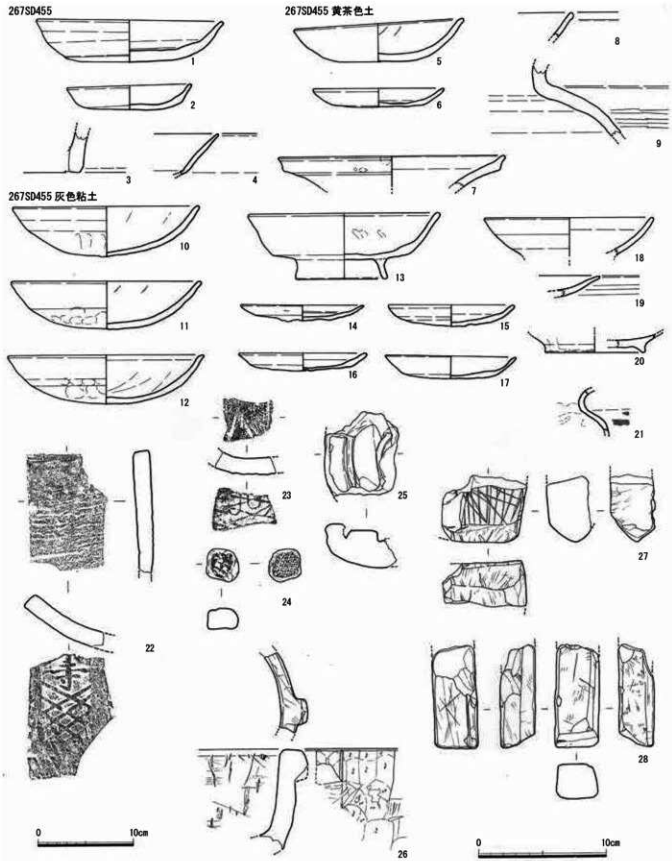


Fig.14　267SD455 出土遺物実測図（1）

皿（8）　口縁部の破片資料で、外方へやや反り気味に口縁部をつくり出している。内外面に施釉が確認できる。

灰釉陶器

椀ｃ（9）　高台から底部の破片資料で、断面三角形に近い高台を貼付し、見込み部分には重ね焼き痕跡が観察できる。

金属製品

鉄鏃（10）　刃部下半から基部の破片で、残存形態からは切っ先へいくほど幅に広がりを持っている。

鉄釘（11）　断面方形のもので、打ち込み部分の折り曲げが観察できる。

267SD455 黄灰色土（Fig.14・15）

土師器

小型壺（12）　手持ち成形によってつくられた小型の壺で、体部から口縁部へ移行する頸部に穿孔がある。手持ち成形のためか歪が著しい。

長沙窯系青磁

水注（13）　肩部から頸部の破片資料で、把手が付されていると解される。外面は施釉、内面は露胎のまま。

石製品

砥石（14）　4面の使用面が観察できる砥石で、石材は砂岩製。

267SD459（Fig.15）

黒色土器B類

椀ｃ×皿ｃ（15）　やや高めの高台を付し、見込み部分はミガキｃが観察できる。また、底部外面は回転糸切り離し痕跡があり、搬入品の可能性がある。

267SD461（Fig.15）

土師器

小皿a1（16）　口径10.2cmを測り、口縁部を直線的に外方へ引き出すものである。

緑釉陶器

椀ｃ×皿ｃ（17）　体部下位の破片資料で、全形を明らかにし難い。見込み部分に陶枕と考えられる小粘土塊を剥離させた際の痕跡が観察できる。

石製品

用途不明（18）　滑石製で、大型の石鍋転用品と考えられる。長方形を呈し、一ヶ所穿孔することを試みた痕跡が残る。

267SD464 茶灰色砂（Fig.15）

須恵器

鉢（19）　口縁部をやや内外に肥厚させるもので、内外面回転ナデ痕跡が残る。

267SD478（Fig.15）

土師器

丸底坏ａ（20）　丁寧に押し出しを行っているためか、坏底部と体部の境界が不明瞭。なお、器面摩耗のため成形・調整痕跡は観察できていない。

267SD481（Fig.15）

黒色土器B類

椀ｃ（21）　高台から底部の破片資料で、高台端部をやや内方に屈曲させる形を持つ。内外面ともに回転ナデ調整。

267SD511（Fig.15）

土師器

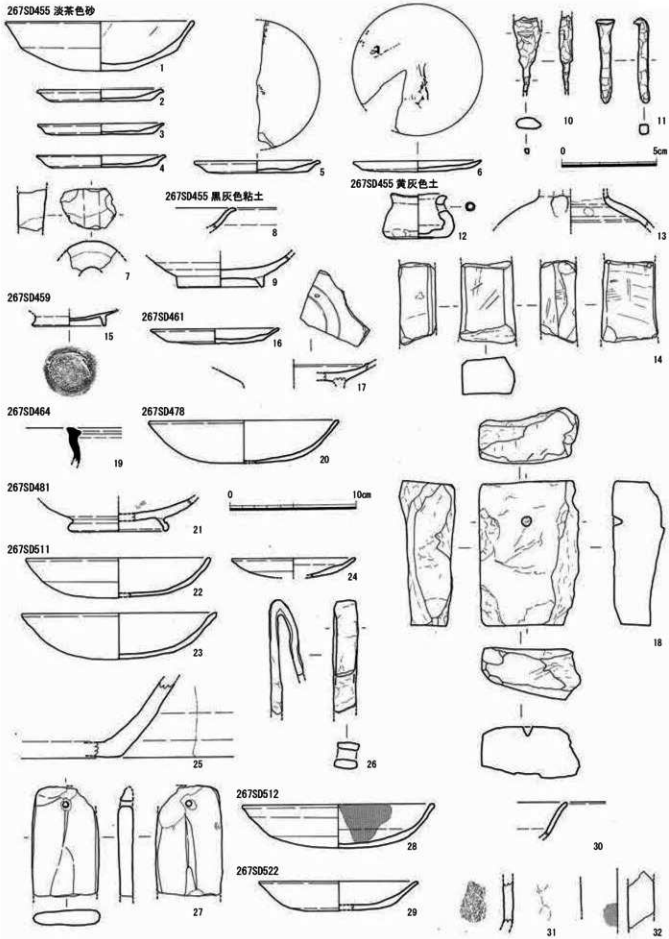


Fig. 15　267SD455・459・461・464・478・481・511・512・522出土遺物実測図

丸底坏a（22・23）　いずれも底部から体部の境界部分を丁寧に押し出すもので、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が残る。他の部位については器面摩耗のため観察できない。

小皿a1（24）　口径9.8cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

黒色土器B類

鉢×壺（25）　やや厚めの器厚を有し、内外面にミガキc痕跡が観察できる。

金属製品

用途不明（26）　大きく屈曲させるもので、断面は長方形である。

石製品

権（27）　下位端部を欠損するもので、断面は扁平で、平面形は長方形を呈している。上部に一ヶ所穿孔がある。材質は片麻岩製。

267SD512（Fig.15）

土師器

丸底坏a（28）　底部から体部への移行が丸く丁寧に押し出されているもので、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。内面にはススス状炭化物が付着している。

267SD522（Fig.15）

土師器

小皿a1（29）　やや器高が高いもので、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

緑釉陶器

椀（30）　口縁部のみの破片資料で、内外面に施釉が観察できる。

土製品

製塩土器（31）　体部の破片資料で、内面に布痕跡が、外面に指頭圧痕が観察できる。

羽口（32）　外面にナデ痕跡が観察できる小破片資料。

267SD524（Fig.16）

須恵器

甕（1）　頸部から口縁部の破片資料で、口縁端部にやや平坦面を形成している。

土師器

丸底坏a（2）　底部から体部への屈曲部分の外面に指頭圧痕が残り、口縁部内面にはミガキcが観察できる。なお、内外面にススス状炭化物が付着し変色している。

小皿a1（3）　口径9.1cmを測り、口縁部を直線的に引き出すもの。底部外面の処理は不明。

壺（4）　底部から直立するような体部形態を有し、内面に強めのナデ痕跡が観察できる。

黒色土器B類

椀（5）　体部上位から口縁部の破片資料で、内外面にミガキcが残る。

大型鉢（6）　平底の底部から開き気味に外方に立ち上がる体部形態を有し、内外面ともに粗目のミガキcが施される。

土製品

塼（7）　小破片のため全形は定かではない。表面に削り痕跡が観察できる。

267SD533（Fig.16）

土師器

小皿a1（8～10）　いずれも平底の底部から外方へ直線的に開く口縁部形態を有している。8のみ底部外面は回転ヘラ切り。

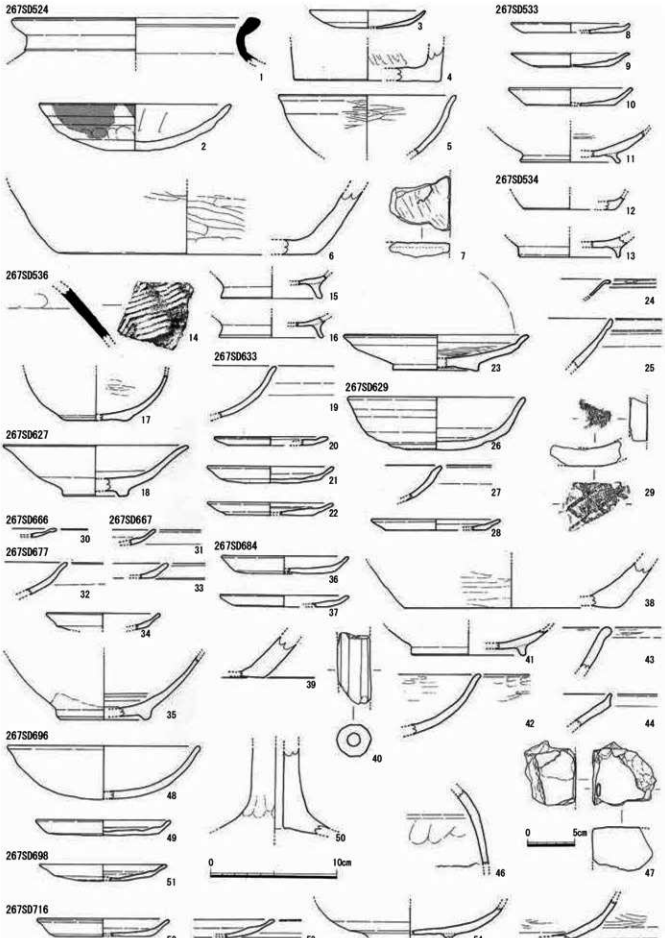


Fig.16 267SD524・533・534・536・627・633・639・666
667・677・684・696・698・716 出土遺物実測図

黒色土器B類

椀c（11）　高台から体部下位の破片資料で、高台は外方へ踏ん張る形態を有し、体部内面にはミガキc痕跡が観察できる。

267SD534（Fig.16）

土師器

小坏a×小皿a（12）　平底の底部破片。器面摩耗のため詳細は不明。

黒色土器A類

椀c（13）　高台から底部の破片資料で、器面摩耗のため詳細は不明。

267SD536（Fig.16）

須恵器

甕（14）　体部上位の破片資料で、外面に平行タタキが施される。頸部付近と考えられる内面には指頭圧痕が残る。

土師器

椀c（15）　高台から底部の小破片で、高めの高台を貼付している。器面摩耗のため詳細不明。

黒色土器A類

椀c（16・17）　16はやや高めの高台を貼付し、17は丸みのある体部形態から断面形状がやや退化したような断面三角形を呈する高台を貼付している。さらに内面にはミガキcが観察できる。

267SD627（Fig.16）

越州窯系青磁

皿（18）　底部から体部への移行箇所に屈曲を有するもので、皿Ⅰ1a類。

267SD633（Fig.16）

土師器

丸底坏（19）　底部から体部への移行に屈曲を伴わず、丁寧な押し出しによるものと考えられる。押し出し前の底部と考えられる外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

小皿a1（20～22）　口径9.0cm～10.0cmを測り、器面摩耗により詳細は不明。

緑釉陶器

皿（23）　蛇の目高台に回転ヘラ削りするもので、体部から口縁部への移行箇所をわずかに屈曲させる。見込み部分にミガキcが観察できる。京都産緑釉陶器と考えられる。

白磁

皿（24）　口縁端部を外方へ屈曲させるもので、端部外面にヘラを押し付け輪花を形成しえている。皿Ⅺ1類。

越州窯系青磁

椀（25）　口縁部の破片資料で、口縁端部外面を肥厚させるもの。椀Ⅱf類。

267SD639（Fig.16）

土師器

丸椀a（26）　復元底径7.3cmから復元口径14.0cmと丸みを帯びつつ口縁部まで立ち上がる体部形態を有している。器面摩耗のため、成形・調整技法については不明。

丸底坏（27）　口縁部のみの破片で、口縁部外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

小皿a1（28）　平底の底部から直線的に外方へ開く形態の小皿で、復元口径10.1cmを測る。底部外面の切り離し処理は、器面摩耗のため不明。

瓦

平瓦（29）　小破片のため詳細不明ながら凸面に格子タタキ、凹面に布目痕跡が観察できる。

267SD666（Fig.16）

土師器

小皿 a1（30）　器高が低い小皿で、器面摩耗のため詳細不明。

267SD667（Fig.16）

土師器

小皿 1（31）　器面摩耗のため詳細不明。

267SD677（Fig.16）

土師器

丸底坏（32）　器面摩耗のため詳細不明。

小皿 a1（33・34）　器面摩耗のため詳細不明。

白磁

椀（35）　低い高台を削り出す椀Ⅳ 1a 類。

267SD684（Fig.16）

土師器

小皿 a1（36・37）　復元口径 10.1cm、10.2cm をそれぞれ図り、器面摩耗のため詳細不明。

鉢（38・39）　38 は、底部から外方へ大きく開き、底部外面にミガキ c が観察できる。39 は器面摩耗のため詳細不明。

器台（40）　脚部の破片資料で、脚部断面形状がおおむね十角形を呈している。

黒色土器 A 類

椀 c（41）　高台から底部の破片資料で、しっかりした断面長方形の高台が貼付されている。器面摩耗のため、成形・調整痕跡は不明。

黒色土器 B 類

椀（42）　やや開き気味の体部から口縁部形態を有し、口縁部内外面にミガキ c が施されている。

鉢（43）　直線的に外方へ開き、口縁端部をやや外反させる。口縁端部内外面にミガキ c が観察できる。

灰釉陶器

壺（44）　口縁端部をつまみ上げ成形するもので、広口壺の口縁部と考えられる。内面に施釉が確認できる。

白磁

皿（45）　口縁端部を外方へ開くもので、皿Ⅺ 1 類。

中国産陶器

壺（46）　肩部の破片資料で、内面に指頭圧痕、外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

土製品

塼（47）　二面の器面を残存する破片資料。

267SD696（Fig.16）

土師器

丸底坏 a（48）　底部から体部の移行がスムーズな個体で、器面摩耗のため詳細は不明。

小皿 a1（49）　平底の底部から直線的外方へ開く口縁部形態を有する。内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。底部外面の処理は不明。

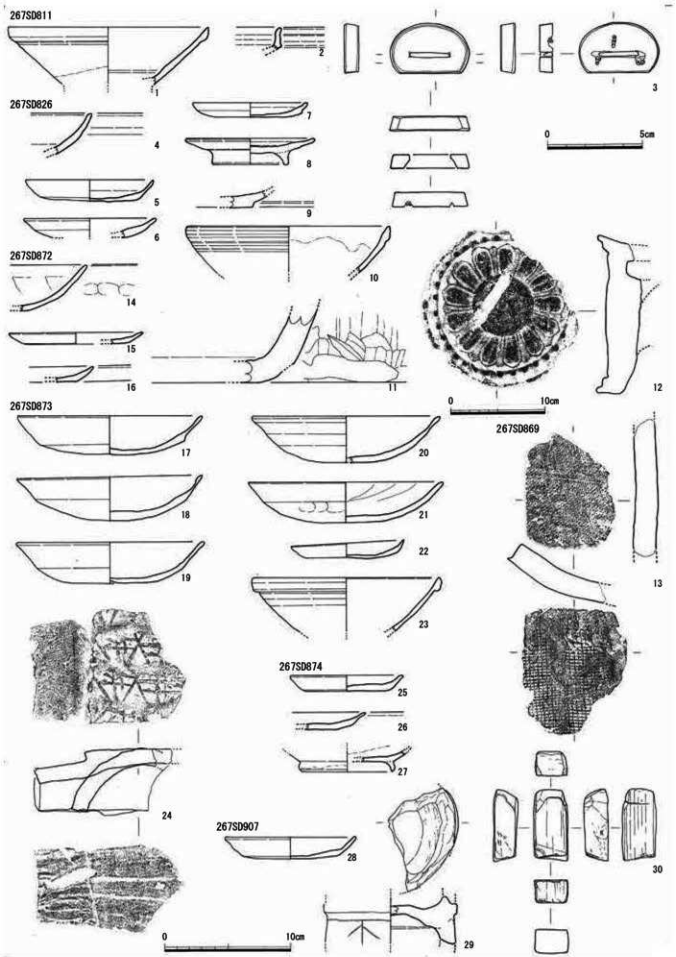


Fig.17　267SD811・826・869・872・873・874・907出土遺物実測図

器台（50）　脚部の破片資料で、台座部分と脚部の接合のためのナデ痕跡が観察できる。

267SD698（Fig.16）

土師器

小皿 a1（51）　やや押し出された底部形態を有し、口縁部を外反気味に外方へ開く。復元口径10.0cmを測る。器面摩耗のため詳細は不明。

267SD716（Fig.16）

土師器

小皿 a1（52・53）　52は、平底から直線的に外方へ開く口縁部形態を有し、53はやや押し出された底部形態を有している。いずれも器面摩耗のため詳細は不明。

椀 c2（54）高台貼り付け部から体部下位の破片資料。器面摩耗のため詳細は不明。

黒色土器B類

椀 2（55）　体部下位の破片資料。丸みを有する体部形態を有し、内外面にミガキ c が観察できる。

267SD811（Fig.17）

白磁

椀（1）　口縁部外面を玉縁によって肥厚させるもので、椀Ⅳ b 類。

朝鮮系無釉陶器

壺（2）　口縁端部の破片資料で、口縁部外面に回線状の筋が二条確認できる。

石製品

丸鞆（3）　断面台形を呈し、表面は磨き上げている。「白玉」と呼称される石英製と考えられる。

267SD826（Fig.17）

土師器

丸底坏（4）　体部下位から口縁部の破片資料で、器面摩耗のため詳細は不明。

小皿 a1（5～7）　5および7は、平底の底部から直線的に外方へ開く口縁部形態を有する。いずれも底部外面の切り離しは回転ヘラ切り。6はやや押し出された底部形態を有する。

小皿 c1（8）　やや高めの高台を貼付する浅めの小皿。器面摩耗のため詳細不明。

緑釉陶器

皿×椀（9）　高台部分の破片資料で、円盤状高台を有する京都系緑釉陶器と考えられる。

白磁

椀（10）　口縁端部外面を肥厚する椀Ⅳ類。

石製品

石鍋（11）　底部のみの破片で、体部の立ち上がりから森田分類のA群ないしB群と考えられる。内外面に成形のための削りが観察できる（森田、1983）。

瓦

軒丸瓦（12）　瓦頭のみの破片資料で、文様から九州歴史資料館分類による170A型式と考えられる（九州歴史資料館、2000）。

267SD869（Fig.17）

瓦

平瓦（13）　破片資料で、凸面に小さめの格子タタキ、凹面に布目痕跡が観察できる。

267SD872（Fig.17）

土師器

丸底坏（14）　体部下位から口縁部の破片資料で、内面にミガキbが、外面には指頭圧痕が観察できる。
小皿a1（15・16）　いずれも平底の底部から直線的に外方へ口縁部へ開く。

267SD873（Fig.17）

土師器

丸底坏a（17～21）　口径14.6cm～15.35cmを測り、底部と体部の境界が明瞭な17～19と、不明瞭な20・21がある。多くは器面摩耗のため詳細は不明だが、21は外面に指頭圧痕が観察できる。
小皿a1（22）　やや底部を押し出すもので、底部外面は回転ヘラ切りによって処理されている。

白磁

椀（23）　口縁部外面を肥厚させる椀Ⅳ類。

瓦

丸瓦（24）　玉縁が残存するもので、凸面に格子タタキ、凹面に布目痕跡が観察できる。「安楽之寺」と文字を描く904Ab型式のタタキと考えられる（九州歴史資料館、2000）。

267SD874（Fig.17）

土師器

小皿a1（25・26）　25は平底の底部から直線的に外方へ開くもので、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。26は器面摩耗のため詳細不明。

灰釉陶器

皿×椀（27）　逆「く」の字形を呈する高台を貼付し、見込み部分に施釉が観察できる。黒笹90号様式と考えられる（藤澤、1990）。

267SD907（Fig.17）

土師器

小皿a1（28）　やや押し出されている底部から直線的に外方へ開く口縁部へ至るもので、復元口径10.4cmを測る。器面摩耗のため詳細は不明。

黒色土器A類

円面硯（29）　脚部外面にヘラ描きによる文様が施され、硯部には黒色化した海と陸が形成されていることから、円面硯と判断した。ただし、焼き物の質から考えると当該資料上で墨をつくることは想定できず、絵筆皿的な用途として使用されていたものと考えられる。

石製品

砥石（30）6面の使用面が観察できる砥石で、材質は頁岩製。

267SD1011（Fig.18）

土師器

小坏a（1）　復元口径12.6cm、底径8.2cm、器高2.35cmを測り、内外面ともに回転ナデによって成形・調整がなされている。底部外面の切り離し処理は不明。
小椀c2（2）　やや高い高台を貼付し、内湾し丸みを帯びる体部形態を有する。内外面ともに回転ナデによって仕上げている。
器台（3）　脚部の破片資料で、断面はおおむね円形で、外面には成形のための指頭圧痕が多く観察できる。

黒色土器B類

小皿a1（4）　やや押し出された平底気味の底部から直線的に外方へ開く口縁部形態を有する。内外面ともにミガキcが観察できる。

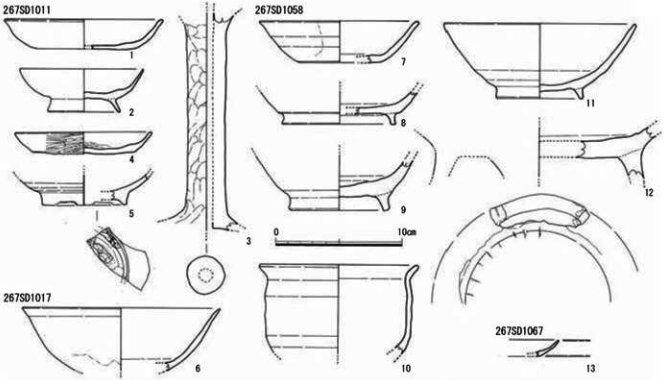


Fig.18　267SD1011・1017・1058・1067 出土遺物実測図

白磁

椀（5）　高台から体部下位の破片資料で、あまり高くない高台形を有する椀Ⅶ1a類。

267SD1017（Fig.18）

白磁

椀（6）　丸みのある体部形態を持ち、やや外反する口縁部形態を有するもので、椀Ⅴ1a類。

267SD1058（Fig.18）

土師器

坏a（7）　復元口径12.6cmを測り、平底から直線的に外方へ開く体部形態を有する。底部外面の処理は資料欠損のため不明。

椀c1（8・9）　高台を貼付し、直線的に外方へ開く体部形態を有する。器面摩耗のため詳細は不明。

小甕（10）　やや丸みを帯びつつ「く」の字形に外反する口縁部へ至る。外面には横ナデが観察できる。口縁端部内面が褐色に変色している。

鉢（12）　脚部を有する大型の鉢と考えられる。脚部には透かしが観察できる。

黒色土器A類

椀c1×2（11）　高台から、やや丸みを帯びつつ口縁部へ至るもので、平安中期以降に隆盛する椀2とは異なり、丸い体部形態を意識しつつ直線的な体部形態へ仕上がってしまった、いわば折衷形の椀と考えられる。

267SD1067（Fig.18）

土師器

小皿a1（13）　直線的に外方へ開くもので、器面摩耗のため詳細は不明。

c. 井戸

267SE060 茶色土（Fig.19）

土師器

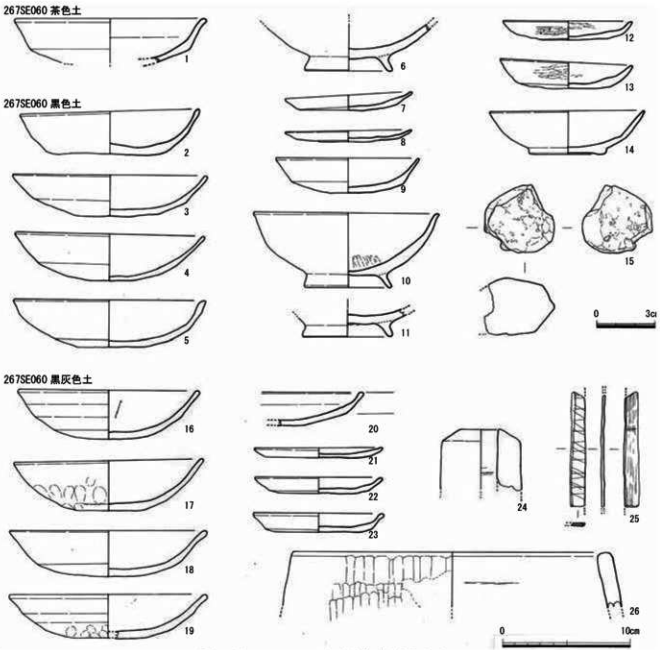


Fig.19　267SE060 出土遺物実測図（1）

丸坏 a（1）　口径 15.0cm を測る口縁から底部の破片で、底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切り。

267SE060 黒色土（Fig.19）

土師器

坏 a（2）　口縁部を一部欠損する資料。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切り。

小坏 a（9）　やや丸みを帯びた底部から直線的に外方へ開く体部形態を有し、口径 11.2cm、底径 8.8cm、器高 2.8cm を測る。底部外面の処理は摩耗により定かではない。

丸底坏 a（3 ～ 5）　3 は器面摩耗により成形・調整痕跡は不明瞭。4・5 底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りで、いずれも底部外面に板状圧痕あり。

椀 c2（6）　底部～高台部分の破片で、内外面とも表面の摩滅が著しく調整不明。

小皿 a1（7・8）　それぞれ口径 9.95cm、9.95cm、底径 7.1cm、5.9cm、器高 1.2cm、0.9cm を測る。底部外面は回転ヘラ切り。

黒色土器 A 類

椀 c2（10）　10 は口縁部を 1/2 欠くのみで、復元口径 14.5cm、高台径 6.8cm、器高 5.8cm。摩滅が著しく内面底部付近の一部でミガキ c が観察できる。口縁部外面の一部にススが付着する。

椀 c（11）　11 は高台部のみが残存し、高台径 7.0cm。

黒色土器 B 類

小皿 a1（12・13）　12 は口径 10.15cm、底径 4.8cm、器高 1.5cm。内外面にミガキ c と底部内面に不定方向のナデを施す。13 は復元口径 10.4cm、底径 7.2cm、器高 2.1cm。内外面にヘラミガキを施す。いずれも底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕を有す。

白磁

皿（14）　口縁の一部を欠くほぼ完形品で、口径 12.15cm、底径 6.0cm、器高 3.4cm を測る。体部は回転ナデ後施釉され、やや淡い緑がかった灰白色を呈す。底部は回転ヘラケズリで整形され、無釉である。皿Ⅱ 1a に分類できる。

石製品

軽石（15）　現存 3.5cm × 3.6cm、厚さ約 2.9cm を測る。

267SE060 黒灰色土（Fig.19）

土師器

丸底坏 a（16 ～ 20）　16 ～ 19 は復元口径も含めて 14.2 ～ 15.4cm、底径 5.5 ～ 11.2cm、器高 3.4 ～ 4.0cm を測る。20 は口縁から底部にかけての破片。16 ～ 18 は内面にミガキ b が確認される。17・19 は外面に指頭圧痕、底部に回転ヘラ切りが認められる。20 は表面摩滅のため調整が不明瞭。

小皿 a1（21 ～ 23）　復元口径 10.0 ～ 10.2cm、復元底径 7.8 ～ 8.6cm、器高 0.8 ～ 1.5cm。22 は摩滅により調整が不明瞭だが、21・23 は回転ナデ後底部内面にナデ、底部回転ヘラ切りが確認される。

土製品

フイゴ羽口（24）　フイゴ先端部分の破片で現況の全長 4.7cm、厚さ 1.8cm、推定される外径は 6.2cm である。内外面にナデを施す。外面は淡灰青色、内面および断面は淡黄橙色～橙茶色～暗灰色を呈する。

木製品

曲物（25）　曲物と推定される小破片で残存長 8.95cm、厚さ 0.25cm。内側とみられる面に多数の刻み痕が観察できる。

石製品

石鍋（26）　1/4 弱の口縁部片で、復元口径 24.8cm。内外面に工具によるケズリを施す。口縁外面上部に一部ススが付着する。石鍋 A 群ないしは B 群と推定できる。

267SE060 フショク土（Fig.19・20）

土師器

器台（27）　脚部の破片で現存全長 6.4cm、幅 3.55 ～ 5.0cm、中心の穿孔の直径 1.1cm を測る。外面は縦方向にケズリを施し八面をなす。

黒色土器 B 類

椀 c2（28）　底部 1/2 弱の破片で復元底径 8.0cm。内外面とも摩耗により調整は不明瞭だが、高台部にナデを確認できる。

木製品

槌状製品（29）　全長 19.6cm、芯部の径 1.2 ～ 1.3cm、槌部の径 4.0 ～ 5.2cm を測る。手持ち削りによって成形されている。

加工品端材（30 ～ 34）　30 は 6.1cm × 10.0cm × 4.8cm で、片側の辺部中央に削ったような痕跡がある。

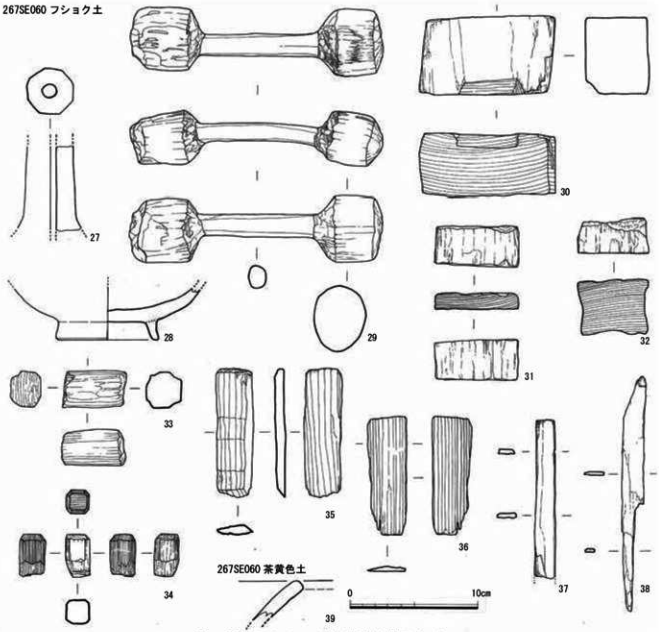


Fig.20　267SE060 出土遺物実測図（2）

31 は 3.1cm × 6.5cm × 1.2cm。32 は 4.2cm × 5.5cm × 2.7cm を測り、長方体を呈する。33・34 は棒状の加工品の端材で、それぞれ現存長 5.0cm、3.3cm、厚み 2.8cm、1.8 × 1.9cm を測る。34 は端部で、上面を四角形に近い八角形に面取りされる。

木片（35・36）　木材を削り取ったような破片で、それぞれ全長 10.0cm、9.2cm、幅 2.9cm、3.0cm、厚さ 0.7cm 0.4cm、を測る。35 は小口端部に削られたカット面がある。

板状用途不明製品（37・38）　37 は現存長 12.3cm、幅 1.5cm、厚さ 0.4cm を測り、端部から 2.3cm の箇所に半円形の穿孔痕が認められる。穿孔がある側が縦割れしている可能性もあるが、判然としない。38 は現存長 18.4cm、幅 0.4 ～ 1.7cm、厚さ 0.3cm を測る。

267SE060 茶黄色土（Fig.20）

土師器

大鉢（39）　口縁部の破片で現存器高 4.1cm。焼成は不良で内外面とも白灰色を呈する。摩耗により調整は不明。

267SE065 黒褐色土（Fig.21）

土師器

小皿 a1（1・2）　いずれも破片資料で摩耗により調整は不明瞭。

脚×把手（3）　獣脚と考えられる破片で、現存長 3.9cm、断面径 1.9 ～ 2.4cm を測る。全面に指押さえを施す。把手の可能性も残す。

瓦

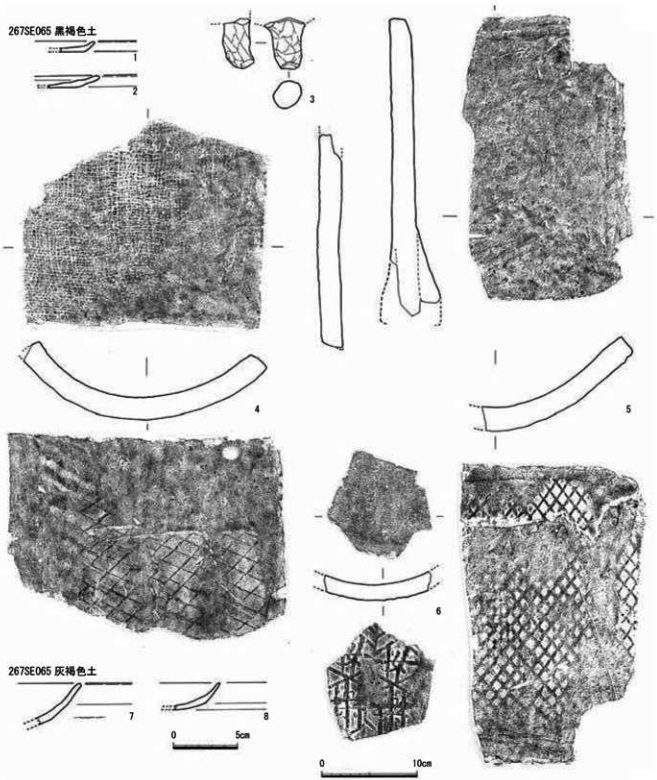


Fig.21　267SE065 出土遺物実測図

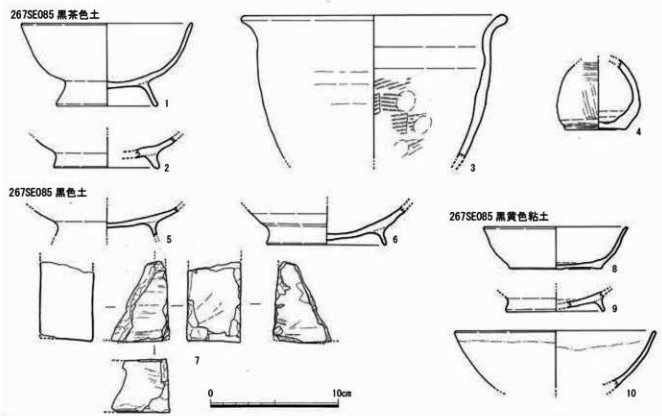


Fig.22　267SE085 出土遺物実測図

平瓦（4～6）　いずれも格子目タタキ。6は文字瓦904Abと考えられる。

267SE065 灰褐色土（Fig.21）

土師器

丸底坏（7・8）　7は、口縁部の破片で、内面にミガキb、口縁部から外面にかけ回転ナデと、体部外面にはその後にナデを確認できる。底部はヘラ切り。8は、内面に回転ナデが観察できるほかは摩耗により調整不明。現状の器高2.1cm。

267SE085 黒茶色土（Fig.22）

土師器

椀c2（1）　1は口縁が1/3、高台は1/2が残存し、復元口径13.3cm、復元底径8.0cm、器高6.5cmを測る。高台の高さ、器厚の薄さから金属器模倣の椀と考えられる。

椀c（2）　2は底部1/4が残存し、復元底径8.2cm。いずれも内外面とも摩耗により調整不明。

甕（3）　口縁から体部下部にかけての破片で、復元口径20.8cmを測る。口縁部内外面に回転ナデ、体部内面はハケ後ナデ調整、外面には横方向のナデが施され、叩きの有無は明らかにできない。ススが付着する。

緑釉陶器

壺（4）　体部から底部が完存し、底径4.8cm、現存器高5.5cmを測る。内面に回転ナデ、体部外面はミガキ後、底部は糸切りの後施釉されるが、表面の剥離が著しい。釉は淡緑色で薄く施される。胎土はφ0.5～1mm大の淡白褐色砂粒をわずかに含む淡白褐色。

267SE085 黒色土（Fig.22）

土師器

椀c（5）　底部部分の破片。摩耗により調整不明。

黒色土器A類

椀ｃ（6）　底部1/3片で、復元底径9.4cm。摩耗しているが内面にミガキ痕跡がみとめられる。外面は回転ナデを施す。

瓦

塼（7）　角部の破片で、無文。厚さ5.5cmを測る。平面に横方向のナデを施す。

267SE085 黒黄色粘土（Fig.22）

土師器

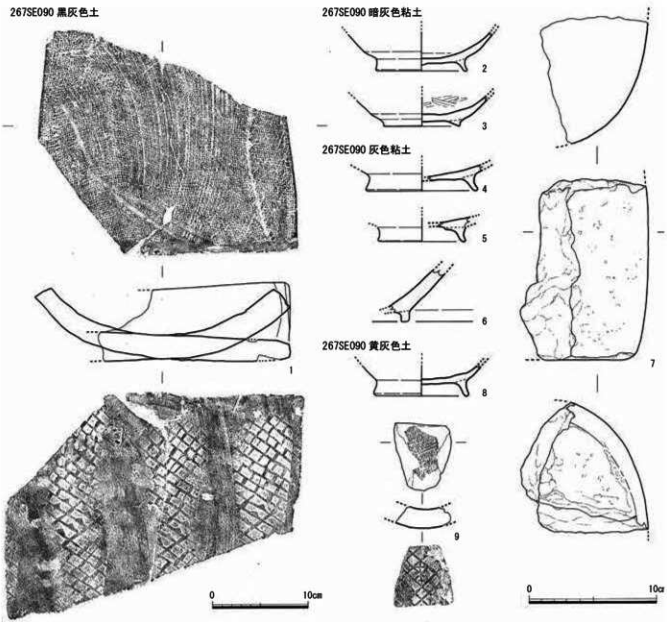
坏ａ（8）　復元口径11.3cm、復元底径7.3cm、器高3.3cm。内外面に回転ナデを施し、その後底部内面にはナデを行う。底部はヘラ切り後ナデを施す。

椀ｃ（9）　高台部分の破片で復元底径7.7cm。内外面に回転ナデを施し、その後底部内面にはナデを施す。

黒色土器Ａ類

椀（10）　口縁から体部の破片で、復元口径15.8cm。口縁部に漆が付着する。

267SE090 黒灰色土（Fig.23）



Ｆｉｇ．２３　２６７ＳＥ０９０出土遺物実測図

瓦

平瓦（1）　凸面に格子目が観察でき、タタキ後一部をナデ消す。凹面には布目痕と糸切り痕跡がみられる。分割破断面は未調整である。

267SE090 暗灰色粘土（Fig.23）

土師器

椀 c2（2）　高台および底部の破片資料で、高台径 7.2cm を測る。内面にミガキ b を施す。外面は回転ナデと、底部に回転ヘラ切り後にナデを施す。

黒色土器 A 類

坏 c（3）　底部 1/3 片で、復元底径 6.0cm。内面にミガキ c を施す。底部は回転ヘラ切り。

267SE090 灰色粘土（Fig.23）

土師器

椀 c（4・5）　ともに底部の破片で復元底径 8.8cm、6.9cm。4 は底部に回転ヘラ切りを観察できる。

鉢 c × 壺 c（6）　高台から体部立ち上がり部分の破片。内面は摩耗により調整不明瞭。外面には回転ヘラケズリを施す。

石製品

用途不明品（7）　側面と考えられる面に摩耗が観察でき、側面を利用した粉砕具の可能性もある。破片資料のため用途を特定するに至っていない。玄武岩製。

267SE090 黄灰色土（Fig.23）

土師器

椀 c2（8）　高台から底部の破片で復元高台径 7.4cm。内面は摩耗により調整不明。外面は回転ナデ、底部には回転ヘラ切り後不定方向にやや粗いナデを施す。

瓦

平瓦（9）　凸面に格子目タタキを施す。凹面に布目痕が観察できる。

267SE120 淡黒色土（Fig.24）

土師器

小皿 a（1・2）　いずれも底部の破片で体部内外面に回転ナデ痕跡が観察できるものの、底部外面の処理は、1 は回転ヘラ切り、2 は不明。

椀 c（3）　底部から高台の破片資料。

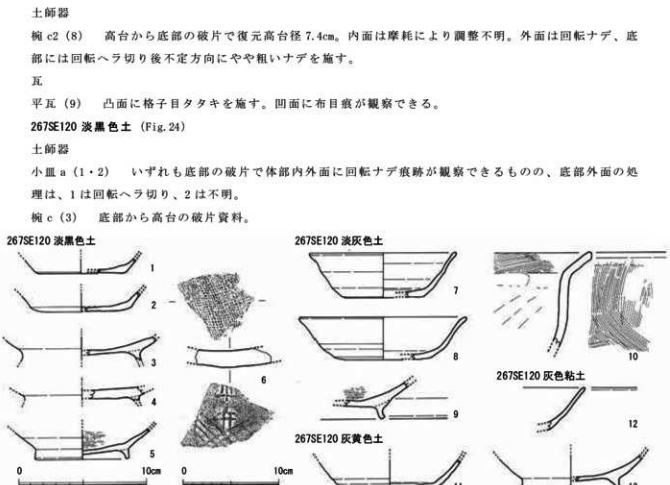


Fig.24　267SE120 出土遺物実測図

黒色土器A類

椀c（4）　底部から高台の破片資料で内外面ともに摩耗により成形・調整痕跡は不明。

椀c1（5）　底部から高台が残る資料で、底部外面に回転ヘラ切りの痕跡が観察できる。見込み部分にミガキcが観察できる。

267SE120 淡灰色土（Fig.24）

土師器

坏a（7・8）　口径11.4cm、13.0cm、底径6.4cm、6.6cm、器高3.5cm、3.3cmを測り、底部外面はいずれも回転ヘラ切りによって処理されている。底部から体部への移行は緩やか。

甕a（10）　口縁部から体部上位までの破片資料で、内面は右上がりにヘラ削り、口縁部内面から外面についてはハケによって器面調整がなされている。

黒色土器A類

椀c（9）　底部から高台の破片資料で、内面にミガキcが残存している。

267SE120 灰黄色土（Fig.24）

土師器

坏a（11）　底部から体部下位までの破片資料、底部から体部への移行にややシャープさが残る。底部外面は回転ヘラ切り。

267SE120 灰色粘土（Fig.24）

土師器

坏（13）　口縁部の破片資料で器面摩耗のため成形・調整痕跡は定かではない。

黒色土器A類

椀c（12）　底部から高台の破片資料で、やや外方へ開く高台形状を呈する。器面摩耗による成形・調整痕跡は定かではない。

267SE145 茶灰色砂（Fig.25）

須恵器

獣脚（1）　脚部のみで現存高7.6cm、幅2.0～4.0cmを測る。全面にナデ付けによる成形時の指頭圧痕がみられる。

土師器

丸底坏a（2）　口縁から体部にかけての小破片。摩耗により調整は不明。内面は白橙色、外面は淡橙黄色を呈する。

小皿a1（3・4）　いずれも小破片で、器高1.5cm、0.9cmを測る4は口縁部に回転ナデを観察できる。

瓦

塼（5）　3側面が残存する破片で、無文。残存法量で9.6cm×13.6cm、厚さ5.6cmを測る。

267SE145 灰色粘土（Fig.25）

土師器

丸底坏a（6）　やや浅めのもので復元口径13.8cm。内面にミガキbが観察できる。

小皿a1（7）　復元口径10.0cm。摩耗により調整は不明。

267SE145 青灰色砂（Fig.25）

土師器

小皿a1（8）　器高1.0cm、内外面に回転ナデを施す。底部切り離しは摩耗により確認できない。

木製品

折敷（9）　底板部分の破片だが、内側の側縁の角部が丸みをもつように切断された再加工品の可能性がある。全長32.9cm、幅10.3cm、厚さ0.5cmを測る。綴目が2箇所あり、植物製の綴紐を二重に回している。

267SE145 暗灰色粘土（Fig.25）

土師器

小皿a1（10・11）　復元口径いずれも9.2cm、復元口径7.0cm、6.4cm、器高1.3cm、1.8cm。いずれも体部

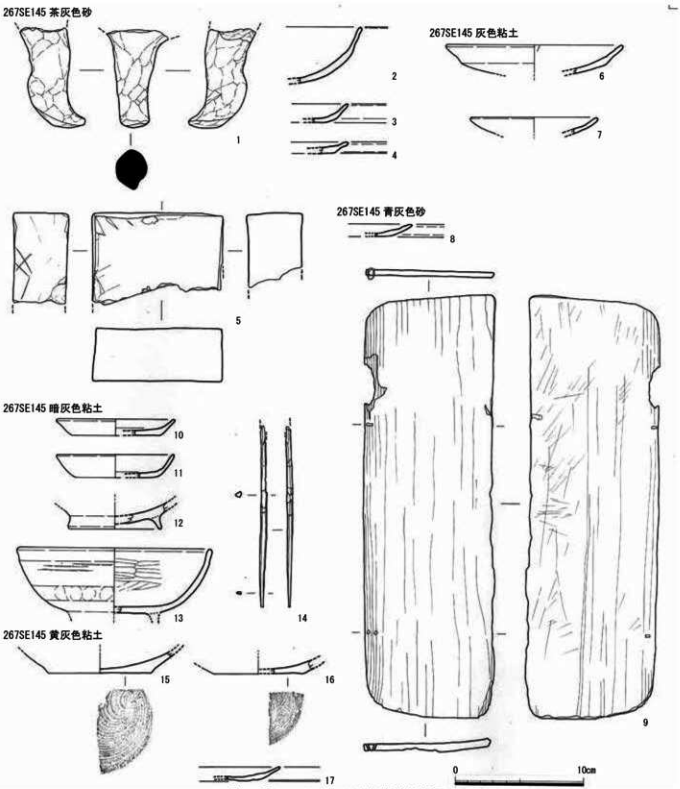


Fig.25　267SE145 出土遺物実測図

内外面に回転ナデを施す。10は底部回転ヘラ切り。11もヘラ切りと考えられる。

椀c（12）　高台から底部の破片で復元高台径7.3cm。高台部に貼付け時のヨコナデが確認できるほかは摩滅により調整不明。胎土に白雲母を比較的多く含む。

黒色土器B類

椀c2（13）　高台を欠く1/3程度の破片で、復元口径15.2cm、現存高5.1cm。内面にミガキcを施す。外面は横ナデのほか一部工具痕と丸椀化の際の指頭圧痕が観察できる。

木製品

箸（14）　片側端部を欠き、現存長19.1cm、厚さ0.2～0.55cm。縦方向に削った痕跡が観察でき、先端部を細く仕上げる。

267SE145 黄灰色粘土（Fig.25）

土師器

坏a（15・16）　底部片でそれぞれ復元底径8.2cm、7.0cm、現存高1.7cm、1.1cm。底部は回転糸切り離し。ロクロ成形の坏bの可能性もある。

小皿a1（16）　口縁から底部にかけての小破片で、径の復元は難しく、器高1.1cmを測る。内外面に回転ナデと底部内面にナデを施す。底部外面には回転ヘラ切りと板状圧痕が確認できる。

267SE332 黒灰色土（Fig.26）

土師器

坏a（1）　復元口径11.0cm、復元底径7.8cm、器高2.0cm。全体的に摩耗が著しいが口縁部に回転ナデの痕跡が観察できる。

椀c（2）　底部の破片で高台端部も欠くが推定復元される高台径は6.9cm。焼成は良好で淡白橙色を呈す。

瓦

丸瓦（3）　凸面に格子目タタキを施す。九州歴史資料館分類の901Kと考えられる（九州歴史資料館、2000）。

平瓦（4・5）　凸面に格子目タタキ、凹面に布目痕跡が観察できる。

267SE332 灰色砂（Fig.26）

土師器

椀c（6）　高台が1/2残存する底部の破片で、底径7.95cmを測る。内面に回転ナデ後粗いナデ、外面には回転ナデを施す。底部切り離しは回転ヘラ切りとみられる。

267SE332 暗灰色砂（Fig.26）

瓦

軒丸瓦（7）　凸面に格子目タタキ、凹面に布目痕跡が観察でき、瓦当を貼付するためのナデ痕跡が凸面に観察できる。九州歴史資料館分類の144bと考えられる（九州歴史資料館、2000）。

267SE332 淡茶灰色土（Fig.26～28）

土師器

小皿a（8）　底部の破片で全体的に摩耗気味だが、底部は回転ヘラ切りと見られ、板状圧痕を有する。内外面とも暗灰色を呈する。

黒色土器A類

椀c（9）　底部から高台が残存する破片で復元高台径8.2cm。内面にミガキcを施し、体部および底部の外面に回転ヘラケズリが、高台部には貼付け時と畳付け時の回転ナデが見られる。底部には板状圧痕

も有する。

瓦

丸瓦（10～14）　いずれも凸面に粗目の格子目タタキ、凹面に布目が観察でき、玉縁と丸瓦の接合部分が浅いもので構成される。九州歴史資料館分類の901J（11・12）、901K（13・14）、901Gb（15）がそれぞれ該当すると考えられる（九州歴史資料館、2000）。

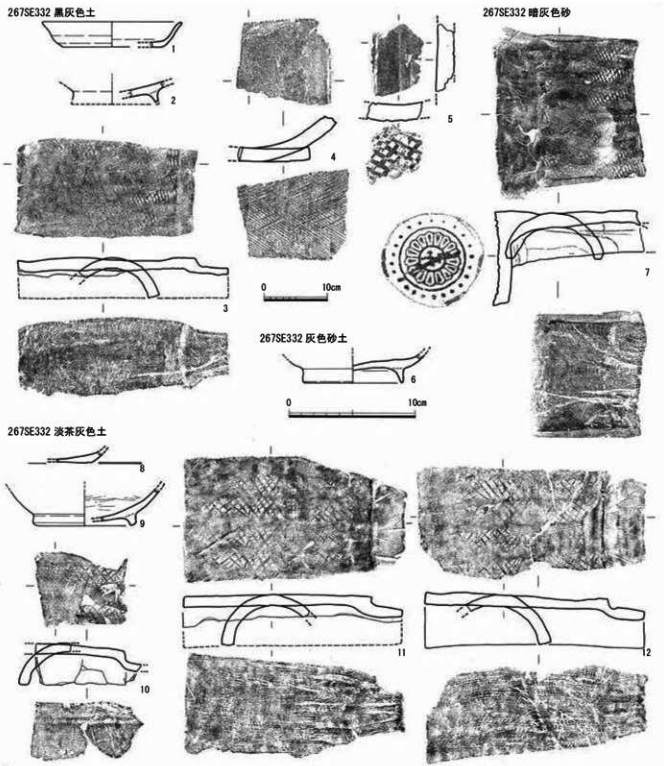


Fig.26　267SE332 出土遺物実測図（1）

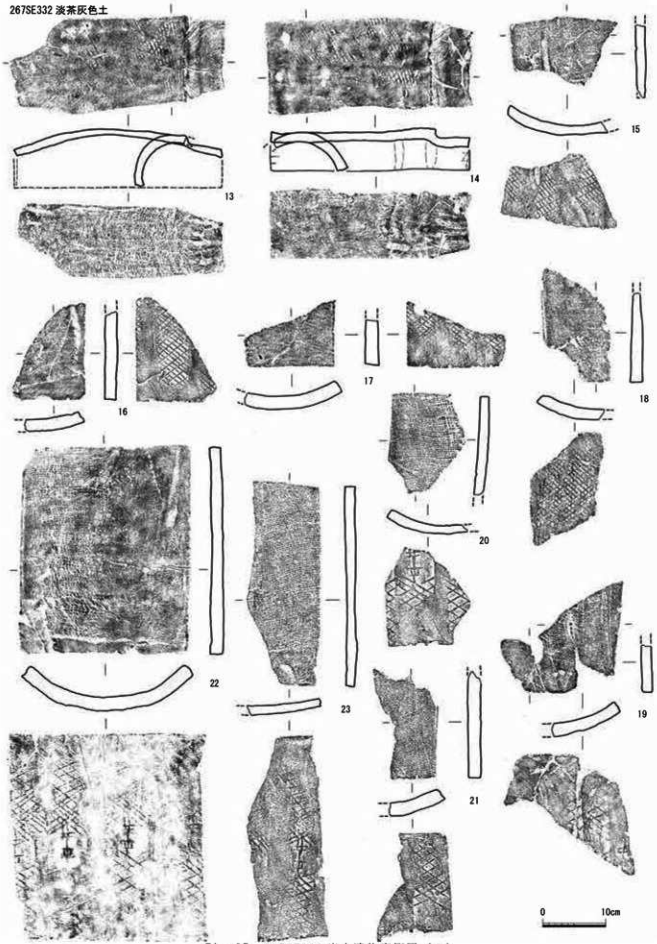


Fig. 27　267SE332 出土遺物実測図（2）

267SE332 淡茶灰色土

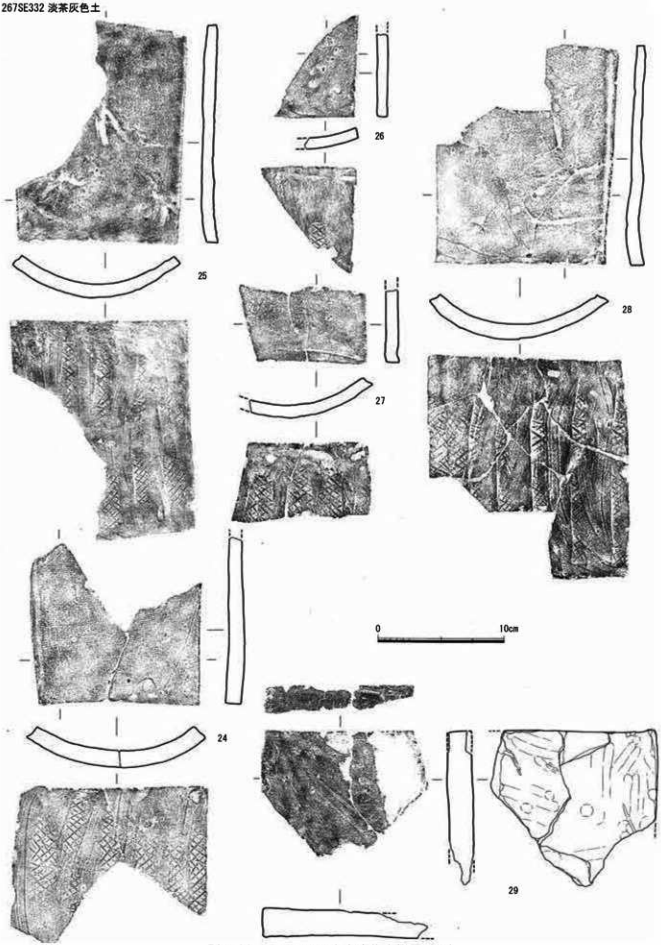


Fig.28　267SE332 出土遺物実測図（3）

平瓦（15～28）　いずれも凸面に格子目タタキ、凹面に布目痕跡が観察でき、九州歴史資料館分類の901Gb（16～18）、901H（19）、901Hb×c（20）、901Hc（22・23）、901J（24～27）に分類でき、28のみ分類不明（九州歴史資料館、2000）。

塼（29）　表面をナデによって成形・調整するもので無文のものと考えられる。

267SE332 灰色砂（Fig.29～31）

瓦

丸瓦（30～35）　凸面に粗目の格子目タタキ、凹面に布目痕跡が観察でき、九州歴史資料館分類の

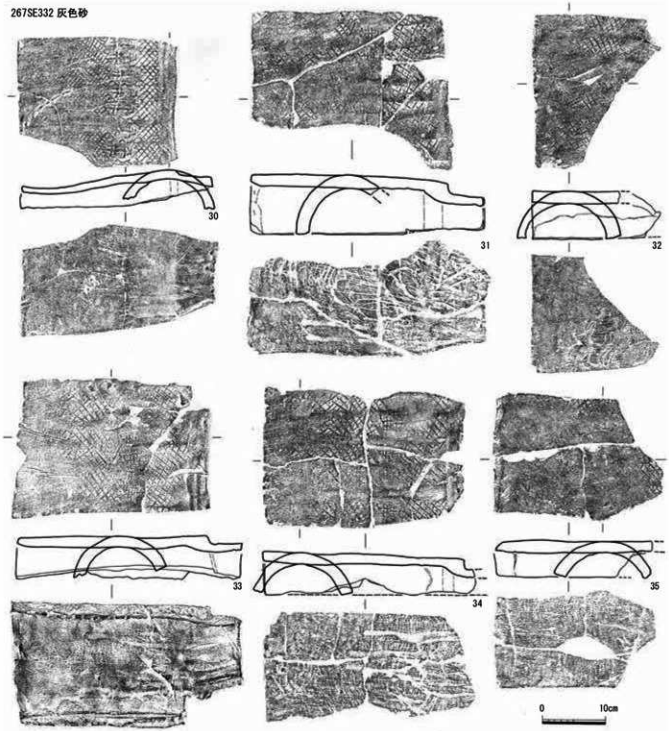


Fig.29　267SE332出土遺物実測図（4）

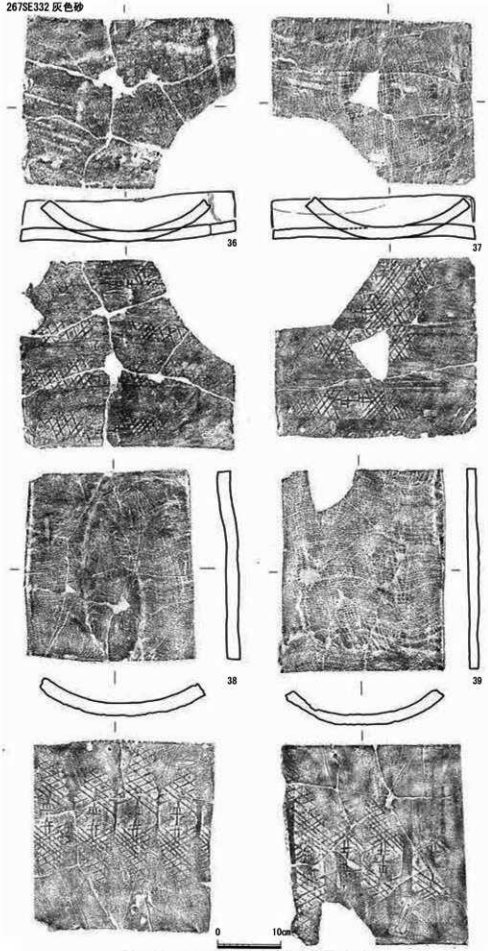


Fig.30　267SE332 出土遺物実測図（5）

901Gb（30）、901J（31～34）に分類でき、35については不明。いずれも玉縁部と丸瓦部の接合部分が浅く仕上げられている（九州歴史資料館、2000）。

平瓦（36～41）いずれも凸面に粗目の格子目タタキ、凹面に布目痕跡が観察でき、九州歴史資料館分類の901HC（36～40）、901J（41）に分類できる（九州歴史資料館、2000）。37～39には「平井」の文字が読み取れる。

267SE435 灰色砂

（Fig.32）

土師器

丸底坏（1）体部のみの破片資料で、内外面とも器面摩耗により成形・調整痕跡を明らかにし難いものの、内面についてはミガキによる平滑な面が観察できる。

椀2（2）丸い体部形態を有し、復元口径15.2cm、外面は回転ナデ、内面にミガキcが観察できる。土師器に分類したが、瓦器の可能性もある。

小皿a1（3・4）口縁部を直線的に引き出すこので、口径が復元できる4は、10.0cmを測る。

4のみ底部外面の処理は回転ヘラ切り。

瓦

丸瓦（5・6）いずれも丸瓦の破片資料で、凸面に斜格子のタタキ痕跡が、凹面に布痕跡が観察できる。九州歴史資料館が提示した格子分類の901型式に該当する（九州歴史資料館、2000）

石製品

石斧（7）刃部が欠損した破片資料で、やや扁平な形状を有している。石材は、緑色片岩。

267SE435 灰色粘土（Fig.32）

須恵器

坏c（8）直線的に外方へのびる体部形態を有し、体部と底部の境界に断面台形の高台を添付する。内外面ともに回転ナデによる調整を行い、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

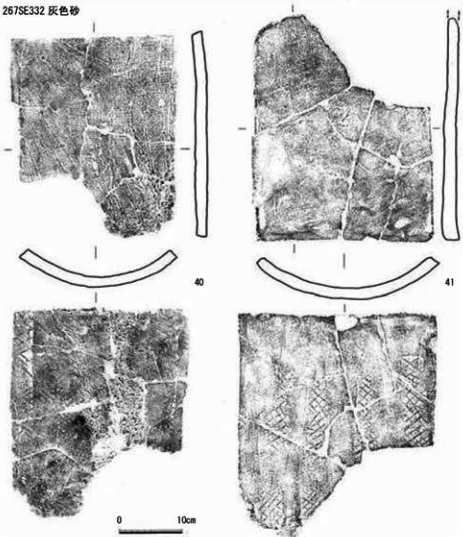


Fig.31　267SE332出土遺物実測図（6）

土師器

丸底坏（9）内外面とも回転ナデによる成形・調整を行い、内面にはミガキbが、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

小皿c1（10）復元口径10.8cmを測るもので、やや高めの高台を貼付する。器面摩耗が著しいため成形・調整については観察し難かった。

黒色土器B類

椀2（11）体部中位から口縁部にかけての破片資料で、器面摩耗が著しいものの、わずかにミガキcが観察できる。

瓦器（12）高台を貼付する底部の破片で、断面台形の低い高台が付され、内外面に細めのミガキcが観察できる。特に見込み部分のミガキについては暗文と考えられ、これらの特徴から畿内産瓦器と考えられる。

瓦

平瓦（13）全景が判然としない破片資料で凸面に格子タタキが、凹面に布痕跡が観察できる。タタキ痕跡については九州歴史資料館分類の901型式と考えられる（九州歴史資料館、2000）。

土製品

無文塼（14）方形のものと考えられ、器面に成形時のナデ痕跡が観察できる。製品の芯の分は暗灰色、

表面は淡褐灰色を呈している。

267SE435 黒灰色土 (Fig.32)

須恵器

こね鉢 (15) 底部から体部下位の破片資料で、底部外面に二条の筋が観察できる他は器面摩耗のため成形・調整痕跡が観察できない。

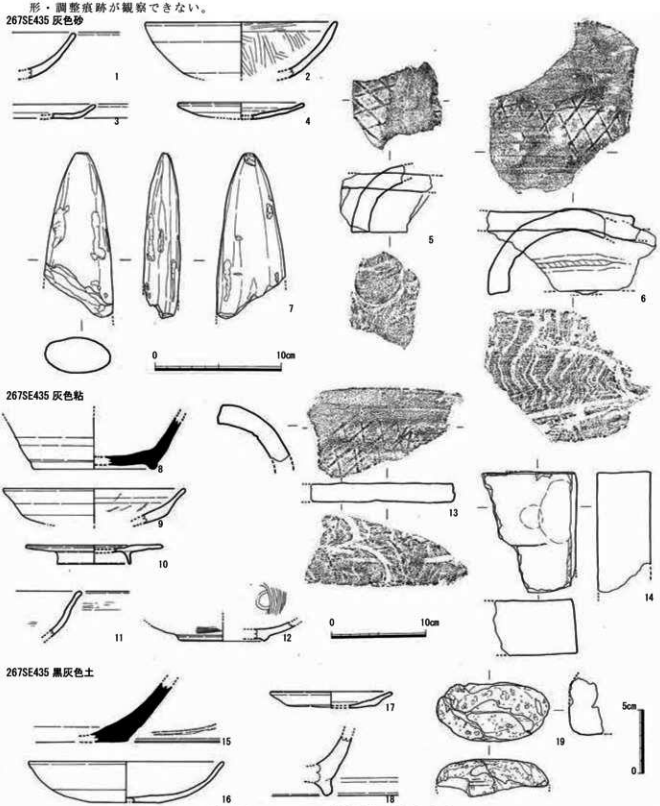


Fig.32 267SE435出土遺物実測図 (1)

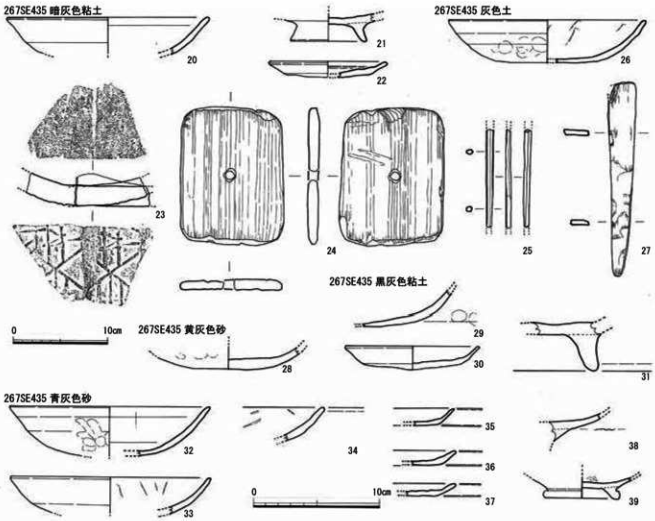


Fig.33　267SE435 出土遺物実測図（2）

土師器

丸底坏 a（16）復元口径 15.4cm、復元底径 11.7cm、器高 3.25cm を測り、内面は器面摩耗のため成形・調整痕跡は観察できないものの、外面は回転ナデ、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

小皿 a1（17）口縁部を直線的に外方へ引き出すもので、内外面ともに回転ナデによって器面成形・調整を行い、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

鉢×壺（18）高台を付す底部の破片資料で、器面は内外面ともに摩耗しているため成形・調整痕跡は観察できない。体部の傾斜からみて壺の可能性があるが、器面摩耗による内面状況が明らかにし難い。

石製品

用途不明（19）側面に使用痕が観察できるもので、材質は火山砕屑物である軽石。

267SE435 暗灰色粘土（Fig.32・33）

土師器

丸底坏（20）　口径 16.0cm を測るもので、内面にミガキ b が観察できる。

椀 c（21）　高台径 6.0cm を測るもので、体部の残存状況からして、高台径が小さい個体と考えられる。

小皿 a1（22）　口径 9.4cm、底径 7.0cm、器高 1.3cm を測り、底部外面は回転ヘラ切り。

瓦

平瓦（23）　やや粗い格子目タタキを凸面に留め、凹面には布目痕跡が観察できる。「安楽之寺」銘がある九州歴史資料館分類の 904Ab と考えられる。

木製品

方形不明製品（24）　板状のもので、中央部を穿孔している。用途については定かにできない。

箸（25）　両端を欠損するもので、表面を削りにより成形している。

267SE435 灰色土（Fig.33）

土師器

丸底坏a（26）　口径15.8cm、底径12.6cm、器高3.4cmを測り、体部内面にはミガキbが、外面には指頭圧痕が観察できる。

木製品

不明製品（27）　板状のもので、先端を想像させるように尖っている。用途については定かではない。

267SE435 黄灰色砂（Fig.33）

土師器

丸底坏（28）　底部のみの破片資料で、内面に回転ナデ調整の後、不定方向のナデが観察できる。底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

267SE435 黒灰色粘土（Fig.33）

土師器

丸底坏a（29）　底部のみの破片資料で、復元径を求めることができなかった。外面に押し出しに伴う指頭圧痕が残る。底部外面は回転ヘラ切り。

小皿a1（30）　復元口径10.6cm、底径7.6cm、器高1.9cmを測り、底部内面に不定方向のナデを施すことにより、やや安定しない底部形態を有している。

鉢（31）高台部の破片で体部との接合の際に付けられた貼付け時のナデが確認できる。大きさから大型の鉢に貼付されたものと推定できる。

267SE435 青灰色砂（Fig.33）

土師器

丸底坏a（32～34）いずれも内面にミガキcが見られる。32は外面に指頭圧痕が観察できる。33の外面には黒斑が観察できる。

小皿a1（35～37）復元口径を求めることができない破片資料で、口縁部を直線的に引き出す形態を有している。37のみ底部外面に回転ヘラ切りの痕跡が観察できる。

器台（38）受部と脚部の接合部分の破片で、外面に受部と脚部を接合する際のナデ痕跡が観察できる。

黒色土器B類

椀c（39）高台から底部の破片資料で、見込み部分にミガキc痕跡が残る。また底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

d. 土坑

267SK030（Fig.34）

須恵器

甕（1）　底部からやや外開きに直立気味に立ち上がる体部形態を有し、外面は回転ナデの後、粗い不定方向のナデによって仕上げられている。また、内面には当て具痕跡が観察できることから、タタキしめの後、回転ナデ、さらには粗いナデ調整で器体の成形・調整がなされたものと考えられる。

土師器

椀c（2～4）　高台を有す底部付近の小片で、摩耗により調整は不明。

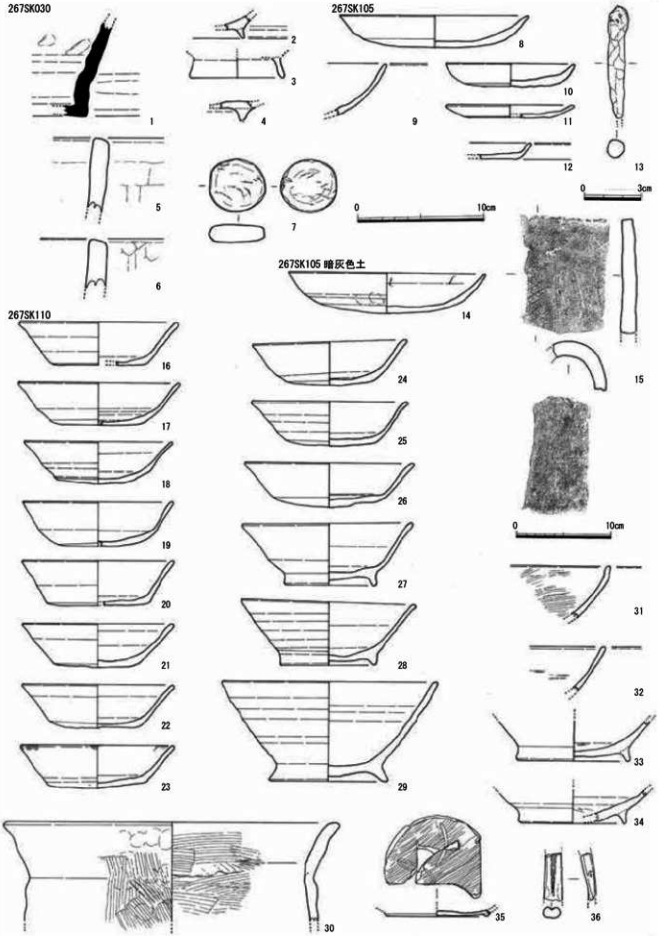


Fig. 34　267SK030・105・110 出土遺物実測図

石製品

石鍋（5・6）　滑石製の石鍋で、いずれも直立気味の体部形態を有することから、森田氏分類のA群の可能性が高い。残存状況が悪い6についてはB群の可能性も残す（森田、1983）。5は外面にスス状炭化物が付着している。

用途不明（7）　円形の扁平な形状を有し、研磨様の仕上がりで、平滑度が高い。石英製と考えられる。

267SK105（Fig.34）

土師器

丸底坏a（8・9）　8は、復元口径15.0cmを測り、底部外面は回転ヘラ切りによって処理されている。9は、器面摩耗のため詳細不明。

小皿a1（10～12）　10は、他の2点と比較し器高が高く古い様相を有しており、混入の可能性がある。底部外面の処理は10のみ回転ヘラ切りであることが確認できるが、他のものは器面摩耗のため詳細不明。

金属製品

鉄釘（13）　錆のため断面形状をはじめ詳細が不明。

267SK105 暗灰色土（Fig.34）

土師器

丸底坏a（14）　底部から体部への移行がスムーズで、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察でき、口縁部内面にはミガキb痕跡が残る。口径15.6cmを測る。

瓦

丸瓦（15）　破片資料で、全形は不明。凸面に格子タタキが、凹面には布目痕が観察できる。

267SK110（Fig.34）

土師器

坏a（16～26）　復元口径11.8cm～13.4cmを測り、底部から体部への移行が明瞭に屈曲している16・20・21に対し、不明瞭なもの17～19・22～26がある。いずれも直線的に外方へ開く体部形態を有しており、平安前期の様相を保持している。

椀c1（27～29）　直立する高台を貼付する27・28に対し、外方へ張り出す高台形状をもつやや大型の29がある。底部外面はいずれも回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

甕a（30）　頸部を緩やかな「く」字形に屈曲させるもので、内外面にハケ調整の痕跡が観察できる。口縁形についても奈良時代のものと比較するとルーズさが感じられる。

黒色土器A

椀（31・32）　口縁部のみの破片で、内面にミガキcが施されている。

椀c（33～35）　高台を貼付するもので、33・34ともにわずかにミガキc痕跡が観察できる他は、器面摩耗のため詳細は不明。35は、器厚が極めて薄く、暗文様のミガキcが細かく施されており、加えて高台形状が断面三角形であることから畿内産黒色土器A類の椀であると考えられる。

越州窯系青磁

水注（36）　水注に貼付される把手と解され、施釉薬や素地の状態から越州窯系青磁Ⅰ類に分類される。

267SK485 茶褐色土（Fig.35）

土師器

丸底坏a（1）　底部から体部への移行がスムーズで、底部外面に指頭圧痕が残る。他の部位については器面摩耗のため詳細不明。

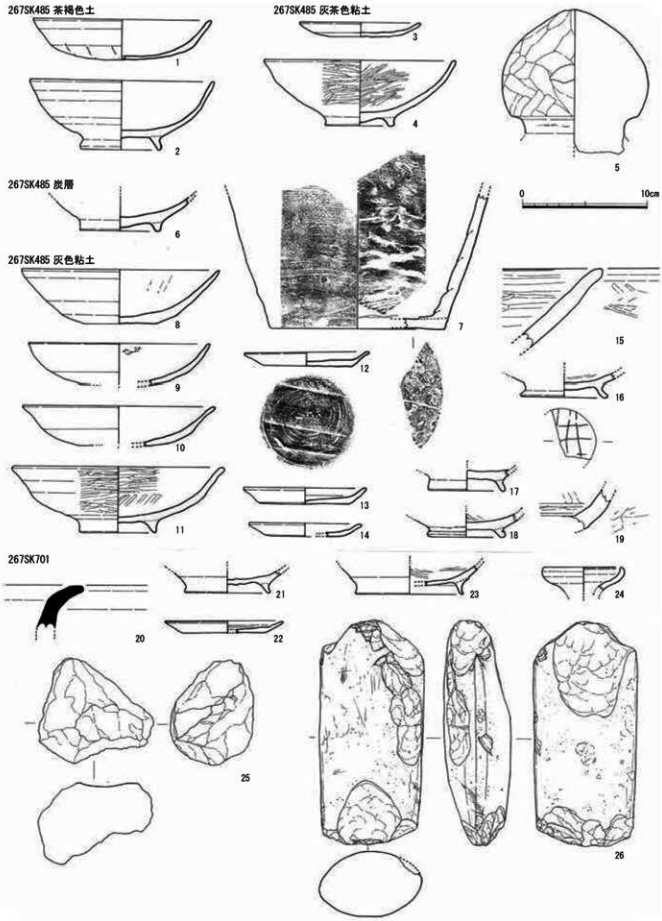


Fig.35　267SK485・701出土遺物実測図

椀 c2 (2)　やや外方に張る高台を貼付し、内湾気味に丸い体部形態を持つ椀である。成形・調整痕跡については器面摩耗のため詳細不明。

267SK485 灰茶色粘土 (Fig.35)

土師器

小皿 a (3)　復元口径 9.6cm を測り、底部外面回転ヘラ切り。

黒色土器 B 類

椀 c (4)　やや直立気味の高台を貼付し、外開きながら丸い形態の体部を持つ。内外面ともにミガキ c が施されている。

土製品

擬宝珠 (5)　削りによって成形された擬宝珠で、下位に接合痕跡が観察できることから何かに接合されていたことが想定できる。

267SK485 炭層 (Fig.35)

土師器

椀 c2 (6)　高台から底部の破片資料で、全形ならびに器面摩耗のため詳細を明らかにできない。

朝鮮系無釉陶器

壺 (7)　やや器厚が厚く、朝鮮系無釉陶器と断定するには至っていない。外面に細かい格子タタキが観察できる。

267SK485 灰色粘土 (Fig.35)

土師器

丸底坏 a (8 ～ 10)　丸底坏で、8 のみ内面にミガキ b 痕跡が観察できる。9 および 10 については器面摩耗のため詳細不明。

椀 c (11)　直立気味の高台を貼付し、内外面にミガキ c を細かく施している。

小皿 a1 (12 ～ 14)　口径 9.0cm ～ 10.0cm を測り、12・13　については底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

黒色土器 A 類

鉢 (15)　大型の鉢と考えられ、外方へ大きく開く口縁部形態を有している。内外面にミガキ c が観察できる。

黒色土器 B 類

椀 c (16 ～ 18)　高台を貼付する椀で、16 については底部外面にヘラ描きによる記号が付されている。

鉢 (19)　体部下位の破片資料のため全形を推定することができない。外面は不定方向の削り、内面にミガキ c が観察できる。

267SK701 (Fig.35)

須恵器

火舎×鉢 (20)　外反する口縁部を有する。内外面ともに回転ナデ調整。

土師器

椀 c (21)　外方へ張る高台を貼付するもので、体部形態は判然としない。底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

小皿 a1 (22)　復元口径 9.5cm を測り、直線的に外方へ開く口縁部を有する。器面摩耗のため詳細は不明。

黒色土器 A 類

椀 c (23)　外方に張り出す高台を貼付し、外方へ直線的に立ち上がる体部形態を有する。見込み部分

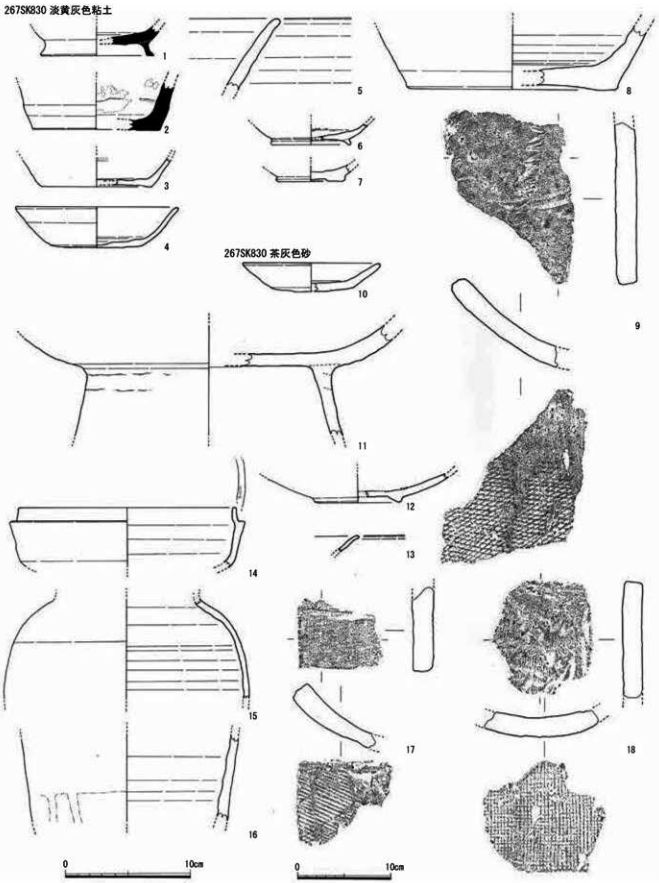


Fig.36　267SK830 出土遺物実測図

にミガキｃが観察できる。

越州窯系青磁

壺（24）　内湾する口縁部形状を呈するもので、内外面に施釉。素地の状態からⅡ類系の製品と考えられる。

土製品

用途不明（25）　土塊でわずかに器面らしき箇所が観察できるものの、焼成されていることを考えると、本資料から用途を特定することができない。

石製品

石斧（26）　敲打によって刃部を形成する石斧で、表面には細かい敲きによる器面調整が行われている。玄武岩製。

267SK830 淡黄灰色粘土（Fig.36）

須恵器

坏ｃ（1）　やや外方に張り出す高台形状を有し、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

壺（2）　底部の破片資料で、平底の底部からやや直立気味に外方へ立ち上がる体部へと至ると推定できる。内面に粘土紐痕跡が観察でき、外面は回転ヘラ削りによって器面調整されている。

土師器

坏ａ（3・4）　両者とも底部外面は回転ヘラ切り、3は底部のみの破片資料で口径などが定かではないが、4は推定口径13.0cmを測り、底部と体部の境界は不明瞭。

鉢（5）　外方へ大きく開く口縁部形状を有し、内外面とも回転ナデ調整。

黒色土器Ａ類

椀ｃ（6）　外方へ張り出す高台を貼付するもので、底部から体部下位の破片資料のため、体部形状は不明。

白磁

椀（7）　蛇の目高台を有するもので、見込み部分に白色釉を掛ける。外面は露胎。椀Ⅰ-1類と考えられる。

中国産陶器

壺（8）　平底の底部から外方へ開く体部形態を有する。内面に回転ナデ痕跡が観察でき、白色砂を多く含む素地特徴を有する。

瓦

平瓦（9）　凹面に布目痕、凸面にやや細かい格子タタキ痕跡が観察できる。

267SK830 茶灰色砂（Fig.36）

土師器

小坏ａ（10）　復元口径11.0cmを測り、底部外面は回転ヘラ切り。

高台付鉢（11）　やや大ぶりの鉢で、高脚の高台を貼付する。器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

緑釉陶器

皿（12）　断面三角形の高台を有し、体部内外面に施釉がみられる。外方へ大きく開く体部形態を有している。

灰釉陶器

皿（13）　口縁端部の破片資料で、内外面に灰釉を施す。

青磁

合子（14）　外面および口縁部内面に施釉。口縁部のカエリ部分外面に目跡が観察できる。

中国産陶器

壺（15・16）　15は、やや丸みを有する体部上位から頸部の破片資料で、内面に回転ナデ痕跡が観察できる。素地に白色砂を多く含む。16は直立気味に立ち上がる体部の破片資料で、素地特徴は15に類似。

瓦

平瓦（17・18）　両者とも凹面に布目痕が観察でき、17は凸面に粗目の格子タタキ痕、18は細かい格子タタキ痕が観察できる。

（5）第2・3調査面検出遺構

a. 柵列状遺構

267SA1145（Fig.37）

1坊路東側に2つの小穴が南北に並び、同じ方位で東に3間×5間の東西棟267SB540が展開していることから建物にともなう柵列を想定している。

b. 掘立柱建物

267SB540（Fig.37）

調査区中央のAE～AG23～27で検出された3間×5間の東西棟の建物である。黒灰色土層除去時に検出された遺構で、5間×3間の東西棟である。540aの柱穴からは獣骨が出土している。

267SB700（Fig.37）

南北16間（30m）×東西5間（8.5m）を測る。大型掘立柱建物。遺構保存が図られることから遺構検出のみ行う。条236-1SB480と同一の建物と考えられる。

調査区東側のU～AF17～20で検出された建物である。4×16間の南北棟で、身舎2×16間を確認している。

267SB1095（Fig.37）

調査区北東側のAM～AO19・20で井戸267SE425を囲むように検出された1間×3間の南北棟である。a～gの7基の柱穴を検出した。建物の内側で267SE425の井戸が検出されており、この井戸の覆屋の可能性がある。

267SB1135（Fig.37）

調査区中央のAF・AG24・25で検出された南北に長い2間×2間の総柱建物である。埋土は柱痕材の残る灰茶色の粘土が堆積する柱痕と白色シルトの掘方とに分けられた。a～hの8基の柱穴を検出した。a・bは柱材が残存していた。

c. 井戸

267SE001（Fig.37）

調査区北西のトレンチ内で検出された井戸である。掘り方のプランは楕円形を呈し、長軸長2.2m、短軸長1.8m、深さ0.72mを測る。井戸枠の板や軸などの痕跡はなく、部材が抜かれている可能性がある。埋土は、上から黒色土・黒色粘土・茶青色シルト・褐色粗砂（曲物内）・青褐色砂（曲物裏込）の順に堆積し、遺物の取り上げを行っている。

267SE005（Fig.37）

Fig.37 2～4面遺構配置図

調査区西側のAG31で検出された井戸である。掘り方のプランは楕円形を呈し、長軸長1.7ｍ、短軸長1.5ｍ、深さ1.8ｍを測る。井戸枠は横板を組み合わせたもので、軸木は確認できなかった。板材の腐食が著しいが、4枚の横板が確認できた。横板の両端部に加工された突出部分を組み合わせていることがわかった。枠組は最下位の横板から、0.82ｍの四角形であったと推定される。埋土は上から、黒色土・黒褐色砂質土・暗灰色粘土（枠内）・淡青灰色砂（枠内）・淡青色シルト（裏込）の順に堆積し、遺物の取り上げを行っている。

267SE150（Fig.37）

調査区中央付近のAB・AC22で検出した井戸である。たまり状遺構267SX040除去後検出した。遺構の西側が267SE090により掘削されているが、南北に長い長方形プランであることが分かった。井戸の規模は長軸長2.46ｍ、短軸長1.8ｍ、深さ1.46ｍを測る。井戸枠も曲物も腐食が著しく、破片によりプランが確認できる程度であった。井戸枠は軸木や桟木は確認できなかった。井戸枠は一辺0.72ｍを測る方形で、井戸枠中央に曲物が検出され、直径35㎝を測る。埋土は上から灰色粘土（枠内）・灰茶色土（枠内）・淡灰色粘土（曲物内）・灰茶色粘土（裏込）の順に堆積し、遺物の取り上げを行った。

267SE155（Fig.37）

調査区中央のAB23で検出した井戸である。南西側は攪乱によって掘削を受けており、全体プランは不明である。深さ1.3ｍを測る。井戸底部には一辺0.54ｍ四方の枠木に囲まれた直径20㎝の曲物が据えられていた。埋土は上から暗灰色粘土（枠内）・灰褐色砂（枠内）・灰色砂（曲物内）・灰茶色土（裏込）の順に堆積し、遺物の取り上げを行った。

267SE160（Fig.37）

調査区中央のAD・AE24で検出した井戸である。267SK1130が切り込む位置関係にあり、北側は攪乱により削平を受けている。全体のプランは不明だが、長軸長2.26ｍ、深さ1.5ｍを測る。縦板と桟木は確認できたが、四隅の軸木は不明である。南側の井戸枠は北に大きく迫り出し原位置を留めていないが、おおむね一辺0.8ｍの方形と推定される。井戸枠中央には直径24㎝の曲物が出土している。埋土は上から茶褐色土（枠内）・灰色粘（枠内）・黄色砂（曲物内）・黒色粘土（曲物内）・灰茶色土（裏込）・灰黄色土（裏込）・茶灰色砂（裏込）の順に堆積し、遺物の取り上げを行った。

267SE332（Fig.37）

AC26で上層のたまり状遺構267SX040黒灰色粘土を除去後検出された遺構で、北側は掘削により破壊されている。長軸長1.4ｍ、短軸長1.3ｍ、深さ1.28ｍを測る。井戸枠は枠板の痕跡のみで、板材は残っていない。板材を支える桟木が2段確認されたが、5本しかなく腐食がかなり進んでいる。桟木の痕跡から井戸枠の規模は一辺0.7ｍの方形プランと推定される。水溜の曲物は井戸枠の南東側に偏る位置から検出された。井戸は淡黄灰色粘土と灰茶色粗砂の地山との境で壁がえぐれており、この位置で滞水上面があったことが伺われる。埋土は上から黒灰色土・灰色砂質土・暗灰色砂・淡茶灰色土・灰色砂・黒茶褐色土の順に堆積、遺物の取り上げを行っている。

267SE425（Fig.37）

調査区北東側のAN19付近で検出された井戸である。267SD410に切られる位置関係にある。やや東西に長い楕円形を呈し、長軸長2.36ｍ、短軸長2.2ｍ、深さ1.2ｍを測る。

井戸枠は縦板が残存していたが、支える桟木や軸木は腐食が著しく確認することができなかった。井戸枠中央には直径64㎝の曲物が検出された。埋土は上から黒黄色土・茶黄色土・暗灰色粘土（枠内）・黄灰色土（枠裏込）・黒灰色土（曲物内）・黄灰色砂（曲物裏込）の順に堆積し、遺物の取り上げを行っている。

267SE1105（Fig.37）

調査区中央付近のAC19で検出した井戸である。全体のプランは直径1.36ｍの円形で、深さ1.4ｍを測る。井戸枠は縦板と桟木の一部を検出したが、残存状況はよくない。井戸枠底部分には桟木や曲物は検出されず、砂で埋められていた。井戸枠の掘方は樽状に広がった形状を呈し、残存している縦板から一辺70㎝ほどの正方形だったと考えられる。埋土は上から黒色土・灰色粘土（枠内）・淡灰色粘土・灰茶色土の順に堆積し、遺物の取り上げを行った。

267SE1110（Fig.37）

調査区中央のAE～AF25で検出した井戸である。南北にやや長い楕円形を呈し、長軸長1.98ｍ、短軸長1.82ｍ、深さ1.86ｍを測る。井戸枠は東側で長さ80㎝、幅30㎝ほどの縦板材と、北側で先端を二股に加工した桟木が一本出土している。井戸枠内からは板材や曲物底板と思われる木製品が出土したが、遺存状況が悪く取り上げは行っていない。井戸枠底からは一辺5㎝程度の角材を組み合わせ、約80cmの四角形の横軸を検出した。埋土は上から黒色土、灰黄色土、茶青色土の順に堆積し、遺物の取り上げを行った。

267SE1155（Fig.37）

調査区北側のAN23で検出した井戸である。267SD455に切られる位置関係にある。やや南北に長い楕円形を呈し、長軸長1.5ｍ、短軸長1.46ｍ、深さ1.0ｍを測る。井戸枠は検出されなかったが、直径48㎝の曲物が検出された。埋土は上から淡灰土・淡灰粘の順に堆積し、遺物の取り上げを行った。

267SE1120（Fig.37）

調査区東側のAE20で検出した井戸である。遺構の西半分が削平をうけている。全体プランは長軸長1.44ｍ、短軸長1.38ｍ、深さ1.16ｍを測る。井戸枠は西隅を除く3本を検出し、横板の枠が確認できた。井戸枠は腐食が著しく、残存していた南西部分で横板が三枚使われていた。井戸枠のプランは、一辺約0.7mの正方形だったと推定される。埋土は上から黒色土・黒色粘土・黒黄色土・灰色砂・茶褐色土の順に堆積し、遺物の取り上げを行っている。

d. 土坑

267SK125（Fig.37）

調査区南側のW25付近で検出された土坑である。267SD115に切られる位置関係にある。南北にやや長い楕円形状を呈し、長軸長2.46ｍ、短軸長2.3ｍ、深さ0.36ｍを測る。埋土は上から灰色土・灰茶色土の順に堆積し、遺物の取り上げを行った。

267SK555（Fig.37）

左郭1坊路上のAD28の267SF545明茶砂除去後に検出された土坑である。東西に長い楕円形状を呈し、長軸長1.58ｍ、短軸長1.02ｍ、深さ0.06ｍを測る。土坑の中心には短軸長0.42ｍ、長軸長0.65ｍ、厚さ0.26ｍを測る花崗岩の石が据えられていた。埋土

は茶褐色土の単層である。

267SK1100 (Fig.37)

調査区中央付近のAH26で検出された土坑である。14条路の堆積層267SX500灰色粘質土に切られる位置関係にある。南北に長い楕円計を呈す。埋土は上から淡茶灰色土、黄灰色粘土、灰色粘土の順に堆積している。

267SK1274 (Fig.37)

調査区南側のV27の西壁際で検出したため、遺構の大半は調査できなかった。西壁で土層観察を行ったが井戸と断定することが出来なかった。しかし、大きさや形状から井戸の可能性を残す。

e. その他の遺構

267SX490 (Fig.37)

AJ27・28の267SX500茶色粘土上面で検出した礫集中部分である。左郭1坊路と14条路との交差点、南東隅付近に位置する。礫や瓦片に混じり、ウマの頭蓋骨も出土している。

267SX495 (Fig.37)

調査区北側のAK～AM25～28に広がるたまり状遺構である。淡茶灰色土上面の整地層橙褐色粘土の中で土器片が集中している箇所を267SX495として掘下げた。埋土は多量の土器片と炭を含む黒茶色土である。

267SX500 (Fig.37)

AH～AK18～28で1面目整地層の淡茶灰色土除去後に幅9.0m、長さ30mにわたって検出された。後述の左郭1坊路と14条路の交差点から東側の条路上面に広がる堆積層である。埋土は上から茶色粘土・黒灰色土・灰色粘土・灰黄色土の順に堆積し、特に茶色粘は全体的に確認された。14条路全体がオープンカット状に掘り下がっていることにより、粘質土が広範囲に堆積したと考えられる。

267SX600 (Fig.37)

調査区西寄りのAF・AG28～30、1坊路と14条路の交差点に堆積する腐植土層である。267SF705・710除去後に検出される遺構で、267SD560・570が切り込んでいる。埋土は上から黒色腐植土・茶黒色腐植土・黒灰色粗砂・黒灰色砂の順に堆積している。腐植土中からは獣骨や木製品が出土した。地山上面には木片や葉などが貼り付くようにして堆積していた。267SX765と同一遺構である。

267SX765 (＝600) (Fig.37)

調査区北側のAH～AL28～30で検出し、1坊路と14条路の交差点に堆積する腐植土層である。AHラインより南で検出された267SX600と同一遺構である。埋土からは獣骨や木製品、杭が多く出土した。出土した杭については267SX790として取り上げている。

267SX770 (＝600) (Fig.37)

調査区北のAL・AM28・29で検出し、1坊路上に広がる。267SX765の下で検出され、Ⅱ期道路を構成する基盤層の一部と考えられる。

267SX775 (＝600) (Fig.37)

AK・AL28・29で検出したⅡ期道路を構成する基盤層の一部。267SX765の下で検出。

（6）第２・３調査面遺構出土遺物

●第２調査面

a. 掘立柱建物

掘立柱建物と判断できた柱穴については、現地保存を図るために一段下げを行ったのみのため、出土遺物は極めて少ない。

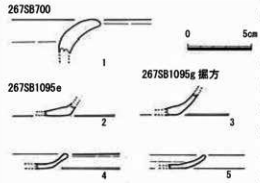


Fig.38　267SB700・1095・1173 出土遺物実測図

267SB700 イ（S-1013）（Fig.38）

土師器

甕（1）　口縁部のみの破片で、器面摩耗のため成形・調整技法について定かではないものの、古墳時代以降のモノと考えられる。

267SB1095e（Fig.38）

土師器

坏ａ（2）　底部から体部下位の破片資料で、器面摩耗のため成形・調整技法について定かではない。

267SB1095g 掘方（Fig.38）

土師器

坏ａ（3）　底部から体部下位の破片資料で、器面摩耗のため成形・調整技法について定かではない。

267SB1173（Fig.38）

土師器

小皿a1（4・5）　口径復元に至らないものの、底部から口縁部まで残存する小皿と判断できるモノである。形状から平安時代中期以降のものと考えられる。

b. 井戸

267SE001 黒色土（Fig.39）

土師器

小皿a1（1）　推定口径10.1cmを測り、底部外面は回転ヘラ切り。成形・調整は回転ナデだが見込み部分に不定方向のナデが残る。

小皿a2（2）　推定口径10.6cmを測り、口縁端部を立ち上げる。底部外面は回転ヘラ切り。成形・調整は回転ナデだが、見込み部分に不定方向のナデが残る。

黒色土器Ａ類

鍔付鍋（3）　鍔を外面に有するもので、口縁部外面から内面にかけてミガキｃが施されている。

黒色土器Ｂ類

椀ｃ（4）　外方へ張り出す高台形状を有し、底部外面には回転ヘラ切り、見込み部分にミガキｃ痕跡が観察できる。

木製品

櫛（5）　櫛と判別できるほどの破片資料。

金属製品

用途不明品（6）　板状の破片資料。

267SE001 黒色粘土（Fig.39）

須恵器

円面硯（7）　硯部の海部分の破片資料で、脚部と硯部の接合部分外面に削り痕跡が観察できる。

土師器

小皿a（9・10）　推定口径10.4cm、10.5cmをそれぞれ測り、9は平底、10はやや丸みを帯びた押し出しによる丸底化を呈している。いずれも回転ヘラ切り。

坏a（8）　体部から口縁部にかけての破片資料で、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

椀c（11）　直立気味の高台と底部の破片資料で、底部外面は回転ヘラ切り。内外面には回転ナデ調整が施される。

黒色土器A類

鉢（12・13・15）　平底から丸みを帯びた体部形状を有するもので、12・15は体部下位を回転ヘラ削り、

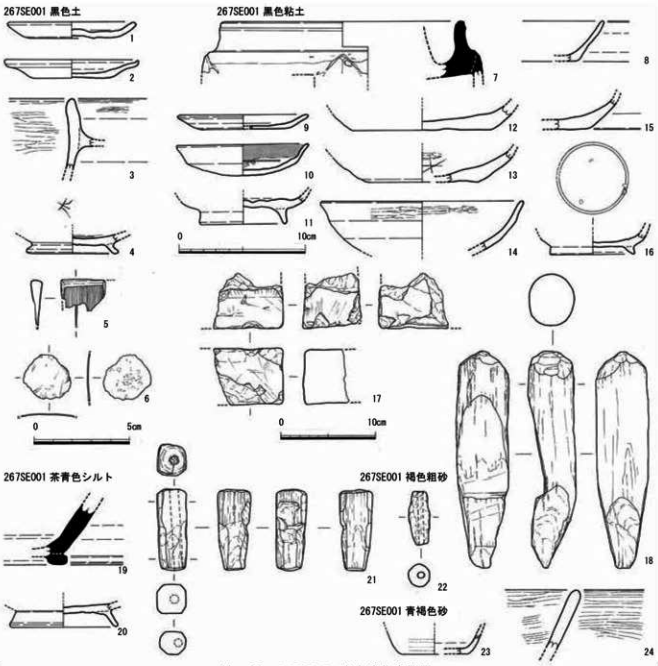


Fig.39　267SE001出土遺物実測図

13は体部下位を回転ナデにて仕上げている。13は、見込み部分にミガキcが施され、直線による「×」の痕跡が観察できる。

黒色土器B類

椀（14）　丸みを帯びた体部形状を有し、内外面にミガキc痕跡が観察できる。

緑釉陶器

椀（16）　やや高台内面を回ませるもので、見込み部分に目跡が三ヶ所確認できる。近江産緑釉陶器と考えられる。

土製品

塼（17）　破片資料で無文塼と考えられる。

木製品

杭（18）　削りによって先端を尖らせた杭で、反対側も削りによって成形されている。

267SE001 茶青色シルト（Fig.39）

須恵器

壺（19）　高台から体部下位の破片資料で、体部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデにて仕上げている。

黒色土器A類

椀c（20）　やや高脚の高台を貼付する。底部外面は回転ヘラ切り。見込み部分にミガキc痕跡が観察できる。

木製品

用途不明品（21）　やや小ぶりの杭状のもので、栓の可能性もある。表面は削りによって成形されている。

267SE001 褐色粗砂（Fig.39）

土製品

土錘（22）　表面に手づくねによる指頭圧痕を多く留め、略円筒状を呈する。重量は11.1gを量る。

267SE001 青褐色砂（Fig.39）

土師器

小坏d（23）　底部外面を回転ヘラ削りし、体部外面にミガキaが観察できる。

鉢（24）　外方へ開く口縁部の破片で、内外面ともにミガキcで仕上げられている。

267SE005 黒色土（Fig.40）

土師器

坏a（1）　底部のみの破片で、見込み部分に回転ナデ痕跡が観察できる。底部外面の処理は器面摩耗のため不明。

椀c1（2・3）　2は、やや外方に張り出す高台形状を有し、底部からの立ち上がりから、直線的な体部形態を持つ椀1と考えられる。3はやや外方へ大きく開く体部形態を有するものの、底部をやや窪ませていることから、椀c1の範型を優先した椀c2模倣の椀と考えられる。

甕a（4）　口縁部の破片資料で、外面にハケ、内面は横ナデによって仕上げられている。

黒色土器A類

椀c2（5・6）　5は、内外面にミガキcが観察でき、器厚、高台の張り出し状況から金属器模倣の椀と考えられる。6は、略方形の高台にやや外方へ開く体部形態を持つもので、皿の可能性もある。外面に回転ナデ痕跡が観察できるが他は器面摩耗のため不明。

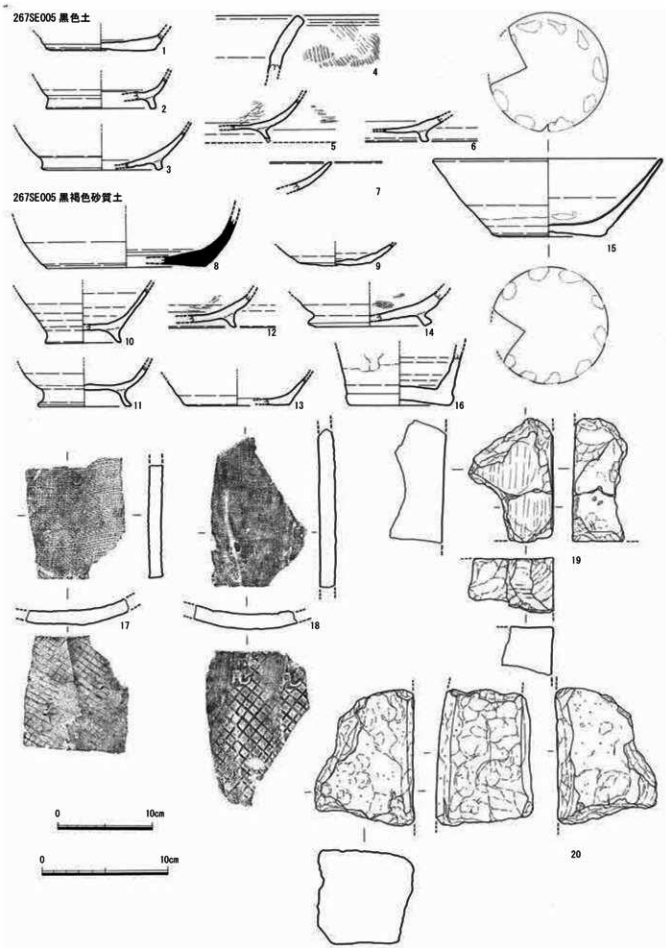


Fig.40　267SE005 出土遺物実測図（1）

緑釉陶器

皿（7）　口縁部の破片資料で、内外面を施釉し素地を回転ナデしている。

267SE005 黒褐色砂質土（Fig.40）

須恵器

壺×鉢（8）　平底の底部から丸みのある体部へ移行する。底部外面を含め器内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

土師器

坏d（9）　やや丸みを帯びる底部形態を有し、底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切り、他の部位には回転ナデが観察できる。なお、見込み部分に不定方向のナデが観察できる。ミガキaが完全に省略された坏dと考えられる。

椀c1（10・12）　断面二等辺三角形に近い形状の高台を貼付し、直線的に外方へ開く体部へと立ち上がる。底部外面の処理以外は、回転ナデにて仕上げている。12は低めの高台を貼付し、底部をやや窪ませつつ、丸みを有するかのように体部へと立ち上がる。3同様に、椀c1の範型を優先しつつ椀c2を模倣したものと考えられる。内面にミガキcが観察できることから黒色土器A類の可能性もある。

椀c2（11）　外方へ開きかつ器高の高い高台を貼付し、丸みのある体部へと立ち上がる。底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。高台ならびに体部形状から金属器模倣の椀と考えられる。

壺（13）　平底の底部から外方へ開く体部形態を有する。外面にわずかに回転ナデ痕跡が観察できるものの、全体的に器面摩耗のため不明。

黒色土器A類

椀c（14）　外方へ張り出す高台を貼付し、内面にミガキc、底部外面は回転ヘラ切りが観察できる。

越州窯系青磁

椀（15）全形が復元できるもので、平底から外方へ大きく開く体部形態を有する。見込み及び底部と体部との境界部分に目跡が観察できる。越州窯系青磁椀Ⅰ-5b類。

中国産陶器

壺（16）　平底の底部から直立気味に立ち上がる体部形態を有する。体部外面下位まで施釉されている。

瓦

平瓦（17・18）　17は、凹面に布目、凸面に「平」の文字と斜格子タタキがある。九州歴史資料館分類の文字瓦901Gaないしは901Gb型式に該当する。18も同様に凹面に布目、凸面に陰刻の「瓦」の文字があり九州歴史資料館分類の文字瓦901B型式に該当する。

土製品

塼（19・20）　いずれも破片資料で残存している箇所は無文である。

267SE005 暗灰色粘土（Fig.41）

土師器

坏a（21～24）　推定口径11.2cm～13.8cmを測り、底部から体部への移行が緩やかなもの（21）と明瞭に稜を形成するもの（22～24）の二種類がある。いずれも底部外面は回転ヘラ切り。

椀c1（25・27～29）　やや外方へ張り出す高台から直線的に外方へ開く体部形態を有する椀（25・28・29）と直立気味の断面台形の高台を貼付するもの（27）がある。口縁部が残る28は推定口径13.6cm、29は14.8cmを測る。

椀c2（26）　やや外方へ張り出し、かつ高い高台を貼付し、丸みを帯びた体部へ移行するもので、金属器模倣の椀と考えられる。

黒色土器A類

椀c2 (30)　底部を下方へ押し出すもので、丸みのある体部形態を有する。内面にミガキaが観察できる。形状から椀c1の範型を有する椀c2模倣のモノ。

灰釉陶器

壺 (31)　丸みのある体部から細い頸部へ移行するもので、瓶様の形態を有する。体部外面中位から上に施釉。

267SE005 淡青色シルト (Fig.41)

土師器

坏a (32)　やや外方へ大きく開くもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

石製品

砥石 (33)　四面に使用痕跡が観察できる砂岩製の砥石。

267SE150 灰色粘土 (Fig.42)

須恵器

坏a (1)　平底の底部から外方へ立ち上がる体部へ移行する破片で、底部外面は回転ヘラ切り。

土師器

坏d (2・3)　体部下位から底部外面を回転ヘラ削りするもので、内外面にミガキaが観察できる。なお2には口縁部下位に観察できる範囲で3箇所穿孔がある。

267SE150 淡灰色粘土 (Fig.42)

土師器

坏a (4)　底部外面に回転ヘラ切り痕跡をとどめ、外方へ開く体部形態を有する。器面摩耗のため成形・調整痕跡は観察し難いが、見込み部分に不定方向のナデが観察できる。

土師器

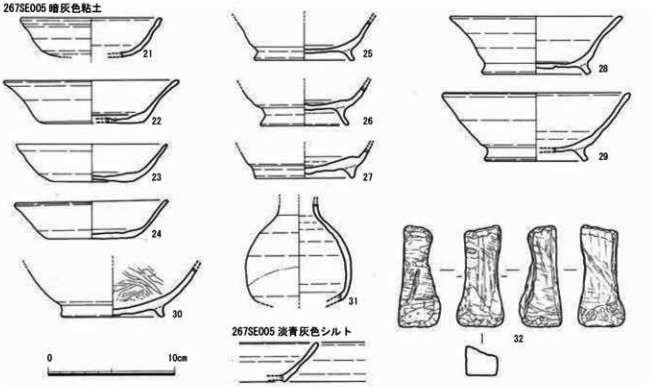


Fig.41　267SE005出土遺物実測図（2）

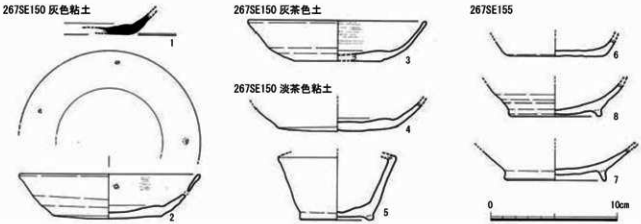


Fig.42　267SE150・155 出土遺物実測図

小壺 (5)　略台形の高台を有し、直線的に外方へ立ち上がる体部形態から屈曲する肩部形態へと移行する。底部内面に不定方向のナデが観察できるが、総じて器面摩耗のため成形・調整痕跡が観察し辛い。

267SE150 暗灰色粘土 (Fig.42)

土師器

坏 a (6)　底部外面を回転ヘラ切りする平底の底部から上方へ立ち上がる体部へ移行する。見込み部分に不定方向のナデ、体部内面に回転ナデ痕跡が観察できる。

坏 c (7)　やや高めの高台を貼付し外方へ開く体部形態を有する。底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

黒色土器A類

坏 c (8)　やや外方に張る断面略方形の高台を貼付し、見込み部分にミガキ c 痕跡が観察できる。

267SE160 茶褐色土 (Fig.43)

土師器

坏 a (1)　底部外面に回転ヘラ切り痕跡を有する平底の底部からやや外方へ開く体部へと移行する。

267SE160 灰色粘土 (Fig.43)

須恵器

坏 c (2)　底部外面に回転ヘラ切り痕跡を有し、内外面に回転ナデ、見込み部分に不定方向のナデ痕跡が観察できる。

壺 f × d (3)　二重口縁を有するもので、口径から壺 d の可能性が高い。内外面には、回転ナデ痕跡が観察できる。

土師器

坏 a (4 ～ 11)　推定口径 12.4cm ～ 13.2cm を測り、底部から体部への移行に明瞭な稜を有する 5・6・8・9 と不明瞭な 4・10・11 がある。なお、7 は底部が歪んでいるため判断できない。いずれも底部外面は回転ヘラ切りによって処理されている。

椀 c (12・13)　12 は、外方へ張り出す高台形状を有し、丸みのある体部形態を持つ（椀 c2）ものと考えられる。内面にススス状炭化物が付着している。13 は、略三角形の高台を有し、直線的に外方へ開く体部形態を持ち（椀 c1）、底部外面は回転ヘラ切り、体部内外面は回転ナデ、見込み部分に不定方向のナデが観察できる。

甕 a (14)　口縁部から体部上位までの破片資料で、体部が張らないものと推定される。体部内面に縦方向と推定できるヘラ削り痕跡があり、外面は縦方向のハケ、口縁部内面は横方向のハケ調整があり、口縁部外面には横ナデが観察できる。

黒色土器A類

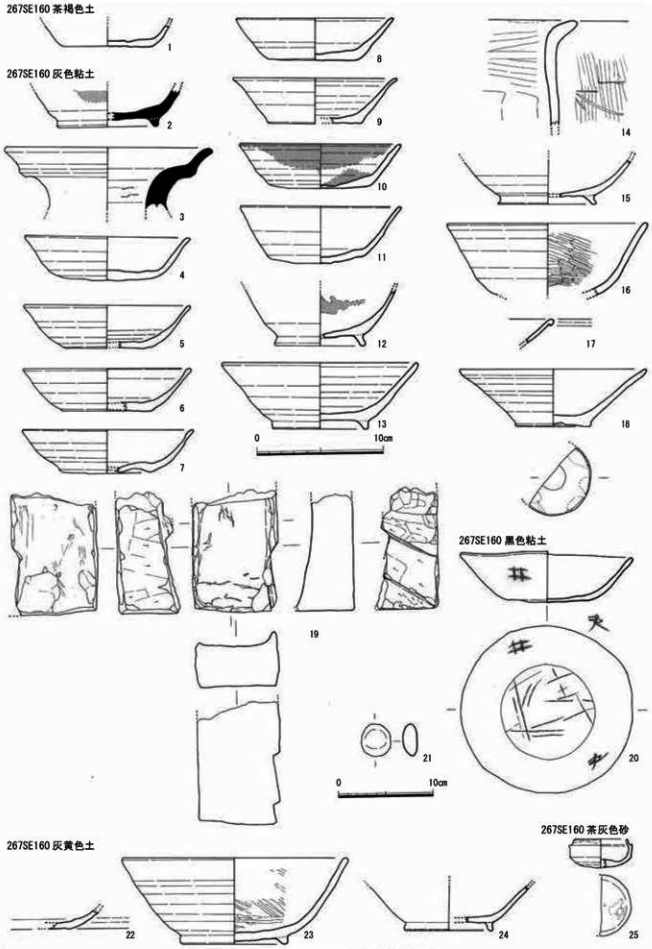


Fig.43　267SE160 出土遺物実測図

椀ｃ（15・16）　15はやや外方に開く高台形状をとり、丸みを帯びつつ立ち上がる体部へと続く。器厚が薄いことから金属器模倣の椀と考えられる。16は、直線的に外方へ開く体部形態を有するもので、内面にミガキｃが観察できる。

白磁

椀（17）　小さめの玉縁口縁を持つもので、内外面に施釉。椀Ⅰ-1類。

青磁

椀（18）　蛇の目高台を持ち、直線的に外方へ開く体部形態を有する。高台外面を除く全面に施釉。越窯系青磁椀Ⅰ-1b類。

土製品

塼（19）　長方形を呈するものと判断でき、四面にナデによる調整痕跡が観察できる。

267SE160 黒色粘土（Fig.43）

土師器

坏ａ（20）　口径13.6cmを測り、底部と体部の境界に稜を持たない。体部外面に「井」「天」様の文字が墨書されている。底部外面は回転ヘラ切り。

石製品

碁石（21）　1.7cm×1.55cm×厚さ0.8cmを測る。

267SE160 灰黄色土（Fig.43）

土師器

坏ｄ（22）　平底の底部から外方へ丸みを帯びつつ開く体部形態を有する。体部内外面に回転ナデ痕跡を観察でき、形状からミガキａを省略する坏ｄと判断した。

黒色土器Ａ類

椀ｃ1（23）　外方へ張る高台を貼付し、外方へ直線的に大きく開く体部形態を有する。外面には回転ナデが、体部内面から見込みにはミガキｃが観察できる。推定口径17.7cmを測る。

緑釉陶器

椀（24）　高台端部を窪ませるもので、直線的に外方へ開く体部形態を有している。内外面に施釉。

267SE160 茶灰色砂（Fig.43）

青磁

合子（25）　口縁部に返りを有する身で、内外面に施釉。底部外面には目跡が観察できる。越州窯系青磁Ⅰ類の系統。

267SE425 黒灰色土（Fig.44）

土師器

坏ａ×皿（1）　底部から体部下位の破片資料。器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

椀ｃ（2）　直立気味の高台を貼付するもので、体部形状ならびに成形・調整痕跡は不明。

土製品

羽口（3）　円筒形のものと推定できるが、残存状況が悪く、全体形状は不明。器表面にナデ痕跡が観察できる。

267SE425 茶黄色土（Fig.44）

土師器

椀ｃ（4・5）　4は、やや外方に張り出す高台を貼付するもの。体部形状ならびに成形・調整痕跡は不明。5は、断面略三角形の高台を貼付し、直線的に外方へ立ち上がる体部形態を有する椀ｃ1。

黒色土器A類

椀c×皿c (6)　底部の破片資料で、高台を貼付しているものと判断できる。見込み部分にミガキcが観察できる。

椀c (7)　やや高い高台を貼付するもので、椀cとして報告するが、器種を明らかにするには残存状況が悪い。椀であれば、金属器模倣の椀の可能性がある。

緑釉陶器

椀 (8)　円盤状高台のもので、底部外面に回転糸切り痕跡が観察できる。見込み部分および体部外面は施釉。

267SE425 暗灰色粘土 (Fig.44)

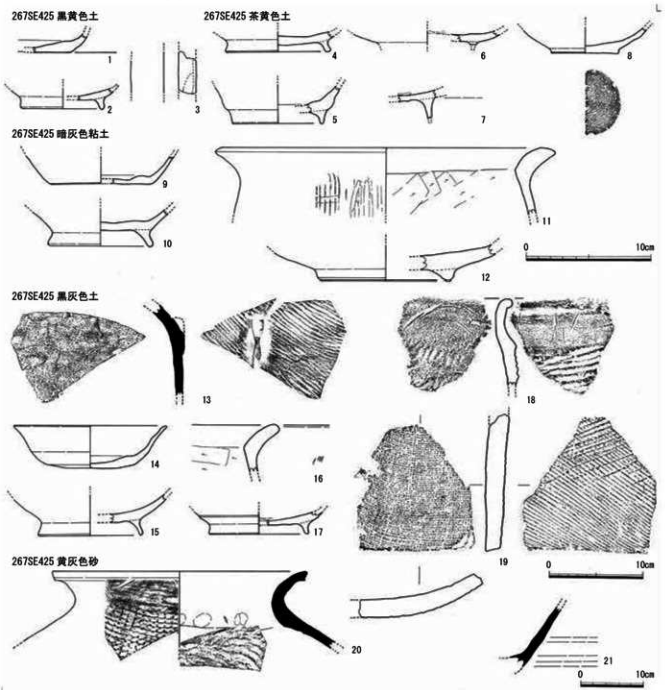


Fig.44　267SE425出土遺物実測図

土師器

坏ａ（9）　平底の底部から外方へ直線的に開く体部形態を有する。底部外面の処理は器面摩耗のため不明。体部内外面ならびに見込み部分回転ナデ痕跡が観察できる。

椀ｃ1（10）　外方へ張り出す高台を貼付し、直線的に外方へ立ち上がる体部形態を有する。器内外に回転ナデ痕跡が観察できるが、残存状況が極めて悪く詳細を明らかにできない。

甕ａ（11）　「く」字状に頸部を屈曲させるもので、体部外面に縦方向のハケ、口縁部は内外面を横ナデ、体部内面は右上がりにヘラ削りを行う。

鉢（12）　やや大型の器種で、断面略台形の高台を貼付し、外方へ大きく開く体部へと移行する。器表面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

267SE425 黒灰色土（Fig.44）

須恵器

壺ｄ×壺ｆ（13）　二重口縁の壺ｄないしは壺ｆの肩部の破片と考えられ、粘土紐を貼付しただけの簡素な形態のもの。外面には平行タタキが、内面には布様の痕跡を持つ当て具痕跡が観察できる。

土師器

坏ａ（14）　推定口径12.2cmを測り、やや平底の底部から外方へ開く口縁部へと移行する。底部外面は回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

椀ｃ2（15）　外方へ開く高台を貼付し、丸みを有する体部形態を持つものと推定できる。部分的に回転ナデ痕跡が観察できるものの、詳細を明らかにできない。

甕ａ（16）　頸部から口縁部の破片資料で、体部外面にハケ痕跡が僅かに観察できる。口縁部内外面は横ナデ、体部内面は左上がりのヘラ削りが観察できる。

黒色土器Ａ類

椀ｃ（17）　高台から底部の破片資料で、見込み部分にミガキｃ痕跡様のものが観察できる。

製塩土器

煎熬土器（18）　体部上位から口縁部の破片資料で、体部外面に平行タタキ、体部内面に全体形状は定かにできないが当て具痕跡が観察できる。口縁端部はやや肥厚している。

瓦

平瓦（19）　凸面に平行タタキ痕、凹面に布目痕跡が観察できる。

267SE425 黄灰色砂（Fig.44）

須恵器

甕（20）　肩部の張るもので、「く」の字に屈曲させる頸部から口縁端部を面取りするもの体部外面は格子タタキ、内面には同心円タタキ痕跡が観察できる。推定口径20.2cmを測る。

鉢（21）　体部の破片資料で、やや大振りのため鉢としたが、器種特定は定かではない。

267SE515 黒色粘土（Fig.45）

土師器

椀ｃ1（1）　やや外方へ張り出す高台を貼付し、直線的に外方へ開く体部形態を有する。底部外面の切り離し処理は不明だが、他の部位は回転ナデ調整が観察できる。

小皿ａ2（2）　やや突出した底部形態を有し、口縁端部内面に沈線様の痕跡を持つ。底部外面は回転ヘラ切り。口径10.8cmを測る。

267SE515 茶灰色土（Fig.45）

土師器

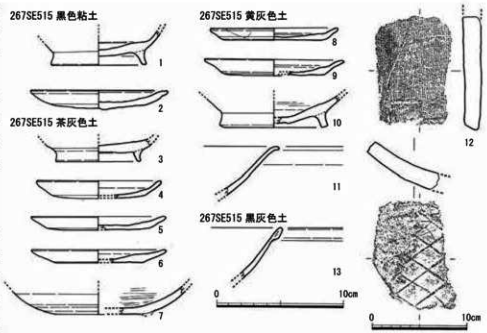


Fig. 45　267SE515 出土遺物実測図

椀 c (3)　高台ならびに底部の破片資料で、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

小皿 a1 (4 ～ 6)　推定口径 9.6cm ～ 10.6cm を測り、底部外面は回転ヘラ切り。4 はやや底部を張り出している。

黒色土器 A 類

鉢 (7)　やや平底の底部から丸みを持ちつつ立ち上がる体部形態を有する。内面にはミガキ c が観察でき、体部外面は回転ナデ、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

267SE515 黄灰色土 (Fig. 45)

土師器

小皿 a1 (8・9)　口径 10.1cm ～ 11.0cm を測り、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

黒色土器 A 類

椀 c (10)　外方へ張り出す高台から外方へ開く体部形態を有する。底部をやや外方へ窪ませていることから、丸い椀を意識した直線的な椀製作者による模倣形態の椀と考えられる。

青磁

椀 (11)　大きく外方へ開き、口縁部をさらに外方へ外反させるもの。内外面施釉。素地ならびに施釉の状況から越州窯系青磁椀 I 類と考えられる。

白磁

椀 (13)　やや尖り気味の玉縁口縁を有し、大きく外方へ開く体部形態を有する。素地ならびに施釉状況から椀 XI -1 類。

瓦

平瓦 (12)　凸面にやや大きめの格子タタキ、凹面に布目痕跡が観察できる。

267SE1105 黒色土 (Fig. 46)

須恵器

壺 (1・2)　1 は、平底から直線的に外方へ立ち上がり、頸部を屈曲させ、細い頸部へと至るもので、体部内面には指頭圧痕を多数とどめ、体部外面にはハケ様の痕跡が観察できる。2 は、平底から丸みを持ちつつ頸部へすぼまるもので、内外面のも回転ナデによって仕上げている。

土師器

坏 a (3 ～ 5)　推定口径 12.3cm ～ 13.4cm を測り、平底の底部から直線的に外方へ開く口縁部へ至る。

椀 c1 (6)　高台を貼付し、直線的に外方へ開く体部形態を有する椀。口径 17.8cm を測る。器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

椀 c2 (7)　直立気味の高台に丸みをもつ体部へと移行する。器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

鉢 (8)　外方へ直線的に開く体部から外反する口縁部へと至る。内面が一部褐色化しており二次焼成の可能性がある。

製塩土器

煎熬土器 (9)　体部の破片資料で、内外面に平行タタキ痕跡が観察できる。

267SE1105 灰色粘土 (Fig.46)

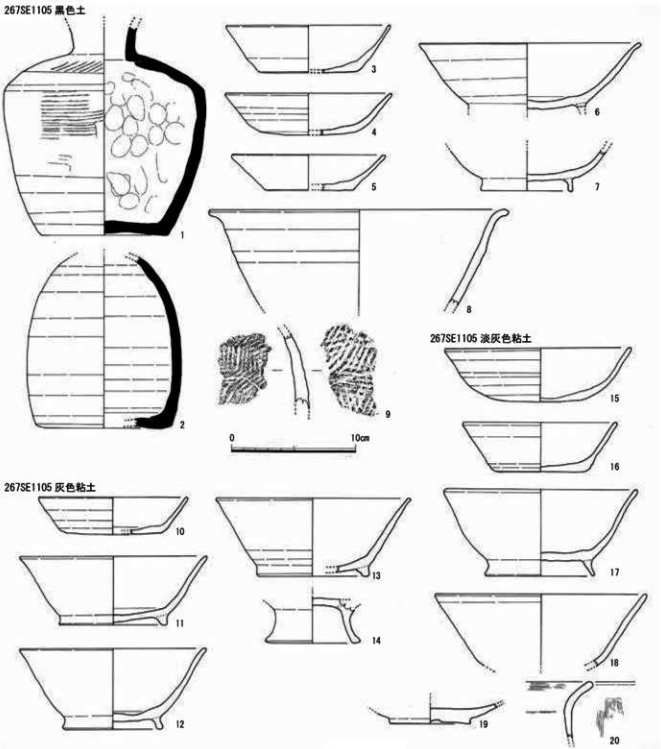


Fig.46　267SE1105 出土遺物実測図

土師器

坏a（10）　推定口径11.9cmを測り、平底の底部から直線的に外方へ開く体部形態を有する。底部外面は回転ヘラ切り。

椀c1（11～13）　いずれも略台形の高台から直線的に外方へ開く体部形態を有する。内外面ともに回転ナデ調整。

高脚高台（14）　体部が残存していないため、全形を定かにし難いが、器高の高い高台である。器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

267SE1105 淡灰色粘土（Fig.46）

土師器

丸椀a（15）　底部を丸底化するもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

坏a（16）　推定口径12.3cmを測り、平底の底部から直線的に外方へ開く体部形態を有する。底部外面は回転ヘラ切り。

椀c1（17）　外方へ開く高台から直線的に外方へ開く体部形態を有する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

椀（18）　直線的に外方へ開く体部形態を有する。器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

甕a（20）　やや緩やかに外方へ外反する口縁へ至る甕で、外面には縦方向のハケ、口縁部内面は横方向のハケ調整が観察できる。体部内面はヘラ削り、口縁部外面は横ナデにて仕上げられている。

緑釉陶器

皿（19）　蛇の目高台を有する緑釉陶器で、内外面に施釉。

267SE1110 黒色土（Fig.47）

土師器

坏a（1～5）　推定口径11.4cm～12.2cmを測り、1を除いて底部から体部への移行が緩やかである。いずれも回転ヘラ切り。1は底部から体部への移行に稜を有し、体部外面にスス状炭化物が付着している。

丸底坏（6）　底部押し出しによる丸底化を行ったもので、上位からの混入。

椀c1（7）　直線的に外方へ開く体部ならびに口縁部を有する坏に、やや高めの高台を貼付するもので、口径12.8cmを測る。口縁部二箇所にスス状炭化物が付着している。

甕×鉢（8）　体部上位から口縁部の破片資料で、口縁部が外方へ大きく屈曲していることから浅めの鉢の可能性を残す。体部内面には左上がりの削りが、体部外面は縦方向のハケによって器面調整されている。

製塩土器

煎熬土器（9）　やや大型のもので、「く」字に屈曲させる頸部を有する。体部外面には擬格子タタキが、内面には指頭圧痕が観察できる。

黒色土器A類

椀c2（10）　やや高めの高台を貼付し、丸みを帯びる体部形態を持つものと考えられる。底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察でき、他の部位は器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

青磁

椀（12）　口縁部のみの破片で器形などは定かではない。素地、施釉の状況から越州窯系青磁椀Ⅰ類。

白磁

椀（11）　口縁部のみの破片資料で、全体形状は定かではないが、素地、施釉の状況の状況から椀Ⅰ-2類。

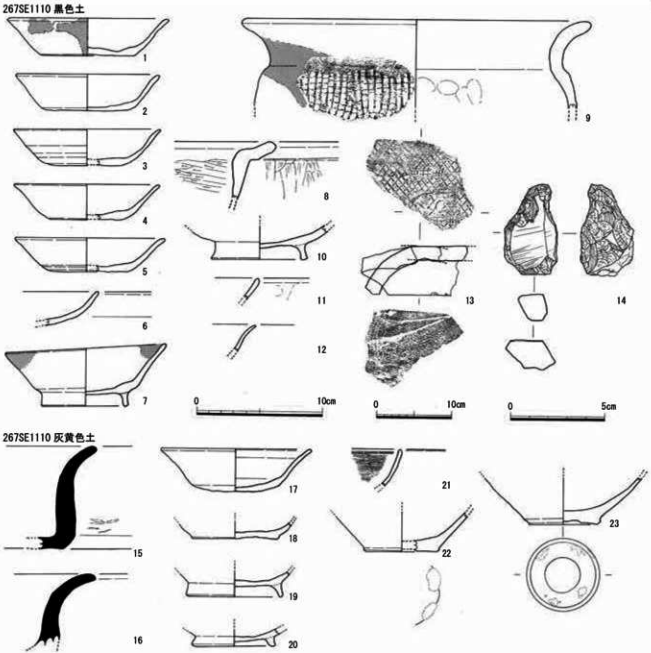


Fig.47　267SE1110 出土遺物実測図（1）

瓦

丸瓦（13）　凸面に「平井瓦」と記された格子タタキ、凹面に布目痕が観察できる。九州歴資料館分類の 901c 類に該当する（九州歴史資料館、2000）。

石製品

用途不明（14）　水晶製のもので、打ちカキ面のみで構成され火打ちに用いられたと推定もできる。

267SE1110 灰黄色土（Fig.47・48）

須恵器

火舎（15・16）　底部外縁から直立気味に立ち上がる体部へ移行し、口縁部がやや外反している。底部と体部の境界部分にヘラ削り痕跡が観察できる。15 はやや器高が高く、16 は低い。

坏 a（17・18）　17 は推定口径 12.0cm を測り、底部をやや外方へ突出させ丸みを帯びている。18 は、平底の底部からわずかに体部が立ち上がることが観察できる破片資料で、全体形状を明らかにし難い。いずれも底部外面は回転ヘラ切り。

椀ｃ（19）　直立気味の高台を貼付し、直線的な体部へ移行するものと考えられる。器面調整は回転ナデ調整。

黒色土器Ａ類

椀ｃ（20）　略台形の高台を貼付するもので、見込み部分にミガキｃが観察できる。

椀（21）　口縁部のみの破片で、細かいミガキｃが観察でき、口縁端部内面に沈線がある。形態、調整技法からみて畿内産黒色土器と考えられる。

青磁

椀（22・23）　いずれも蛇の目高台を有するもので、高台畳付けに目跡が観察できる。素地・施釉の状況から越州窯系青磁椀Ⅰ-1b類。

瓦

丸瓦（24）　凸面に格子タタキ、凹面に布目痕が観察できる。

平瓦（25～27）　いずれも凸面に格子タタキ、凹面に布目痕が観察できるが、25・27は凹面に糸切り様の痕跡が観察できる。また、25および26ともに「平井瓦」を陽刻で記すもので、九州歴資料館分類の901b類に該当する（九州歴史資料館、2000）。

267SE1110 茶青色土（Fig.49）

須恵器

火舎（28）　推定口径29.6cmを測り、器高7.8cm、推定底径22.2cmを測る。平底と考えられる底部から直立気味に体部が立ち上がり、外反する口縁部へと至る。底部と体部の境界部分を不定方向のヘラ削りによって仕上げている。

土師器

坏（29・30）　29は、外方へ開く口縁部形態を有するもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。30は、底部の破片で、底部外面は回転ヘラ切り。他の部位は器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

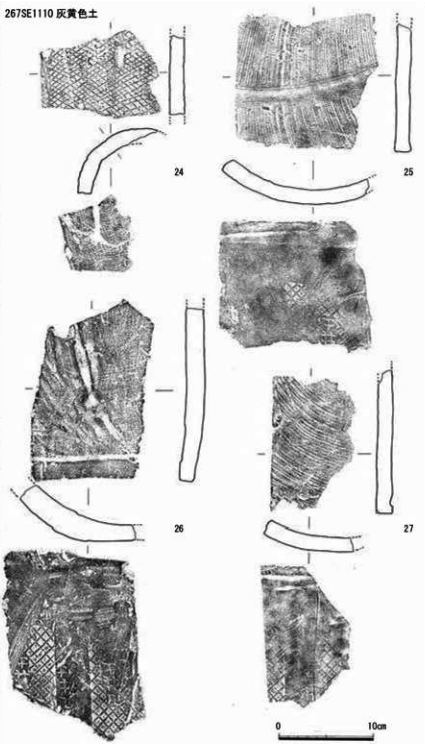


Fig.48　267SE1110出土遺物実測図（２）

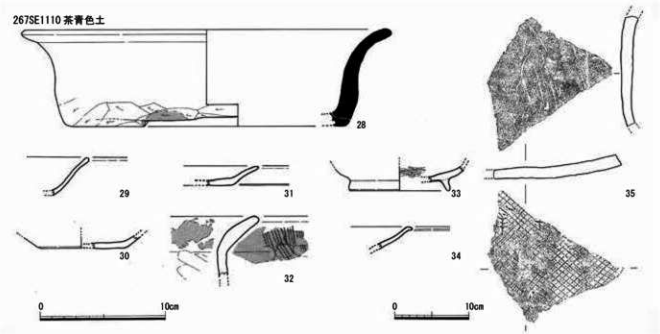


Fig.49　267SE1110 出土遺物実測図（3）

皿 a（31）　平底の底部から外方へ大きく開く体部形態を有するもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

甕 a（32）　直立気味に立ち上がる体部から、外方へ屈曲する口縁部へと至るもので、外面は縦方向のハケ、体部内面は右上がりのナデ、口縁部内面は横ナデによって仕上げられている。

黒色土器 A 類

椀 c（33）　高台から体部下位の破片で、全形については不明。見込み部分にミガキ c が観察できる。

灰釉陶器

皿（34）　口縁部の破片資料で、口縁端部が外反する。内外面に施釉。

瓦

平瓦（35）　凸面に格子タタキと「平」の文字が読み取れる。凹面は布目痕ならびに糸切り離しの際についた痕跡が観察できる。九州歴史資料館分類の 901K 類とも考えられるが、未分類の可能性もある（九州歴史資料館、2000）。

267SE1120 黒色土（Fig.50）

土師器

坏 a（1）　推定口径 11.1cm を測り、底部と体部の境界に丸みを帯びるもの。底部外面は回転ヘラ切り。

267SE1120 黒色粘土（Fig.50）

黒色土器 A 類

椀 c（2）　略台形の高台を貼付市、直線的に立ち上がる体部へと移行するものと判断されるもので、見込み部分にミガキ c が観察できる。

267SE1120 灰色砂（Fig.50）

土師器

坏 a（3）　平底の底部から直立気味に立ち上がる体部形状をとるものと考えられる。底部外面は回転ヘラ切り。

カマド（4）　据え置き式の土製のカマドと考えられ、内面は指頭圧痕、外面にはハケ調整の痕跡が観察できる。

267SE1120 茶褐色土（Fig.50）

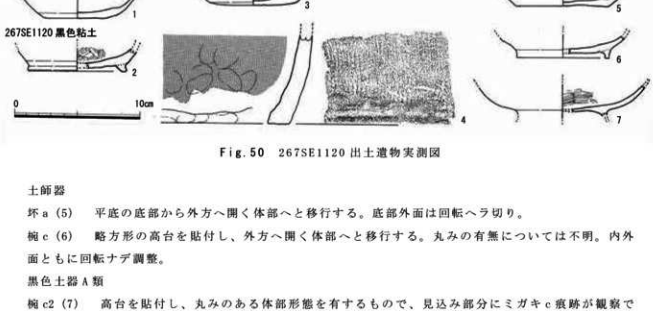


Fig.50　267SE1120 出土遺物実測図

土師器

坏 a (5)　平底の底部から外方へ開く体部へと移行する。底部外面は回転ヘラ切り。

椀 c (6)　略方形の高台を貼付し、外方へ開く体部へと移行する。丸みの有無については不明。内外面ともに回転ナデ調整。

黒色土器 A 類

椀 c2 (7)　高台を貼付し、丸みのある体部形態を有するもので、見込み部分にミガキ c 痕跡が観察できる。

d. 土坑

267SK125 (Fig.51)

須恵器

蓋 (1・2)　1 は扁平なツマミで、回転ナデによって成形・調整されている。2 は、蓋口縁部の破片で、形骸化しつつある断面三角形を呈している。

坏 c (3・4)　3 は、底部と体部の境界より器体中心寄りに断面正方形の高台を貼付し、4 は、底部と体部の境界に断面長方形の高台を貼付している。

壺 (5)　平底の底部からやや直立気味に上方へ立ち上がる体部形状をとるもので、体部下位外面に回転ヘラ削り痕跡が観察できる。

土師器

坏 d (6)　平底の底部からやや内湾気味に立ち上がる体部形態を有するもので、底部外面に回転ヘラ削り痕跡が観察できる。他の部位については、器面摩耗のため観察できない。

皿 a (7)　器高が低いもので、平底の底部から直線的に外方に立ち上がる体部ならびに口縁部へと至る。器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できない。

鉢 b (8)　大きく外方へ開く体部形態を有し、口縁端部を立ち上げるモノで、器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できない。

267SK125 灰茶色土 (Fig.51 ～ 53)

須恵器

蓋 (9)　ボタン状のツマミで内外面に回転ナデ調整の痕跡が観察できる。

坏 a (10)　平底の底部から外方へ開く体部形態を有する。体部外面下位に回転ヘラ削り痕跡が観察できる。

坏 c (11・12)　両者とも断面形状が定まらない高台を貼付するモノで、やや外方へ大きく開く体部形態をもつ。11 は直線的に開き、12 はやや内湾気味に立ち上がる。

甕 (13・14)　両者とも、やや肩部が張る胴部形状を有し、外方へ直線的に立ち上がる口縁部へと屈曲

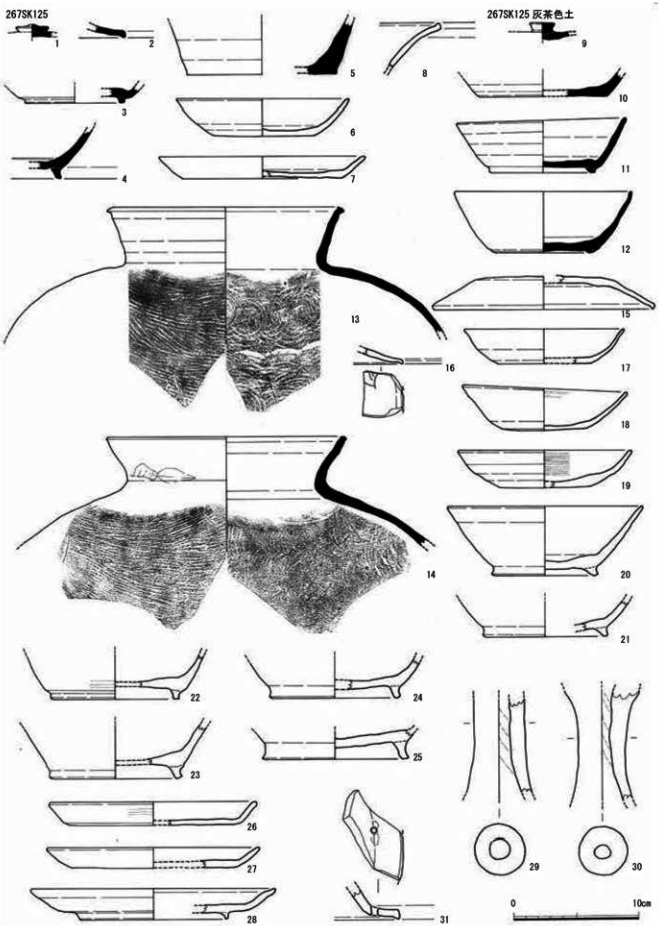


Fig.51　267SK125出土遺物実測図（1）

する。胴部外面には平行タタキ痕跡が、胴部内面には同心円当て具痕跡が観察できる。口縁部は回転ナデにて仕上げられている。14の頸部外面には工具が当てられた痕跡が観察できる。

土師器

蓋（15・16）　断面三角形を呈する口縁部を有する蓋で、器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できない。なお、16の口縁部内面には記された内容は明らかにし難いが、刻書とみられる痕跡が観察できる。

267SK125 灰茶色土

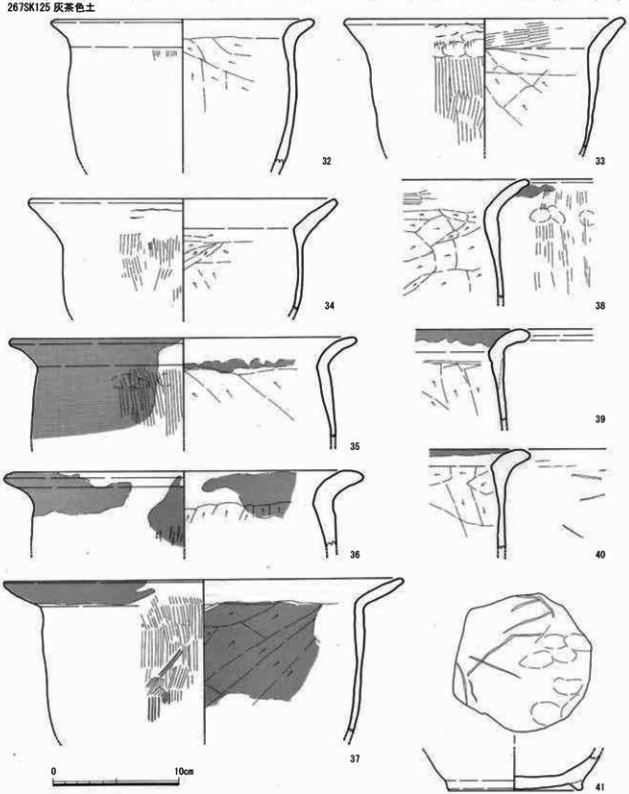


Fig. 52　267SK125 出土遺物実測図（2）

坏 d（17 ～ 19）　いずれも平底から内湾しつつ口縁部へ立ち上がる体部形態を有し、体部下位から底部の外面を回転ヘラ削りする。18・19 については体部内面にミガキ a が観察できる。

坏 c（20 ～ 25）　底部から体部へ移行する屈曲部に高台を貼付する。器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できないモノが多いが、22 は体部外面にミガキ a が、24 は体部外面に回転ヘラ削り痕跡が観察できる。

皿 a（26・27）　平底の底部から直線的に外方に立ち上がる口縁部へ至るもので、26 は体部外面にミガキ a が、27 は底部外面を回転ヘラ削りによって仕上げている。

皿 c（28）　平底の底部の中心寄りに断面略三角形の高台を貼付するもので、器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できない。

高坏（29・30）　円筒形を有する高坏の脚部と考えられる。器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できない。

脚×鉢 b（31）　脚として図化しているが、外方へ大きく開く体部に上方へ立ち上がる口縁部形状を有する鉢 b の口縁部と考えられる。体部から口縁部へ屈曲する箇所に穿孔が観察できる。

甕 a（32 ～ 40）　いずれも胴部の張りがあまりなく、「く」の字形の頸部を有するもので、外面および口縁部内面にハケ調整が観察できる。体部内面は手持ちヘラ削り。

壺（41）　高台を貼付するもので、見込みにあたる部分に指頭圧痕が観察できるため壺とした。底部内面に工具による線刻が観察できる。

鉢 b（42 ～ 45）　外方へ大きく開くもので、口縁部形状が上方へ立ち上がる形態がやや形骸化した印象を持つものである。器面調整が観察できる 43 では、体部外面下位に回転ヘラ削り痕跡が観察できる。

製塩土器

焼塩壺（46 ～ 48）　円筒形のもので、内面には布目痕跡が、外面には指頭圧痕が観察できる。

土製品

塼（49）　1 面のみ残存するもので、ナデによる器面調整が観察できる。

267SK125 灰色土（Fig.53）

須恵器

坏 c（50・51）　やや内湾気味に立ち上がる体部形態を有する 50 と、直線的に立ち上がる体部形態を有する 51 で、50 は体部下位に回転ヘラ削り痕跡が観察できる。

高坏（52）　円筒形を有し、残存状況から短脚と推定できる脚部。内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

小壺（53）　平底の底部からやや外方へ開く体部へと移行し、肩部がやや張り口径が小さい口縁部へと至る。体部外面下位を回転ヘラ削りし、他の部位は回転ナデ調整が観察できる。

壺（54・55）　54 は平底のもので、直立気味に立ち上がる体部形態を有する。55 は、高台を貼付し内湾気味に立ち上がる体部形態を有する。体部外面には自然釉の垂下が観察できる。

土師器

坏 d（56・57）　両者とも、回転ヘラ削りが底部外面に観察できる平底から内湾気味に上方へ立ち上がる体部形態を有する。

坏 c（58・59）　底部と体部の屈曲部に高台を貼付するもので、器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できない。

皿 a（60 ～ 62）　いずれも浅めの器高のもので、底部から体部への移行が明瞭ではない。器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できない。

甕 a（63）　「く」の字形の頸部形態のもので、体部内面に手持ちヘラ削り痕跡が観察できる以外は、

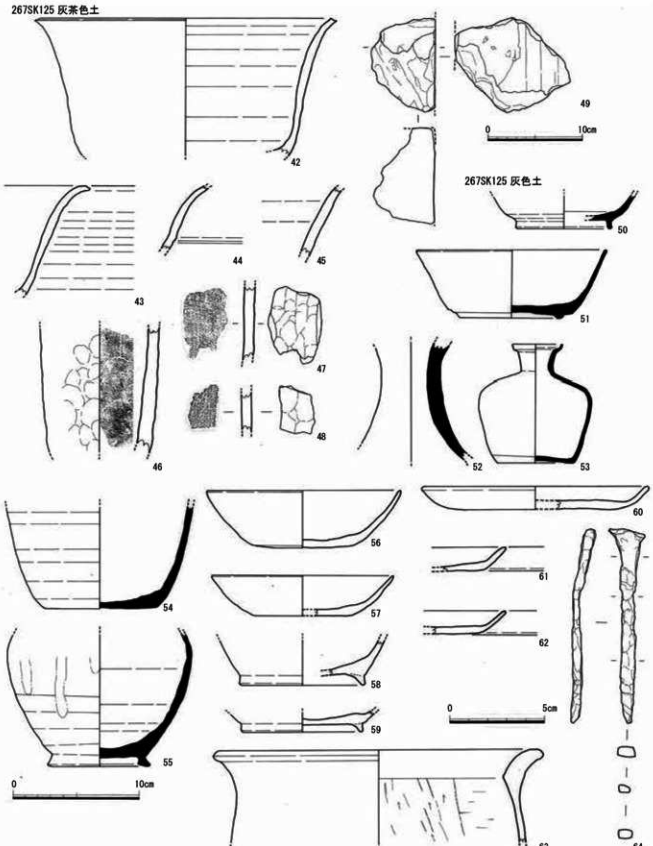


Fig.53　267SK125 出土遺物実測図（3）

器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できない。

金属製品

釘（64）　長さ 10.45cm を測り、断面四角形を有している。打面部と考えられる箇所は折り曲げではな

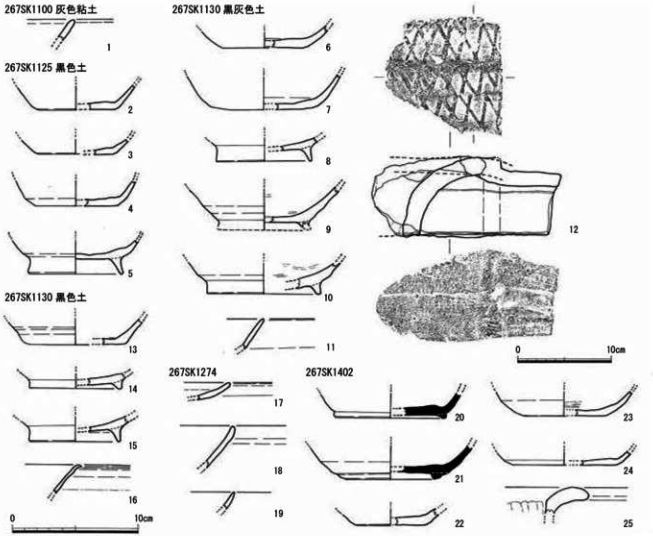


Fig.54　267SK1100・1125・1130・1274・1402出土遺物実測図

いかと考えられる。

267SK1100 灰色粘土 (Fig.54)

供膳具 (1)　口縁端部の破片資料。器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できない。

267SK1125 (Fig.54)

土師器

坏a (2～4)　平底の底部から直線的に外方へ開く体部形態を有するもの。底部外面はいずれも回転ヘラ切り。

椀c (5)　器高が高い高台を貼付し外方へ開く体部へと移行する。体部形状は残存率が悪く判然としない。

267SK1130 黒灰色土 (Fig.54)

土師器

坏a (6・7)　回転ヘラ切りする平底の底部から、6はやや外方へ、7はやや直立気味に立ち上がる体部へと移行する。

椀c (8)　直立気味の高台を貼付する椀で、残存率が悪く椀の形状は明らかにし難い。器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できない。

黒色土器A類

椀c (9・10)　いずれも高台を貼付するもので椀部の内面にミガキcが観察できる。

緑釉陶器

椀×皿（11）　口縁部の破片資料で内外面に施釉。残存率が悪く器種特定に至っていない。

瓦

丸瓦（12）　玉縁が残る丸瓦で、凸面に格子タタキ、凹面に布目が観察できる。

267SK1130 黒色土（Fig.54）

土師器

坏a（13）　平底の底部から直線的に外方へ開く体部へ移行するもので、器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できない。

椀c（14・15）　直立気味の高台を貼付する椀で、残存率が悪く椀の形状は明らかにし難い。器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できない。

灰釉陶器

椀（16）　口縁端部をやや外方へ開くもので、口縁ぶ外面から内面にかけてハケ塗によって施釉されている。

267SK1274（Fig.54）

土師器

小皿a1（17）　やや押し出された底部から外方へ開く口縁部へと移行するもので、器面摩耗のため、成形・調整技法は観察できない。

白磁

椀（18）　玉縁口縁の椀Ⅳ類。

皿（19）　内湾気味に立ち上がる口縁部形状を持つ皿Ⅵ類。

267SK1402（Fig.54）

須恵器

坏c（20・21）　20は底部から体部へ屈曲する部位に高台を貼付し、21はやや中心寄りに高台を貼付している。いずれも底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

土師器

坏a（22・24）　平底の底部から外方へ開き気味に立ち上がる体部へと移行する。

坏d（23）　平底の底部から内湾気味に立ち上がる体部へと移行し、底部外面から体部外面下位に回転ヘラ削りが観察できる。

甕（25）　頸部から口縁部の破片資料で、頸部内面に手持ちヘラ削りが観察できる。

e. その他の遺構

267SX500 茶色粘土（Fig.55）

須恵器

小皿a（1）　推定口径10.2cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できるもので、体部内外面、見込み部分に回転ナデ調整が観察できる。

土師器

小皿a1（2）　やや底部を押し出すもので、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

甕（3）　頸部形状が「く」の字に屈曲させるもので、体部内面に手持ちヘラ削り痕跡を観察することができる。外面については器面摩耗のため詳細は不明。

須恵質土器

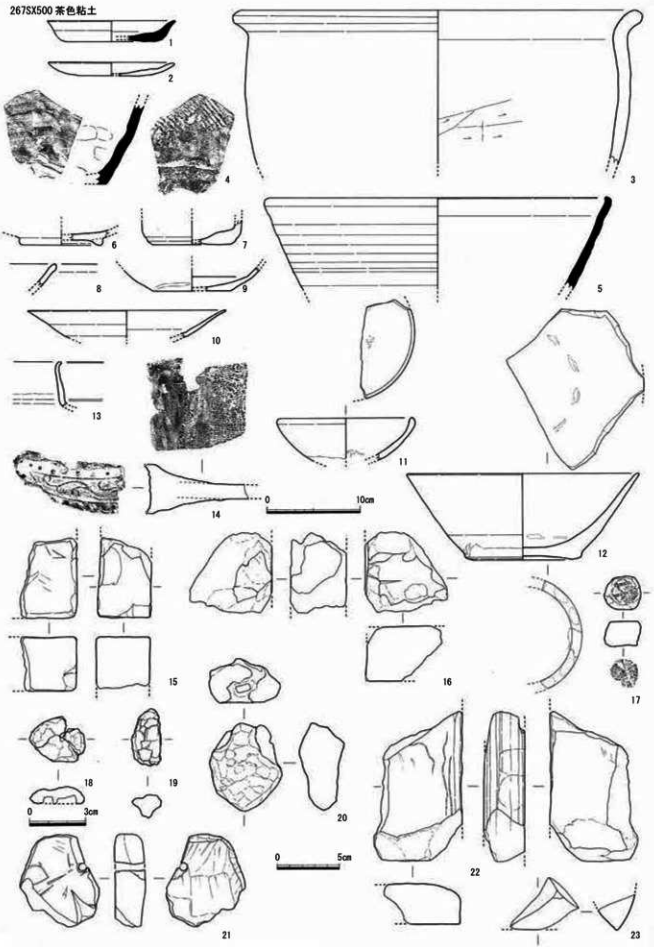


Fig.55　267SX500 出土遺物実測図（1）

壺（4）　平底の底部から外方へ開き気味に立ち上がるもので、外面に平行タタキ痕が内面には当て具痕と考えられる凹凸が残り、器表面を横ナデによって仕上げている。底部と体部の境界部分に回転ヘラ削りが残る。

こね鉢（5）　口縁端部外面に明瞭な面取りが観察できず、内面をややつまみ出すような形状を有するもの。体部外面下位に「黒斑」様の痕跡が観察できる。

緑釉陶器

皿（6）　形が定まらない高台を貼付し、高台脇から内面にかけて施釉。

壺（7）　平底の底部から直立する体部へ移行するもの。体部外面下位から体部内面下位まで施釉。

白磁

椀（8）　わずかに玉縁を形づくるもので椀Ⅰ類と考えられる。

皿（9・10）　素地、成形・調整痕跡、施釉状況から皿Ⅺ類の範疇に入るものと考えられる。

青磁

椀（11・12）　いずれも越州窯系青磁で、11は、底部から内湾気味に立ち上がるもので、椀Ⅱ-d類と考えられる。12は椀Ⅰ-2a類。

水注（13）　内傾気味に直立する口縁部の破片で、長沙窯系青磁と考えられる。

瓦

軒平瓦（14）　唐草文と考えられる軒平瓦で、九州歴史資料館分類の軒平瓦642B類に該当するものと考えられる（九州歴史資料館、2000）。

土製品

塼（15・16）　15は、4面残存しているもので、表面にスス状炭化物が付着している。16は3面残存しこちらもスス状炭化物が付着している。

瓦玉（17）　格子タタキを有する瓦の加工品で、瓦欠損部分は削り様の痕跡が観察できる。

金属製品

用途不明（18・19）　錆によって原型を推定できない。

鉄滓（20）　不定形の鉄滓。中心部に四角形の鉄が観察できる。

石製品

石鍋再加工品（21）　スス状炭化物が付着していることから石鍋であったと考えられ、一ヶ所穿孔が観察できる。滑石製。

砥石（22・23）　22は砂岩製のもので、23は細部研ぎ出しに使われた砥石と考えられ、粘板岩製。

267SX500 灰色粘土（Fig.56・57）

須恵器

坏（24）　平底の底部から大きく外反する体部へと移行するもので、蓋の可能性も残る。

壺（25）　平底の底部から直立気味に立ち上がる体部へと移行する。全体形状については不明。

火舎（26）　独立した脚が数本貼付され、立ち上がりが低い台部がのる。見込み部分に指頭圧痕が多数観察できる。

硯（27）　硯として使用した面には同心円当て具痕跡が、裏面には平行タタキ痕があり、甕を転用した硯と考えられる。

土師器

坏a（28）　推定口径11.5cmを測るもので、底部と体部の境が不明瞭は坏である。底部外面は回転ヘラ切り、他の部位には回転ナデ痕跡が観察できる。

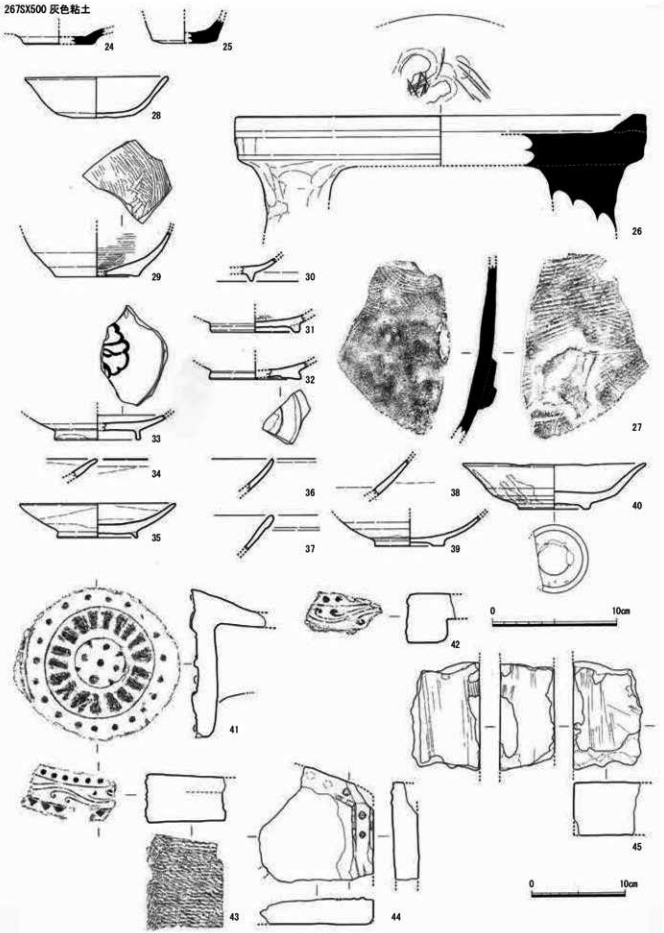


Fig.56　267SX500 出土遺物実測図（2）

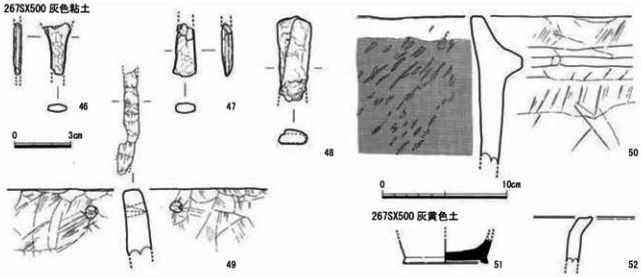


Fig.57　267SX500 出土遺物実測図（3）

黒色土器A類

椀（29）　回転ヘラ切りする平底の底部から内湾気味に立ち上がる体部へと移行する。内面にはミガキcが残る。

緑釉陶器

椀（30 ～ 32）　31・33は輪高台のもので、32は蛇の目高台。33は見込み部分に華文が観察できる。

皿（34・35）　34は口縁部のみの破片。全形が分かる35は、断面略台形の高台を貼付し、外方へ大きく開く体部へと移行する。底部外面には回転糸切り痕が残る。

青磁

椀（36）　やや内湾気味に開くもので、越州窯系青磁椀Ⅰ類。

白磁

椀（37 ～ 39）　37は、外面に扁平な玉縁を有する者で、椀Ⅺ-1類と考えられる。39は椀Ⅰ類。38は華南産白磁と考えられる。

皿（40）　口縁端部に輪花があるもので、素地・形態・釉調から椀Ⅰ-1b類。

瓦

軒丸瓦（41）　中房に1＋4の朱文があり、複弁とみられ、外縁に20の朱文がある。

軒平瓦（42・43）　偏行唐草文と考えられ、九州歴史資料館分類の560型式と考えられる（九州歴史資料館、2000）。

鬼瓦（44）　鬼面部分は欠損しており、縁部分の朱文部分のみ観察できる。

土製品

塼（45）　3面残存するもので、器表面にナデ痕跡が観察できる。

鉄製品

鏃（46）　二股に分かれる形態と考えられるもので、鏃と推定される。

用途不明（47・48）　棒状のもので、錆にため用途を推定するには至らなかった。

石製品

石鍋（49・50）　49は口縁部のみの破片で、内外面に穿孔途中の痕跡がある。50は鍔を有するモノで内外面にスス状炭化物が付着している。両者とも削り痕が観察できる。

267SX500 灰黄色土（Fig.57）

須恵器

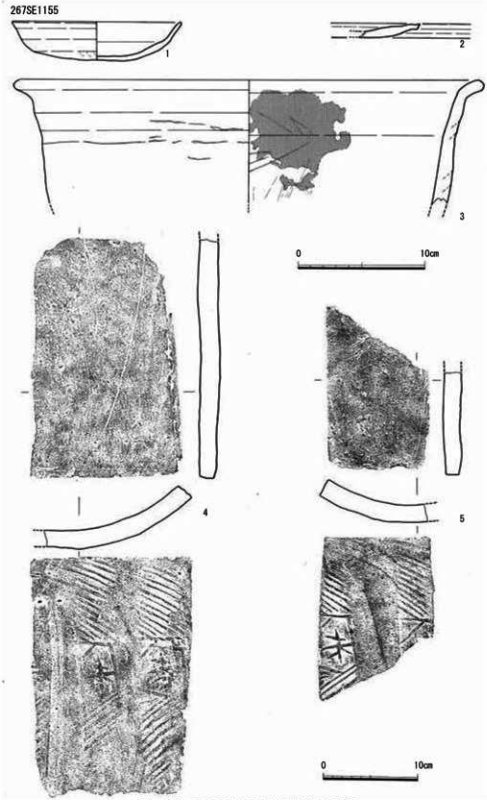


Fig.58　267SE1155 出土遺物実測図

館分類の914型式（九州歴史資料館、2000）。

（7）第4調査面検出遺構

a. 土坑

267SK830 (Fig.37)

坏c（51）　内傾する高台を貼付し、直立気味に立ち上がる体部へと移行する。

土師器

煮沸具（52）　口縁端部を平坦に仕上げるもので、残存度合いが悪いため器種特定には至らなかった。

●第3調査面

a. 井戸

267SE1155 (Fig.58)

土師器

丸底坏a（1）　口径13.3cmを測り、底部押し出し時の指頭圧痕が観察できる。

小皿a2（2）　口縁端部をつまんで立ち上げるもので、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

鍋（3）　やや大振りの鍋で口縁部を外方へ屈曲させる。成形時の粘土紐痕跡が観察でき、内面にはスス状炭化物が付着している。

瓦

平瓦（4・5）　凸面に平行タタキ痕跡と「未」の文字様の文字タタキが観察できる。凹面には布目痕がある。九州歴史資料

調査区北西側のAL33で検出された土坑である。東西方向の道路側溝267SD875・880に切り込む位置関係にある。東西に長い楕円形を呈し、長軸長約3.0 m、短軸長2.2 m、深さ0.96 mを測る。埋土は上から淡黄灰色粘土、茶灰色砂の順に堆積し、遺物の取り上げを行った。粘質土と砂質土との互層堆積が見られる。形状や深さから井戸の可能性も考えられるが、井戸枠や掘方、板材などの痕跡は見られなかった。下層の茶灰色砂には流木や石・礫が認められた。

b. その他の遺構

267SX790 (Fig.37)

AH～AL28～30で検出したⅢ期道路除去後に検出される道路基盤層267SX765に含まれる遺物群で、木片や瓦片、獣骨、礫、杭が大量に出土した。杭は267SX765の掘下げ中に打ち込まれた状況の杭が154本出土している。杭に引っかかったような棒状木製品や板状の木片が見られた。まず、杭が出土した267SX765(267SX600も含む)は1坊路と14条路との交差点に形成された腐植土層である。交差点はオープンカットによる道路(Ⅰ期)形成後、頻繁な通行により路面がえぐられ、地山の標高が低くなっていたと想定される。標高の低い交差点に土砂や有機物が流れ込み、腐植土層が形成されていったと考えられる。この腐植土層に打ち込まれた大量の杭は、その形成された時期と目的を考察するに二つのパターンが考えられる。

(8)第4調査面遺構出土遺物

a. 溝

267SD1140 (Fig.59)

須恵器

坏c (1)　外方へ張り出す高台を貼付するもので、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

黒色土器A類

椀 (2・3)　2は直線的に外方へ開く体部形態を有する。3は略四角形の高台を貼付している。器面摩耗のため成形・調整痕跡は明らかにし難い。

267SD1140暗茶色砂 (Fig.59)

土師器

坏a×皿a (4)　平底の底部から外方へ大きく開く体部へと続く。器面摩耗のため成形・調整痕跡は明らかにし難い。

b. 土坑

267SK1341 (Fig.59)

須恵器

蓋1 (5)　返りを有するモノで、やや器高が高いと判断されるため、7世紀前半から中頃までに存続幅を有する蓋1と推定できる。内外面ともに回転ナデ調整。

坏 (6・7)　6は外方へ開くと考えられる口縁部の破片。7は、平底の底部から直立気味に立ち上がる体部形態を有するもので、推定口径10.0cmを測る。

壺 (8)　高脚の高台を貼付する壺で、肩部に波状文および3条の圏線を施文している。肩部下位から高台脇まで回転ヘラ削りによって仕上げている。

土師器

甕（9）　体部から底部の破片で、外面に縦方向のハケ痕跡が観察できる。内面は器面摩耗のため成形・調整痕跡は明らかにし難い。

267SK1437（Fig.59）

土師器

丸底坏ａ（10）　やや器高が高いモノで、平安中期に分布中心を有する丸椀と考えられる。内面にはミガキｂ痕跡が観察できる。

267SK1438（Fig.59）

土師器

小椀（11）　手づくね土器とされるもので、内外面に指頭圧痕が多数残る。

黒色土器

椀（12）　内外面にスス状炭化物が付着するもので、直線的に外方へ開く体部から口縁部形態を有する。

土製品

用途不明（13）　一面のみ凹凸を有する器表面の特徴を有するが、他の面は摩耗のため成形・調整痕跡は明らかにし難い。

金属製品（14）　槍カンナ様の形態を有する銅製品。

c. その他の遺構

267SX1339（Fig.59）

須恵器

火舎（15）　脚部が貼付されるものと考えられるが、器部分のみの資料。平底の底部から直立する体部へと移行し、外反する口縁部へと至る。内外面ともに回転ナデで仕上げている。

土師器

坏ａ（16）　平底の底部からやや外方へ体部が立ち上がる。体部ならびに見込み部分に回転ナデ痕跡が観察できる。

坏ｃ（17）　直立気味に立ち上がる高台形状を有する。残存率が低いため全形について明らかにし難い。

黒色土器Ａ類

椀ｃ（18・19）　いずれも直立気味に立ち上がる高台を貼付する。残存率が低いため全形について明らかにし難い。

267SX1426（Fig.59）

須恵器

坏ａ（20・21）　いずれも、平底の底部を有し、21は底部付近の破片で、外面に「玉名」と墨書される。

（９）道路関係遺構出土遺物

条坊道路遺構については、検出面との関係性を明らかにし難い面もあるため、個々の道路検出面によって出土遺物を解説する。

●道路１面

a. 道路状遺構

267SF545 明茶色砂（Fig.60）

土師器

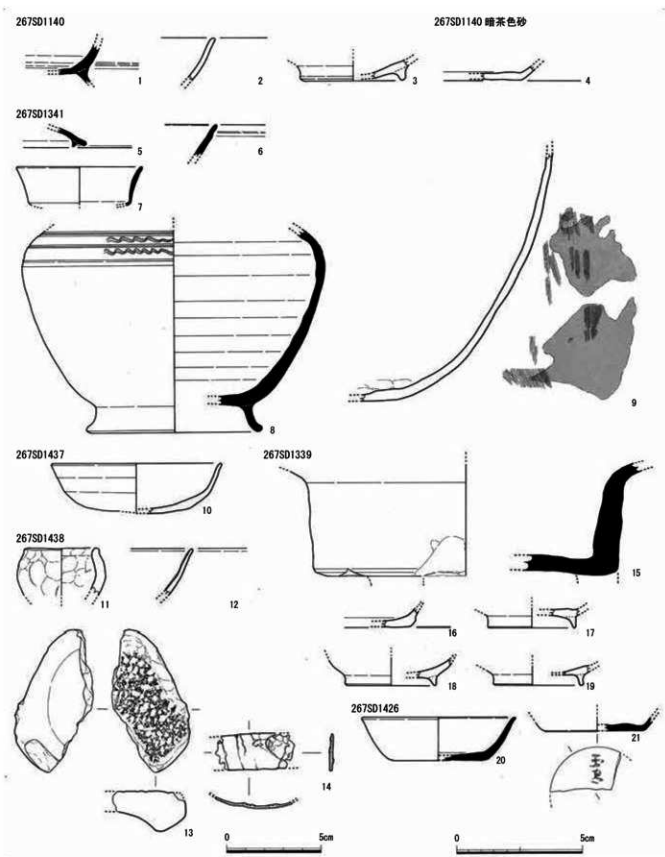


Fig.59　267SD1140・SK1341・1437・1438・SX1339・1426 出土遺物実測図

坏a（1・2）　1は、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる坏底部の破片資料で、他の部位については器面摩耗のため成形・調整痕跡は明らかにし難い。2も同様に、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察でき、見込み部分に朱が付着している。

椀c×皿c（3）　直立気味の高台を貼付するモノで、器面摩耗のため成形・調整痕跡は明らかにし難い。
小皿a1（4～6）　いずれも口径復元できない底部から口縁部までの破片資料。6のみ底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。他は、器面摩耗のため成形・調整痕跡は明らかにし難い。
黒色土器
椀c（7～9）　いずれも高台から底部の破片で全形を明らかにし難い。7および9の見込み部分にミガキcが観察できる。
白磁
椀（10）　口縁部外面に玉縁を付すもので、椀Ⅳ類。
青磁
坏（11）　口縁端部外面に輪花を持つもので、越州窯系青磁坏Ⅰ類。
椀（12）　蛇の目高台を有するモノで、形状、素地、施釉の特徴から長沙窯系青磁と考えられる。
水柱（13）　水柱の注ぎ口の部分の破片で、形状、素地、施釉の特徴から長沙窯系青磁と考えられる。
陶器
壺（14）　内傾する高台を有し、外方へ開く体部へと移行する。体部下位から底部外面は回転ヘラ削り痕跡が観察でき、削り出し高台と考えられる。
瓦
鬼瓦（15）　口から鼻の部分の破片と考えられ、線刻によって造形されている。裏面には、ナデや指頭圧にともなう痕跡が観察できる。
石
用途不明（16）　自然風化面も観察できるが、材質はメノウ。人為的な加工痕跡は観察できない。
石製品
鏃（17）　打製石器。材質はサヌカイト製で重さは0.5gを量る。
267SF545 茶灰色砂礫（Fig.60～62）
須恵器
椀（18）　円盤状高台様の底部を持ち、やや内湾気味に立ち上がる体部へと移行する。底部外面に回転糸切り痕跡が観察できる。
甕（19）　頸部の破片資料で、内面に同心円当て具痕跡があり、肩部外面に円弧上の貼付文が付されている。
壺（20）　平底の底部から内湾気味に立ち上がる体部へと移行する。内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。
火舎（21・22）　21は、体部下位から口縁部の破片資料で、直立する体部から外反する口縁部へと移行する内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。22は、脚部から底部の破片資料。
土師器
小皿a（23）　回転ヘラ切り痕跡が観察できるモノで、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。
椀c（24～32）　いずれも高台から底部の破片資料で、26・27・30・31は成形・調整痕跡として回転ナデが観察できる。他の資料は、器面摩耗のため、成形・調整痕跡を明らかにし難い。
椀（33）　円盤状高台の椀を考えられるものの、器面摩耗のため、成形・調整痕跡を明らかにし難い。
黒色土器A類
椀c（34～36）　いずれも高台から底部の破片資料で、34・36の見込みにはミガキcが観察できる。
緑釉陶器

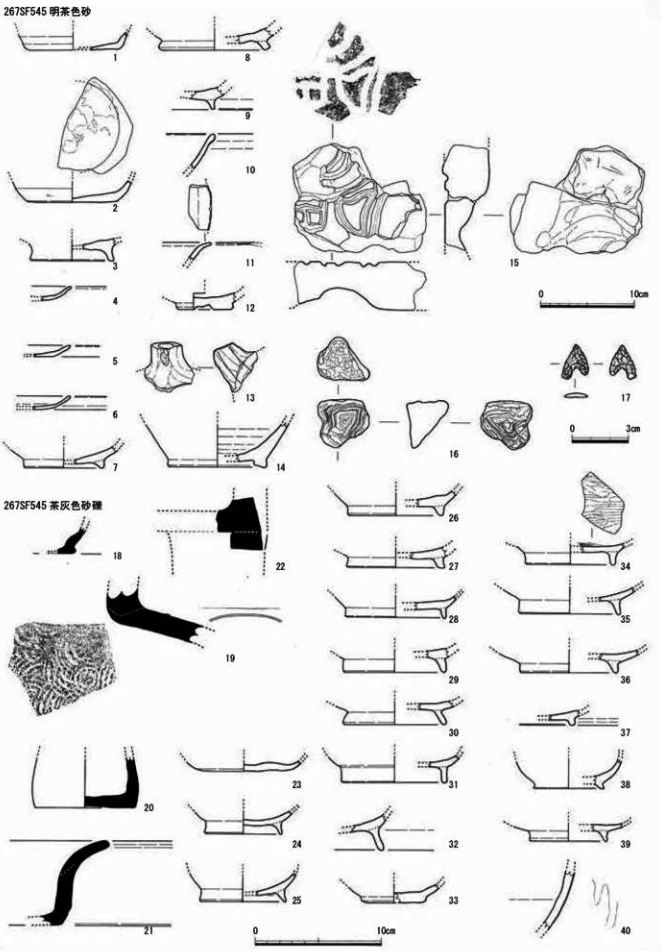


Fig.60　267SF545 出土遺物実測図（1）

椀×皿（37）　高台から底部の破片資料で、内外面ともに施釉。

小椀（38）　外方に張る高台から内湾気味に立ち上がる体部へと移行する。底部のみ露胎で他の部位は施釉。

灰釉陶器

椀×皿（39）　高台から底部の破片で、内外面ともに回転ナデ痕跡が観察できる。

壺（40）　体部の破片資料で外面に自然釉の垂下が見られる。

青磁

椀（41・42）　41は越州窯系青磁椀Ⅰ2ウ類、42は越州窯系青磁椀Ⅲ類。

陶器

壺（43）　頸部の破片資料。中国製と考えられる。

瓦

軒丸瓦（44）　単弁で外縁に朱文を配している。全形を明らかにし難いもので九州歴史資料館分類に該当するモノが見当たらない。

丸瓦（45・46）　45は、玉縁が残るもので、凸面に格子タタキ、凹面に布目が観察できる。46は、凸面に「平井」の文字が観察でき九州歴史資料館分類の901Ga型式と考えられる。

平瓦（47～52）　47は凸面に判読し難いものの線刻が観察できる。48・49は、凸面に「平井」の文字があり、48は九州歴史資料館分類の901B型式、49は901Hc型式と考えられる。50・51は、凸面のタタキが平行タタキ。52は、凸面に縄目タタキが観察できる。

鬼瓦（53）　小破片化していることもあり形式を明らかにし難いが、表面の凹凸ならびに穿孔から鬼瓦の可能性もある。

土製品

錘（54）　円筒状のもので、器面摩耗のため、成形・調整痕跡を明らかにし難い。重量は11.1gを量る。

金属製品

用途不明（55）　板状のもので二箇所穴が開けられている。銅製。

石製品

石鍋（56）　滑石製石鍋で器表面を削り出しによって成形している。再加工が施されており、加工後の利用については不明。

砥石（57）　3面に使用痕が観察できるモノで、材質は砂岩製。

267SF545 暗茶色砂（Fig.62）

瓦

平瓦（58）　凸面に文字を配するもので九州歴史資料館分類の901Hc型式と考えられる。

267SF545 茶褐色土（Fig.62）

瓦

平瓦（59）　凸面に格子タタキ、凹面に布目痕が観察できる。

267SF545 茶灰色土（Fig.62）

青磁

椀（60）　越州窯系青磁椀Ⅰ-1a類。

267SF545 灰白色砂（Fig.62）

土師器

坏a×小皿a（61）　平底の底部で外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

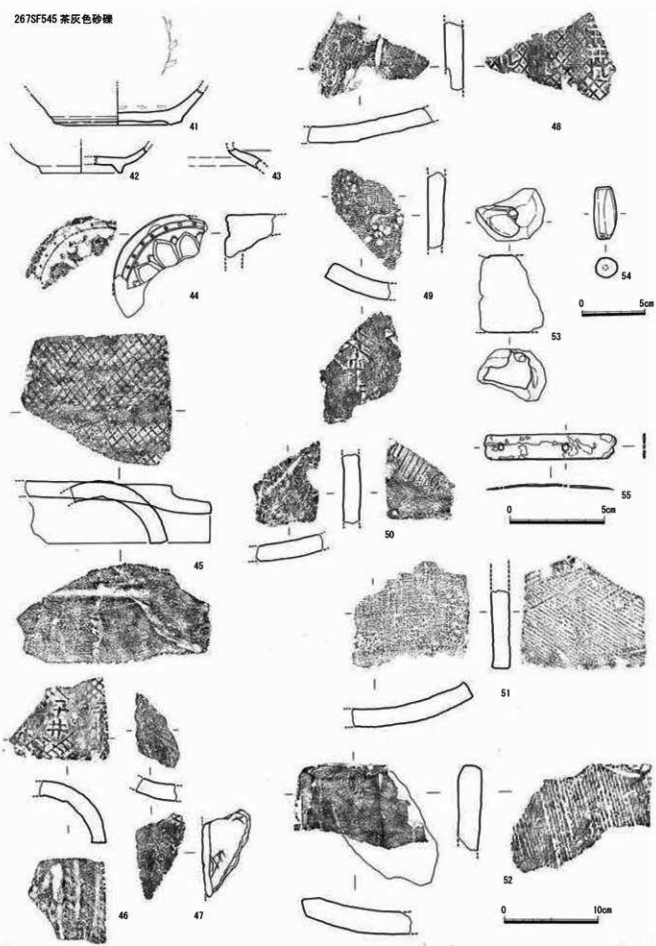


Fig.61　267SF545 出土遺物実測図（2）

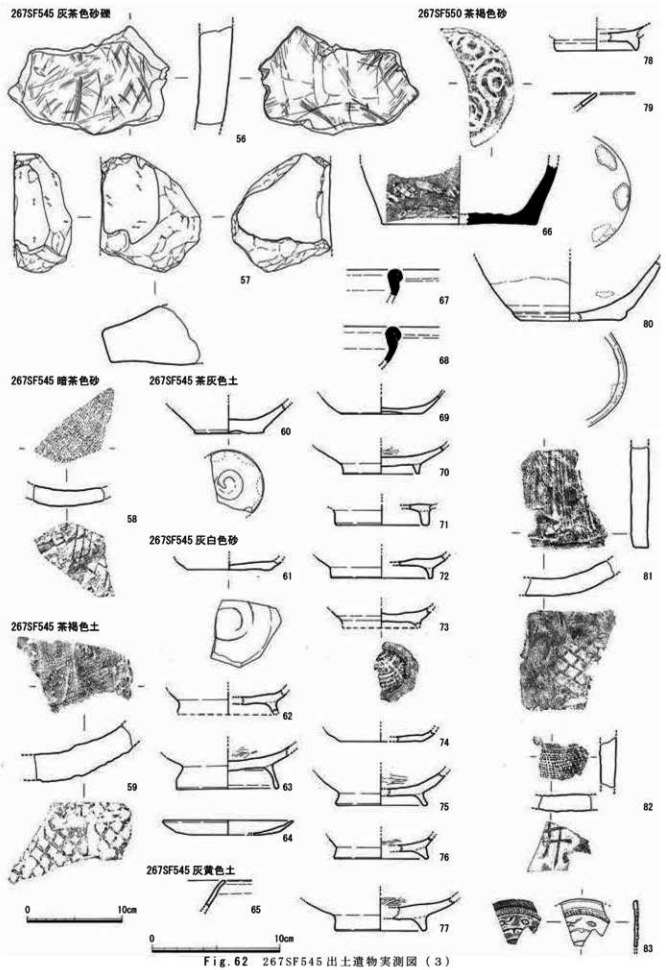


Fig.62　267SF545出土遺物実測図（3）

小皿a1（64）　推定口径10.2cmを測り、残存部からの観察では内外面ともに回転ナデ痕跡が観察できる。

椀c（62）　高台から底部の破片資料で、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

黒色土器A類

椀c（63）　高脚の高台を貼付する底部の破片で、見込み部分にミガキcが観察できる。高脚であることから金属器模倣の椀と考えられる。

267SF545 灰黄色土（Fig.62）

緑釉陶器

椀（65）　やや外反する口縁部の破片。内外面に施釉。

267SF550 茶褐色砂（Fig.62）

須恵器

壺（66）　平底の底部から直立気味に外方へ立ち上がるモノで、底部内面に同心円当て具痕跡が観察でき、体部下位に格子タタキ痕がある。

鉢（67・68）　肥厚する口縁部形状を示し、内外面は回転ナデによって仕上げられている。篠窯系の製品と考えられる。

土師器

坏a×小皿a（69・74）　いずれも、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できるモノで、他の部位は回転ナデによって仕上げられている。

椀c（70～73）　高台を貼付する底部の破片で、70は見込み部分にミガキcが観察でき、73は底部切り離し処理が回転糸切りのモノである。

黒色土器A類

椀c（75～77）　高台を貼付する椀で、見込み部分にミガキcが観察できる。

灰釉陶器

供膳具（78）　逆「く」の字形の高台のもので、底部外面に回転糸切り痕跡が残る。見込み部分に施釉。

白磁

皿（79）　皿XI類。

青磁

椀（80）　越州窯系青磁椀Ⅰ-5類。

瓦

平瓦（81・82）　81は凸面に格子タタキ、凹面に布目が観察できるモノ。82は小破片のため器種特定に至らないものの、凸面に「平井」と考えられる文字の内「井」と判読できることから、九州歴史資料館分類の901F型式と考えられる。

金属製品

鏡（83）　破鏡で、外縁の斜面文が内縁に隆起紐による文様が観察できる。鏡の形式については明らかにし難い。

267SF560 灰色粘土（Fig.63・64）

須恵器

大蓋c（1）　ややくずれた擬宝珠形を持つもので、直径4.4cm、残存高4.2cmを測り、やや大振りの蓋のツマミと考えられる。

鉢（2）　口縁端部を内側に肥厚させ、推定口径21.0cmを測る。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

高坏（3）　円筒形の高坏の脚部。上位にむけて絞り上げるように回転ナデにて仕上げられている。

土師器

坏 a（4～6）　口径 12.6cm～14.6cm を測る。4 ならびに 5 は、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察でき、他の部位は回転ナデによって仕上げられている。6 は器面摩耗のため、成形・調整痕跡を明らかにし難い。

丸底坏 a（7～12）　口径を明らかにできる 7 は 11.8cm、12 は 12.0cm を測る。多くは、器面摩耗のため、成形・調整痕跡を明らかにし難いものの、10 は体部下位内面に指頭圧痕が観察できる。

椀 c2（13～25）　多くは、高台から底部の破片資料であるが、全形が分かる 13 は推定口径 10.8cm、15 は推定口径 16.6cm を測る。多くの個体は器面摩耗のため、成形・調整痕跡を明らかにし難い。

小皿 a1（26～55・57）　口径 9.5cm～12.35cm を測り、10.0cm を分布中心におく。底部外面の処理を観察できるものは回転ヘラ切りのみ確認できる。

小皿 a2（56）　口縁端部を折り曲げないしはつまみ上げるもので、内外面ともに回転ナデ痕跡が観察できる。

器台（58）　円筒形の脚部の破片で、器表面に成形のための指頭圧痕が観察できる。

黒色土器 A 類

椀 c（59・60）　やや外方に張る高台と底部の破片資料。見込み部分にミガキ c 痕跡が観察できる。

黒色土器 B 類

椀 c（61）　やや外方に張る高台と底部の破片資料。見込み部分にミガキ c 痕跡が観察できる。

緑釉陶器

大鉢（62）　推定口径 40.5cm、器高 16.65cm、高台径 16.8cm を測り、内面にわずかにミガキ c 痕跡が観察でき、見込み部分に陶枕の跡が残る。

壺（63・64）　63 は、二重口縁を呈する壺の口縁部と考えられ、内外面に施釉。64 は胴部の破片資料。

白磁

椀（65）　口縁端部を外方に折り曲げて肥厚させるもので、椀XI-3 類。

皿（66・67）　扁平に近い口縁部形態を有しするもので、皿XI類。

石製品

碁石（68～106）　いずれも扁平な形状を持つ小円礫で、碁石に利用されたものと考えられる。

用途不明（107）　滑石製石鍋の再利用品で、円形に削り出され円盤状の形状を呈する。器表面は削りによって成形されている。

267SF560 茶褐色土（Fig.65）

須恵器

坏 c（1）　形骸化した断面台形を呈する高台を貼付する底部破片。内外面ともに回転ナデによって仕上げ、見込み部分に不定方向のナデ痕跡が観察できる。

土師器

坏 a（2・3）　やや小皿気味に小型化したモノで、3 の底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

小皿 a1（4）　推定口径 10.1cm を測り、底部外面は回転ヘラ切り。

小皿 a2（5～7）　口縁端部をつまみ上げによって仕上げるもので、口径が明らかにできる 7 は推定口径 10.8cm を測る。器面摩耗のため、成形・調整痕跡を明らかにし難い。

椀 c2（8）　高台脇から体部下位までが残存するもので、見込み部分にミガキ c が観察できる。

緑釉陶器

267SD560 灰色粘土

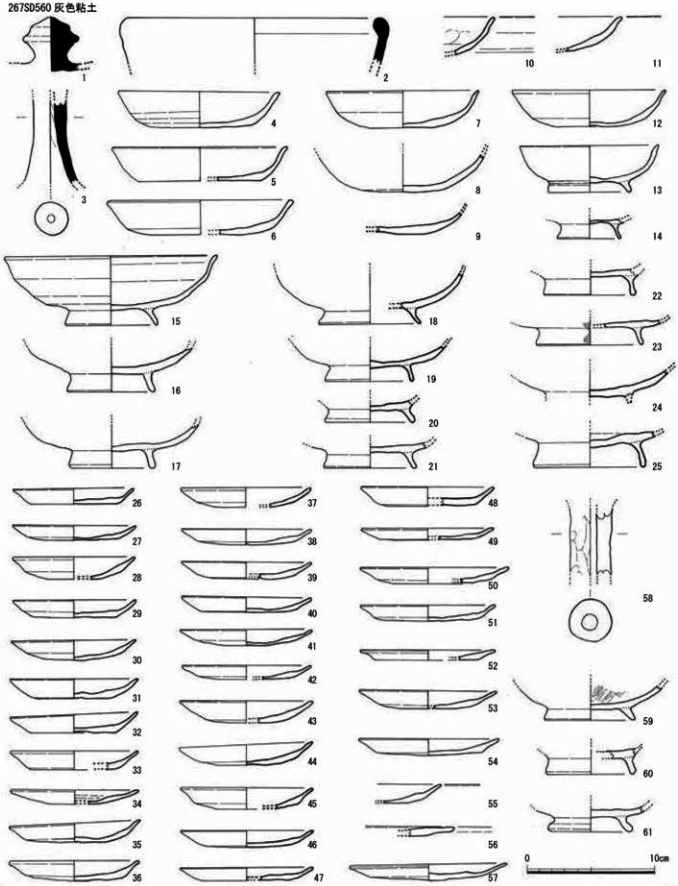


Fig.63　267SF560 灰色粘土出土遺物実測図（1）

椀ｃ（9）　断面四角形の高台を貼付する平底の底部破片。内外面に施釉。

青磁

皿（10）　底部から屈曲し外方へ開くモノで、越州窯系青磁坏Ⅰ類と考えられる。

水注（11）　水注の把手と考えられ、３つの棒状のモノを束ねた形状を持つ。越州窯系青磁Ⅰ類系の素地特徴を有する。

267SF715（Fig.66 ～ 69）

須恵器

蓋Ⅰ（1）　かえりを有する蓋で外面の口縁部と天井部の境を回転ヘラ削りしている。

蓋ｃ（2）　ややボタン状の扁平つまみを貼付するもの。つまみ貼付のための回転ナデのほかに天井部外面には回転ヘラ削り痕跡が観察できる。

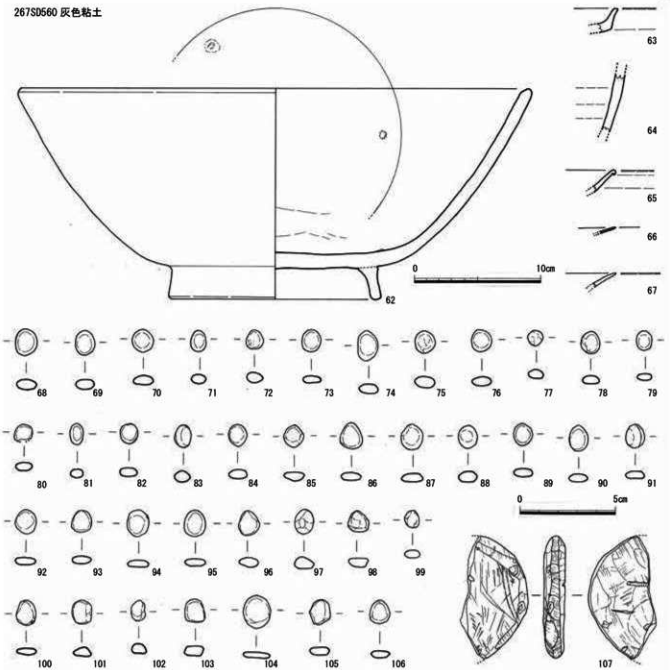


Fig.64　267SF560 灰色粘土出土遺物実測図（２）

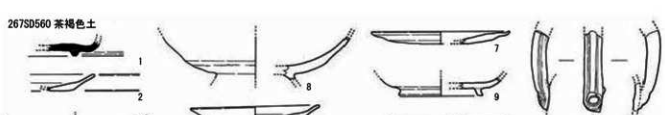


Fig.65　267SF560 茶褐色土出土遺物実測図

蓋 c3（3）　残存状況からつまみを貼付するものと解せる蓋で、断面三角形の口縁部を有する。天井部外面は回転ヘラ削り。

蓋（4・10）　いずれも天井部外面に回転ヘラ削り痕が観察できる。

蓋 3（5 ～ 8）　いずれも天井部外面は回転ヘラ削りによって仕上げ、断面三角形の口縁端部形状を有する。

蓋 4（9）　口縁部内面に凹線を描く蓋 4。

坏（11）　外方へ大きく開くもので、高台を貼付する大振りの皿の可能性も残る。内外面ともに回転ナデ。

坏 a（12 ～ 14）　全形が明らかな 12・13 は推定口径 11.8cm、14.2cm を測り、底部外面に回転ヘラ切り痕跡をいずれもとどめる。14 も口径は明らかではないが。底部外面に回転ヘラ切り痕跡がある。

坏 c（15 ～ 20）　17 以外は、断面台形の高台を貼付し、16 は丸みを帯びつつ立ち上がる体部形態を有するもので、内面に漆様の付着物がある。17 は、他の資料を異質で、やや高めの外方へ開く高台を貼付する。

皿 a（21）　底部外面を回転ヘラ切りするもので、外方へ開く口縁部へと至る。推定口径 15.1cm を測る。

皿 c（22）　断面略正方形の高台を貼付し、底部と体部の境を丸みを帯びつつ上方へ立ち上がる形態と考えられる。口径が広い坏になる可能性も残されている。

壺蓋（23）　外面を手持ちヘラ削りで成形するもので、口径から壺 a などの蓋と推定される。

壺（24・25・29 ～ 31）　24・25 は頸部をすぼめる壺で、内外面に回転ナデ痕跡がある。29 ～ 31 は、法量から高台を貼付する壺底部と判断した。29・30 は外面は回転ナデ、31 は外面回転ヘラ削りで仕上げている。

壺 b（26・27）　26・27 ともに破片資料であるが、形状から長頸壺である壺 b と判断した。

小壺（28）　高台を貼付する小型の壺。内外面は回転ナデ。

鉢（32・33）　頸部を「く」字に屈曲させる鉢で、体部外面下位を回転ヘラ削りする以外は、内外面ともに回転ナデ。

火舎（34・35）　34 は火舎体部で、外面を回転ヘラ削りする以外は回転ナデによって仕上げる。35 は火舎に貼付される獣脚で手持ちナデによって成形している。

硯（36）　脚付の風字硯と考えられる。陸部分に削り痕が観察できる。

土師器

蓋 4（37）　口縁部内面に凹線を描くもので、内外面ともに回転ナデ。

坏 a（38 ～ 44・68）　全形が分かる 44 は推定口径 12.5cm、器高 3.65cm、底径 8.7cm を測り、他の個体ともども底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

坏 c（45）　断面方形の高台を貼付するもので、体部形状が明らかでなく、皿の可能性も残る。

椀 c（46 ～ 63）　多様な高台形状をそれぞれ持つもので、器面調整が明らかな個体は、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。全形が明らかな 46 は、推定口径 15.6cm 器高 4.9cm、高台径 7.3cm を測る。

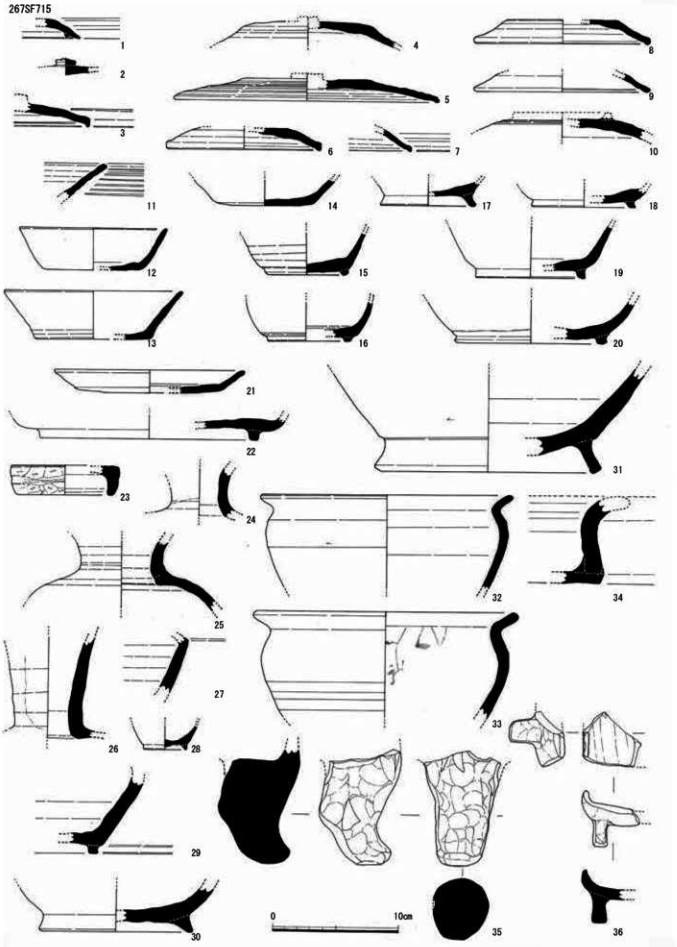


Fig.66　267SF715出土遺物実測図（1）

皿 a（64 ～ 67）　平底の底部から外方へ大きく開くもので、推定口径 11.6cm ～ 12.8cm を測る。

甕 a（69 ～ 71・73）　胴張りのない頸部から外反させる口縁部形状を有するもので、69・70 は、胴部内面をヘラ削りする。73 は内外面ともにナデによって仕上げている。

甕 b（72）　土師器か製塩土器か明らかにし難い。外面に擬格子タタキが観察できる。

鉢（74）　外側に張り出す高台を貼付するもので、残存率が極めて悪いため、器種なども含め明らかにし難い。

竈（75）　残存部分が極めて悪いため、器種も含め明らかにし難い。器表面と考えられる部位にはナデ痕跡が観察できる。

黒色土器 A 類

椀 c（76 ～ 86）　高台が欠損する 86 以外は、形が一定しない高台をそれぞれ貼付し、見込み部分にミガキ c を施している。86 も他の個体と同様に見込み部分にミガキ c が観察できる。

瓦質土器

椀（87）　平底の底部から外方へ大きく開く体部へと移行する。内外面ともに回転ナデ。

緑釉陶器

椀（88 ～ 91）　88 は、体部下位から外反気味に口縁部へ至るもので、内外面回転ナデによって仕上げ、施釉。89 は蛇の目高台を削り出すもので、体部形態が定かではないため皿の可能性も残る。90 は体部下位の破片資料。91 は、体部下位から緩やかに立ち上がり、口縁端部を外反させるもので、体部下位を回転ヘラ削りしている。

灰釉陶器

椀（93）　体部下位の小破片。内外面施釉。

壺（92）　頸部から直立気味に立ち上がるもので、内外面を回転ナデし、外面に施釉し、内面には薄く施釉されている。

青磁

椀（94・95）　94 は、円盤状高台から内湾気味に立ち上がる体部へと移行する。越州窯系青磁椀Ⅱ -2c 類。95 は、輪高台で、直線的に外方へ大きく開く体部へと移行する。越州窯系青磁椀Ⅰ -2a ァ類。

水注（96・97）　両者とも、水注の把手と考えられる。越州窯系青磁。

合子（98）　返りを有する小型の合子。素地特徴から越州窯系青磁Ⅰ類系のもの。

陶器

壺（99・100）　99 は、口縁部を大きく外反させる壺の破片で、褐色釉薬をかけている。中国産陶器を考えられる。100 は、体部の破片資料、外面のみ施釉。

瓦

軒丸瓦（101・102）　101 は、瓦当の文様構成から九州歴史資料館分類の 291 型式、102 は 292 型式と考えられる。

丸瓦（103）　凸面に斜格子タタキ、凹面に布目痕跡が観察できる。

平瓦（104 ～ 108）　104 ～ 107 は凸面に格子タタキ、凹面に布目が観察できるもの。一方 108 は凸面に木目とは異なる平行タタキ痕が観察できる。凹面は他資料同様に布目が残る。

金属製品

飾り金具（109・110）　109 は鉄製の環状金具、110 は銅製の板状のもので、小さい釘様のものでとめられている。表面に皮様のものが付着している。

石製品

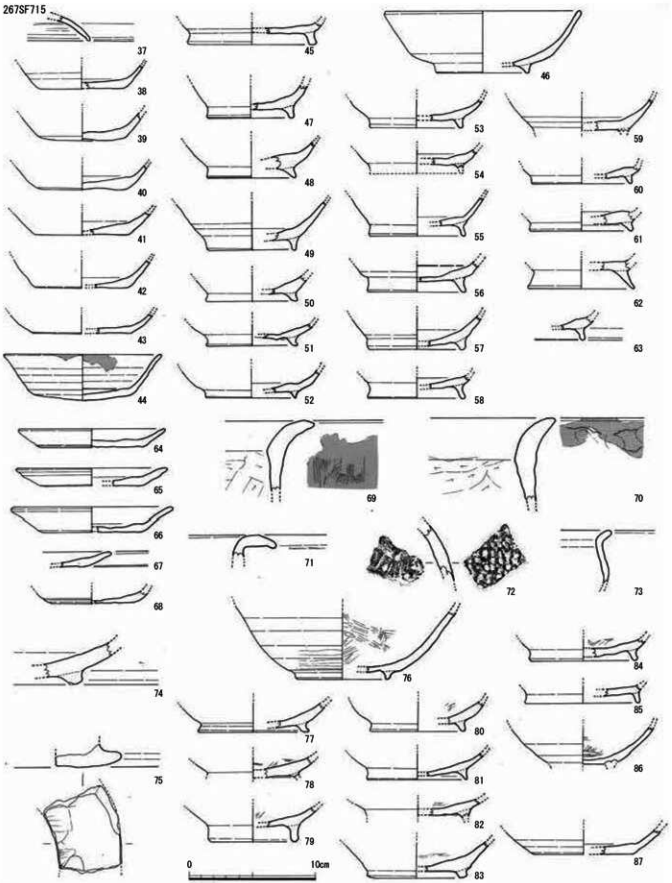


Fig.67　267SF715出土遺物実測図（2）

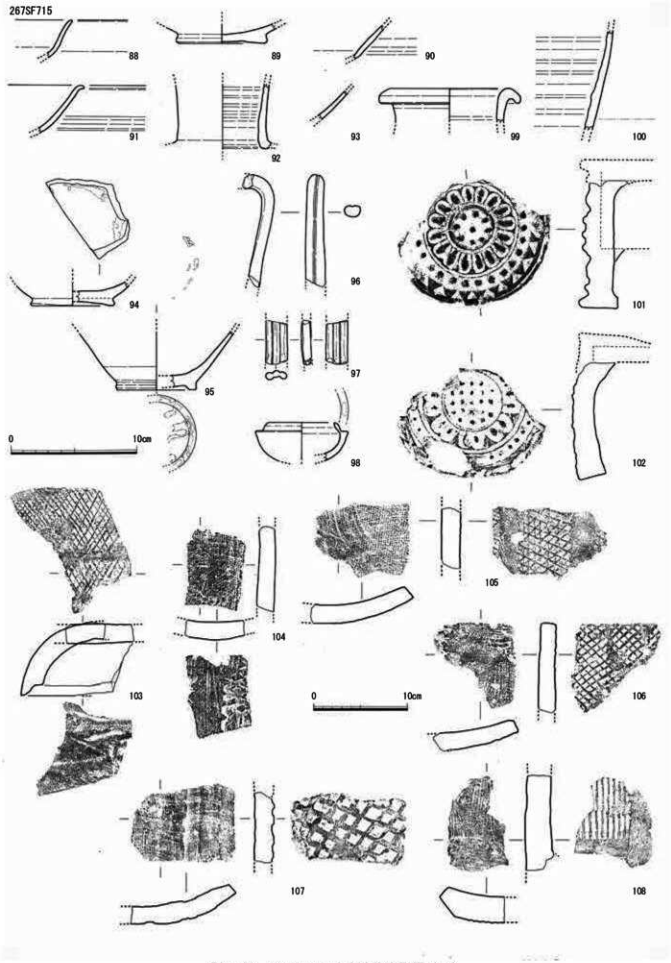


Fig.68　267SF715 出土遺物実測図（3）

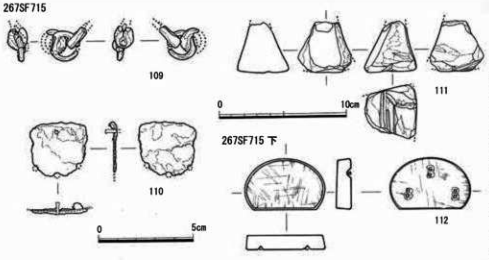


Fig.69　267SF715 出土遺物実測図（4）

砥石（111）　4面に使用痕があるもので、砂岩製。

丸鞆（112）　裏面に二個一組の穿孔が3箇所あるもので、色調は暗灰色で、頁岩製。

267SF720（Fig.70）

土師器

坏a（1）　推定口径12.2cmを測り、底部外面を回転ヘラ切りするもの。内外面は回転ナデ調整。

坏a×皿a（2）　法量が定かではないため皿の可能性も残る。底部外面は回転ヘラ切り。

椀c1（3）

推定口径13.0cmを測り、直線的に外方へ立ち上がる体部へと移行する。内外面ともに回転ナデ。

椀c（4～9）　高台を貼付するもので、体部形状を明らかにし難い。器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難いものもあるが、おおむね内外面ともに回転ナデで仕上げている。

壺（10）　平底からやや外方へ開く体部へと移行する。調整痕跡については回転・手持ちの判断がつかないがナデによって仕上げている。

黒色土器A類

椀c（11～13）　やや外張りの高台を貼付するもので、13は見込み部分にミガキcが観察できる。

緑釉陶器

椀×皿（14・15）　14は円盤状高台、15は削り出しによる蛇の目高台のもので、体部形態が明らかではないため、器種特定に至っていない。

白磁

椀（16）　口縁端部を玉縁に仕上げるもので、素地・釉調から白磁椀Ⅰ-1類。

青磁

椀（17）　平底から外方へ大きく開く体部へと移行するもので、見込みならびに畳付部分に目跡が残る。越州窯系青磁椀Ⅰ-5類。

瓦

軒平瓦（18）　偏行唐草文を中区に配し、崩れた鋸歯文があるもので、九州歴史資料館分類の691型式の型崩れと考えられる。凸面は縄タタキ、凹面に布目が観察できる。

石製品

鍋（19）　直立する口縁部の破片で、内外面に成形・調整のための削り痕跡が観察できる。滑石製。

267SF720 暗茶色土（Fig.70）

土師器

坏a（21）　底部外面に回転ヘラ切り痕跡があるもので、他の部位は器面摩耗のため成形・調整痕跡が観察できない。

267SF720 暗褐色土（Fig.70）

青磁

椀（20）　蛇の目高台から外方へ立ち上がるもので、素地特徴から越州窯系青磁椀Ⅰ-1類。

●道路２面

a. 道路状遺構

267SF580 黄灰色砂礫 (Fig.71)

土師器

坏a (1～4)　いずれも底部の破片資料で、外面切り離し処理が観察できるものは、全て回転ヘラ切り。4は外面に判読し難いが墨書が残る。

坏c (5・6)　断面台形の高台を貼付する底部破片。成形ならびに調整は回転ナデによる。

器台 (7)　器表面に成形のための指頭圧痕が顕著に残る円筒形状の器台脚部。

緑釉陶器

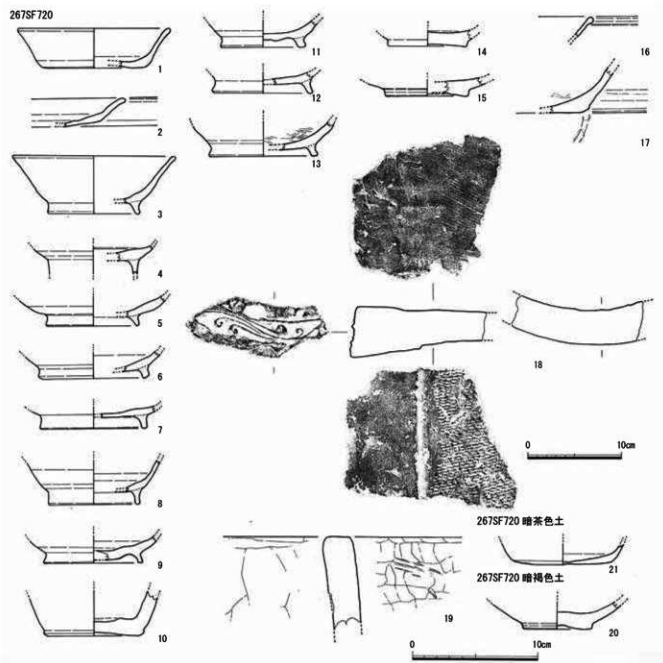


Fig.70　267SF720 出土遺物実測図

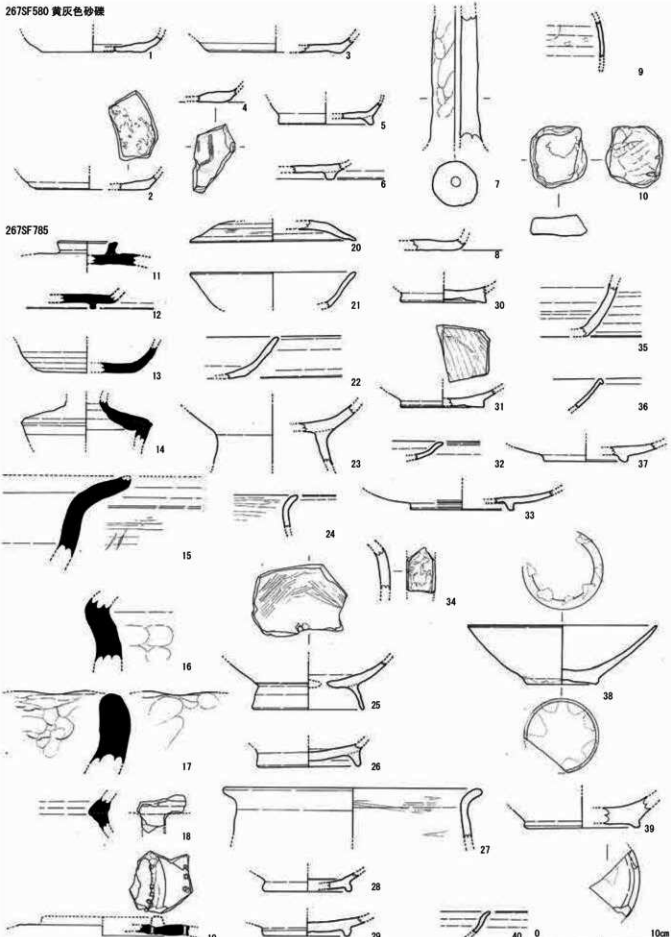


Fig.71　267SF580・785出土遺物実測図

坏×皿（8）　高台を貼付する底部破片。内外面に施釉。

青磁

壺×水注（9）　胴部の破片資料で素地特徴から越州窯系青磁Ⅰ類の範疇に入るものと考えられる。

石製品

用途不明（10）　表裏に加工痕がある石英。用途については明らかにし難い。

267SF785（Fig.71・72）

須恵器

蓋b（11）　環状つまみを貼付するもので、天井部外面には回転ヘラ削り痕跡が観察できる。

蓋（19）　環状つまみを貼付し、天井部に円形の透かしを施文する資料で、全形を明らかにし難い。

坏c（12）　形骸化した高台を貼付した平底の底部破片。

坏a（13）　平底の底部から内湾気味に立ち上がる体部へと移行する。底部外面から体部下位にかけて回転ヘラ削りが観察できる。

壺（14）　肩部を屈曲させる小型の壺で、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

火舎（15・16）　15は外反する口縁部の破片、16は体部下位と考えられる破片資料と考えられる。

用途不明（17）　内外面に指頭圧痕が多数残ることからルツボの可能性がある。

円面硯（18）　脚部の破片資料で、透かしが観察できる。

土師器

蓋3（20）　口縁端部内面を窪ませ受部を形成し、天井部外面は回転ヘラ削り、内外面にミガキaが観察できる。推定口径13.0cmを測る。

坏（21・22）　いずれも外方に大きく開く体部形態を持ち、内外面を回転ナデによって仕上げている。底部が残存する22は回転ヘラ切り。

大椀c（23）　高脚の高台を貼付する大振りの椀と考えられる。見込み部分にミガキcが観察できる。

黒色土器A類

椀（25・26）　25は高脚の高台を貼付し内湾気味に立ち上がる体部形態を有する。金属器模倣の椀と推定できる。26は直立気味の高台を貼付する底部破片。

甕（24・27）　「く」字形の頸部を持つもので、内面にミガキcが観察できる。

瓦質土器

硯（50）　瓦質のもので、四角形の脚台を二脚貼付し、陸面を二分させている。海部分は1箇所。器表面には成形・調整のためのナデ痕跡が観察できる。脚部は削りによって成形。

緑釉陶器

椀（28～31）　28・29は輪高台、30・31は蛇の目高台のもので、31は見込み部分にミガキcが観察できる。

皿（32・33）　32は体部から口縁部へ屈曲しつつ至るもの。33は断面台形の輪高台を持つもので、内外面にミガキ痕跡が観察できる。

水注（34）　水注の把手と考えられる。

灰釉薬陶器

壺（35）　体部下位の破片資料で外面に施釉。

白磁

椀（36）　口縁部外面に小さな玉縁を形成するもので椀Ⅰ-1類。

皿（37）　輪高台をもつ皿Ⅰ-1類。

青磁

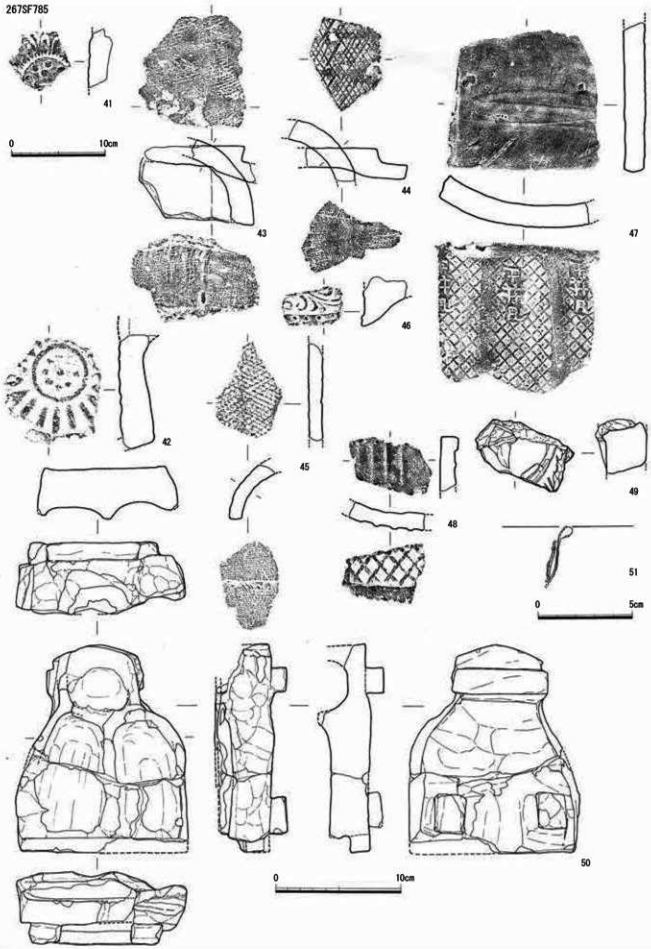


Fig. 72　267SF785 出土遺物実測図

椀（38・39）　いずれも越州窯系青磁で、38は椀Ⅰ-1類、39は椀Ⅰ-2類。

皿（40）　口縁部の破片資料。

瓦

軒丸瓦（41・42）　瓦当の破片資料で、全形を明らかにし難いが、41は九州歴史資料館分類の223aないし223b型式、42は077B型式と考えられる。

丸瓦（43～45）　43は、凸面に縄タタキ、凹面に布目痕が残る。44・45は、凸面に格子タタキ、凹面に布目が観察できる。

軒平瓦（46）　小破片資料で、均等唐草文を中区に、下外縁に朱文を配するものと解せるが、残存率が極めて低いため分類特定ができていない。

平瓦（47・48）　47は、凸面に「平井瓦」と陰刻される格子タタキが、凹面には布目が観察でき、九州歴史資料館分類の901B型式。48は、凸面に格子タタキ、凹面に布目が観察できる。

鬼瓦（49）　鬼瓦の口の部分の破片と考えられ、牙と思しき文様が観察できる。

金属製品

盤（51）　佐波理と呼称されるもので、盤と考えられる。口縁端部を肥厚させる形態を有している。

267SF790（Fig.73）

須恵器

高坏（1）　短脚の高坏の脚部で、脚部は絞り上げによる回転ナデ痕跡が観察できる。

壺（2）　平底の底部から直立気味に立ち上がる体部形態のもので、底部外面から体部下位まで回転ヘラ削りによって仕上げられている。

甕（3）　体部の破片資料で、全形は判然としない。

土師器

坏a（4）　推定口径12.35cmを測り、底部から体部への移行は緩やか。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切り。

坏c（5）　断面長方形の高台を貼付する底部破片で、底部中央に1箇所穿孔がある。

緑釉陶器

皿（6）　蛇の目高台のもので、大きく外方へ開くことから皿と考えられる。見込み部分に重ね焼きと考えられる痕跡が観察できる。

灰釉陶器

皿（7）　口縁端部を外反させる皿で内面から口縁端部外面まで施釉。

瓦

丸瓦（8）　凸面に縄目タタキ、凹面に布目痕が残る。玉縁を有しないと考えられる。

土製品

塼（9）　3面が残存するもので、一面はナデ、残りの2面には削り痕跡が観察できる。

267SF795（Fig.73・74）

須恵器

蓋b（10・11）　10は環状つまみを、11は天井部から口縁部の破片資料で、推定口径から復元された形状から11も環状つまみを有するものと考えられる。天井部外面はいずれもナデによって仕上げられている。

坏c（12・13）　高台を貼付する底部の破片資料で、底部から体部への移行が丸みをもっている。

高坏（14）　全形が判然としない高坏の破片資料。

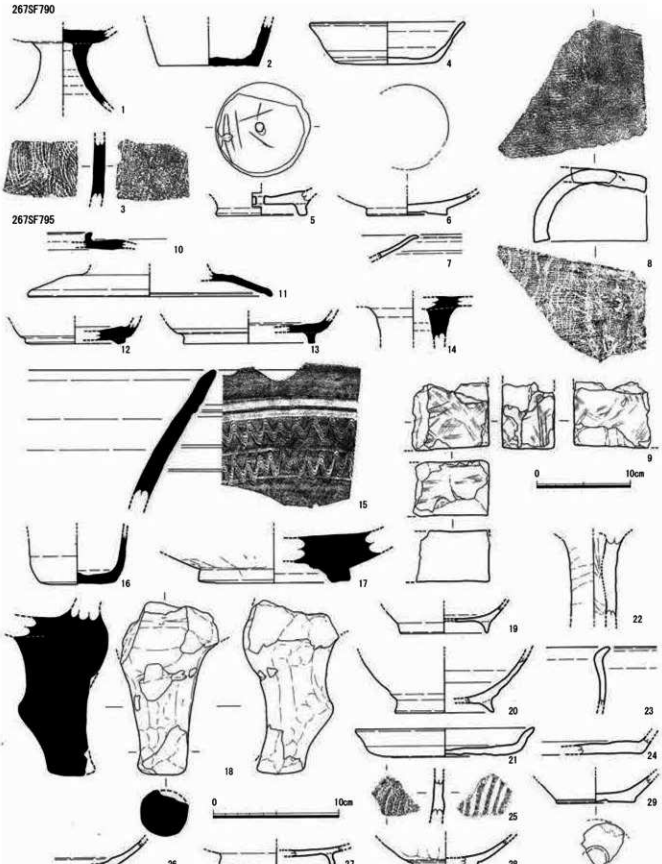


Fig.73　267SF790・795 出土遺物実測図

大甕（15）　外方へ開く口縁部で、外面に４条の圏線を配し、波状文を２条施文している。

壺（16）　平底の底部から直立気味に立ち上がる体部へと移行する。器種については明らかにし難い。

盤（17）　高台を貼付する底部の破片資料で、大振りであることから高台を貼付した盤と考えられる。

火舎（18）　他遺構で出土した獣脚の火舎になるものと考えられ、獣脚を表現するために不定方向のナデによって仕上げられている。

土師器

椀ｃ（19・20）　やや高めの高台を貼付する椀形態で、残存状況が悪く全形を明らかにし難いものの、20は丸い椀を指向していると考えられる。

皿（21・24）　21は、推定口径14.2cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が残る底部から丸みを帯びつつ口縁部へと移行し、外反する口縁部へと至る。内外面ともに回転ナデによって成形・調整され見込み部分に不定方向のナデが観察できる。24は底部外面を回転ヘラ削りしている。

高坏（22）　絞り上げによる回転ナデ調整が観察できる。やや高脚の高坏と考えられる。

甕（23）　「く」字形の頸部を有する甕で、内外面に横ナデ痕跡が観察できる。

製塩土器

煮焚土器（25）　全形を明らかにし難い。外面に平行タタキ痕跡がある。

緑釉陶器

坏（26）　平底と考えられ、外方へ大きく開く体部へと移行する。

椀×皿（27）　やや高い高台を貼付するもので、残存率が低いことから全形を明らかにし難い。見込み部分に墨痕がある。

白磁

椀（28）　畳付幅が狭い蛇の目高台で、椀Ⅰ-2類。

青磁

椀（29）　蛇の目高台を持つもので、越州窯系青磁椀Ⅰ-1b類。

瓦

丸瓦（30）　凸面に細かい格子タタキ、凹面に布目痕がある。

平瓦（31～41）　41のみ縄目タタキが凸面に観察できるが、他の個体は大小はあるものの格子タタキが観察できる。31・32に「平井」もしくは「平」の文字が判読でき、31は九州歴史資料館分類の901B型式、32は同分類で細分類は定かではないが901型式と考えられる。

石製品

風字硯（42）　滑石製の風字硯で、長方形の脚を削り出している。陸部分に横方向の摺り痕跡が観察できる。

砥石（43）　不定形の石製の砥石。

紡錘車（44）　滑石製のもので、器表面を削り出しによって円形に整えている。中央部に一箇所円形の穿孔を施す。

金属製品

用途不明（45）　厚さ1.1cmを測るもので、板状を呈するものである。

b. 溝

267SD505（Fig.75）

須恵器

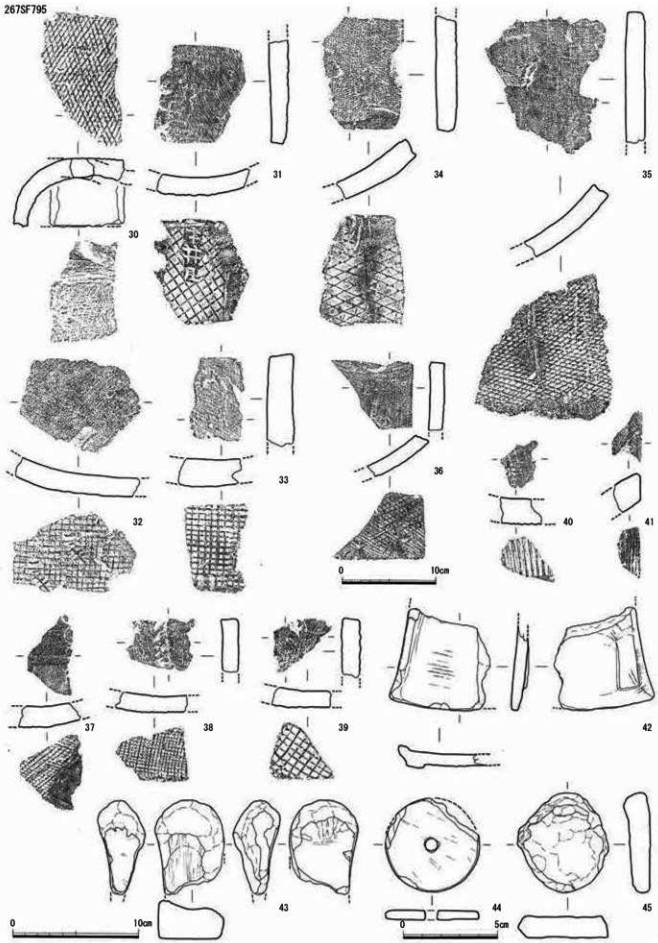


Fig. 74　267SF795 出土遺物実測図

風字硯（1）　海部分を欠損し半分ほどが残存する資料。器表面をナデによって成形し、長方形の脚を貼付している。陸から海にかけて一条の隆起帯を貼付し、硯全体を二分する形状をとる。

土師器

坏a（2～4）　底部平底のもので、口径が明らかな3は11.2cm、4は13.3cmを測る。4のみ底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切り。

椀c（5～9）　やや高い高台が貼付される底部の破片で、外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

黒色土器A類

椀（10・11）　10はやや外反する口縁部の破片資料で内面にミガキcが観察できる。11は高台を貼付する底部の破片。

甕（12）　頸部「く」字形の甕で、内面にミガキcが残る。

青磁

椀（13）　蛇の目高台の椀で、越州窯系青磁椀Ⅱ-1a類。

267SD520（Fig.76）

土師器

丸底坏a（1～3）　口径が明らかな1は推定口径14.0cmを測る。2の内面にミガキb痕跡が観察できるが、他は器面摩耗のため成形・調整技法について明らかにし難い。

小皿a1（4・5）　口径が明らかな4は推定口径9.6cmを測り内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。他は、器面摩耗のため成形・調整技法について明らかにし難い。

甕a（6）　直立気味の体部から頸部「く」字形に屈曲させるもので、体部内面は横方向のハケ、体部外面は縦方向のハケ調整が観察できる。口縁部は内外面ともに横ナデ。

黒色土器B類

椀（7）　推定口径16.0cmを測り、内外面にミガキcが観察できる。

緑釉陶器

皿（8）　円盤状高台で蛇の目高台様の形状をわずかに呈している。器面摩耗のため成形・調整技法について明らかにし難い。

土製品

塼（9）　残存部分がわずかしかなく、擦ったような痕跡が観察できる。

石製品

砥石（10）　4面に使用痕跡がある砥石で砂岩製。

267SD525（Fig.75）

土師器

丸底坏（14）　推定口径15.0cmを測り、口縁部が明橙赤色を呈している。器面摩耗のため成形・調整技法について明らかにし難い。

甕（15）　内面に粗目のハケ調整が、外面には横方向の削り痕跡が観察でき、口縁部を外方へ屈曲させる形態を持つ。法量が定かではないため、甕としたが、器高が低い場合は鍋の可能性も残る。

黒色土器A類

椀c（16）　外方へ張る高台を貼付し見込み部分にミガキcがまたヘラ記号様の線刻が観察できる。

青磁

椀（17）　直立する高台で、見込みならびに高台畳付け部分に目跡が観察できる。高台径が7.1cmを測ることから、初期高麗青磁椀Ⅲ-2類に該当する。

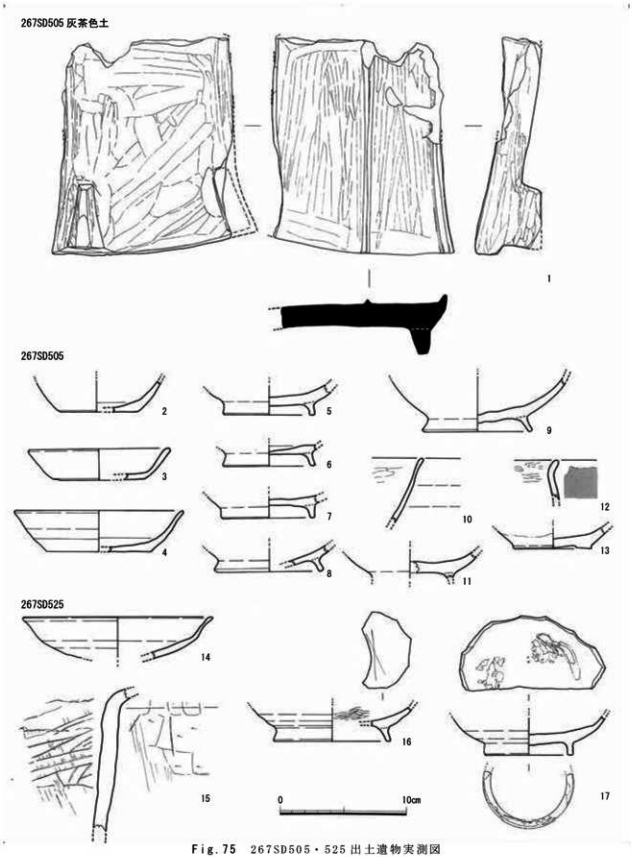


Fig.75　267SD505・525出土遺物実測図

267SD535（Fig.77）

須恵器

椀c（1）　外方に張り出す高めの高台を貼付する椀。体部残存が悪いため、全形について明らかにし難い。

土師器

丸底坏 a（2）　推定口径 14.6cm を測り、口縁端部内面をやや肥厚させる。内面に回転ナデ痕跡が観察できるが、総じて器面摩耗のため成形・調整痕跡が観察できない。

椀 c（3・4）　略四角形の高台を貼付するもので、いずれも器面摩耗のため成形・調整痕跡が観察できない。

小皿 a1（5）　推定口径 10.4cm を測り、底部外面を回転ヘラ切りする。

黒色土器 B 類

椀（6）　腕部下位の破片資料で、内面にミガキ c 痕跡が観察できる。

瓦

平瓦（7）　凸面に「平井」と判読できる陽刻の文字がある格子タタキで、凹面には布目が観察できる。

軒平瓦（8）　瓦当面がわずかに残存するもので、九州歴史資料館分類の 560 型式。

267SD565 茶灰色土（Fig. 77）

須恵器

椀（9）　外観上、円盤状高台のもので、内面は凹ませるように見込部を形づくっている。内外面ともに回転ナデ。

土師器

椀 c ×皿 c（10・11）　外方に張る高台の破片。器面摩耗のため成形・調整痕跡が観察できない。

小皿 a2（12）　口縁端部を上方にわずかにつまみ上げるもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡が観察できない。

267SD565 茶色粘土（Fig. 77）

土師器

椀 c ×皿 c（13・14）　高台を貼付する器種と判断されるが、詳細は不明。

267SD570 黒茶色土（Fig. 77）

須恵器

鉢（31）　口縁部を肥厚させるもので、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。篠窯産と考えられる。

土師器

坏 a（16 ～ 20）　17 は外方に開く口縁部の破片。他は底部外面をヘラ切りするもので、内外面を回転ナデによって仕上げている。

椀 c（21 ～ 25）　高台を貼付するもので、体部下位まで残存する 22 は丸い椀を意識したものと考えられる。

大形椀 c（26）　外方に張り出す高台を貼付する大型の椀で、面摩耗のため成形・調整痕跡が観察できない。

黒色土器 A 類

椀 c（27・28）　27 は、やや外張りの略四角形の高台を貼付し、見込部分にミガキ c が観察できる。28 は、やや高脚の高台を貼付し、27 同様に見込部分にミガキ c 痕跡が観察できる。

黒色土器 B 類

皿 a（29）　平底から内湾気味に体部へと移行すると考えられ、内外面をミガキ c にて仕上げている。

椀 c（30）　断面三角形の高台を貼付し、見込部分にミガキ c が観察できる。

白磁

椀（32）　内面に白堆線が観察できるもの。分類については不明。

青磁

椀（33）　蛇の目高台から直線的に外方へ立ち上がる口縁部形態のもので、畳付に目跡が残る。越州窯系青磁椀Ⅰ-1類。

瓦

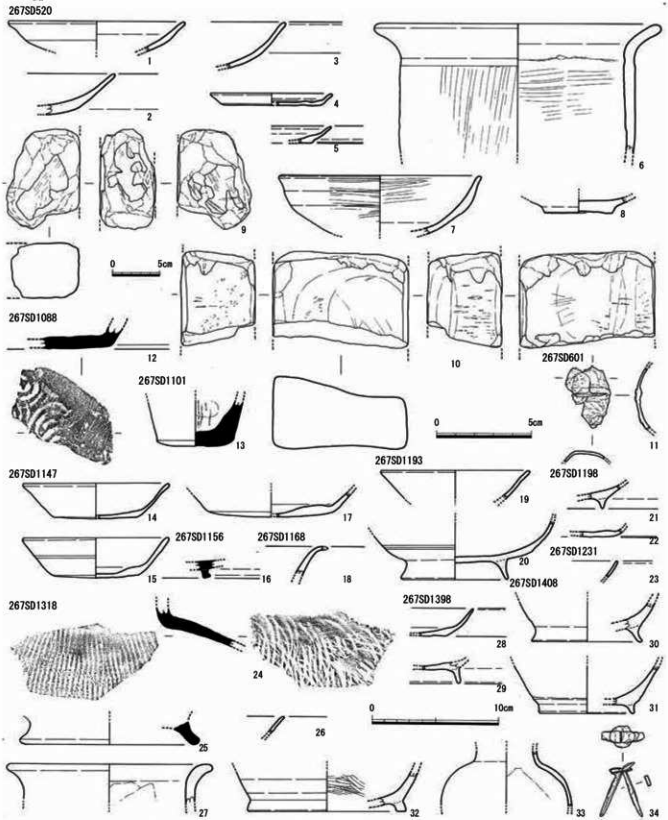


Fig.76　267SD520・601・1088・1101・1147・1156・1168
1193・1198・1231・1318・1398・1408 出土遺物実測図

平瓦（34）　凸面に格子タタキ、凹面に布目が残る。

土製品

塼（35）一面のみ残存する塼。表面にナデ痕跡が観察できる。

土玉（36）　玉状に形づくるもので、貫通する穿孔がある。

石製品

砥石（38）　4面の使用面があるもので、砂岩製。

鍋（39）　石鍋の破片と考えられ、器表面に削り痕跡が観察できる。

碁石（40）　扁平な小円礫で、色調は白色、材質は石英製。

用途不明（41）　把手と考えられる石製品で、一箇所穿孔がある。滑石製。

金属製品

刀子（37）　錆によって全形を明らかにし難いが、断面を見る限り、刃部らしきものが観察できる。

267SD570 暗灰色粘土（Fig.77・78）

土師器

坏a（42～45）　平底のもので、口径が明らかな43は推定口径13.2cm、44は15.0cmを測る。42・43ともに底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。44は、皿の可能性が残るが、底部中央に一箇所穿孔がある。

椀c（46～49）　高低はあるものの高台を貼付し、内外面を回転ナデによって仕上げる。

皿（50・51）　50は、底部をやや外方に押し出し、安定性に欠ける底部から、外方へ大きく開く口縁部へと移行する。底部外面は回転ヘラ削り、他の部位は回転ナデ。51は、破片資料で器種特定には不安がある。面摩耗のため成形・調整痕跡が観察できない。

甕a（52）　やや胴張りし、頸部を「く」字形に屈曲させるもので、体部内面は縦方向のヘラ削り、体部外面は縦方向のハケ、口縁部は横ナデによって仕上げている。頸部外面には指頭圧痕が観察できる。

黒色土器A類

椀c（53・54）　高台を貼付するもので、見込部分にミガキcが観察できる。

黒色土器B類

椀c2（55）　外方に張り出す高台を貼付し、腕部内外面にミガキcによる仕上げが観察できる。

緑釉陶器

皿（56）　大きく開く口縁部で、口縁端部をやや外反させる。内外面に施釉。

青磁

椀（57・58）　57は、蛇の目高台のもので目跡が観察できていないため、越州窯系青磁椀Ⅰ-1類。58は、直線的な体部形態を有する。越州窯系青磁。

陶器

壺（59）　体部の破片で、外面に褐色釉を施釉。中国製陶器。

土製品

塼（60・61）　60は、3面が残る塼の破片資料で、61は2面が残存している。いずれもナデによって成形・調整している。

267SD575 茶灰色土（Fig.78）

土師器

椀c（62）　断面略三角形を呈する高台を貼付するもので、体部が残存していないため全形については明らかにし難い。面摩耗のため成形・調整痕跡が観察できない。

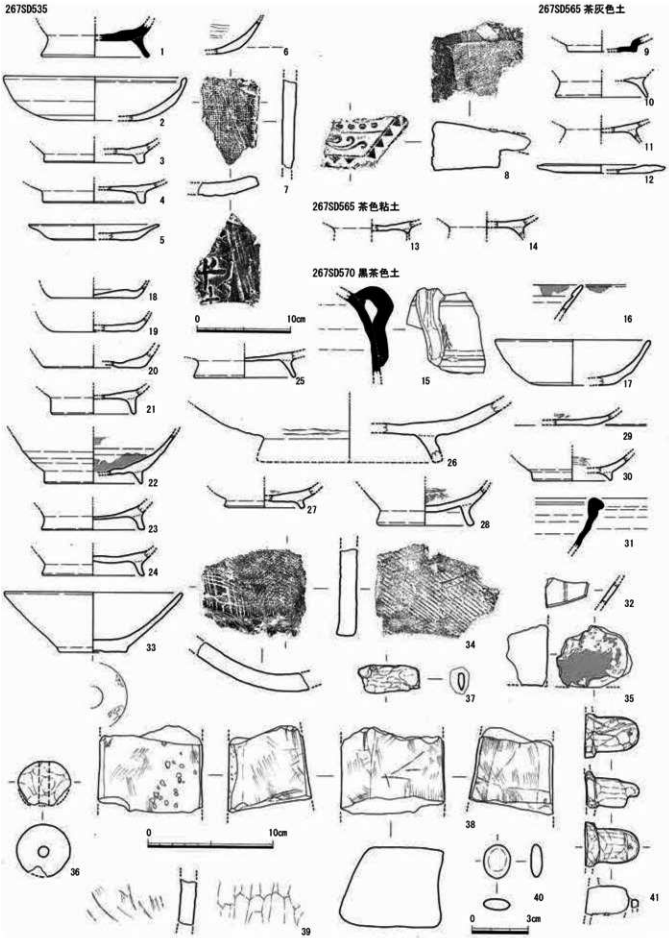


Fig.77　267SD535・565・570出土遺物実測図

小皿 a1 (63)　推定口径 10.2cm を測り、底部外面は回転ヘラ切り。

黒色土器 A 類

椀 c ×皿 c (64)　断面略台形の高台を貼付する底部の破片で、面摩耗のため成形・調整痕跡が観察できない。

石製品

鍋 (65)　やや内湾気味に立ち上がるもの。

碁石 (66)　扁平な小円礫。色調は暗灰色で、材質は泥岩。

267SD590 黒茶色土 (Fig.79)

須恵器

蓋 c (1)　ボタン状のつまみで、回転ナデによって成形・調整を行っている。

坏 (2)　推定口径 20.0cm を測るもので、内外面を回転ナデによって仕上げている。

壺 (3)　二重口縁の壺で、内外面を回転ナデにて仕上げている。

土師器

坏 a (4)　底部外面を回転ヘラ切りするもので、他の部位は回転ナデにて仕上げている。

椀 c (5)　直立気味の高台を貼付する底部破片。内外面は回転ナデ。

大椀 c ×大皿 c (6)　高台を貼付する大振りの器。面摩耗のため成形・調整痕跡が観察できない。

灰釉陶器

椀×皿 (7)　「三日月」状に屈曲させる高台を貼付するもので、内面に施釉。

青磁

椀 (8)　輪高台のもので、見込および畳付に目跡が観察できる。越州窯系青磁椀Ⅰ-2a ゥ類。

瓦

平瓦 (9)　凸面に平井の「井」と考えられる文字がある格子タタキ、凹面には布目がある。九州歴史資料館分類で 901F 型式。

土製品

用途不明 (10)　表面に指頭圧痕が観察できるもので、用途は不明。

石製品

碁石 (11)　白色の扁平な小円礫。色調は白色で、材質は石英製。

丸鞆 (12)　2つで一つの組をなす穿孔が 3 ヶ所あち、黒色を呈する。材質は頁岩製。

267SD590 暗灰色粘土 (Fig.79)

緑釉陶器

椀×皿 (13)　高台を貼付する底部で、破片資料のため器種特定に至っていない。

青磁

椀 (14)　平底から外方へ開く口縁部へ至るものと考えられる。越州窯系青磁椀Ⅰ-5a 類。

石製品

碁石 (15)　白色を呈する小円礫。材質は、石英製。

267SD730 (Fig.79)

土師器

皿 a (16)　底部外面を回転ヘラ切りするもので、推定口径 12.6cm を測り、口縁部外面に墨痕、内面にベンガラ様のものが付着している。

丸椀 a (17)　底部回転ヘラ切りする底部から丸みを帯びつつ体部へと移行するもの。他の部位は回転

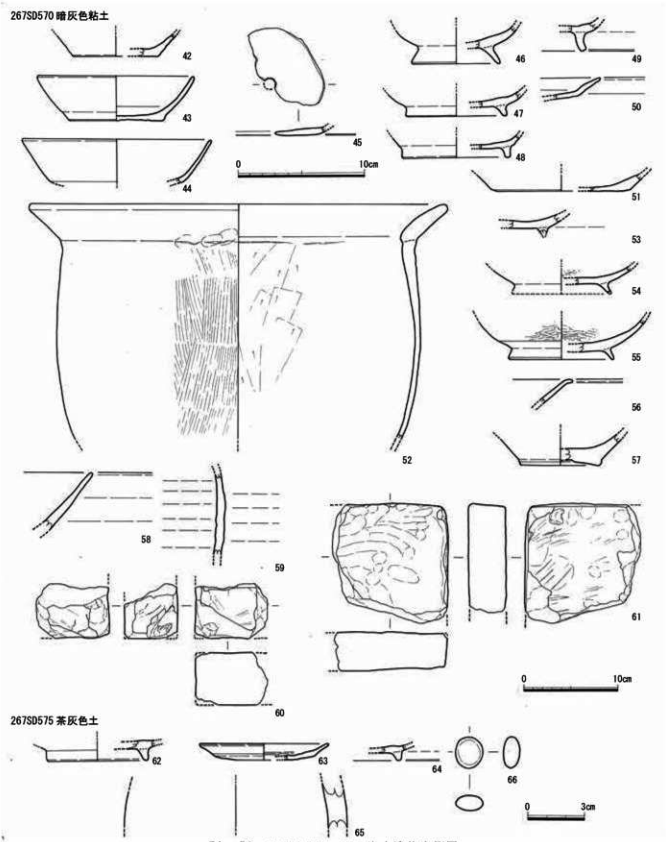


Fig.78　267SD570・575 出土遺物実測図

ナデにて仕上げている。

椀 c (18・19)　高台を貼付する底部の破片で、観察できる部位からは内外面回転ナデにて仕上げている。

鉢 (20)　直線的に外方へ開く口縁部形状を有するもので、内外面を回転ナデにて仕上げている。

黒色土器 A 類

椀 c（21・22）　いずれも高台を貼付するもので、見込ならびに体部内面にミガキ c 痕跡が観察できる。

土製品

羽口（23）　円筒形状のもので表面に縦方向のナデ痕跡が観察できる。

267SD730 灰色粘土（Fig.79）

白磁

椀（24）　蛇の目高台のもので、椀Ⅰ-1 類。

陶器

鉢（25）　口縁端部を肥厚させる中国製陶器。

267SD730 灰褐色粘土（Fig.79）

須恵器

鉢（26）　底部外面を回転糸切り離しする平底のもので、他の部位は回転ナデにて仕上げている。

土師器

坏 a（27・28）　いずれも底部外面を回転ヘラ切りされるもので、他の部位は回転ナデによって仕上げている。

椀 c2（29・30）　29 は推定口径 13.0cm を測り、直立する高台から丸みを帯びた体部へと移行する。30 も同様の形をとるものと考えられる。内外面ともに回転ナデ調整。

緑釉陶器

皿（31）　蛇の目高台の皿で見込に重ね焼きの痕跡がある。内外面に施釉。

267SD735（Fig.80）

土師器

坏 a（1）　平底の底部からやや丸みをもって立ち上がる体部へと移行するものと考えられる。器面摩耗のため成形・調整について明らかにし難い。

267SD740（Fig.80）

土師器

椀 c（2・4）　2 は直立する断面三角形の高台を貼付する底部破片。器面摩耗のため成形・調整について明らかにし難い。4 は、外方に張り出す高台を貼付する底部破片で、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

黒色土器 A 類

椀 c（3）　低めの断面略三角形の高台を貼付する。器面摩耗のため成形・調整について明らかにし難い。

青磁

椀（5）　円盤状高台から内湾気味に体部へ移行するもので、素地・施釉特徴から越州窯系青磁椀Ⅱ-2 類。

267SD750（Fig.80）

土師器

坏 a（6 ～ 8）　6・8 底部外面を回転ヘラ切りする底部破片。全形を明らかにし難い。7 は、直線的に外方へ立ち上がるもので、底部と体部の境目に指頭圧痕が観察できる。

椀 c（9 ～ 13）　高台を貼付する底部の破片で、腕部の形を推定できるほど、残存状況はよくない。

土製品

カマド（14）　竈の脚部分と考えられ、外面に縦方向のハケが観察できる。脚端部は横方向のナデ。

黒色土器 A 類

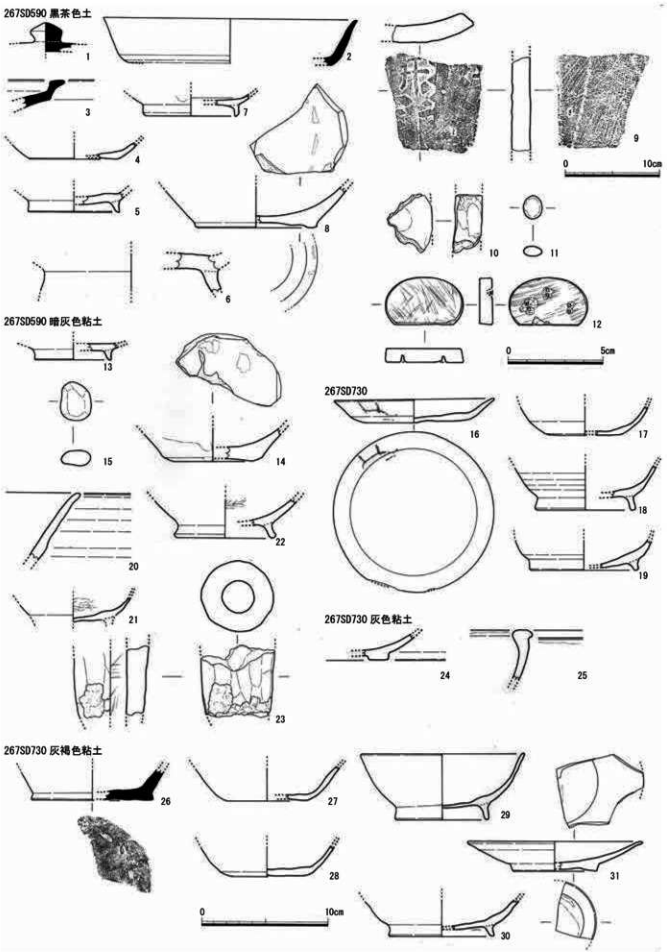


Fig.79 267SD590・730 出土遺物実測図

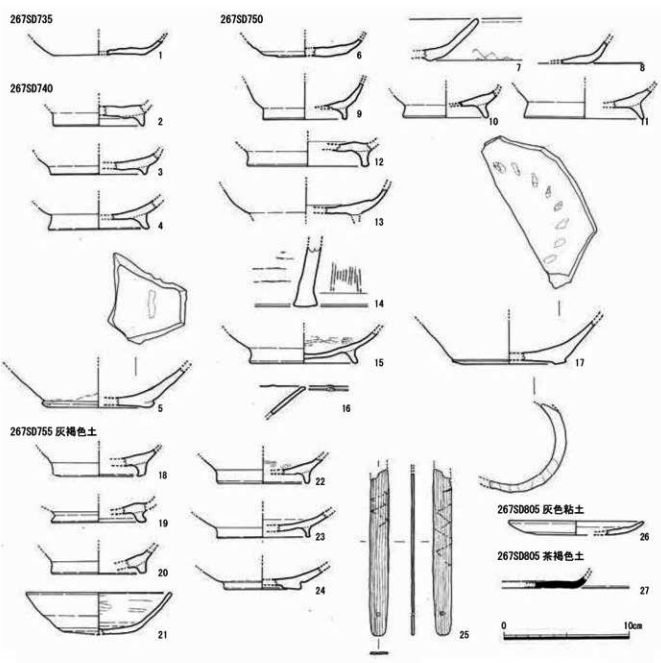


Fig.80　267SD735・740・750・755・805出土遺物実測図

椀c（15）　外方へやや張り出す高台を貼付し、丸みのある体部へと移行する。見込にミガキcが観察できる。

緑釉陶器

椀（16）　口縁端部外面に輪花を形づくるもので、内外面に施釉。

青磁

椀（17）　低めの高台を削り出すもので、越州窯系青磁椀Ⅰ-2aゥ類。

267SD755 灰褐色土（Fig.80）

土師器

椀c（18～20）　高台を貼付する底部。技法が観察できる個体では、内外面ともに回転ナデ。

黒色土器A類

坏a（21）　推定口径11.6cmを測り、内面をミガキcにて仕上げている。底部外面は回転ヘラ切り。

椀ｃ（22・23）　高台を貼付する底部破片で、見込にミガキｃ痕跡が観察できる。

白磁

椀（24）　蛇の目高台のもので、椀Ⅰ-1類。

木製品

用途不明（25）　一端に1箇所穿孔がある板状のもので、鋸歯状の切り目が入れられている。

267SD780（Fig.81）

須恵器

坏ｃ（2）　やや外方に張り出す高台を貼付し、腰部を形成するように凸部を形成し上方へ屈曲するもので、金属器模倣形の椀を考えられる。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

壺（1・3）　1は、やや小ぶりの壺と考えられ、外方へ張り出す高台を貼付し、内外面を回転ナデによって仕上げている。3は、平底から外方へ立ち上がる体部形態を有するもので、外面には平行タタキ、内面には当て具痕と考えられる窪みが観察できる。

土師器

坏ａ（4・5）　口径が明らかな4は、推定口径12.4cmを測り、いずれも底部外面は回転ヘラ切りによって処理されている。内外面を回転ナデ。

椀ｃ１（6～9）　6は推定口径20.2cmを測る、やや大振りの椀で、底部外面は回転ヘラ切り。7・8は器面摩耗のため成形・調整の痕跡を明らかにし難い。9はやや高脚のものと考えられ、高坏の可能性も残る。

甕（10）　頸部を「く」字に形づくるもので、体部は内外面ともハケ調整、口縁部は横方向のナデにて仕上げている。口縁部内面から体部外面にかけてススス状炭化物が付着。

把手（11）　甕や小型の鉢に貼付されている把手と考えられ、ナデによる成形がなされている。

黒色土器Ａ類

椀ｃ1（12・13）　いずれも高台を貼付し、直線的に体部から口縁部へと移行するものと考えられ、12は内面にミガキｃが施される。

黒色土器Ｂ類

椀（14・15）　14は口縁部の破片で、内外面にミガキｃが、15は高台を貼付する底部の破片。

瓦

平瓦（16）　小破片のため丸瓦の可能性も残る。凸面に格子タタキが観察できる。

土製品

棒状土製品（17）　断面方形のもので、表面をナデにて成形・調整している。

267SD805 灰色粘土（Fig.80）

土師器

小皿ａ1（26）　推定口径10.8cmを測るもので、器面摩耗のため成形・調整について明らかにし難い。

267SD805 茶褐色土（Fig.80）

須恵器

皿ａ（27）　底部外面を回転ヘラ切りするもので、直線的に外方へ開く体部へと移行するものと判断できる。

267SD810 暗灰色粘土（Fig.81）

須恵器

蓋３（18）　断面略三角形の口縁部を有するもので、観察できる範囲では、内外面ともに回転ナデにて

仕上げている。

坏（19 ～ 23）　19・20 は直線的に外方へ開く口縁部で、内外面回転ナデ。21 ～ 23 は高台を貼付する底部の小破片。

皿 a（24）　底部外面を回転ヘラ切りするもので、他の部位は内外面ともに回転ナデ。

土師器

蓋（25）　小破片ならびに器面摩耗のため詳細を明らかにし難い。

坏（26 ～ 28）　全形が明らかな 26 は、口径 15.5cm を測り、底部外面には切り離しのための回転ヘラ切りが、体部内外面には、回転ナデの後、ミガキ a が観察できる。見込部分に格子状の線刻が残る。

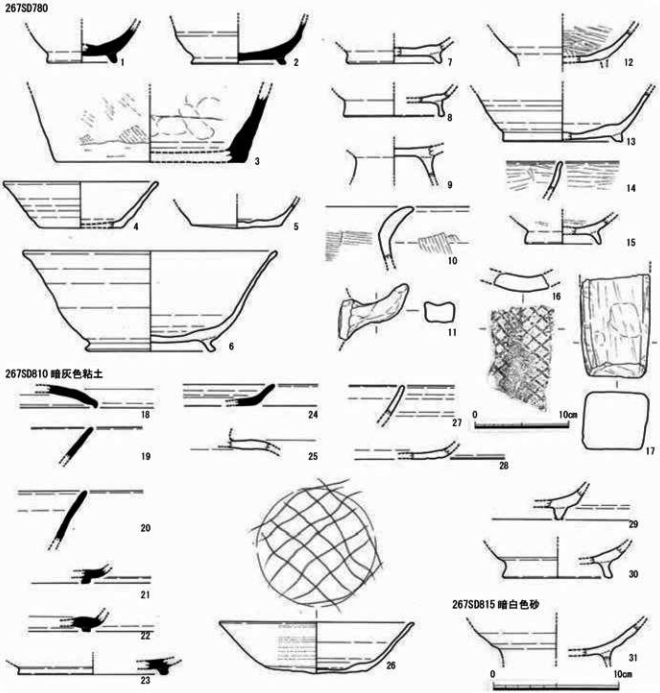


Fig. 81　267SD780・810・815 出土遺物実測図

坏 c（29・30）　高台を貼付する底部破片。器面摩耗のため成形・調整について明らかにし難い。

267SD815 暗白色砂（Fig.81）

土師器

椀 c2（31）　高台を貼付し丸みをもって立ち上がる体部へと移行するものと考えられる。器面摩耗のため成形・調整について明らかにし難い。

267SD1088（Fig.76）

須恵器

壺（12）　底部外面に同心円当て具痕跡が残るもので、わずかな破片資料ではあるが壺と推定した。

267SD1101（Fig.76）

須恵器

壺（13）　平底の底部から直立気味に立ち上がる体部形態を持つ小型の壺と推定できる。内面には縦方向のハケ様の痕跡が観察できる。

267SD1147（Fig.76）

土師器

坏 a（14・15）　推定口径 11.2cm、11.6cm を測り、底部外面の処理はいずれも回転ヘラ切り。底部から体部への移行は緩やかな形状を示す。

267SD1156（Fig.76）

須恵器

坏 c × 皿 c（16）　形が定まらない形骸化した高台を貼付する底部の破片資料で、残存状況が悪いため器種特定に至っていない。

土師器

坏 a（17）　底部外面の処理が回転ヘラ切りの底部破片。

267SD1168（Fig.76）

青磁

椀（18）　外反する口縁部のもので越州窯系青磁椀Ⅱ類。

267SD1193（Fig.76）

土師器

坏（19）　直線的に外方へ開く口縁部形態を有し、器面摩耗のため成形・調整技法について明らかにし難い。

椀 c2（20）　高めの高台を貼付し、丸みを帯びた椀へと移行する。器面摩耗のため成形・調整技法について明らかにし難い。

267SD1198（Fig.76）

土師器

椀 c（21）　断面三角形の高台を貼付するもので、器面摩耗のため成形・調整技法について明らかにし難い。

小皿 a（22）　平底で底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。他の部位は器面摩耗のため成形・調整技法について明らかにし難い。

267SD1231（Fig.76）

土師器

供膳具（23）　小破片のため器種特定ならびに器面摩耗のため成形・調整技法について明らかにし難い。

267SD1318 (Fig.76)

須恵器

甕 (24)　体部上位から頸部の破片で、外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が観察できる。

壺 (25)　外方へ開く高台の破片で、法量から壺の高台ではないかと推定される。

土師器

供膳具 (26)　小破片のため器種特定ならびに器面摩耗のため成形・調整技法について明らかにし難い。

甕 (27)　「く」字形の頸部から外反する口縁部の破片資料で、胎土に角閃石を多く含む。

267SD1398 (Fig.76)

土師器

坏a (28)　平底から内湾気味に立ち上がる体部、そして口縁部へ移行するもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

黒色土器A類

椀c (29)　やや器高の高い高台から底部の破片。器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

267SD1408 (Fig.76)

土師器

椀c (30)　外方に張り出す高台で、内湾気味に上方へ体部が立ち上がるものと考えられる。内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

坏c (31)　低い高台を貼付し直線的に外方へ立ち上がる体部へと移行する。内外面に回転ナデ、内面にミガキaの痕跡が観察できる。

黒色土器A類

坏c (32)　外方に張り出す断面四角形の高台を貼付し高台脇を回転ヘラ削り、内面にミガキcが観察できる。

白磁

水注 (33)　丸みを帯びた体部からすぼまりつつ頸部へ至る形状を有し、内外面を施釉し、内面には釉垂れが観察できる。

金属製品

用途不明 (34)　飾り金具、もしくは留め金具と考えられる銅製品。

c. その他の遺構

267SX745 灰白色土 (fig.82)

土師器

椀c (1)　器高がやや高い高台を貼付する底部の破片資料で、器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

黒色土器A類

椀c (2)　器高がやや高い高台を貼付する底部の破片資料で、器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

緑釉陶器

皿 (3)　低い高台を貼付する底部の破片資料。内外面に施釉。

267SX760 (fig.82)

土師器

椀 c × 皿 c (4)　やや大振りの高台を貼付する底部破片で、残存率が低いため器種特定に至らない。器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

青磁

椀 (5)　平底の高台から外方へ立ち上がる体部へと移行するもので、越州窯系青磁椀Ⅰ-5類。

267SX765 (fig. 83 ～ 86)

須恵器

蓋 3 (1)　略三角形の口縁部をもつ蓋で、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

蓋 c (2)　扁平つまみを貼付するもので、天井部外面に回転ヘラ削り痕跡が観察できる。

蓋 b (3・4)　環状のつまみを貼付するもので、天井部外面を回転ヘラ削りし、他の部位は回転ナデによって仕上げている。

坏 c (5)　やや高脚の高台を貼付し、丸みをもつ体部へと移行する内外面を回転ナデによって仕上げている。

甕 (6・7・9)　口縁端部を面取りによって仕上げるもので、体部外面には格子タタキ、内面には同心円当て具痕跡が観察できる。

小壺 (8)　頸部の断面「く」の字形に絞り上げる小壺。内外面は回転ナデによって仕上げている。

壺 (11 ～ 15)　11は高台を貼付する壺と推定でき、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。12 ～ 15までは、平底の底部から上方へ立ち上がる体部形態へと移行するもので、12は内外面ともに回転ナデ、13は底部内面に同心円当て具痕が、14は体部外面に平行タタキ、15は外面が擬格子タタキ、内面に同心円当て具痕跡が観察できる。

横瓶 (10)　細頸の頸部から外方へ大きく開く口縁部へと移行する。体部の一部と頸部の破片資料であることから全形について明らかにし難い。

火舎 (16)　平底の底部から直立気味に立ち上がる体部へと移行し、口縁部は外方へ大きく開く。内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

硯 (17)　陸部を二分する風字硯で、断面四角形の脚部を貼付する。

用途不明 (18)　器表面に成形のためのナデ痕跡が観察でき、小型の陶枕の様な形態を持つ。

土師器

皿 a (19)　平底の底部から外方へ大きく開く口縁部へと移行するもので、内外面ともに回転ナデ。

坏 (20)　底部から緩やかに体部へと移行するもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

坏 a (21 ～ 28)　21・22は、平底から内湾気味に立ち上がる体部へと移行するもので、形骸化した坏 d の可能性がある。他の個体は全形を明らかにし難く、底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切り。

坏 c (35)　断面四角形の高台を貼付する大振りの坏で、内外面に回転ナデ痕跡をとどめる。

椀 c (29 ～ 32)　高台の高低はあるものの、いずれも高台を貼付する底部破片。内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

高坏 (33)　高坏の脚部と推定できるが、短脚であることから別の器種の可能性も残る。内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

鉢 (34)　高脚の高台を有するもので、大型の鉢と考えられる。内外面に回転ナデ痕跡が残る。

供膳具 (36)　扁平な器体に高台様の貼付材が想定できるもので、器台的な用途が推定できる。器表面が観察できる部位は回転ナデによって仕上げられている。

黒色土器 A 類

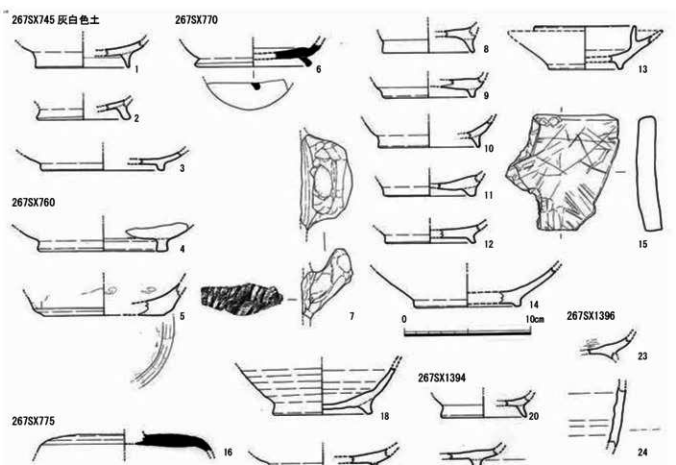


Fig.82　267SX745・760・770・775・1394・1396 出土遺物実測図

椀（37）　丸みを帯びた体部形態をもつもので、内面にミガキｃが観察できる。

椀ｃ（38 ～ 40）　低い高台を貼付する 38・39 と、高脚の高台を貼付する 40 がある。見込み部分にミガキｃ痕跡が残る。

甕（41）　胴張りのない体部から口縁部を外反させるもので、内面にはミガキｃ、口縁部外面にはスス状炭化物が付着している。

鉢（42）　大型の高台を貼付する大振りの鉢で、見込み部分にミガキｃ痕跡が観察できる。

黒色土器Ｂ類

椀（43）　やや口縁部を外反させるもので、内外面にミガキｃが残る。

皿ｃ（44）　高台を貼付したものと判断される皿形の土器で、内外面にミガキｃ痕跡が観察できる。

須恵質土器

椀×鉢（45）　円盤状高台風の底部から外方へ大きく開く体部へと移行する。底部外面には回転ヘラ切り痕跡が、また墨書が観察できる。

甕（46）　平底の底部から外方へ開く体部へと移行する。内面には粘土紐痕跡と当て具痕が観察できる。

盤（47）　大振りの器種で盤と推定したが、他の器種の可能性もある。内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

緑釉陶器

椀（48 ～ 53）　48・49 は器高から椀の破片資料、50 ～ 52 は輪高台、53 は蛇の目高台を形づくる。

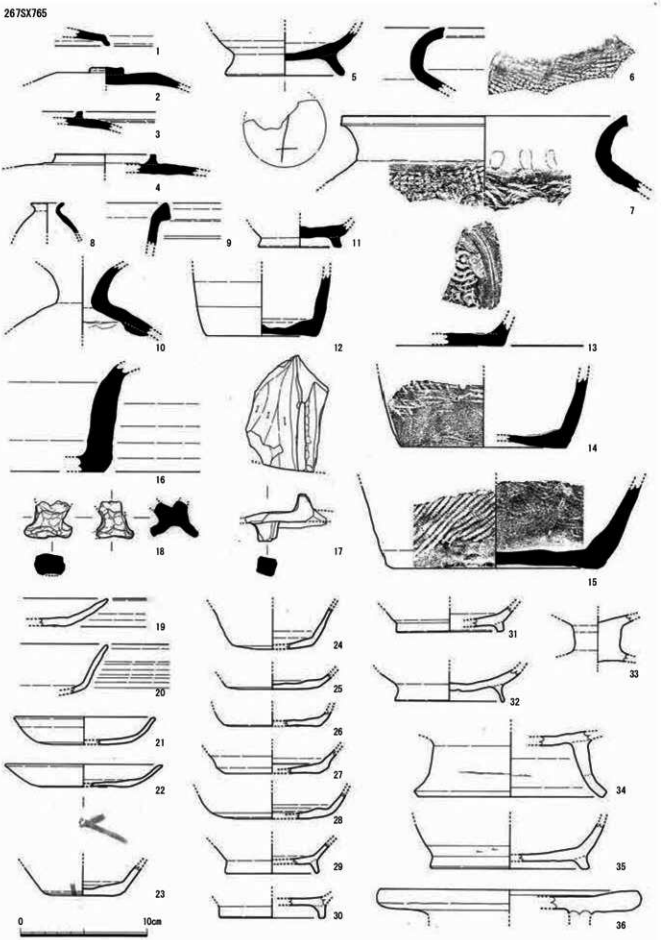


Fig.83　267SX765出土遺物実測図（1）

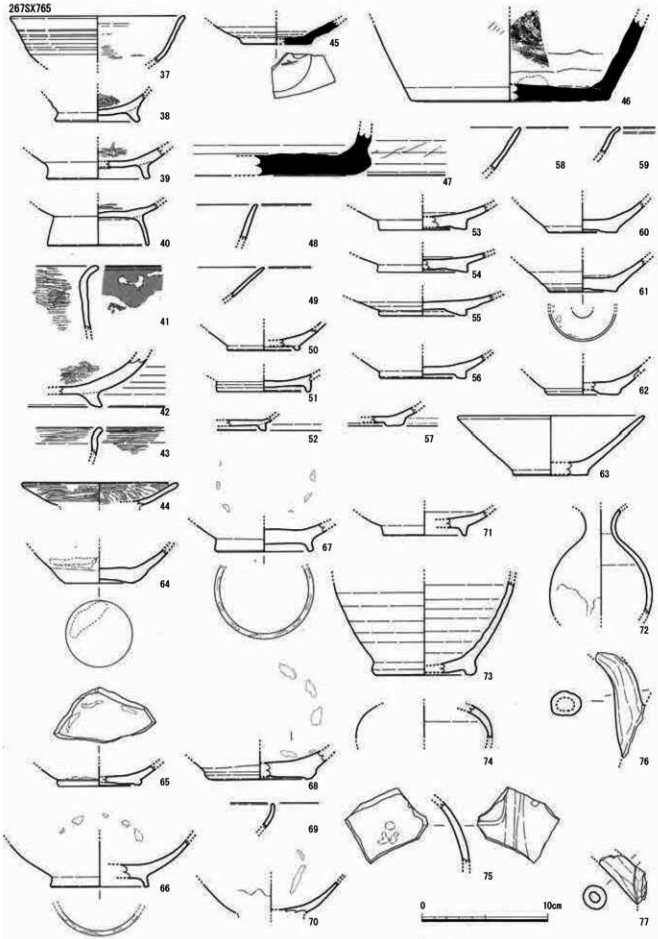


Fig. 84　267SX765 出土遺物実測図（2）

皿（54・55）　体部の開き具合から皿と推定した。54は丁寧な蛇の目高台、55はやや形骸化した蛇の目高台を形づくっている。

灰釉陶器

壺（72）　丸みのある体部からすぼまりながら頸部へ移行し、外方へ開く口縁部へと再度開く瓶的な形状を有する。体部外面中位まで灰釉が掛けられている。

白磁

椀（56・57）　56は輪高台、57は蛇の目高台をもつ椀で、いずれもⅠ類。

青磁

椀（58～63・65～71）　70以外は全て越州窯系青磁Ⅰ類で、70のみ越州窯系青磁Ⅱ類。60～63はⅠ-1類、65～67は輪高台のⅠ-2類、68はⅠ-2aゥ類、69はⅠ-3類、70はⅡ類。

坏（64）　平底から外方へ大きく開く体部へ移行するもので、底部外面は回転ヘラ削りで仕上げている。内面および体部外面下位に施釉。

皿（71）　輪高台の皿で、体部が大きく開くことから皿と推定した。畳付部分の釉薬を削り取る以外は全面施釉。越州窯系青磁Ⅰ類

壺（73・74）　高台を貼付する壺で畳付部分の釉薬を削り取る以外は、外面は全面施釉。内面は釉垂れが観察でき一部露胎の箇所もある。

水注（75～77）　75は、把手がわずかに残る体部の破片資料、76・77は注ぎ口部分の破片。いずれも越州窯系青磁Ⅰ類系。

陶器

壺（78・79・82）　78・79は、素地特徴が中国陶器B群のもの。82は縦方向の隆起帯を貼付する。

水注（80）　外面に3条の凹線がある把手の破片資料。

盤（81）　口縁部を内外に肥厚させるもので、盤Ⅱ類。

瓦

軒丸瓦（83）　中房に1+5の朱文、複弁で外縁にも朱文を配するもので、九州歴史資料館分類の170Ba形式に該当するものと考えられる。

軒平瓦（84）　偏行唐草文で上縁に朱文、下から側縁に鋸歯文を配するもので、九州歴史資料館分類の560Ba型式と考えられる。

平瓦（85・86）　両者とも平瓦で、凸面に格子タタキ、凹面に布目が観察できる、85は凸面にヘラ描きの格子が観察でき、86は「国」様の文字が確認でき九州歴史資料館分類の907型式に該当するものと考えられる。

土製品

塼（87～90）　いずれも全形を明らかにできない破片資料で、器表面をナデにて仕上げている。

木製品

用途不明（91～93）　いずれも破材で、用途を明らかにし難いが、表面を削りによって仕上げている。

金属製品

銭貨（94）　銅製で、一文字すり減っているが「神功開寶」と考えられる。

鏡（95）　隅丸方形を呈する「湖州鏡」の破片と推定され、鏡面および背面に擦痕が残る。

釘（96・97）　96は、全長7.9cm。97は、使用したと推定できる折り曲げられたもので、両者とも鉄製の釘。

石製品

巡方（98・99）　98は黒色で頁岩製、99は灰色で蛇紋岩製。

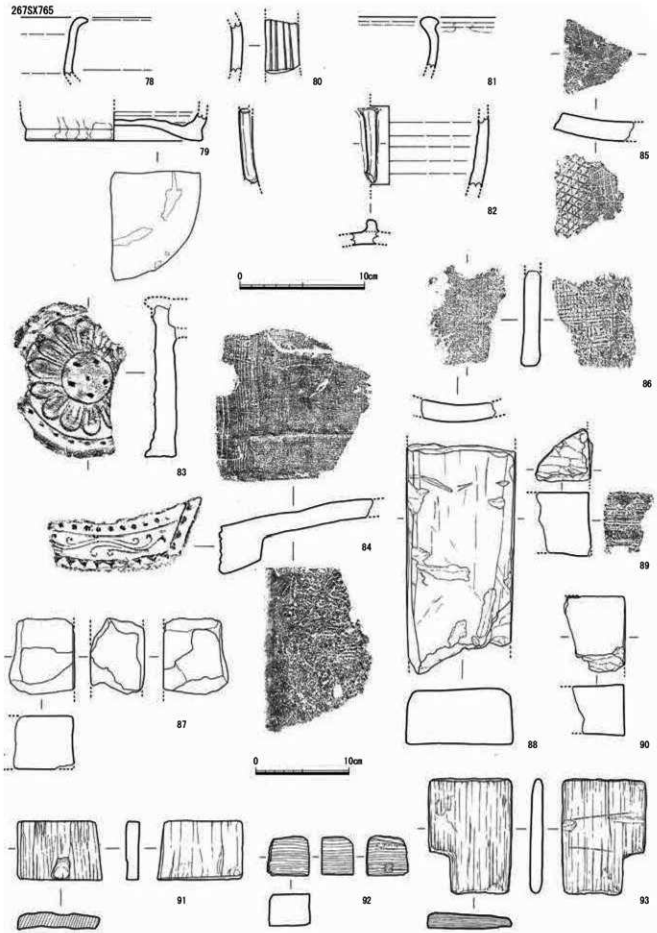


Fig. 85　267SX765 出土遺物実測図（3）

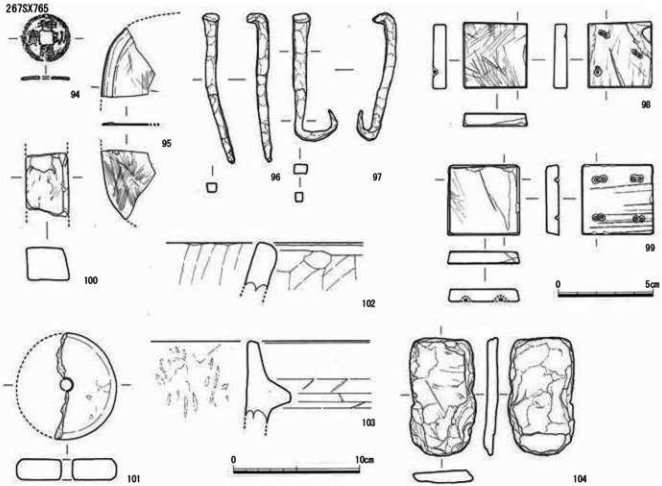


Fig.86　267SX765出土遺物実測図（4）

砥石（100）　長方形のもので、4面に使用痕が観察できる。

紡錘車（101）　円形に成形し、中央部を穿孔したもので、半分が欠損している。

鍋（102・103）　両者とも滑石製の石鍋。102については、破片資料のため傾きを明らかにし難い。103は、鍔が巡る石鍋B群。内外面に成形のための削りが観察できる。

石斧（104）　打製のものと考えられ、刃部様の尖りが観察できる。緑色片岩製。

267SX770（fig.82）

須恵器

坏c（6）　「ハ」の字形に開く高台を貼付し、丸みをもって底部から立ち上がる体部へと移行する。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

把手付甕（7）　把手ならびに貼付された器体が僅かに残り、体部内面と考えられる破片に同心円タタキ痕跡が観察できることから甕の可能性が高い。把手部分はナデによる成形・調整痕跡が観察できる。

土師器

椀c（8～11）　高めの高台を貼付する8・10と低い高台を貼付する9・11がある。器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

緑釉陶器

椀c×皿c（12）　断面略台形の高台を貼付し、内外面に施釉。

青磁

托（13）　口縁部が欠損するものの、おおむね全形が推定できる。畳付部分の釉は削りとられており、内外面を施釉。越州窯系青磁Ⅰ類系の托と考えられる。

椀（14）　断面四角形の輪高台をもつ椀で、越州窯系青磁椀Ⅰ-2a類。

石製品

鍋（15）　内外面に成形のための削り痕跡が観察できるもので、把手がつく石鍋A群と推定できる（森田、1983）。

267SX775（fig.82）

須恵器

壺蓋（16）　天井部から緩やかに口縁部へと移行する破片資料で、天井部外面に回転ヘラ削り痕跡が観察できる。口縁部への移行具合から壺蓋ではないかと推定した。

土師器

椀（17）　直線的に外方へ開く口縁部の資料。内外面を回転ナデによって仕上げている。

椀c（18）　外方へ張り出す高台を貼付し、やや丸みを帯びつつ外方へ立ち上がる体部へと移行する。内外面を回転ナデにて仕上げている。

緑釉陶器

椀（19）　高台がわずかに残存する底部破片。内外面に施釉。

267SX1394（fig.82）

土師器

椀c（20・21）　やや高めの高台を貼付する底部破片で、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

青磁

椀（22）　蛇の目高台をとるものと考えられ、越州窯系青磁椀Ⅰ-1a類。

267SX1396（fig.82）

黒色土器A類

椀c（23）　高台を欠する椀で、見込み部分にミガキcが観察できる。

陶器

壺（24）　直立気味に立ち上がる体部破片で、内面に回転ナデ痕跡が強く残る。外面には施釉。

青磁

椀（25）　平底から輪高台を削り出すもので、見込みに目跡が観察できる。越州窯系青磁椀Ⅰ-2aゥ類。

●道路３面

a. 道路状遺構

267SF585 灰色砂（Fig.87）

須恵器

坏c（1）　断面略台形の高台を貼付し、平底の底部からやや外方へ開き気味に立ち上がる体部へと至る。内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

椀（2）　円盤状の底部から外方へ大きく開く体部へと立ち上がるもので、内外面とも回転ナデによって仕上げられている。底部外面には回転糸切り様の痕跡が観察できる。

火舎（3）　本調査区内での他の事例から火舎に貼付される獣脚と考えられ、ナデによる成形・調整が行われている。

鉢（13）　口縁部を内外に肥厚させるもので、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。籠座の須恵器と考えられる。

土師器

坏 a (4)　平底の底部から外方へ開く体部へと続くもので、外面は器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明だが、内面は回転ナデ痕跡が観察できる。

椀 c1 (9)　やや外方に張り出す断面長方形の高台を貼付し、平底から直線的に外方へ立ち上がる体部へと移行する。

椀 c2 (5)　断面略三角形の高台を貼付し、丸みを帯びて立ち上がる体部へと移行する。器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

椀 c (6 ～ 8)　断面略台形や三角形の高台を貼付するもので、底部のみの破片のため椀形状を推定できない。器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

土製品

錘 (10)　略円筒形を呈するもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。一部欠損しているが、重さは 17.6g を量る。

黒色土器 A 類

椀 c (11・12)　11 は、型崩れした低い高台を貼付し、外面には回転ナデ痕跡が、見込み部分にはミガキ c 痕跡が観察できる。12 は、高台および底部の破片資料のため詳細を明らかにし難い。

緑釉陶器

椀×皿 (14)　高台および底部の破片資料で、見込みおよび高台脇を全面、さらには底部外面に一部施釉されている。

灰釉陶器

椀 (15・16)　15 は「三日月」状の高台を貼付し、残存する体部内外面に施釉している。16 は、略正方形の高台を貼付し、施釉状況は 15 と同じ。

青磁

坏 (17)　やや上げ底の底部から外方へ開くように立ち上がるもので、素地、施釉特徴から越州窯系青磁坏Ⅱ類。

椀 (18 ～ 22)　18・19 は蛇の目高台の椀で、両者とも畳付、見込みに目跡が残ることから越州窯系青磁椀Ⅰ -1 b 類、20・22 は細く低い輪高台で越州窯系青磁椀Ⅰ -2a 類。21 は平底で底部外面に回転糸切り様の痕跡が観察できる。素地・施釉特徴から越州窯系青磁椀Ⅱ -2 類。

瓦

軒平瓦 (23)　内区に唐草、下外区に朱文を配する軒平瓦。

平瓦 (24・25)　24 は凸面に文字様の痕跡が観察できるが詳細を明らかにし難い。25 は凸面にやや大きめの格子タタキ、凹面に布目が残る。

石製品

砥石 (26・27)　26 は表裏二面に使用痕跡が観察でき、27 は火きりなのか穿孔様の痕跡が多数残る。26 は砂岩製、27 は砂岩製。

碁石 (28・29)　小円礫で両者とも白色。材質は石英。

用途不明 (30)　表裏に削り痕跡が残るもので、材質が滑石であることを考えると石鍋の再加工品と考えられる。

用途不明 (31)　凝灰岩の小円礫。打痕様の痕跡が見られるが用途不明。

267SF705 (Fig.88)

須恵器

甕 (1・2)　1 は、外方へ開き口縁端部を直立に立ち上げるような面取りを行うもので、内外面に回転

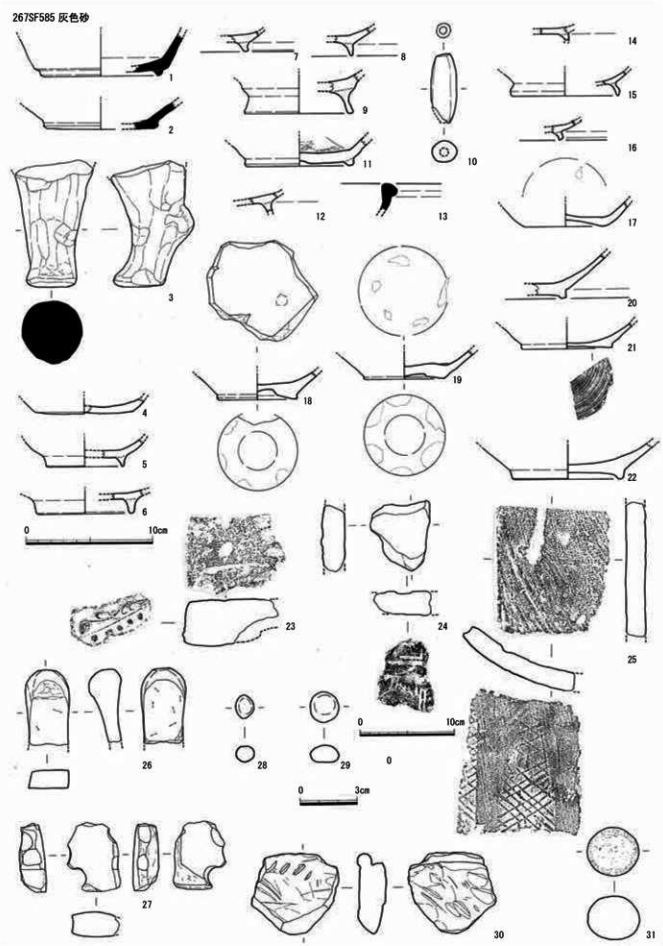


Fig.87　267SF585 出土遺物実測図

ナデ痕跡が観察できる。2は、体部の破片で、外面に擬格子タタキ、内面に同心円当て具痕が観察できる。

硯（3）　風字硯と考えられる破片で、陸部分が残存し擦痕が残っている。裏面には成形のための削り痕が残る。

土師器

坏a（4～8）　全形が明らかな7は推定口径13.0cmを測り、底部外面は回転ヘラ切り。他の個体は平底の底部破片で、いずれも底部外面は回転ヘラ切り。

椀c（9～11）　外方へ張り出す高台を貼付するもので、外方へ開く体部へと移行する。

甕×鍋（12）　外反する口縁部から、上方へわずかに摘まみ上げる口縁端部へと至るもので、内面にハケ調整痕跡が観察できる。

黒色土器A類

椀c（13・14）　13は、断面略台形の高台を貼付するもので、見込み部分にミガキ様の痕跡が観察できる。14は高台を欠損するものの見込み部分にミガキcが観察できる。

緑釉陶器

椀×皿（15）　蛇の目高台で体部形状を明らかにし難い。畳付部分は回転ヘラ削り。

壺（16）　胴部の破片資料で、外面に黄緑色の釉薬がかかっている。

青磁

椀（17・18）　17は、蛇の目高台の椀で素地・施釉特徴から越州窯系青磁椀Ⅰ-1類。18は、平底から外方へ大きく開く体部へと移行するもので、底部外面ならびに見込に目跡が残る。越州窯系青磁椀Ⅰ-5類。

水注（19・20）　19は、袋状の口縁部を有し、把手を貼付する水注と考えられるもので、口縁端部に目跡が観察できる。越州窯系青磁Ⅰ類系の素地。20は平底の底部で、素地・施釉特徴から長沙窯系青磁。

石製品

鍋（21）　内外に成形のための削り痕跡を有する滑石製の石鍋の底部。

碁石（22）　碁石と考えられる小円礫。色調は白色、材質は石英。

267SF705 明茶色砂（Fig.89）

青磁

椀（23）　低めの輪高台のもので、内外面に施釉。越州窯系青磁椀Ⅰ-2類。

267SF705 灰白色砂（Fig.89）

土師器

椀c（24）　外方へ大きく張り出す高台を貼付するもので、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

267SF705 黒色砂（Fig.89）

土師器

坏a（25）　平底の底部から大きく外方へ開く口縁部へと至る。底部外面は回転ヘラ切り。

椀c（26）　全形を明らかにし難い高台の破片。

青磁

椀（27）　低い輪高台を削り出すもので、素地・施釉特徴から越州窯系青磁椀Ⅰ-2aゥ類。

267SF705 白色砂（Fig.89）

須恵器

甕（28）　平底の底部から外方へ開く体部へと移行する。外面に平行タタキ痕跡が観察できる。

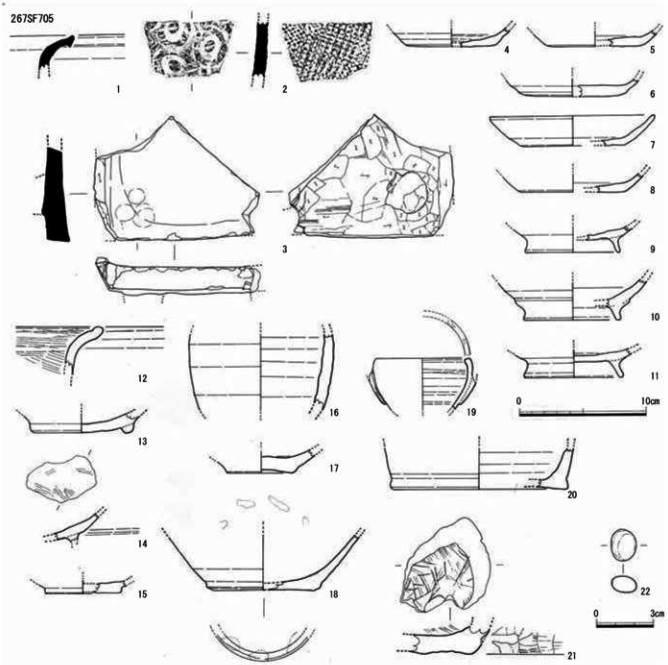


Fig.88　267SF705 出土遺物実測図（1）

土師器

坏 a（29・30）　平底の底部から外方へ大きく開く体部へと移行する。30 は、底部外面は回転ヘラ切り。

椀 c（31）　断面略台形の高台を貼付し、丸みを帯びつつ体部へ移行するものと推定できるが、残存率が悪いため明らかにし難い。

緑釉陶器

皿×椀（32）　断面台形の高台を貼付するもので、底部外面に回転ヘラ削り、見込み部分は施釉を行っている。

267SF705 茶灰色砂（Fig.89）

黒色土器

椀 c（33・34）　33 は外方に大きく張り出す高台を貼付するもので、直線的に外方へ大きく開く体部へと移行する。見込み部分にミガキ c が観察できる。34 は、高台が欠損するもので、体部内外面にミガキ

c様の痕跡が観察できる。

緑釉陶器

椀×皿（35）　全形を明らかにし難い高台の破片。

267SF705 茶褐色砂（Fig.89）

須恵器

鉢（36）　外方へ開く体部から丸く収める口縁端部へと移行する。内面には漆様のものが付着している。内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

土師器

坏a（37）　口径11.5cmを測り、器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

椀c（38～41）　やや高めの高台を貼付する破片資料で、41は見込み部分にミガキc痕跡が観察できる。

皿a（42）　回転ヘラ切りする平底から外方へ大きく開く口縁部へと至る。器面摩耗のため成形・調整痕跡は不明。

黒色土器A類

椀c（43～46）　全形が明らかな45は、断面台形の高台を貼付する底部から大きく外方へ直線的に開く体部形態を有するもので、椀部内面にミガキcが施されている。他の部位は回転ナデ。他の個体についても、見込み部分にミガキcが観察できる。

青磁

坏（49）　平底の底部から外方へ大きく開く体部へと立ち上がるもので、素地・施釉特徴から越州窯系青磁坏Ⅰ類と考えられる。

瓦

丸瓦（47）　凹面に布目痕があり、凸面に墨書とみられる痕跡が観察できる。

平瓦（48）　小破片のため全形を明らかにし難く、丸瓦の可能性も残る。凸面と思しき部位に縄目タタキが観察できる。

267SF710（Fig.90）

土師器

丸底坏a（1）　底部押し出しで、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。他の部位は回転ナデによって仕上げられている。

椀c（2～5）　高台を貼付する底部破片で、全形を明らかにできない。

黒色土器A類

椀c（6）　やや外方に開く高台を貼付する底部破片で、見込部分にミガキcが観察できる。

灰釉陶器

椀×皿（7）　低めの高台を貼付し、高台脇ならびに見込部分に施釉。

木製品

皿（8・9）　漆器で、器表面に黒漆を塗布している。

金属製品

釘（11）　折り曲げによる鉄製の釘。断面四角形を呈している。

267SF710 茶灰色砂（Fig.90）

土師器

椀c（12・13）　外方に張り出す高台を貼付する底部破片。器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

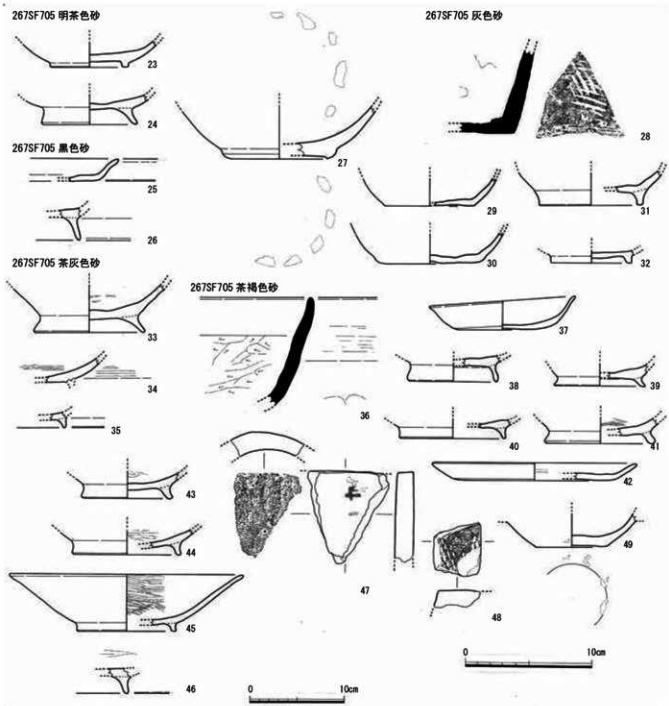


Fig.89　267SF705 出土遺物実測図（2）

267SF710 黒色砂 (Fig.90)

須恵器

蓋 1 (14)　かえりを有する蓋で、内外面に回転ナデ痕跡をとどめる。

土師器

丸底坏 (15)　内面にミガキ b が観察できるもので、他の部位については回転ナデ。

小皿 a1 (16)　推定口径 10.6cm を測り、器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

黒色土器 A 類

椀 c (17・18)　外方に張り出す高台を貼付し、見込にミガキ c 痕跡が観察できる。

灰釉陶器

皿（19）　やや低めの高台を貼付するもので、高台脇ならびに見込に施釉。

青磁

椀（20・21）　素地および施釉状況から、20は越州窯系青磁椀Ⅰ類、21も同様に越州窯系青磁椀Ⅰ-2類。

瓦

平瓦（22・23）　凸面に格子タタキならびに「佐」の文字があり、九州歴史資料館分類の902Bb型式。凹面は布目が観察できる。23は、凸面に格子タタキ、凹面に布目がある。

267SF725 灰橙色土（Fig.90）

土師器

坏a（24）　平底のもので、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

椀c（25）　やや内傾する高台を貼付し、器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

瓦

丸瓦（26）　凸面に格子タタキ、凹面に布目が観察できる。

267SF855（Fig.91）

土師器

坏a（1～3）　推定口径12.2cm～13.3cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

椀c1（4）　高台が貼付されると判断されるもので、推定口径15.6cmを測る。内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

椀c（5・6）　やや大振りの椀と考えられるもので、高台を貼付する底部破片。

黒色土器A類

椀（7・8）　7は、やや丸みを帯びる椀で2類、8は直線的に外方へ開く椀で1類。内面にミガキcが観察できる。

灰釉陶器

壺（9）　平底の底部から丸みを帯びて立ち上がるもので、体部外面下位を回転ヘラ削りによって仕上げている。

青磁

椀（10）　平底の底部から外方へ大きく開く体部へと移行するもので、見込および底部と体部の境界部分に目跡が観察できる。

石製品

巡方（11）　方形を呈するものと考えられ、色調は暗灰色、材質は粘板岩製。

267SF1441（Fig.91）

土師器

坏a（12）　推定口径13.0cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

b. 溝

267SD595 淡灰色粘土（Fig.92）

須恵器

蓋4（1）　口縁端部内面をくぼませるもので、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

坏c（2）　蓋として図示しているが、坏c。内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

皿（3）　推定口径17.0cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕跡があり、他の部位は回転ナデ。

土師器

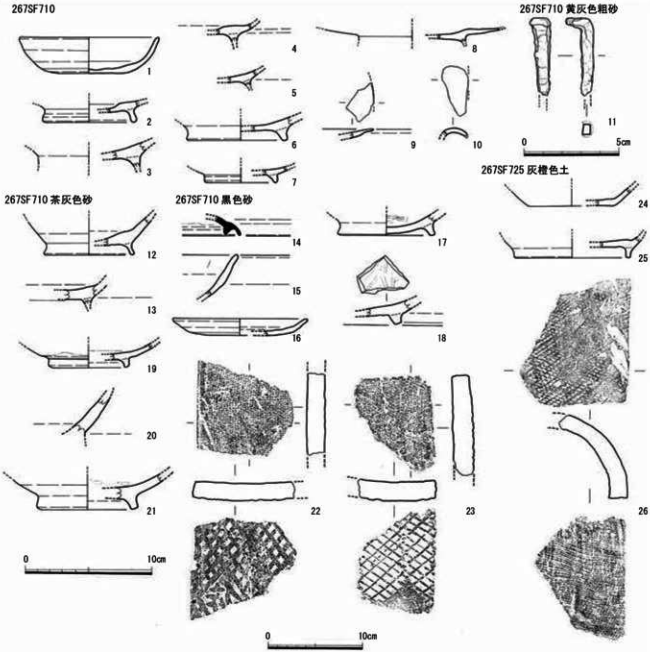


Fig.90　267SF710・725出土遺物実測図

坏a（4）　推定口径13.2cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕跡があるとともに「十」のヘラ描きが観察できる。他の部位は回転ナデ。

高坏（5）　円筒状のもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

黒色土器A類

椀c（6）　やや外張りの高台から外方へ大きく開く体部形態を有するもので、内面にミガキcが観察できる。

緑釉陶器

皿（7）　口縁部のみの破片で、椀になる可能性もある。内外面に施釉。

瓦

平瓦（8）　凸面に格子タタキ、凹面に布目が観察できる。

267SD595 灰茶色粘土（Fig.92）

須恵器

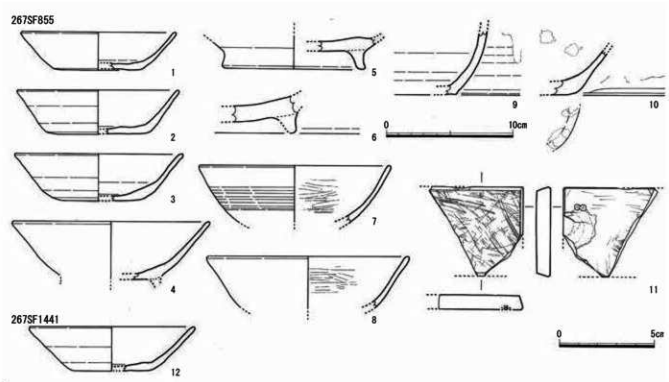


Fig.91　267SF855・1441 出土遺物実測図

坏 c（9・10）　9 は、推定口径 13.8cm、断面三角形の高台を貼付し平底の底部から外方へ直線的に開く体部へと移行する。内外面に回転ナデが観察できる。10 は口縁部を欠損するもので、断面四角形の高台を貼付し、底部から体部への移行が丸みを持って立ち上がる。

壺 e（11）　肩部ならびに頸部下位に突帯を巡らせるもので、二重口縁を有しないもの。体部外面下位に縦方向のナデ痕跡が観察できる。

土師器

坏 a（12・13）　推定口径 12.4cm、15.1cm をそれぞれ測り、いずれも底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

椀 c1（14 ～ 17）　14 は、推定口径 19.6cm を測る大振りの坏で、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。16 は、推定口径 13.4cm で、やや外張りする高台を貼付し、直線的に外方へ開く体部へと移行する。底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。17 は、口径 15.8cm を測る。底部外面の処理は不明ながら、他の部位は回転ナデ。

皿 a（18）　推定口径 15.0cm を測るもので、底部外面を回転ヘラ切りし、他の部位は回転ナデ。

製塩土器

焼塩壺（19・20）　外面には指頭圧痕が残るもの。

緑釉陶器

皿（22）　円盤状高台を有し、見込にミガキ e が観察できる。

青磁

椀（23）　蛇の目高台で、やや内湾しつつ外開きに立ち上がる体部へと移行する。内外面に施釉。越州窯系青磁椀Ⅰ -1 類。

267SD595 淡灰色土（Fig.93）

須恵器

坏 a（24）　平底から外上方へ直線的に開く体部形態のもので、底部外面は回転ヘラ切り。

石製品

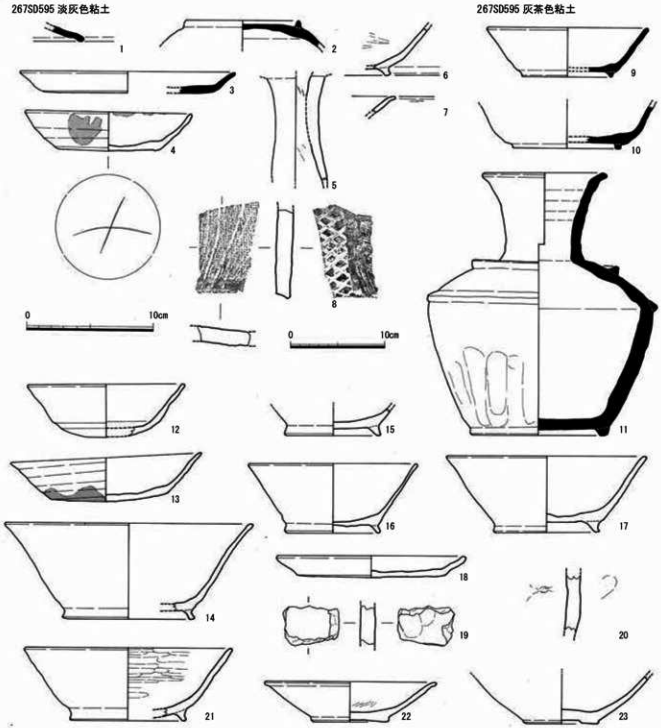


Fig.92　267SD595 出土遺物実測図（1）

鍋（25）　直立気味に立ち上がる体部で、内外面に成形・調整のためのヘラ削りが観察できる。

267SD595 灰黄色土（Fig.93）

須恵器

坏c（26・27）　低めの断面四角形の高台を貼付する底部破片。器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

土師器

坏d（28）　平底からやや内湾気味に立ち上がる体部へと移行するもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

坏ｃ（29）　推定口径19.0cmを測るもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

黒色土器A類

鉢（30）　断面台形の高台を貼付し、外方へ開く体部へと移行し、頸部を「く」の字に屈曲させる。頸部内面にミガキｃが観察できる。

267SD595 灰色粘土（Fig.93）

須恵器

坏ｃ（31）　断面略台形の高台を貼付し、底部から体部への移行が緩やかなもので、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

土師器

椀ｃ1（32）　高脚の高台を貼付し、直線的に外方へ開く体部へと移行する。底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

甕ａ（33・34）　いずれも頸部を「く」字に屈曲させるもので、体部外面を縦方向のハケ、内面を手持ちヘラ削りする。33は口縁部内外面を横方向のナデにて仕上げている。

267SD620（Fig.94）

土師器

椀ｃ（1）　直立する高台を貼付する底部。内外面ともに回転ナデ。

青磁

椀（2・3）　2は、輪高台で越州窯系青磁椀Ⅰ-2類、3は、蛇の目高台で越州窯系青磁椀Ⅰ-1類。

瓦

平瓦（4）　凸面に格子タタキ、凹面に布目が残る。

267SD825（Fig.94）

土師器

椀ｃ（5・6）　いずれも直立する高台を貼付した底部破片。

黒色土器A類

椀ｃ×Ⅲｃ（7）　やや外張りする高台を貼付した破片資料で、見込にミガキｃが観察できる。

瓦

平瓦（8）　凸面をナデによって調整し、凹面に布目が残る。

267SD835（Fig.94）

須恵器

鉢ａ（9）　鉄鉢状の形状を有するものと考えられ、内外面を回転ナデによって仕上げている。

土師器

坏ａ（10）　底部外面を回転ヘラ切りするもので、内外面を回転ナデによって仕上げている。

製塩土器

煎熬土器（11）　外面を平行タタキし、内面に指頭圧痕が多数観察できる。

青磁

椀（12）　蛇の目高台のもので、越州窯系青磁椀Ⅰ-1類。

267SD840（Fig.94）

須恵器

坏ｃ（13）　断面台形の低めの高台を貼付し、内外面ともに回転ナデ。

土師器

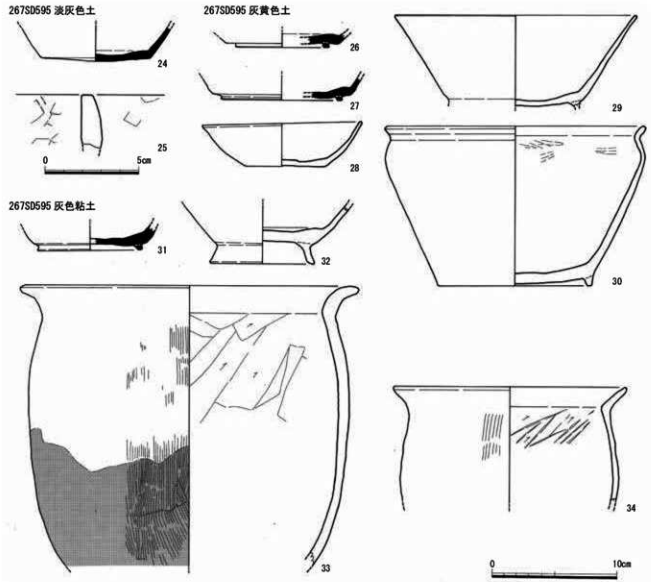


Fig.93　267SD595 出土遺物実測図（2）

把手（14）　手持ちナデによって成形された把手。

267SD845（Fig.94）

須恵器

坏 a（15）　推定口径 11.35cm を測り、やや丸みを持つ底部から外方へ開く体部形態を有する。底部外面を回転ヘラ切り。

坏 c（16）　高台を貼付する椀状のものと考えられ、壺の可能性も残る。内外面を回転ナデ。

土師器

坏 a（17・18）　推定口径 12.2cm、13.3cm をそれぞれ測り、底部外面を回転ヘラきりするもの。

椀 c（19）　やや高めの高台を貼付するもので、内外面を回転ナデによって仕上げている。

甕 a（20）　頸部を「く」字に屈曲させるもので、体部外面を縦方向のハケ、体部内面をヘラ削りによって仕上げている。口縁部内外面は横方向のナデ。

黒色土器 A 類

椀 c（21）　外張りする高台から外方へ丸みを帯びつつ立ち上がるもので、器面摩耗により成形・調整痕跡は不明。

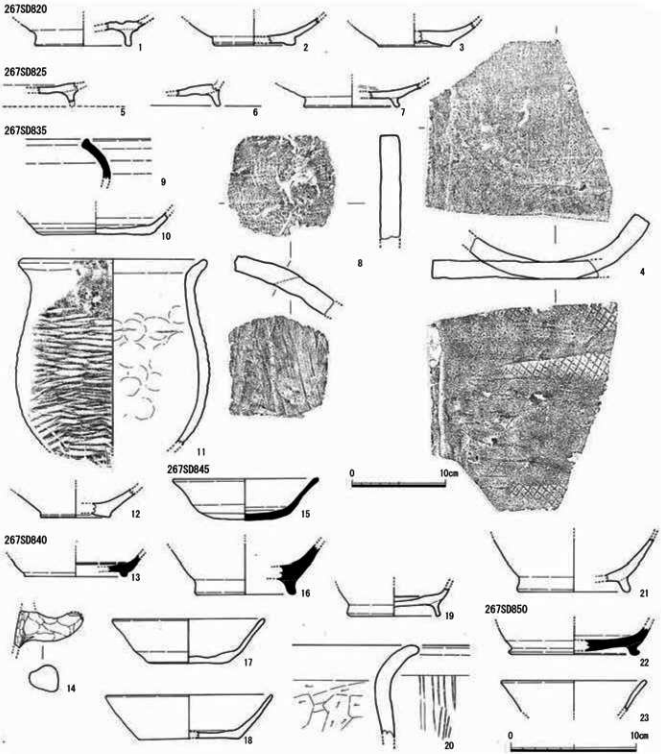


Fig. 94　267SD820・825・835・840・845・850 出土遺物実測図

267SD850 (Fig. 94)

須恵器

坏 c (22)　高台端部を跳ね上げる高台形態を有し、外方へ直線的に開く体部へと移行する。

土師器

坏 (23)　外方へ開く口縁部。器面摩耗のため成形・調整痕跡は明らかにし難い。

267SD865 (Fig. 95)

須恵器

小坏（1）　内湾気味に立ち上がり、口縁部を外反させるもので、推定口径8.0cmを測る。

壺（2・3）　2は、平底の底部から外方へ開き気味に立ち上がる体部へと移行する。底部外面に当て具痕跡が残る。3は、高台を貼付するもので、内外面を回転ナデによって仕上げるもので、内面下位に白色の付着物がある。

土師器

坏a（4）　回転ヘラ切りする平底の底部から外方へ開く体部へと移行する。

椀c（5・6）　5は、直立する高台を貼付する底部の破片資料。6は、推定口径15.2cmを測るもので、体部中位をやや内湾させつつ、口縁部へと外反させる。丸みを意識した形状と考えられる。

把手（7）　扁平な形状を有する把手で、器表面にハケ痕跡が観察できる。小型の鉢などに貼付されているものと推定できる。

土製品

錘（8）　両端がすぼまる円筒状を呈し、表面が摩耗しているため成形・調整に関して明らかにし難い。18.4gを量る。

灰釉陶器

壺（9）　短頸壺で、内外面を回転ナデし、頸部に施釉痕跡が観察できる。

267SD865 淡灰色砂（Fig.95）

須恵器

火舎（10）　他の遺構にて出土した事例から、火舎に貼付される獣脚と考えられる。表面に成形のための指頭圧痕が多く観察できる。

円面硯（11）　四角形の透かしを有する円面硯の脚。成形のための回転ナデ痕跡が内外に観察できる。

土師器坏d（12）　内外にミガキaが観察できる個体。

青磁

椀（13）　やや幅広の輪高台のもので、畳付および見込に目跡が残る。越州窯系青磁椀Ⅰ-2類。

267SD865 灰色粘土（Fig.95）

黒色土器A類

椀c2（14）　口縁部ならびに高台を欠損するが、体部の立ち上がりに丸みを持つ。

267SD870（Fig.96）

須恵器

蓋c（1）　扁平なツマミの破片資料。内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。なお、天井部内面には不定方向のナデ痕跡がある。

蓋3（2～5）　断面三角形の口縁部を持つもので、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

坏a（6）　底部外面を回転ヘラ切りする底部破片で、やや内湾しつつ体部へ移行する。

坏c（7～11）　高台を貼付するもので、内外面を回転ナデによって仕上げる。

壺a（12・13）　短頸壺で、内外面を回転ナデによって仕上げ、12は体部外面下位を回転ヘラ削りする。

壺（14～18）　14は肩部の破片と考えられ、外面に二条の沈線と格子文様が施文される。15は、平底の底部から外方に立ち上がるもので、体部下位外面にミガキa痕跡と考えられるものが観察できる。16は、大振りのもので甕の可能性を残す。17は、高台を貼付し、体部外面下位にミガキa痕跡が観察できる。18は、肩部に突帯を貼付するもの。

甕（19・20）　19は体部外面に格子タタキ、内面に当て具痕を残す。20は、外面に平行タタキ、内面に当て具痕跡をとどめている。

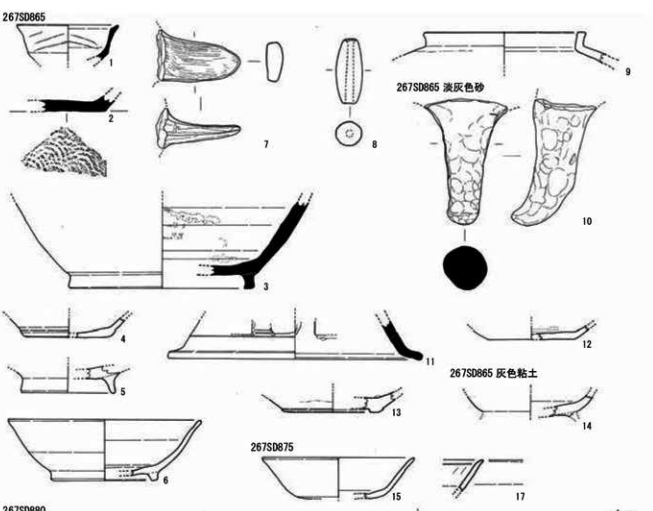


Fig.95　267SD865・875・880 出土遺物実測図

土師器

坏 a（21）　推定口径 12.0cm を測り、内外面に回転ナデ痕跡がある。

坏 d（22）　推定口径 14.0cm を測り、内外面を回転ナデによって仕上げるとともに、外面にミガキ a 痕跡が観察できる。

坏 c（23）　高台を貼付する坏底部の破片。

高坏（24・25）　円筒状の高坏の脚部。器面摩耗のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

鉢（26）　底部から大きく開く土師器特有の鉢で、口縁端部を垂直に立ち上げる。

甕（27・28）　頸部を「く」の字に屈曲させるもので、体部外面を縦方向のハケ、内面をヘラ削りする。27 は口縁部内面をハケ、外面を横ナデし、28 は口縁部の内外面を横方向のナデにて仕上げている。

把手（29）　表面に成形のための指ナデ痕跡が多数残る。

黒色土器 A 類

椀 c × 皿 c（30）　低めの高台を貼付するもので、見込部分にミガキ様の痕跡が残る。

鉢（31）　平底と思しき底部から外方へ立ち上がる体部形態を有するもので、内面にミガキ c 痕跡が観察できる。

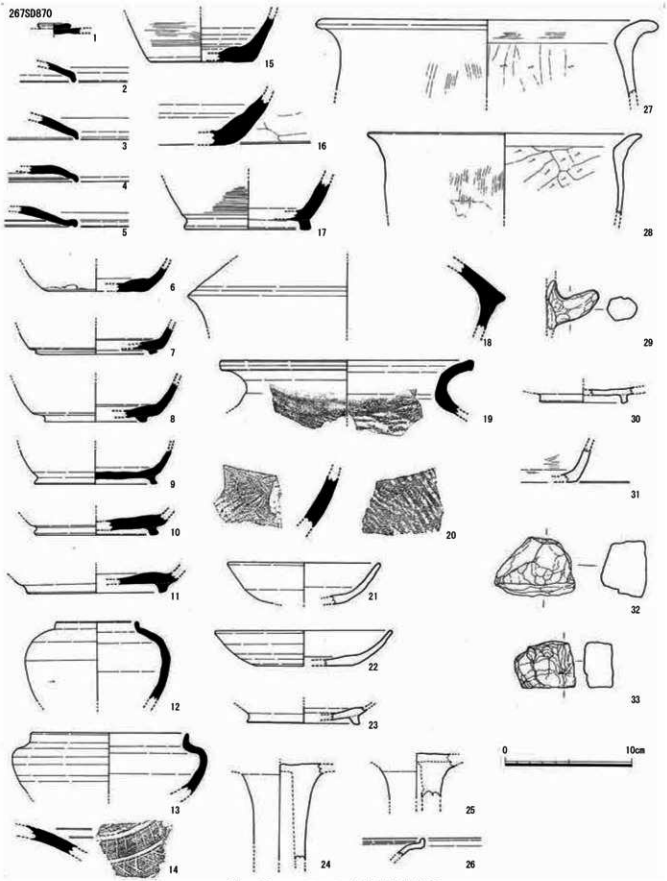


Fig.96　267SD870 出土遺物実測図

石製品

用途不明（32・33）　32は、石英塊。33は、材質は細粒砂岩。

267SD875（Fig.95）

土師器

坏a（15）　推定口径12.0cmを測り、平底の底部から緩やかに体部へ移行する。内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

盤（16）　高台を有する大振りの器で、体部下位に突帯が貼付されていると推定できる。

緑釉陶器

椀（17）　わずかに口縁端部を外反させるもので、口縁端部内面に沈線様の模様が観察できる。

267SD880（Fig.95）

土師器

坏a（18）　底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる平底のもので、底部から体部への移行が緩やかに移行する。推定口径12.4cmを測る。

Ⅳ．自然科学分析

（1）大宰府条坊跡第２６７次調査出土動物遺存体分析報告

菊地大樹（京都大学大学院人間・環境学研究科）

a. はじめに

今回報告する動物遺存体の大部分は、大宰府左郭 14 条１坊における、平安時代の道路および側溝、なかでも交差点付近に集中して出土したものである。動物遺存体の多くは骨の主成分であるリンと地下水の鉄イオンとが結合した藍鉄鋼（ビビアナイト）を析出させて劣化しており、その結果、関節部の多くが発掘時に取り上げられず崩壊し、また発掘後の乾燥によっても劣化が進んだため、多数の亀裂が生じて破片となっている。出土した動物遺存体のうち、同定できたものは 125 点で、哺乳類のウマ、イノシシ／ブタ、シカ科、ウシの１科３種であった。保存状態の悪さから骨の表面に亀裂が生じて剥離して荒れているため、解体痕などの痕跡は観察できなかった。各部位の計測はDriesch (1976) に従い、遊離歯の歯冠高からもとめられるウマ推定年齢は、西中川ら (1991) に基づく。以下、出土した動物遺存体について記す。

表１　出土動物遺存体種名表

哺乳綱 MAMMALIA	イノシシ／ブタ Sus scrofa
奇蹄目 Perissodactyla	シカ科 Cervidae
ウマ科 Equidae	ウシ科 Bovidae
ウマ Equus caballus	ウシ Bos Taurus
偶蹄目 Artiodactyla	
イノシシ科 Suidae	

b. 種類ごとの特徴（詳細な分析結果表は、CD-ROM 搭載）

ウマ　すべての時期から出土している。四肢骨は腐朽が著しく計測ができないため、推定体高はもとめることが困難であった。同定できた資料の大部分はエナメル質により保護されていた遊離歯である。遊離歯の歯冠高計測値より推定されるウマの年齢は、S-755 の道路側溝から出土したウマが、およそ７歳から９歳の若齢であり、S-765(S-600) の交差点たまり状遺構から出土したウマが、およそ６歳から１４歳の若齢～壮齢であった。また、S-455 の南北溝より出土したウマには犬歯が認められることから、オスであると考えられる。

イノシシ／ブタ　S-765(S-600) の交差点たまり状遺構から、上腕骨（右）が１点出土している。

シカ科　S-765(S-600) の交差点たまり状遺構から、上顎臼歯（左）が１点出土している。

ウシ　S-765(S-600) の交差点たまり状遺構から、遊離歯（左１右１不明３）５点、下顎骨（左１右１）２点、上腕骨、大腿骨、脛骨（左）、中手骨／中足骨（不明）が１点ずつ出土している。

c. まとめ

本報告資料は、太宰府市による大宰府条坊跡第 267 次調査で出土した動物遺存体である。調査では、大宰府の左郭 14 条１坊が検出されている。動物遺存体が出土した遺構は、道路路盤および側溝である。調査により、１坊路は平安時代

の後期まで使用していたことがわかっており、道路遺構の交差点たまり状遺構からは、ウシ、ウマが出土している。側溝からは若齢のウマが、交差点からは若齢から壮齢のウマが出土しており、他の遺構ではあるが、出土したウマに犬歯が認められることからオスであることがわかった。このことから、当時のウマが肉体の最盛期をむかえる若齢から壮齢段階まで、ながきにわたり利用されていたことを推察させる。また今回、交差点からウシとウマが出土しており、当時の大宰府の都市景観とともに、都市部における廃棄状況を知る貴重な手がかりとなる資料となろう。

引用文献

Angela von den Driesch: A guide to the measurement of animal bone from archaeological sites. Peabody Museum Bulletin 1. Harvard: Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, 1976.

西中川駿［ほか］(1991)「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛，馬の渡来時期とその経路に関する研究」（科学研究費補助金（一般研究(B)）研究成果報告書，平成２年；01490018）

（２）大宰府条坊跡第 267 次出土獣骨の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

a. はじめに

大宰府条坊跡（福岡県太宰府市朱雀・通古賀などに所在）は、7 世紀後半から九州の筑前国に設置された地域行政機関であり、軍事、外交を主として担い、九州地方の内政も行っていた大宰府の都市遺跡である。

本分析調査では、大宰府条坊跡の調査で出土した動物骨について同定報告を行う。出土地点は、朱雀大路のすぐ東側に広がる外国使節を安置した客館や、瓦屋の瓦窯などが検出された地区で、試料は古代から中世・近世の遺構等から出土している。

b. 試料

試料は、第 267 次（S-549）より出土した骨で、1 試料である。試料は土ごと取り上げられた状態にある。

c. 分析方法

試料を肉眼で観察し、形態的特徴から種・部位を現生標本との対比によって同定を行った。骨体表面に残された解体に伴って生じたカットマークの有無、焼骨等を観察し、記録する。

d. 結果

検出された種類は、哺乳綱 1 種類（ウシ）である（表 1）。なお、計測結果は結果表に掲載している。以下に示す。

表 1. 検出分類群の一覧

脊椎動物門 Phylim Vertebrata
　哺乳綱 Clss Mammalia
　　奇蹄目 Order Perssodactyla
　　ウシ科 Family Bovidae
　　ウシ Bos Taurus

ア）哺乳類

・ウシ

ウシは市中で役畜として使役される。その利用は運搬、農耕であり、役畜としての役目を終えると解体され食用にされる他に皮革製品や骨角器などに利用される。

第 267 次調査 S-549 から下顎骨歯槽部が検出された（表 2）。

表 2．哺乳類科属性表

No.	調査次	出土位置	種類	部位	部分	状態等	数量	備考
1	第 267 次	AK21 S549	ウシ	下顎骨	歯槽部	破片	1	P2-M3 までの下顎骨破片、歯は歯根のみ。

e. まとめ

検出された哺乳類はウシで役畜の歯槽部で、歯が堆積中に分解されにくいため歯と歯槽部のみが残存したと考えられる。また役畜としての役目を終えたものが皮革や骨角器に利用されるために解体され、不要な頭部を廃棄したその残滓の可能性も考えられる。

Fig. 97　267SX549 出土獣骨

参考文献

富岡直人・屋山洋・松井章・丸山真史（2011）「動物考古学からみた博多と動物の歴史」『福岡市史　資料編考古 3 遺物からみた福岡の歴史』福岡市，p. 221-295.

Ⅴ．まとめ

（1）条坊路関連遺構

第2調査面以下で淡茶灰色土を除去した後に左郭1坊路と14条路とその交差点部分が確認されている。条坊路については、所属する調査面の特定が難しいことから、まとめとして記述する。

条坊路は大きく分けて3時期に分けられ、下位よりⅠ～Ⅲ期として記述する。

a. 条坊路Ⅰ期（腐植土下面、地山直上道路＝Ⅰ期道路）

267SF585

1坊路南で検出した道路路盤。SD590と595に対応すると考えられる。

267SF855

14条路東側で検出した帯状通行痕。

AJ・AK29～33、14条路西側で検出したSD875と815の間の凸凹痕。SD815下面でも凸凹痕が見られた。埋土はAK30～33付近では暗灰シルトや灰緑シルト、淡赤砂であり、地山の土壌が入り込んだものと考えられる。AK29付近では埋土が暗灰土で、通行などによる凸凹痕に交差点付近で検出された腐食土(267SX765)が入り込んだものと推定される。

267SF885

14条路西側で検出したSD875と815の間の凸凹痕。

b. 条坊路Ⅱ期（腐植土上面道路＝Ⅱ期道路）

267SF545 茶灰色砂礫

X～AG28・29で検出した1坊路の砂敷路盤で、267SF545明茶色砂除去後検出される。交差点付近で267SX600に切られ、1坊路側溝267SD560と267SD570の間に展開している。Ⅶ期埋没。交差点溜まり状遺構267SX600・765上面で検出し、側溝を伴う道路（Ⅱ期道路）

267SF580 黄灰砂礫

AD～AG30で検出した1坊路の砂敷路盤である。砂敷と凸凹痕があり、1坊路側溝SD570・575と565の間で検出された。交差点付近で腐植土の267SX600(765)に切られる位置関係である。AHラインより北で検出された267SD800・805と考えられる。Ⅶ～Ⅷ期埋没。（Ⅱ期道路）。

267SF785、795

14条路の道路路盤。交差点付近で腐植土SX765により分断。

AJ～AK18～27で検出した14条路の帯状硬化面と通行痕である。Ⅲ期の砂敷267SF715(14条路東側）と267SF720(14条路西側）除去後に検出された通行痕である。14条路面に帯状に伸びる砂質の硬化面を除くと、10～20cmくらいの凸凹痕が検出された。帯状硬化面は3.6mの間で3列確認できた。凸凹痕は60cmほどの幅で14条路に沿って東西方向に伸び、二列併行して検出された。このような状況から帯状硬化面と刺突痕は道路の通行痕跡であると考えられる。1坊路との交差点付近は腐植土層267SX765に切られ、痕跡を確認することはできなかった。267SF785と267SF795との違いは埋土で、267SX765の埋土の腐植土が入るのを267SF785とし、灰緑色シルト（地山）を含む埋土が入るのを267SF795としている。（ただし、作図ではどれが267SF785・795なのかが不明）

c. 条坊路Ⅲ期（砂敷道路＝Ⅲ期道路）

267SF545 明茶色砂（=710）、550(=705)

南北に伸びる砂の硬化面で、路盤には瓦や礫を多く含み、最も新しい時期の道路面。

AC ～ AG28・29 で検出した 1 坊路の砂敷路盤である。北で検出した 267SF710 と同一遺構である。幅 1.75 mほどの帯状を呈し、明茶色砂には多くの瓦や礫を含み、掘下げると 267SD560 の 1 坊路東側溝が検出される位置関係にある。平安後期埋没。最も新しい時期の道路（Ⅲ期道路）。

267SF550

AD ～ AG29・30 で検出した 1 坊路の砂敷路盤で、267SF705 茶褐色砂の続きである。幅 0.75 ～ 1.5 m の帯状を呈し、掘下げると 1 坊路側溝 267SD570・575 が検出される。Ⅸ～ Ⅹ 期埋没。最も新しい時期の道路（Ⅲ期道路）。

267SF715、720

東西に伸びる砂の硬化面で、1 坊路の砂敷道路が南北に横断する位置関係である。砂の堆積土を除去すると凸回の通行痕が検出される（Ⅲ期道路）。

267SF715 は、AK ～ AL23 ～ 29 で検出し、14 条路の東側を東西に伸びる砂の硬化面で、1 坊路の砂敷道路 267SF705・710 が南北に横断する位置関係である。267SF705・710 により分断されるが、14 条路西側に展開する 267SF720 とは同一遺構と考えられる。砂の堆積土を除去すると凸回の通行痕が検出される。

267SF720 は、AI ～ AL30 ～ 34 で検出し、14 条路の西側を東西に伸びる砂の硬化面で、1 坊路の砂敷道路 267SF705・710 が南北に横断する位置関係である。砂の堆積土を除去すると凸回の通行痕が検出される。土色は上から暗褐色土・暗茶色土の順で堆積し、遺物の取り上げを行った。

267SX500 茶色粘土・灰色粘土

14 条路東側に幅 8 ～ 11 m で広がり、1 坊路との交差点付近でＬ字に屈曲する堆積層。堆積層を除去すると砂が堆積する硬化面（SF710・715・720）を検出。

（２）左郭 1 坊路と 14 条路の交差点

8 世紀から 12 世紀にかけての道路遺構が非常に良好な状態で検出されている。道路の構造は、宅地面より掘り下げられたオープンカット状を呈し、側溝が掘削されている。路面部分には瓦片と礫を敷き詰めた状況が確認できる。左郭一坊路は通行痕により 4 面の道路面があることが判明した。

（３）奈良時代の大型掘立柱建物跡

本調査区周辺（大宰府条坊跡 236・257 次）で検出されていた奈良時代の大型掘立柱建物（南北棟）の続きが検出されている（SB700）。今回の調査区では南北棟のうち北棟西側が検出された。これで北棟の規模が確定し、南北桁行 16 間（30 m）×東西 5 間（8.5 m）（身舎梁行 3 間、西側に庇 2 間）の規模とみられる。南棟とは柱筋を揃えており同時並存していたことが十分想定可能である。なお両棟は梁行・庇の規模はほぼ一致するものの、南棟の桁行 11 間（約 24m=80 小尺）に対して、北棟は桁行 16 間（約 30m=100 小尺）と、北棟がより長大である。

（４）白玉製丸鞆

11 世紀後期埋没の南北溝（SD811）から出土したもので、丸鞆の石材はＸ線回析分析（九州国立博物館・福岡市埋蔵文化財センター）により、石英であることが判明した。形態は垂孔（透かし穴）があり、長軸 4.2㎝、短軸 2.6㎝、厚さ 0.7㎝を測る。裏面の三箇所の潜り穴には銀線が残存しており、Ｘ線ＣＴスキャン（九州国立博物館）によりＵ字状を呈して、遺存していることが分かった。「白玉帯」と「銀線」の使用は律令の規定で三位以上と四位の参議のみに限定され、官長クラスのものと考えられる。

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
1	267SE001	井戸	ｴﾋﾟ除去後検出.	青褐色砂(黒ふ)→褐色粘砂(粉内)→茶褐色ｼﾙﾄ→黒色粘(X層)→黒色土(X層)		X～XI期頃	AS33
2		小穴群		黒色土		平安初～	AS32
3		小穴群		灰茶色土		平安初～中～	AS32～35
4		小穴群		灰茶色土		古代	AS32
5	267SE005	井戸	方形横板木枠 巻黒色土は上層のS-27-32の遺物含む.	淡青色ｼﾙﾄ(黄ふ)→淡青灰色砂(粉内)→暗灰色粘土(V層～VI期)→黒褐色砂質土→黒色土(V層～VI期)		V層～VI期頃使	AF-AS31
6		小穴群		茶褐色土		奈良・平安	AS32
7		小穴群		黒灰色土～黒色土		～平安中	AS31～32
8		小穴群		灰茶色土		奈良	AF31
9		小穴群		黒色土		～平安	AF31
10	267SX010	土器溜		黒色土		平安後(～X期)	AF-AG27～29
11		小穴		茶褐色土		奈良～平安	AG31
12		小穴群		灰褐色土		奈良～	AG32
13		小穴群		黒色土	AS34付近の褐褐色粘土層→13→茶灰褐色砂質土 土器	平安～	AS34
14	267SX014	小穴群		黒色土		平安～	AL33
15	267SD015	溝	絡溝か. 茶褐色土中に土器多く含む. S-45も同じ遺構とみられる.	褐褐色粘に切り込む遺構埋土に類似.	10→20→15	平安後	AR26～29
16		溝	南北に走向.	黒色土～黒灰褐色土		平安	AL-AR33
17		溝		黒色土～黒灰褐色土	21→17→18	平安後	AS32～33
18		たまり		暗灰褐色砂質土	17→18 19→18	平安後～	AK～AM34
19		溝		灰褐色砂質土	19→19	平安後～	AL-AM34
20	267SX020	たまり 茶褐色粘土層	茶褐色粘土層とS-20と同一と確認(井上・下高). 鉢の鋳型出土.	茶褐色粘土層とS-20と同一と確認(井上・下高). 茶褐色粘土層と同一. 茶褐色粘土は茶褐色土層と関連するかも.	20→40	鎌期	AA27～28
21		たまり		灰褐色砂	21→17	平安～	AK33
22		小穴群	S-14と同じ埋土		22→18	平安後～	AK-AL33
23		たまり		砂層	22→23→16→1	平安後～	AL33
24		小穴群	奈良期遺物多い	黒灰色土		～平安	AG31
25	267SX025	土器溜	西端のS-10より下がっているところをS-25として分けた. S-10と同一遺構の可能性あり. 土器多量出土.	褐色土	25→10	～鎌期	AE-AF29
26		溝	東西に走向. 絡溝か.	茶灰褐色土		～平安後	AG30～31
27	267SD027	溝	東西に走向. 絡溝か. S-27(25-29及び302-303)の延長上にあり. これらの遺物を含んでいると考えてよいだろう.	茶灰褐色土		～平安	AG30～31
28	267SD298	溝	東西に走向. 絡溝か. S-298-754と同一遺構とみられる.	茶灰褐色土		～平安後	AF30
29		小穴群				～平安後	AF-AG30～31
30	267SX030	土坑	左側1/3路東路面上. 埋没後に褐褐. 須恵瓦器類の遺物多い. (典示丸まっている).	淡黄灰色シルト→淡茶灰黒色粘土→茶褐色土	30→140	～平安中	AA29付近
31		小穴群				～平安中	AI-AK32～33
32		掘丸	西鉄の電柱による.			現代	AK33
33	267SD033	溝	東西に走向. 絡溝か.	茶黒色土		平安後	AE28～30
34	267SD034	溝	東西に走向. 絡溝か. S-38と同一遺構の可能性高い.	茶黒色土		平安中～	AE20～30
35	267SD035	溝×掘丸	北西-南東方向に走向. 付近に同一方向の掘丸あり.	淡茶黒色土		平安後	X-Y18～19
36		たまり		茶褐色土が残存したものと考える.		平安中～後	AD29
37		たまり		褐褐色粘土が残存したものと考える.		平安	AD29～30
38		小穴群		黒色土	38→39	平安	AG30
39	267SD393	溝	東西に走向. 絡溝か.	黒色土	38→39	平安中～後	AG29～30
40	267SD040	たまり	S-20と同一列構に類似か.	40黒灰色粘土・40黒灰色土→40	20→40	平安後～	AC-AE30～27
41		たまり		茶褐色土の一部か.	42→41	平安後	AH30
42	267SD042	溝	東西に走向. 絡溝か. S-41と同一遺構. S-79とも関連か.	茶黒色土	42→41	平安後	AH30～31
43	267SD075	溝	東西に走向. 絡溝か. S-612と同一（＝S-75）			～平安後	AH30～31
44		廃棄	南北に走向.			平安	AR31
45	267SD045	溝	東西に走向. 絡溝か. S-15と同一遺構とみられる. 白銅鈴鐘(鎌期)出土.	茶褐色土	20→45(15)	平安後	AR21～24
46		小穴群				平安	AI-AR31
47		たまり		黒色土	52→47	平安後～	AR31～32
48	267SD034	溝	東西に走向. 絡溝か. S-34と同一遺構の可能性高い. S-372と同遺構.	茶黒色土		平安後	28～29付近
49	267SD304	溝	東西に走向. 絡溝か. S-304と同一遺構とみられる.	茶黒色土		平安後	AG30～31
50	267SD020	たまり×溝	西く幅広の溝か. 茶褐色粘土は5-20埋土に類似.	50黒灰色土→50茶褐色粘土→50黒色土→50茶褐色土(＝50) 巻50黄褐色粘土(721)が上下関係不明.	50→356	平安後～ (鎌期～)	AA-AB18～
51		小穴群	奈良遺物多い.			奈良～	AR31
52		小穴群	4-47下層検出小穴のうち黒色土の小穴である.			平安～	AR32
53		小穴群	遺物なし.				AF28
54		小穴群		褐褐色粘土層→54		平安	AR30
55	267SE1120	井戸	巻S-1120で調査.	茶色土(平安後. 土器溜丸底坪)		平安後	AE20
56	267SD056	溝	S-359と同遺構	茶褐色土層の残りとみられるが. 少し削んでいるため溝の可能性もある.		平安後	AE26～27
57		溝×たまり		茶黒色土		平安後	AF28

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
58		小穴	暗褐色粘土層に切り込むものではない。	黒灰色土		奈良～平安	AG31
59		溝×たまり	S-69溝の延長上にあり同一遺構の可能性あり。	暗褐色粘土を含む茶褐色土		奈良～平安	Y28～29
60	267S060	井戸	黒色土出土遺物は鎌期頃の一括廃棄。	茶黄色土→ブロック土→黒灰色土→黒色土→茶色土	60→50	～鎌期	AE～AC19
61		小穴	S-140(礎石遺物)に関連ありらが　遺物は平安中以前のものが少し出土。	黒灰色土		～平安中	AA29
62	267S062	たまり×溝	S-43除去後検出。	茶褐色土	62→140?	鎌期前後	X28
63		小穴	S-43除去後検出。	黒灰色土		鎌～鎌期	AB32
64		小穴群		黒灰色土		平安	AG～AH31～32
65	267S065	井戸	黒褐色土から漆製品出土。桶か、底食著しく横のみ残存。	茶褐色砂(～平安中)→灰褐色土→黒褐色土→黒色土		～平安後	Y～AA18～19
66		小穴群		黒灰色土		奈良・平安	AH～AI31～32
67		小穴群		黒灰色土		奈良・平安	AG31
68	267S068	たまり		黒灰色土	T2-79→68→273	氏～X期	Y26～27
69	267S069	溝	東西に走向。鎌溝か。	茶褐色土	81→69	～平安後	Y26～27
70	267S004(104)	溝	東西に走向。鎌溝か。S-42-61の一部か?	茶褐色土		～平安後	AH21～22
71		小穴群		黒灰色土		～平安後	Y27
72		小穴群	S-68除去時検出。	黒灰色土	72→68	平安前～中	X-Y26
73	267S073	小穴	石帯(蛇状帯)出土。	黒灰色土	73→68	鎌期～	Y26
74		小穴群		灰色土		平安前～	X26
75	267S075	溝	東西に走向。鎌溝。S-612-43と同一遺構。	茶褐色土		平安後	AG?小
76		小穴	柱石?	黒灰色土	77→76→273	平安	Y26
77		小穴	遺物なし。	黒灰色土	77→76→273		Y26
78		小穴		黒灰色土	79→273	平安	Y26
79		小穴群		黒灰色土		奈良～平安	Y26
80	267S080	たまり		茶灰色土・灰黒色土→黒色土	20(80)→40→80		AB～AC20～21
81		小穴		黒灰色土		平安	Y26
82	267S082	たまり(あるいは溝)	S-20除去後に検出。炭・土器多く黒色土埋土。おそらくS-10と同遺構と考えられる。	黒色土		鎌期頃	AA26～27
83	267S083	小穴	小礎石が2個、ともに完形で規例状況で出土。		87→83	X～X期頃	AA26
84		小穴群		茶褐色土		奈良～平安	AA27
85	267S085	井戸	S-20除去時に検出。黒茶色土から緑釉陶器小壺検出。	黒黄色粘土(埋期)→茶灰色砂→黒色土(埋～鎌期)→黒茶色土(埋期前後)	85→90→20	鎌期	AB22～23
86		小穴群		黒灰色土		奈良～平安	AA26～27
87		たまり	東西に走向。	茶褐色土	88→87	平安中～後	AA26
88		小穴群	S-87除去後検出。	黒灰色土		平安前～中	AA26
89		小穴群		黒灰色土	89→69	平安中期前後	Y26
90	267S090	井戸	S-20除去時に検出。	黄灰色土(黄ふ)(埋～氏期)→黒黄色土→茶灰色砂(曲物囲内)→黒色土→灰色粘土→黒灰色土→暗灰色粘土(井枠内)	85→90→20	埋～氏期	AB22～23
91		小穴群		黒灰色土		～平安前	AB27
92		小穴群	路面上に切り込む		92→10	平安後	AB28
93		小穴群		黒茶色土		平安	AB25
94		小穴群	S-20除去時に検出。	黒灰色土		平安	AA～AB25～26
欠番							
96	267S096	小穴群	S-14遺物が混入している。	黄茶色土	455暗褐色粘土層除去後に検出。淡茶灰色土層上に植栽。	平安中～後	AK～AM33
97		溝	東西に走向	茶色土	455暗褐色粘土層除去後に検出。淡茶灰色土層上に植栽。	X期	AM33
98		溝×たまり		灰白色粗砂	455暗褐色粘土層除去後に検出。淡茶灰色土層上に植栽。	平安後	AM33
99		たまり	整地層の一部か?	黒灰色土	326→99	平安中～後	Y24～25
欠番							
101		小穴群		茶褐色土		平安中～	T-U26
102		小穴群		茶褐色土		平安中～後	Y26～27
103		小穴群		茶褐色土		平安～	Y27
104		小穴群		灰色土		平安～	Y26～27
105	267S105 2575.140	土坑	上層は条257 S-140として検出。遺物取り上げ、平安後の遺物がわずかに入る。	淡黄色砂質土→暗灰色土→105(平安後)→条257S-140		平安後～(X～X期)	Y24～25
106		小穴	条2575-140除去後検出。	灰色土		奈良～	Y26
107		たまり	条2575-65除去後検出。	灰色土		平安前～中	Y25
108		小穴		灰色土		平安前～中	Y26
109		たまり	条2575-65と条2575-107除去後検出。	灰黒色土		平安前～中	Y25～26
110	267S110	土坑		茶褐色土		鎌期	Y26
欠番							Y25
112		小穴		茶褐色土		平安～	Y27
113		小穴群		茶褐色土		平安中～後	R27
114	267S114	小穴	白磁梅ヒ-1類、埋出土。	茶褐色土		～X期	T24
115	267S115	溝	東西に走向。鎌溝か。切り合いからS-115は特定では最も新しい遺構と考えるが、出土遺物には平安後のものと明らかなものは少ない。	茶灰黄色土	115→196	平安後～(X期以降)	X?小
116		小穴群		茶褐色土		平安～	T24
117		小穴		灰色土		～平安中	Y24

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

通番	遺構番号	種別	備考	堆土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時期	地区番号
118		小穴群		茶褐色土		平安～	U24
119		小穴群		茶褐色土		平安中～後	U25
120	267SE120	井戸	暗青褐色粘土（裏込）→灰黄色土（裏込、埋土）→灰色粘土（粉内 埋～埋期）→灰色土（粉内 埋～埋期）→淡黒色土（粉内 埋～抜期）→129→未2375-119			埋期前後	T23
121		小穴		茶褐色土		平安前～中	U25
122		小穴		茶褐色土		平安～	U25
123		小穴		茶褐色土		平安中～後	U25
124		小穴	須恵器蓋1点→点出土	黄茶色土		奈良～	U27
125	267SK125	土坑	2面目で調査	灰茶色土→灰色土	125→194·204·207·219	奈良後半（～Ⅳ・Ⅴ期）	M25
126		小穴		茶褐色土		平安～	U26
127		小穴群		灰色土		平安～	U26
128		小穴		灰色土		平安前	U26
129		小穴群		灰色土		平安中～後	U26
130		小穴	礎立柱穴か?	茶褐色土		平安後	V27
131		小穴群		灰色土		平安前～中	U26
132		小穴		灰色土		平安前	U26
133		小穴		灰色土		平安～	U26
134		小穴群		灰色土		奈良～平安	U25
135	267SS135	土器溜り		茶褐色土	272·276·287·289→135	32～埋期	W23
136		小穴群		茶褐色土		平安中～後	U25
137		小穴群		茶褐色土	256→137	平安後	U25
138	267SS138	小穴群		茶褐色土		平安中～後	U25
139		小穴群		茶褐色土		平安	U25
140	267SB140	礎立柱建物	2間×1間以上。柱穴はa～f、S-259最表面140c検出。礎石あり。	柱穴内は褐灰色土	30→140→20	平安後	V-AA28～29
141		小穴		茶褐色土	221→141	平安～	U25
142	267SS142	小穴群		茶褐色土		～平安後	U25
143		小穴群		茶褐色土		～平安	V26
144		小穴群	電場所特定できず。	茶褐色土		～平安	―
145	267SE145	井戸	須恵器大倉の根脚。	黄灰色粘土（裏込）→暗灰色粘土（粉内）→青灰色砂（粉内）→灰色粘土→茶灰色砂	53→358→145	XIII期～	AE21
146		小穴群		茶褐色土		～平安中	W26
147		小穴群		茶褐色土		～平安後	W26
148	267SS148	小穴		茶褐色土		～Ⅸ期	V26
149		小穴		茶褐色土		～埋期頃	W26
150	267SE150	井戸	S-150灰茶色粘というがcもある。S-150茶灰色土はS-150に埋まらない。	灰茶色粘土→淡灰色粘土→灰茶色土（V期頃か）→灰色粘土（8c後）	150→90→20	8c中～後	AB-AC22
151	267SS151	小穴	遺物多い	灰色土		平安中～後	W25
152		小穴		灰色土		平安	W25
153		小穴		茶褐色土		平安前～中	W26
154		小穴		茶褐色土		平安前～	W25
155	267SE155	井戸		灰色砂→灰褐色砂→暗灰色粘土（平安前・埋期?） ※灰茶色土は撹乱埋土。		埋期頃か	AB23
156		小穴		茶褐色土		平安前～	W26
157		小穴		茶褐色土		平安前～	W26
158		小穴		茶褐色土		平安前～中	W26
159		小穴群		茶褐色土		平安	W26
160	267SE160	井戸	灰色粘土で鐙尾のような埋出土。	茶灰色砂（裏込）→灰黄色土（裏込）→灰茶色土（裏込）→黒色粘→黄灰色砂→灰色粘土→茶褐色土	160→1130	VI～埋期か	AB-AE24
161		小穴		茶褐色土	177→161	平安後（埋期）	W26
162		小穴		茶褐色土		平安～	W26
163		小穴群		茶褐色土		平安～	W26
164		小穴		茶褐色土		平安～	W26
欠番							
166		小穴		茶褐色土		平安中～	W26
167		小穴		茶褐色土		平安前～中	W26
168		小穴		茶褐色土		平安前～中	W26
169		小穴		茶褐色土	171→169	平安～	W26
欠番							
171		小穴	S-169の撹乱か?	茶褐灰色土	171→169	平安～	W26
172		小穴		茶褐色土		平安～	V26
173		小穴群		灰色土		平安	X26
174		小穴群		灰色土		平安	W27
欠番							
176		小穴		茶褐色土		平安～	W27
177		小穴	S-161の撹乱か?	茶褐灰色土	177→161	平安～	W26
178		小穴		灰色土		奈良～平安前	V27
179		小穴群		灰色土、茶褐色土		平安中～後	X26
欠番							
181		小穴		灰色土		～平安後	X26
182		小穴		灰色土		平安	X26
183		小穴		灰色土	197→183	平安	X26
184		小穴		灰色土		平安	X26
欠番							
186		小穴群		灰色土		平安	X26～27
187		小穴		灰色土		奈良～平安	U25
188		小穴		灰色土		平安	U25
189		小穴		灰色土		平安中～後	U25
欠番							
191		小穴		灰色土		奈良～	U25

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

5-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
192		小穴	礎石	灰色土		～平安中か	U25
193		小穴群		茶褐色土		平安中～後	W25
194		小穴群		茶褐色土	125→194	～平安	W25
欠番							
196		小穴群	須恵器鉢(重ね焼き)	茶褐色土		奈良～平安	X25
197		溝	東西に走向	灰色土	197→183	奈良～平安	X26
198		たまり		茶褐色土	115→198	平安	X26
199		小穴		灰色土		奈良～平安	X26
欠番							
201		小穴		灰色土		平安	X27
202		小穴群		茶褐色土		平安～	U·125
203		小穴群	帝場所特定できず。	茶褐色土		平安～	V25
204		小穴		灰色土	125→204	平安後	W25
欠番							
206		小穴		灰色土		古代～	W25
207		小穴		茶褐色土	125→207	平安後(城際廃後)	W25
208		小穴		茶褐色土		平安～	W25
209		小穴		灰色土		古代	W25
欠番							
211		小穴		灰色土		平安	X25
212		小穴		灰色土		平安	X25
213		小穴		灰色土		奈良～平安	X25
214		小穴		灰色土		平安	X25
欠番							
216		小穴		灰色土		平安中～後	X25
217		小穴群		灰色土		奈良～平安	X25
218		小穴		茶褐色土		平安～	U25
219		小穴		灰色土	125→219	～平安	W24
欠番							
221		溝	奈良遺物多い	黒灰色土		～平安	U25
222		小穴		灰色土		平安	U25
223		小穴		灰色土		～平安前	U25
224		小穴		灰色土		平安	U25
欠番							
226		小穴		茶褐色土		平安～	V26
227		小穴		茶褐色土		奈良～平安	V26
228		小穴		茶褐色土		平安中～後	V26
229		小穴	帝場所特定できず。緑釉陶器蓋。	黒灰色土		奈良～平安前	W25
欠番							
231		小穴群		黒灰色土		奈良～平安	W24
232		小穴		黒灰色土		平安	W24
233		小穴		黒灰色土		平安	W25
234		小穴		黒灰色土		平安中～後	W25
欠番							
236		小穴群		黒灰色土		～平安中	V25
237		小穴群		黒灰色土		平安	V24
238		小穴		黒灰色土		平安	V24
239		小穴群		灰色土		平安	V24
欠番							
241		小穴群		黒灰色土		平安	V24～25
242		小穴群		黒灰色土		平安中～後	V24
243		小穴		灰色土		～平安前	W24
244		小穴		茶褐色土		奈良～	V26
欠番							
246		小穴群		黒灰色土		平安	W24
247		小穴		黒灰色土		～平安中	W24
248		小穴群		黒灰色土		平安	W24
249		小穴		黒灰色土		平安	V24
欠番							
251		小穴群		黒灰色土		平安中～後	V24
252		小穴群		茶褐色土		平安中～後	V25
253		小穴		茶褐色土		奈良～	V26
254		小穴群		茶褐色土		平安～	V25
欠番							
256	267SX256	たまり		黒灰色土（黒灰色土整地残欠?）	256→137·142·172·224·228·252·257	平安前期遺物多い が平安中～後	V25
257		小穴群		黒灰色土		平安～	V25
258		小穴群		黒灰色土		平安～	V26
259		小穴群		黒灰色土		平安～	V·W23
欠番							
261		小穴		黒灰色土		平安～	V23
262		小穴		黒灰色土		平安～	V23
263		小穴		黒灰色土		平安後	V23
264		小穴	VII～IX期の土師器椀×2出土	黒灰色土		VII～IX期か	V23
欠番							
266		小穴	帝場所特定できず。土師器椀×鉢(円板高台)	黒灰色土		平安～	V23
267		小穴		灰色土		平安～	W25
268		小穴群		黒灰色土		平安前～	W24
269		小穴		黒灰色土		平安～	W24
欠番							
271		小穴		黒灰色土		奈良～	W23
272		小穴		茶褐色土	272→135	平安中～後	W23
273	267SX273	たまり		茶褐色土	68→273	平安中～後	X～Y26
274		溝	遺物多く含む。	茶褐色土	274→115	平安中～後 (IX～X期)	X26～27

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	地土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
欠番							
276		小穴群	奈良遺物多い。	灰色土	276→135	奈良～平安	#23～24
277		小穴群		茶褐色土		奈良～平安	Y23
278		小穴		茶褐色土		平安～	#23
279		小穴群		灰色土		古代	#23
欠番							
281		小穴		茶褐色土	281→115	平安～	X23
282		小穴群		灰色土	282→115	奈良～平安	X23
283		小穴		茶褐色土		平安～?	#23
284		小穴群	S-115除去後検出。	灰色土		平安	#23
欠番							
286		小穴		茶褐色土		平安～	Y23
287		小穴		灰色土	287→135	奈良～	#23
288		小穴	平安中期の遺物多い。	黒灰色土	288→135	平安中期	#23
289		小穴群		灰色土		奈良～平安	#23
欠番							
291		小穴群		灰色土		奈良～平安前	#23
292		小穴群		黒灰色土		奈良～平安前	Y23
293		小穴群		黒灰色土		平安中～後	Y23
294		小穴群		黒灰色土		～平安中・後	Y23
欠番							
296		小穴群		黒灰色土		～平安中・後	Y23
297		小穴群		灰茶色土		平安中前後	AA25
298	267S0298	溝	東西に走向、蛇溝か。S-29-704と同一遺構とみられる。	茶灰褐色土		奈期	AF27
299		小穴群	土器多く含む	茶褐色土		平安中・後	AF・AG27
欠番							
301		小穴群	1TSの下から検出。			奈良～平安	AF27
302	267S0302	溝	東西に走向、蛇溝か。土器多く含む。	茶灰褐色土		～奈期（但し当該期の遺物は少な	AF27
303	267S0303	溝	東西に走向、蛇溝か。土器多く含む。S-39と同一遺構とみられる。	灰色土	303SK色土→303	奈期	AG27
304	267S0304	溝	東西に走向、蛇溝か。S-49-704と同一遺構とみられる。土器多く含む。AG29地区では茶褐色土層で遺物取り上げていらようだ		304SK色土→304	奈～奈期	AG27
欠番							
306	267S3306	たまり	付近現場でみられる灰色土層の一部か?	灰色土		～平安中	AC27
307		小穴群		茶黒色土	1TS路東側溝→307	～平安	AC・AG29
308		小穴群		茶黒色土	1TS路路面茶灰色砂→308	～平安中	AC28
309		溝	東西溝、蛇溝か。S-358と同一遺構か。	灰黒色土	358→309	平安	AE27
欠番							
311		小穴群	奈良遺物多い。	灰褐色土		奈良～平安	AE27
312		小穴群		黒灰色土		奈良～平安	AE27
313		小穴		黒灰色土		平安前～中	AC27
314		小穴群		黒灰色土		平安前～中	AC27
欠番							
316		小穴	奈良遺物多い。	灰茶色土		～平安	AC27
317		小穴群	S-46に先行する遺構とみられる。	茶黒色土		奈良～平安中	AC25
318		たまり		黒灰色土		平安	AA26
319		たまり		茶黒色土		平安	Y25
欠番							
321		たまり	S-329とあまり差がない。	黒灰色土	329→321	奈良～	Y26
322		小穴		灰褐色土		奈良後～	Y26
323	267S3323	たまり		黒灰色土	331→323→324	平安後	Y・AA25
324		小穴		茶黒色土	331→323→324	平安	Y25
欠番							
326		小穴群			326→99	平安	Y25
327		小穴群				平安中～後	Y24～25
328	267S3328	たまり		黒灰色土		平安後	Y25
329	267S3329	たまり	S-321とあまり差がない土層。	黒灰色土	329→321	～平安前	Y25～26
欠番							
331		小穴群		黒灰色土	331→329・323	平安前～中	Y25～26
332	267S3332	井戸	方形井戸枠。曲物あり	枠内：暗灰色砂→灰色砂土→黒灰色土。裏込：灰色砂→淡茶灰色土		奈～奴期（裏込）奴～末期（埋め土）	AC26
333		小穴群	須恵器が	黒灰色土		平安(～平安中か)	Y23・24、Y24
334		小穴群		黒灰色土～灰色土		平安前～中	Y24
欠番							
336		小穴群		黒色粘土が主体	336→40	平安前～中	AB27
337	267S0229	溝	南北に走向。S-1229と同一遺構。遺物取り上げたものは量が少ない。			平安前～中	AC25
338		小穴群		灰色土	338→40	奈良～	AC25
339		小穴群		淡黒色土		～平安中頃	Y23
欠番							
341		小穴群				平安	Y24～Y25
342		土坑	遺物なし	黒灰色土			Y23
343		小穴群		黒灰色土		～平安中	AB26
344		小穴	遺物は平安前～中のみ	茶黒色土		平安前～中	AB26

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	備考	現土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時期	地区番号
欠番							
346		小穴		淡茶色土		平安	AC27
347		小穴群	遺物は奈良以降	茶褐色土		奈良～	I19
348		小穴群		黒色土		平安	I19
349		小穴群		茶色土		平安中～後	M18～19
欠番							
351		たまり		茶色土		平安(中期前後)	I16
352		小穴群		黒茶色土		奈良～平安	I19
353		たまり		黒茶色土		平安中～後	I18
354		小穴群	S-355除去後検出	黒茶色土		平安中～後	I18
欠番							
356		小穴群		茶褐色土	50→356	平安	AA19～20
357		小穴群		茶褐色土	50→357	平安	AA19
358	267SD358(309)	溝	東西に走向、軌溝か。AE26地区の茶褐色土除去後検出。S-309と同一遺構とみられる。	茶褐色土	358→309	平安中～後	AE24～26
359	267SB359	たまり	黒灰色土系の凹凸に整地層等が流れ込んだものか。上層にたまった茶褐色土層(12267SB359)で茶褐色土として取り上げ。			平安中～	AE26
欠番							
361	267SB540m	小穴	S-358除去後地山に切り込んで検出される。			平安前～中	AE26
362	267SX362	小穴		茶褐色土・樹褐色粘土（一つの小穴のみ）	298→302→362	平安後	AF27
363		小穴		黒灰色土		平安	AF27
364		小穴	浅い・軟方。	黒灰色土		平安前～中	AF27
欠番							
366		小穴		淡茶灰色土	366→40	奈良～平安	AD26
367		小穴群		灰茶色土～黒灰色土	367→40	平安	AD26
368		たまり	遺物を見ると平安後期にするようである。淡茶灰色土層の一部とみてよいだろう。	黒色粘土		平安中～後	AD18
369	267SD358(309)	溝	東西に走向、軌溝か。S-358と同一遺構とみられる。			平安中～後	AE19～23
欠番							
371	267SX371	浅い土坑	緑灰黒茶青緑×高麗青磁出土	黒茶色土		平安中～	AE20
372	267SD034(046)	溝	東西に走向。S-34・46と同一遺構。	茶褐色粘土(粘土というより土介)		平安後	AE20
373		小穴群		黒色土		平安中～後	AC・AD18～19
374		小穴群		黒灰色土		平安	AC19
欠番							
376		小穴		茶色土	66→376→50(20)→農茶色土層	平安	AC18
377		たまり	茶褐色土層の一部か？遺物は平安後期のもののほどんどない。	茶褐色土		平安中～後	AG24～25
378		小穴群		黒灰色土～黒茶色土		奈良～平安	AG24
379		小穴群		黒茶色土	379→384	奈良～平安	AG23～24
欠番							
381	267SD381	溝	南北に走向、軌溝か。	茶色土	726→383→75・384	平安前～中	AG24
382		小穴		黒茶色土		平安前～	AG24
383		小穴		黒茶色土		平安	AG24
384		小穴群		黒茶色土	384→383・377	奈良～平安	AG24
欠番							
386	267SD386	溝	南北に走向。	茶色土	386→75・383・384	奈良～平安	AG24
387		小穴群		灰色～茶灰褐色土		奈良～	AG24
388		小穴群		茶灰褐色土		奈良～	AG23
389	267SD389	溝	南北に走向、軌溝か。		389→389→75・393・394	～平安中～	AG23
欠番							
391		小穴		茶灰褐色土		奈良～	AG23
392		小穴	奈良遺物多い。	黒灰色土	389→392	平安～	AG23
393		小穴群		黒灰色土	392→389	奈良～	AG23
394		小穴	柱痕あり、径12～13cm。S-389と関係あり？	灰色土	394→384	平安	AG23
欠番							
396		小穴群			396→384	平安	AG23
397		小穴		茶色土		平安	AG23
398		小穴		灰茶色土		平安前～中	AG23
399		小穴	柱痕あり、径10cm S-384と関係あり？	灰色土	399→384	平安	AG24
400	267SX400	包含層	これを除かすると、東西溝267SD405・410・413・420と井戸267SE425のプランを検出。	褐茶色土(褐褐色粘土地含む)		～平安後	AN19～20
401		小穴群	奈良遺物多い。	茶灰色土		平安～	AO20
402		たまり		灰色粘土	405→402	平安後～	AO20
403		土坑		黒灰色土	410→403	平安中～後	AN21
404		小穴		茶色粘含む茶色土	415→404	～平安前	AN21
405	267SD405	溝	東西に走向、軌溝か。	淡灰色粘土～暗茶灰色土	405→402	平安前期か	AO20～21
406		撹乱		灰色粘土	405→406	平安後	AO21
407	267SB400r	小穴	柱痕は土器多く、炭含む	茶灰色粘土（褐方）→灰色粘土（柱痕）	413→407	平安後	AN21

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

通番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
408		小穴	柱痕は土器多く、供食か	茶灰色粘土（版築）→灰色粘土（柱痕）	415→408	平安後	A921
409	(267SB440a) (267SB440e)	小穴群	SB440a・SB440eを一部に含む。	黒色土		平安中～後	A920
410	267SB410	溝	東西に走向、敷瓦か。	暗灰色粘土→橙灰色土		平安後	A919～23
411		小穴群		茶色土	411→419	平安	A921
412	(267SB440a)	小穴群	SB440aを一部に含む。	茶色土		平安中～後	A922
413		小穴群	橙褐色粘土層の上面	茶色土		平安	A919
414	267SB440a	小穴		茶色土		～羅期	A920
415	267SB415	溝	東西に走向、敷瓦か。	暗灰色粘土→橙茶灰色土		平安後	A919～23
416		小穴		黒色土		平安	A922
417	267SB417	小穴		赤・橙土層含む茶色土		平安後	A923
418	267SB440b	小穴		灰色粘土		平安	A923
419		小穴		黄色粘土含む茶色土	435→419	平安中～後	A924
420	267SB420	溝	東西に走向、敷瓦か。	橙灰色粘土→黒灰色土		～SI111期	AH19～23
421		小穴群		茶色土		平安	A922
422	267SB440b	小穴群		茶色土		平安後?	A921
423		小穴群		茶色土		～平安中	A923
424		小穴	遺物なし。		512→480→424		A921
425	267SE425	井戸		黄灰色砂→黄灰色土→黒灰色土(遺物内)→暗灰色粘土(枠内)→黄茶色土(1～412茶黄色土と2つあり)→黒黄色土	425→410→400	平安～羅期	A919
426		小穴		茶色土(版打)→灰色粘土(柱痕)		平安	A921
427		小穴		灰色粘土(版打)→黒色土(柱痕)	512→427	平安～	A922
428		小穴群		茶色土		平安	A922
429	267SB440b	小穴		灰色土(版打)→黒灰色粘土(柱痕)		平安	A922
430	267SB430	溝	東西に走向、敷瓦か。	黒灰色土→茶色土	430→420	平安後	A921～24
431		小穴		灰色土(版打)→黒灰色土(柱痕)		平安中～後	AL22
432		小穴		黒色土(版打)→黒灰色粘土(柱痕)		平安	AL22
433		小穴		茶色土(版打)→黒灰色粘土(柱痕)		平安	AL22
434		小穴		茶色土(版打)→灰色粘土(柱痕)		平安中～後	AL20
435	267SE435	井戸	文字瓦904Ab（「安衆之寺」を見え消し）が多く出土	黄灰色砂→黒灰色粘土→黄色砂(遺物無し)→黒灰色砂(遺物内)→灰色土(枠内)→暗灰色粘土(枠内)→灰色砂		～羅期	A924
436		土坑		黒色土	490→436	平安後	AL21
437		土坑		灰色土	437→512	平安	AL20
438		小穴		茶色土(版打)→灰色粘土(柱痕)		平安後端	AH20
439	267SX439	小穴群	須恵器大甕×3	茶色土		平安	AL20
440	267SB440	掘立柱建物	4間×3間、柱穴12a～e、k～r。なお8・440として取り上げている遺物は8a～1まで。		SB415・429・430・512→440	平安後	AH・AG20～23
441		小穴		茶色土(版打)→灰色粘土(柱痕)		平安	AL21
442		小穴		茶色土(版打)→灰色粘土(柱痕)		平安中～後	AM22
443		小穴群		茶色土		平安後か	AM22
444	267SB444	溝	東西に走向、敷瓦か。	暗茶色土	445→444	平安後	AL26～28
445	267SB445	溝		黄灰色砂→橙褐色粘土(ﾌﾞﾛｯｸ含む)灰色粘砂		平安中～後	AL27～29
446		小穴群		灰色砂		～平安後	AL29
447		小穴		茶灰色土		平安後	AK30
448		小穴群		黒茶色土		～平安中・後	AK30
449		小穴群	橙褐色粘土層除去時、淡茶灰色土層上面で検出。	茶黒色土		平安前～中	AM34
450		たまり		茶褐色土(土器・炭を多く含む)			AH29
451		溝	橙褐色粘土層除去時、淡茶灰色土層上面で検出。	黒灰色土		平安～	AM34
452		たまり状		黒色土		平安～	AK・AL31
453		小穴群		黒色土		平安	AL30
454		たまり状		黒茶色土		平安中～後	AJ31
455	267SB455	溝	455橙褐色粘土は、橙褐色粘土層と同一で、一緒に埋められたものとみられる。	黄灰色土→黒灰色粘土・淡茶色砂→灰色粘土→黄茶色土→茶灰色土→455(=橙褐色粘土)	淡茶灰色土層→455	C期	AH～M30 19～34
456		小穴群		黒茶色土		～平安中	AK30
457		溝		黒茶色土	461→457	平安後	AJ29～30
458	267SX458	小穴		黒茶色土		奈良～平安	AJ29
459		溝	東西に走向、敷瓦か。	暗茶色土	461→459	平安後	AJ30
欠番							
461	267SB461	溝	東西に走向、敷瓦。	黒色土	461→457・459	平安後(～羅期)	AJ29
462		小穴群		黒茶色土		平安中～後	AM32
463		小穴群		茶色土		～平安中	AN21
464	267SB464	溝	東西に走向、敷瓦か。	茶灰色砂		平安前～中	AL31～32
465		溝×たまり	南北に長い	黒茶色土		平安後	AK30
466		小穴群		茶色土		～平安後	AM30～31
467		小穴		黒茶色土(黄色土塊含む)		平安	AL30
468		小穴群		茶灰色粘土		平安	AR27
469		小穴群		茶色土		平安～	AE・AF18
470	267SX470	たまり		灰色粘土→茶色土	496→470	平安後	AF・AG18
471		小穴		灰色粘土(柱痕木片残る)		平安中～後	AF18
472		小穴		灰色粘土(柱痕木片残る)		平安中～後	AF18
473		小穴群		茶色土		平安中～後	AH19～19
474		小穴群		灰茶色土		平安前～	AH19～19
475	267SB475	掘立柱建物	東側に隣接する掘立柱建物267SB340の続きで、本調査区では南北6間分を検出。柱穴1a～h		500茶色粘土→475	平安後	AH～AJ19
476		小穴群		茶色土		平安	AJ19

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況 (古→新)	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
477		溝か		茶灰色土	477→478	平安	AJ19
478	267S478	溝	東西に走向。結溝か。	茶灰色土	479→509→542→543	平安中～後	AJ18～22
479		溝	北東～南西に走向。	茶灰色土	479→478	平安	AK19
480	267S480	たまり	黒茶色粘土出土の瓦類破片S-533出土と接合。 砂(黄色)+?で遺物粘土を行っているものもあるが、黄灰色/+?と同一層と判断。	暗灰色粘土→黒茶色粘土→黄色土→黄灰色/+?	512→521→522→480→449→433	平安後	AL21～22
481	267S481	溝	東西に走向。結溝か。 S-627とも関連か。	茶灰色土		平安中～	AK19～24
482	267S482	小穴群		茶色土		～平安後	AH-AI20
483		小穴群	遺物なし。	茶色土			AH-AI20
484		小穴群		茶色土		平安中～	AE19
485	267S485	土坑	周辺の東西溝より新しい遺構。	灰色粘土→炭層→灰茶色粘土→茶褐色土	511-524→485→478	XIII期	AJ22
486		小穴	礎石あり。	茶灰色土		平安中～後	AF19
487		小穴群		茶色土		奈良～平安	AF-AG19
488		小穴	礎石、瓦あり。	茶灰色土		平安後	AF19
489		小穴	柱材あり。	茶色土		～平安前・中	AF19
490	267S490	掘集中部	S-500茶色粘土上面で検出。各坑交差点東側付近に投置、ウマの頭蓋骨が出土。	淡茶灰色土		平安	AJ27～28
491		土坑×たまり		灰色砂	524→491(東西溝)	平安中～後	AJ20
492		小穴		灰色粘土(脱力)→灰色砂(柱痕)		平安中～	AJ20
493		小穴	遺物なし。	茶色土			AE19
494		小穴	礎石あり。	灰色土		平安	AE19
495	267S495	掘褐色粘土層	多量の土器含む。褐褐色粘土層中の土器集中箇所。	黒茶色土		末期	AK～AM 25～26
496		小穴群		茶灰色土	496→420	平安後	AF-AG18
497		小穴群		茶色土		奈良～平安	AE20
498		小穴群		茶色土		平安	AF20
499		小穴		茶灰色土		平安中～	AF20
500	267S500	褐褐層	左側15路と14条路の交差点から東側の条路上面に広がる	灰黄色土→灰色粘土→黒灰色土→茶色粘土	575→600黒色粘土→570→545→500→495→495茶灰色土層	平安後	AH～AK 18～26
501		小穴群		黒茶色土		平安	AF-AG20
502		小穴		暗灰色土→灰色粘土		平安中前後	AG20
503		小穴群		黒茶色土		奈良～平安中	AF20
504		小穴		灰色土		平安中	AG20
505	267S505	14条路北側溝か	交差点西側で検出。	灰茶色土	505→1121-1129	VII～VIII期	AL32～33
506		小穴群	S-702と重なる小穴あり	灰色土		平安	AE20
507		小穴群		灰色土		平安	AH19～20
508		小穴	規模のpitより大きく深い	灰色土		平安	AE19
509	267S509	たまり		茶色土	511→495→478→509	平安後	AJ20
510	267S510	土坑×掘立柱		青灰色土	510→455	平安後	AN34
511	267S511	溝	東西に走向。結溝	茶灰色土	511→485→478→509	平安後	AJ20～24
512	267S512	溝	東西に走向。結溝	褐褐色粘土塊混ぜ茶色土	512→480-427-437	平安後	AM20～23
513		小穴群		黒茶色土		平安中～後	AM24
514	267S514	小穴群		茶色土		～平安中	AM24
515	267S515	井戸		灰白色砂→茶色粘土→黒灰色土(砂内)→黄灰色土(X期前後)→茶灰色土→黒色粘土	X期改築 XI～末期埋没		AN30～31
516		小穴群		黒色土		奈良～平安	AM24
517		小穴群		茶色土		～平安中・後	AN25～AO25
518		小穴		灰色砂土		平安	AO25
519		小穴	柱痕有り	茶褐色土(柱痕は黄褐色土)		平安後	AN25
520	267S520	溝	14条路南側溝(S-5005灰色粘土の一部)と南に接行している。この間に通行痕跡はみられない。	茶灰色土		平安後	AH19～25
521	267S521	溝	東西に走向。結溝	暗褐色粘土を多く含む茶色土	521→480	平安中～後	AL20～24
522	267S522	溝	東西に走向。結溝	褐褐色粘土を多く含む茶色土	522→480	平安後	AL20～24
523		小穴群		茶色土		～平安	AJ21
524	267S524	溝	東西に走向。結溝 動物の骨、歯牙出土	暗色土塊多く含む茶灰色土	677→524→485→491	平安後	AJ20～24
525	267S525	溝	眺山南北に走向(南西～北東方向)。砂敷道路の側溝の可能性あり か。	茶灰色土		平安後	AJ～AM 20～21
526		小穴群		茶色土		平安	AK20
527		小穴		灰色土	491→527	平安中～後	AK20
528		小穴群		灰色土	533→528	平安	AK20
529		小穴		茶色粘土		平安	AK19
530	267S530	溝	南北に走向。結溝か。1面目S-16と関連か。	茶色土		平安中～後	AK～AM33
531		小穴		茶色土	533→531	平安	AK20
532		小穴		茶色土		奈良～平安前	AJ19～20
533	267S533	溝	東西に走向。結溝か。瓦類破片S-480黒茶色粘土出土分と接合。	茶色土		平安後	AK20～24

5-番号	遺構番号	種　別	備　考	堆土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
534	267SS534	溝	東西に走向、軌道か。この付近は軌道が少ない。5-669とも関連か。遺物は大半SBC。	茶灰色土	567-606→534 淡茶灰色土層→534	平安前～中	A121～22
535	267SS535	溝	1切盛14条組交差点の東西隅を形成する。SS565と関連か？	黄灰色土（黄色土塊含む）		平安中～(K～X期)	AH-A131
536	267SS536	溝	東西に走向、軌道か。付近は軌道は少ない。	茶色土	536→538 淡茶灰色土層→536	～平安前(X期明け)	A121～22
537		小穴			541→537	平安前	A123
538		小穴			536→538	平安前～中	A121
539	267SS539	小穴	定形に近い土師器丸坏が出土。上部に瓦類切	黒茶色土		X期	A120
540	267SB540	掘立柱建物	3間×2間の東西棟。柱穴はa～c、e～i、k～n。540-a 柱穴から1点動物骨片出土。		黒灰色土層→540 160→540→1130	平安前～中	AE～AG 23～27
541		小穴				平安	A123
542	267SS542	溝×たまり	検出時、鐵が数点検出されたが意味のある施設ではないので、除去した。	黒色土	543→542	平安後	A321
543		小穴			478→543→542	平安	AK21
544		小穴群	根石の可能性のある石出土	黒色土		平安	AK23
545	267SF545	左郭一坊路（南側）帯状通行面	交差点南側の左郭一坊路。砂敷き道路に対応するとみられる。545明暗色土は2層に対応するとみられる。545明茶色砂から鬼瓦出土。	茶灰色砂礫→灰白色砂(AA829地区、AF829地区に分かれる)→明茶色砂なし。その他にも、灰白色粗砂、茶褐色土、暗茶色土、茶灰色土、灰茶色土の土色で遺物取り上げをしているが層順は不明。	575→600黒色腐植土→570→545→560→545明茶色砂（710）→500	～平安後か	AB28～
546	267SS546	小穴群		茶灰色土		平安後	AK21
547		小穴		黒色土		平安	AK21
548		小穴				平安	AK21
549		小穴群	鉄滓　歯牙	茶灰色土（黄褐色土塊含む）		平安	AK21～22
550	267SF550	左郭一坊路（南側）帯状通行面	交差点南側の左郭一坊路。砂敷き道路に対応するとみられる。549から続いて北は、705茶褐色砂につながる。遺物は平安中期までが大半。	茶褐色粘土→茶褐色砂		平安中＞後	AD～AE30
551		小穴群		黒茶色土	485→551	平安後	AJ22
552		小穴群		灰色土		平安中～	AJ22
553		溝×小土坑		茶灰色土		平安中～	AJ22
554	267SS554	小穴		茶灰色土	485→554	平安後	AJ22
555	267SS555	土坑（巨石あり）	交差点南の一坊路の中央に検出。脇方もあり。礎石などか？（加工なし）	茶褐色土	555→549明茶色砂	平安後か	AD28
556		小穴	柱痕所不明。	茶灰色土		平安	AJ22
557		小穴		茶灰色土		平安	AJ22
558		小穴群		茶褐色土		平安中～	AJ22
559		土坑か	動物骨（歯牙）あり	茶灰色土		平安	AH-AJ21
560	267SS560	溝	南北に走向、交差点南の一坊路東端の側溝。SS570とセットで道路となる	灰色粘土→茶褐色土	575→600黒色腐植土→570→545→560→500	X～X期	X～AF28
561		小穴群		茶灰色土		平安	AH22
562		小穴		茶灰色土		平安中～	AK22
563		小穴		茶灰色土		平安	AH22
564		小穴		茶灰色土		平安	AH21
565	267SS565 =267SS605	溝	南北に走向、交差点南の一坊路西端の側溝。	灰色粘土→茶色粗砂→茶灰色土		X期埋没	AD～AH 30～34
566		小穴		茶灰色土（柱痕?）		平安	AH21
567		たまり	遺物なし。	茶灰色土	567→534		A122
568		小穴		茶灰色土		平安	AH22
569		たまり		茶灰色土		平安	A122
570	267SS570	左郭一坊路西側溝	交差点南の左郭一坊路側溝。土敷道路時期の西側溝とみられる。坊路を挟んで560と対になるとみられる。西570暗灰色粘土は、600茶黒色腐植土および570と同一遺構とみられる。	暗灰色粘土（-600茶黒色腐植土?-780）→茶黒色土	575→600黒色腐植土→570→545→560→500	埋期～	AB～AE29
571		たまり		茶灰色土	571→574	平安	A122
572		小穴		茶灰色土		奈良～	A122
573		小穴		茶灰色土		平安	AH22
574		たまり		茶灰色土	571→574	奈良～	A122
575	267SS575	溝	南北に走向、交差点南の一坊路中央検出の側溝。	茶灰色土	575→600黒色腐植土→545明茶色砂→560→500	IX期	AC～AE29
576	267SS576	土坑	礎石のような巨石あり。	茶色土	533→576	平安中～後	AK22
577		小穴群		茶黒色土		平安後	AL23
578		小穴		灰色粘土（柱痕あり）		平安	AL23
579	267SS579	小穴	「大瓦」黒色土器出土	茶灰色土		平安中～	AJ21
580	267SF580	帯状硬化面		青灰色砂礫	595→580→600黒色腐植土→570→545明茶色砂・545灰白色砂	埋＞埋期	AD～AG30
581		小穴		茶灰色土		平安	AJ21
582		小穴		茶灰色土		平安	AJ20
583		小穴		茶灰色土		平安	AJ21

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況 (古→新)	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
584		小穴		茶灰色土		平安	AH23
585	267SF585	左折一坊路通行痕跡（土敷道路） 左折一坊路通行痕跡（土敷道路）	交差点南側の左折一坊路、土敷道路と対応？をみられる。	灰色砂		7期か	AC29
586		たまり		茶灰色土		古代	AH23
587		小穴	白磁Ⅰ類	茶灰色土		平安中～	AH23
588	267SX588	小穴	白磁⑧Ⅰ類	茶灰色土		平安後	AH23
589		たまり		茶灰色土	589→583	奈良～	AH22
590	267SD590	溝	南北に走向。595と対になる可能性あり。	暗灰色土→茶茶色土		7期～7期	AC～AE30
591		小穴		茶色土	591→591	平安	W28
592	267SX592	たまり		黒茶色土	592→560	平安前～中	Y27
593	267SX593	たまり		黒色土	593→560	平安前～中	X27
欠番							
595	267SD595 =267SD840	溝	南北に走向。S-840と同一遺構とみられる。淡灰色土は平安前、平安中の遺物が少し混入。灰黄色土、灰色粘土は奈良遺物がまとまっている。	灰黄色土→黄灰色土→灰茶色粘土→淡灰色粘土	595→560	上層V1～V8期 下層V7～V1期	AC～AE30
596		小穴群			596灰茶色土→596	平安	AC30
597		小穴				平安前～中	AG27
598		小穴群				平安～	AE30
欠番							
600	267SX600(765)	条坊道路交差点補修時の路床地形	土敷道路の上面で検出。600茶黒色粘土=S-765の可能性あり。S-574は灰色粘土も同一遺構とみられる。 600黒色粘土には土片・骨・炭含む 600灰色砂には土片・骨多く含む	茶白色粘砂→黒灰色砂→黒灰色粘砂→黒色粘土 茶黒色粘土→SD760→茶色粘土	585・765・795 条坊道路→600(765)→545 明茶色砂・545 灰白色砂→600 →590→淡茶灰色土層		AF・AG28～30
601	267SX1111	溝	東西に走向。S-1111と同遺構	茶灰色土		平安	AH22
602		たまり	整地の可能性大	灰褐色土	602→553・536	平安前～中 (7層～IX期)	A121～22
603		小穴群		茶灰色土		平安	AL23
604		小穴		黒灰色土		～平安	AH22
605	267SX605	溝状遺構	525と同一遺構か？　545茶灰色粘砂(茶灰色砂礫)のことから除去後検出。	茶黄色土	605→545		AA・AG29
606		小穴		茶灰色土	606→524	平安前～中	A121
607		小穴		茶灰色土		平安	AH23
608		小穴		茶灰色土		～平安後	AL23
609		溝	北東～南西に走向。	茶茶色土	609→481・533	平安	AK22
610		掘立柱建物					S～X23～25
611	267SD642	溝	東西に走向。軌溝。S-42と同一の溝。	黒茶色土(粘砂色土塊含む)		平安後	AH26～28
612	267SD675	溝	東西に走向。軌溝。 S-49・75と同一の溝。	茶褐色土(粘砂色土塊含む)	612→604→717 →302	平安後	AH26～28
613		小穴群		茶灰色土		平安	A1・AJ23
614		小穴		茶色土(瓦片)→灰色粘土(木片あり・性砂)		平安	AK25
欠番							
616	267SX616	小穴群		茶灰色土		平安	AK23
617		小穴		茶褐色土		平安中～	A123
618		小穴		茶褐色土		平安	A123
619		たまり状	東西に走向する溝状にもみえる。	黒色土		平安後	AK23
欠番							
621	267SX621	小穴群		茶灰色土		～平安後	AM24～25
622		小穴		灰色土(瓦片)→黒灰色土(性天、炭・土器片)		平安中～後	AM25
623		小穴群		茶灰色土		平安中～後	AL25
624	267SD624	溝	東西に走向。軌溝か。S-666と関連か。	茶色土		平安中～後	AK23
欠番							
626		小穴群		茶灰色土		平安	AM25
627	267SD627	溝	東西に走向。軌溝か。S-[illegible]と一致か。	黒茶色土		平安中～	AL24
628		小穴		茶灰色土	629→628	平安	AL25
629		小穴		茶灰色土	629→628	平安	AL25
欠番							
631		小穴		茶灰色土		平安中～	AL25
632	267SX632	溝状	東西に走向。	茶灰色粘砂(硬化面？)		平安中～(IX期～)	AL24
633	267SD633	溝	南北に走向。軌溝か。S-639・698と同遺構の可能性あり。	茶灰色土(炭・土器片多く含む)	652→633→679	平安後	AJ～AM25
634		溝×小穴		茶灰色土		平安	AK25
欠番							
636	267SX636	小穴	白磁⑧Ⅰ類、⑧Ⅵ類	灰色粘砂		平安後～	AK24
637	267SX637	小穴群	S-854以上の線幅が接合。土師器碗、脚付鍋	茶色土	500→637	平安中～	AK24～25
638	267SX638	小穴		黒色土		平安中～後	AK24
639	267SD639	溝	南北に走向。軌溝か。633・698と同じ遺構の可能性あり。 7316(2)とS-1011の切りあいは、遺構検出時の位置とあり確実ではないが、調査で(1275-0412)→639との見解。	茶黒色土(多量の土器含む)	641・644→639	平安後	AH25
欠番							
641	267SX641	たまり		茶黒色土(多量の土器含む)	641→639	平安後	AH25
642	267SX642	たまり		茶黒色土		平安前～中	AH26
643		小穴群		茶黒色土	暗褐色粘土層→643	平安後	AH26
644		たまり		茶黒色土	644→639	平安	AH25
欠番							
646		小穴群		茶色土		平安	AH25

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
647		小穴群		茶色土		平安	AG25
648		小穴群		茶色土		平安中～後	AG24～25
649		小穴		茶色土		奈良～	AG24
欠番							
651		小穴		茶黒色土		平安	AG24
652		小穴		茶黒色土		平安	AG24
653		小穴		茶黒色土		平安	AG24
654		小穴		茶黒色土		平安	AG24
欠番							
656		たまり		茶黒色土		平安	AG23
657		小穴		茶黒色土		平安	AI23
658		小穴		茶黒色土		平安	AI23
659		小穴		茶黒色土		平安	AI23
欠番							
661	267S661	小穴	遺物は奈良～	茶黒色土	559→661	平安	AI21
662		小穴	遺物は奈良～	茶黒色土	559→662	平安	AI21
663		小穴			751(612)→663	平安後か	AI26
664	267S664	小穴群		黒茶色土		平安後か	AL29
欠番							
666	267S666	溝	東西に走向、絡溝か。624と関連か。	茶色土		平安後か	AK24
667	267S667/627	溝	東西に走向、絡溝か。　627と同一遺構。 付近の南北溝より切りあい古い。	茶灰色土		平安	AJ25～
668		小穴群		茶灰色土		平安後	AJ24～25
669		小穴群		黒色土		平安	AJ24～25
欠番							
671		小穴		黄茶色		平安	AJ24
672		小穴		茶色土(粘方)→灰色粘土(柱痕)		平安	AJ25
673		小穴		黄茶色土		平安	AJ25
674		小穴群		黒灰色土		平安中～後	AK29
欠番							
676		小穴群		茶灰色土		平安後	AK29
677	267S677	溝	南北に走向、絡溝か。	灰色土	677→524	平安後	AJ24
678		小穴群		茶灰色土		平安後	AJ28～29
679	267S679	土坑	円形鉄みをもつ礎石とみられた巨石あり。	茶灰色土	633→679	平安後か	AJ25
欠番							
681		小穴		灰色粘土(柱痕あり)		平安中～後	AI27
682		小穴群		黒茶色土		平安中～後	AI27～28
683		小穴		茶灰色土		平安	AI27～28
684	267S684	溝	南北に走向、絡溝か。南端はS-611で止まる。	茶灰色土		平安中～後	AH～AI27
欠番							
686		小穴群		茶黒色土		平安中～後	AI・AJ24
687		小穴		茶黒色土			AI24
688	267S688	掘状	東西に走向、絡溝か。S-534と関連か。	茶灰色土	688→627	平安	AI24
689		小穴		茶灰色土		平安中～後	AI24
欠番							
691		小穴		茶灰色土		平安	AI24
692		たまり	機所不明。	黒茶色土		平安後	AI24
693		小穴		茶黒色土(粘方)→黒茶色土(柱痕)		～平安前・中	AI24
694		小穴		黒茶色土		平安	AI24
欠番							
696	267S696	溝	南北に走向、絡溝か。	茶黒土	697→696	平安中～後	AI24～25
697	267S697	溝	東21南北に走向、絡溝か。	茶灰色土	697→696	平安中～後	AI24
698	267S698	溝	南北に走向、絡溝か。　633・639と同一遺構の可能性あり。	茶黒色土(木炭含む)		平安後	AI25
699	267S699	たまり		茶黒色土(木炭含む)	699→698→702	平安後	AI25
700	267SE700 (=236-158480)	大型掘立柱建物(北棟)	236-158480と同一。西端調査。柱穴20穴を確認。よって建物規模15×16間の南北棟、母屋3×16間。			雛期～	U～AF 17～20
701	267S701	土坑		茶黒色土	701→389→304	平安中	AF・AG23
702		小穴	702が702ゥ南あり。	茶色土	702→304	平安前～	AG23
703		小穴		茶色土	703→303	奈良～	AG23
704		たまりヌ土坑		茶黒色土	704→303	平安中～後	AG25
705	267SF705	左第一坊路（砂敷道路）	主に交差点北側の路面堆積、路盤も含む。（新期）	茶黒色砂→茶灰色砂→灰色砂→黒色砂→灰白色砂→白色砂→明茶色砂	710→705	平安中(区S～X期)	AH～AK 29～30
706		小穴群		黒灰色土		奈良～	AG27
707		小穴群		灰褐色粘土	707→304	平安後	AG27
708		小穴		茶黒色土		平安	AG27
709		小穴群		黒灰色土	709→303	奈良～平安	AG26～27
710	267SF710	左第一坊路（砂敷道路）	主に交差点北側の路面堆積、路盤も含む。（旧期）	灰色土→灰白色砂→黄灰色褐砂→黒色砂→茶灰色褐砂	710→705		AH～AS29
711		小穴		黒灰色土	711→304→303	平安前～中	AG27
712	267S712	小穴群		黒灰色土		平安	AG27
713		小穴群		黒黒灰色土	713→304	平安後	AG24
714	267S714	小穴群	白磁皿X類(輪花)	黒色土	714→327	平安	AG25
715	267SF715	14条路（砂敷道路）	交差点東側の14条路路面および側溝を形成する砂敷路盤。			雛期前後	AI～AL 18～20
716	267S716	溝	南北に走向、遺構埋没時期から337(1229)とは別遺構。			平安後	AG25
717	267S717	たまり	719とは304を挟んですぐ隣で検出されているが、別遺構。	茶褐色土層か。	612→604→717→304	平安後	AG26

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

5-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
719	267SX719	たまり	719と718の関係ですぐ脇で検出されているが，別遺構。	茶褐色土+わずかに橙褐色粘土含む。	718→717	平安後	AG25～26
719		溝	絵溝か。	淡黒灰色土	719→717	平安前～中	AG26
720	267SF720	14条坊・砂敷道路）	交差点西側の14条坊路面および路盤を形成する砂敷路盤。	暗茶色土→暗褐色土		平安中（9層～B期頃か）	A1～A6 30～34
721		溝	南北に走向，絵溝か。	黒灰色土		～平安中	AD～AG26
722		たまり か		黒色土黄ヶ灰茶色土	722→716		AG25
723	267SX723	たまり		灰黒色土		平安前～中	AF26
724		小穴群		黒灰色土		平安前～中	AG26～27
725	267SF725	左郭一坊路路盤（砂敷道路）	交差点北東にあり，SF705の東に沿って平行する。左郭一坊路砂敷路盤の一部。	灰色砂→灰褐色土→茶色砂	735・740→725→705	灰色砂（平安）灰褐色土（平安前～中）茶色砂（平安中（9層前後か））	AK～AM 28～29
726		小穴		灰黒色土	726→381	奈良～	AG24
727	267SX727	小穴群				平安	AF25～26
729		小穴		褐褐色粘土	729→303	平安	AG25
729		小穴群	黒色土器8個ほどが破	黒色土		平安	AF25
730	267SD730	条坊道路（土敷道路）側溝	交差点条路北西で検出。土敷道路に伴う道路側溝。左郭一坊路の西側溝で道路を挟んでSD740・745と対になる。14条路の北側溝で，道路を挟んで735と対になる。暗褐色砂層（整地）765（腐植土たまり）に切り込む。	灰褐色粘土→灰色粘土	740→730	9層期	AK29～34
731		小穴群		茶褐色土		平安後	AF25
732		小穴群		茶褐色土		平安後	AF24
733		小穴		灰褐色土	733→302	平安	AF26
734	267SX734	たまり	SD759（東西溝）より新しい。	茶褐色土の一部	743→734	平安後（A11～B期頃か）	AE25
735	267SD735	坊路（土敷道路）東側溝	交差点条路北西で検出。左郭一坊路を挟んでSD730と対になる。735・740・745は一連の遺構。遺物は少ない。	茶灰色砂	735→725	平安中～	AL・AM28
736	267SX736	小穴群		黒灰色土		平安	AD25～26
737		小穴群		淡灰色土		平安	AE25
738		小穴		茶褐色土		平安	AE25
739		小穴群		黒灰色土		平安	AE25
740	267SD740	坊路（土敷道路）東側溝	交差点条路北西で検出。左郭一坊路を挟んでSD730と対になる。735・740・745は一連の遺構。	暗緑灰色土	745・765→740→725	平安中（9層期頃）	AK・AL28
741		小穴群		淡灰色土・黒灰色土		平安前～中	AE25
742		小穴群		灰色土	339→742	奈良～（平安前か）	AE25
743		小穴×たまり		灰色～淡灰茶色土	743→734	平安後	AE25
744		小穴群		黒灰色土		平安	AE25
745	267SD745	たまり状×側溝	交差点北東隅付近で検出。735・740・745は一連の遺構。	灰白色土	750・765→745→740		AK27～28
746		小穴×土坑	東西に走向。	黒色～黒灰色土	752→746	～平安中か	AE25
747		たまり		茶褐色土層の一部か	48→747	平安後か	AE22～23
748	267SX748	小穴群		茶色土～茶褐色土		平安後か	AF23
749		小穴群		茶色土～茶褐色土		平安後か	AF23
750	267SD750	条坊（土敷道路）北側溝	条路（土敷道路（735・795））の北側溝。左郭一坊路東側溝（735・740・745）ともつながる。		750→745	平安中（9層期頃）	AK29～27
751		小穴			302→751	平安	AF23
752		小穴群			752→746	平安	AE25
753		小穴		茶褐色土	753→754	平安	AF23
754		溝	東西に走向，絵溝か。28・298と関連するか。	茶褐色土	753→754→298	平安後か	AF29～23
755	267SD755	条坊道路（土敷道路）南側溝	交差点条路南西で検出。土敷道路に伴う道路側溝。14条路の南側溝で道路を挟んでSD730と対になる。また左郭一坊路の西側溝でもあり，570と一連の遺構だった可能性がある。	暗赤色砂（下層）→灰褐色土（上層）	760→755→600(765)	9層～B期	AM29～AJ32
756		小穴群	黒灰色土層除去時検出。	茶色土～黒色土		平安前	AF23
757		小穴群		茶色土	757(612・431→732	～平安後	AG21～22
758		小穴群				平安	AG21
759		小穴			304→759の可能性あり	平安後か	AG21
760	267SX760	くぼみ（道路補修痕？）	交差点中央。腐植土(765)上の水流によるとそれが白色砂で埋まったもの。	白色砂	765→760	平安中	AJ29
761		溝	東西に走向，絵溝か。SD004と同遺構とみられる。	茶褐色土		平安	AG21
762		小穴群		茶色土		平安	AG22
763		小穴群		茶色土		平安	AG22
764		小穴群		茶色土		平安	AG22
765	267SX600(765)	条坊道路交差点補修時の路床地業	土敷道路の上面で検出。S-600と同一遺構。	腐植土			AH28～AM29
766		小穴群		黒灰色～淡茶色土		平安後	AG22
767	267SX765	小穴群	平安後～中の遺物多い	黒灰色土埋土のものがメイン	767→304	平安	AG22
768		小穴群		黒灰色土		平安前～	AG22
769	267SX769	土坑状		黒灰色土	769→304	平安	AG21
770	267SX770	路床基盤工	S-765と土色違いあり		770→600(765)	平安前	AL・AM28～29
771		小穴群		黒灰色土～淡茶色土	771→75	平安	AG21
772		小穴		黒灰色土		平安	AG21
773		小穴		茶褐色土		平安	AF20

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

通番	遺構番号	種別	備考	地土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時期	地区番号
774		小穴		茶褐色土		平安	AF22
775	267SX775	路床基盤工	S-765と土色違いあり	砂質土		VIII～VIII期	AL-AM28～29
776		小穴群		茶褐色土	302→776	平安	AF28～21
777		小穴	S-896の一部の掘りのこし。			平安	AF29
778		小穴		茶褐色土	黒灰色土層→778	～平安中	AF21
779		小穴		茶黒色土	262除去後検出	平安	AF22
780	267SD780	道路側溝	交差点南の左折一坊路側溝。砂敷道路からも敷道跡にかけての西側溝とみられる。西路を挟んで680と対になるとみられる。 780は、600茶色粘質土、570暗灰色粘土と同一遺構とみられる。	黒灰色土	835→780	VIII～VIII期	AH-AI29
781	267SX781	小穴群	場所不明。	黒灰色土		平安前～	AF22
782		小穴群		黒灰色土		平安前～	AE23
783		小穴群		黒灰色土		平安	AE21～22
784		小穴		黒灰色土	784→358	平安	AE22
785	267SF785(795)	14条路路面・路盤	交差点東側の土敷道路。795に灰緑色砂層出が復存したものを785とした。 仮説理加整出土。	黒緑土(青灰色土)			AJ16～AK33
786		小穴群		黒灰色土		平安	AF21
787		小穴群	S-506と重なる小穴あり。	黒灰色土		平安中～後	AE29
788		小穴群		黒灰色土	288→302	平安	AF29
789		小穴群		灰茶色土	789→254	平安前～中	AF28～21
790	267SF790	路床基盤工か	600(765)の敷植土直下。地山直上。遺物（瓦・木製）は路面直上を採取。	灰青色土+1(地山・灰緑色砂が変色したもの)			AE28～AE30
791	267SE791	掘立柱建物?	1可調、東西棟。 埋土が異なっており同時併存は困難か?			平安前～中	AD19～20
792		小穴群		黒灰色土		平安	AD19
793		小穴群		黒灰色土		平安	AD19
794	267SX794	小穴		黒灰色土	794→794a	平安前～	AD19
795	267SF785(795)	14条路路面・路盤	交差点東西検出の土敷条路。	灰緑色土+1(地山)			AJ16～AK33
796		小穴群		灰褐色土		奈良～	AE29
797		小穴群	場所不明。	黒灰色土		奈良～平安	AE29
798		小穴群		茶黒色土	黒灰色土層→798	～平安中	AD21
799		土坑群×たまり		茶黒色土	黒灰色土層→799	平安中～	AD22
800	267SD800	道路側溝	坊路南西で検出。	暗褐色土	810→805→800	VI×VIII期～	AI-AJ31
801		たまり	606と同遺構。あるいは606除去後検出遺構。	茶灰色土		平安後	AI25
802		小穴		茶黒色土	606→802	平安	AI25
803		小穴		茶黒色土		平安前～	AG26
804		小穴		茶黒色土	612→804→717→301	平安後	AG26
805	267SD805(=806B)	道路側溝		茶褐色土(VI×VIII期)→灰色粘土(X期)	1422→805→800	主体はVI×VIII期、埋没はX期	AH-AI31
806		小穴		茶黒色土	612→806	平安	AH26
807		小穴群		茶黒色土	612→807	平安	AH26
808		小穴群		茶黒色土		平安	AH26
809		小穴		茶黒色土	612→809	平安	AH26
810	267SD810	条路南側溝か	交差点南西で検出。 「環境土（S-765）の下から検出されていることを確認」	暗灰色粘土	810→800	IV期前後	AI30～33
811	267SD811	溝	絵溝か。自然滞丸刷出土。掘り起こした土塊に伴って出土した木製品の埋蔵時は不明だが、溝の絵面で出土しており、本遺構もしくは下層の黒灰色土層から出土した可能性あり。	茶灰色土	811→837	平安後	AH-AI26
812		廃状	南北に走向、絵溝下の一部か。	茶灰色土		平安	AI26
813		小穴		茶黒色土	639除去後検出	平安	AE25
814		小穴	柱痕あり	茶色土(黒灰)→黒灰色粘質土(柱痕)		平安後	AE25
815	267SD815	条路南側溝か	交差点南西で検出。	暗白色砂→灰色粘土→暗灰色粘土		平安中(VIII-IX期～)	AJ31～33
816		小穴群		茶黒色土		平安後	AL28
817		小穴群		茶灰色土		平安中～	AL28
818		小穴群		茶灰色土		平安後	AJ27
819	267SX819	たまり	石	黒灰色土		平安後か	AJ27
820	267SD820	条路南側溝or廃状通行帯	820と814間白色砂は同一遺構の可能性あり。	暗白色砂		平安前	AJ30
821		小穴群		茶灰色土		平安	AI26
822		小穴		茶灰色土		平安中～	AI26
823		小穴		黒茶色土		平安	AH24
824		小穴		黒茶色土		平安	AH24
825	267SD825	条路南側溝or廃状通行帯		灰褐色砂	825→815	～VIII期	AE31～33
826	267SD826	溝	南北に走向、絵溝か。 S-873と関連か。	茶灰色土		平安後	AI～AH26
827	267SD827(827)	溝	東西に走向、絵溝か。 S-667と同一 付近の廃土溝より切りあい古い。	茶黒色土		平安後	AJ26～27
828	267SD828	溝	南北に走向、絵溝か。	茶灰色土	829→828→833→834	平安後	AI-AJ26
829	267SD829	廃状	南北に走向、絵溝か。	茶灰色土	829→828	平安後	AJ25
830	267SD830	土坑	形状から井戸の可能性あり。	茶灰色砂→淡黄灰色粘土	875→880→830	～V-VI期多い	AL33

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

5-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
831		小穴		茶灰色土		平安後か	AJ27
832		小穴		茶灰色土		平安	AJ25
833		小穴		茶灰色土		平安	AJ26
834		小穴		茶灰色土		平安	AJ26
835	267SD835	道路側溝		灰色粘土	835→796	8c代(～VII期)	AB-AI29～30
836		小穴		茶灰色土		平安	AJ26
837		小穴		茶灰色土	811→837	平安後	AJ26
838		たまり状		茶灰色砂	841→838	平安	AK-AL29
839		小穴群		茶灰色土	839→838	平安後	AH30
840	267SD695-SD840	道路側溝	5-595と同一遺構とみられる。	灰茶色土	1429→840		
841		溝か土坑	南北に走向。	茶黒色土	874→841→838	平安中～後	AL27
842		小穴		茶灰色土		平安	AJ26
843		小穴群	木片出土。	茶灰色粘質土		平安	AJ26
844		小穴		茶灰色粘質土	844→848	平安後	AJ26
845	267SD845	道路側溝	交差点南東を画する東西溝。	灰青色粘土		～VIII期	AJ26～28
846		溝	東西に走向。畝溝か。	茶灰色土	846→884	平安	AJ26～27
847	267SD847	溝か		茶灰色土	811→847→826	平安	AJ26
848		小穴		茶灰色土	844→848	平安	AJ26
849		小穴群		茶灰色土	855→849	平安後	AM27～28
850	267SD850	溝	東西に走向。西の14条路北側溝より北に沿う東西溝か。	茶褐色砂		8c～平安前	AM30～32
851		小穴群		茶灰色土		平安中～後	AJ26
852	267SD852	たまり	東西溝群・南北溝群の時期差をうかがえる遺構。しかし、遺物は破片のみ。	茶灰色土	872→852→633	平安	AK25～26
853		小穴	場所不明。	茶灰色土		平安	AE26
854	267SD854	小穴	5-633の緑釉破片と接合	茶灰色土	500→854	平安中～後	AE26
855	267SF855	道路遺行痕	5-795-796砂去後検出。	赤色砂		～VI期	AK20～25
856		小穴		茶灰色土		平安	AJ26
857		小穴		茶灰色土		平安後	AE26
858		小穴		茶灰色土		平安中～後	AE26
859		小穴		茶灰色土		平安	AE26
860	267SD860	道路側溝	860と870は同一遺構の可能性あり。	茶色砂・茶灰色砂		8c	AM29～30
861		小穴群		茶灰色土		平安中～後	AK26・27
862		小穴群		茶灰色土		平安	AL26
863		小穴群		茶灰色土		平安後	AK26・27
864		溝状		茶灰色砂質土	874→864	平安	AK27
865	267SD865	道路側溝		灰色粘土～淡灰色砂	1441→865	V～VI期	AL-AM29
866		小穴群		茶灰色土		平安	AM26
867		小穴		茶灰色土		平安	AE26
868		小穴群		灰色砂	855→868	平安後	AN25～26
869	267SD869	溝	南北に走向。畝溝の一部か。自然本出土。	灰色砂		平安後	AM-AN27
870	267SD870	道路側溝	860と870は同一遺構の可能性あり。	暗桃茶色砂		8c後半（IV期）	AL31～33
871	267SD871	小穴群	南北溝群より新しいとみられる。	灰色砂		平安後	AN26
872	267SD872	溝	東西に走向。畝溝か。側溝の南北溝群より古い。	茶灰色土	872→852	平安後	AK26～27
873	267SD873	溝	南北に走向。畝溝か。5-826と関連か。	茶灰色土		末期	AM-AN26
874	267SD874	溝	南北に走向。畝溝か。	茶灰色土	872→874→884・841・879	平安中～後	AK27
875	267SD875	道路側溝		暗茶色砂	875→830→730	末期埋没	AK29～33
876	267SD876	小穴		茶灰色土	684→876	平安中～後	AL27
877	267SD877	たまり	この下が一坊路路面。	茶灰色土	855→877	平安中～後	AM29
878	267SD878	小穴群		茶灰色土	872→878	平安中～後	AM-AN26
879		小穴		茶灰色土	874→879	平安後	AM27
880	267SD880	溝状	西の14条路路面上。あるいは北側溝	茶褐色砂	880→875	末期か	AL32
881		小穴群		茶灰色土	855→881	平安中～後	AN27～28
882		小穴群		茶灰色土	855→882	平安後	AN28～29
883	267SD883	たまり		茶灰色土	855→883→894	平安後	AN28
884		小穴群		茶灰色土	855→884	平安後	AN29
885	267SF885	道路遺行痕		暗灰色土・淡赤色砂・灰緑色シト・暗灰色シト・淡黄色シト以上は、14条路西側で検出した西側溝でそれぞれの西側に埋没している土色を書き出している。互いの切り合い・関係はなし。）			AK29～33
886		小穴		茶灰色土		平安後	AJ24
887		小穴	場所不明。	茶灰色土		平安	AM26
888		小穴	場所不明。	茶灰色土		平安	AH18
889		小穴		茶灰色土		平安	AF19
欠番							
891		小穴群	平安前～中の遺物多い	茶灰色土		平安前～中か	AO26～27
892	267SD892	小穴群		茶灰色土		平安	AO28～29
893		たまり		茶灰色土		平安	AO29
894		小穴		黒色粘質土（樹幹色粘土混じる）	883→894	平安	AN28
895		小穴		茶灰色土		奈良～平安	AO26
896		小穴	遺物なし。	茶灰色土			AO26
897		小穴群		灰茶色土		平安	AJ23
898		たまり		灰茶色土		平安	AK-AL22
899		小穴	木片出土。	灰茶色土	500→899	平安中～後	AK22
欠番							
901		小穴		茶黒色土	淡茶灰色土層→901	平安中～後	AH22
902		小穴群		茶黒色土		平安後	AH23
903	267SD903	小穴		茶黒色土		平安	AH24
904		溝	東西に走向。	茶黒色土	907→906→904	平安後	AH23

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
欠番							
906		溝	東西に走向。	茶黒色土	907→906→904	平安後	AD23
907	267SD907	溝	南北に走向。南北土層断面図参照。	茶黒色土	907→906	平安後	AD23
908	267SX908	たまり×土坑	淡茶灰色土層の可能性あり。	淡茶灰色土～茶黒色土(砂質含む)		平安中～後	AD24
909		小穴群	40個去後検出。	茶色土～黒灰色土	909→40	奈良～平安	AC24
欠番							
911		小穴群		茶褐色土		平安	AC19～20
912	267SX912	小穴	1面目調査では、一段下げてとめた。	黒灰色土		平安	AC19
913		たまり		茶黒色土＋黄色土塊		平安中～後	AB～AC20
914		小穴		灰茶色土	916→754→914	平安後	AF21
欠番							
916		小穴			916→754→914	平安後	AF21
917	267SD917	溝	南北に走向。	茶色砂		平安後	AB19
918		小穴群		茶褐色土(砂質土)		平安	AB18～20
919		小穴		黒灰色土		平安中～後	AB20
欠番							
921		小穴群				平安	AC22～23
922		小穴		茶褐色砂質土（粗かい）一暗褐色粘土（柱痕、遺物なし）		平安	AD21
923		小穴群		茶褐色土～茶色土		平安後	X-Y23
924		小穴群	96個去後検出	茶褐色砂質土	96個去後検出	平安中～	AC21
欠番							
926		小穴群		茶黒色土	40黒灰色土→926→96	平安～	AC23
927		小穴群				平安中～	X20
928		たまり×掘建柱		茶黒色土	1059→928	平安中	Y～X20
929～1000は欠番							
1001		小穴群		灰茶色土		奈良～	AL23
1002		小穴		灰茶色土	500→1002	平安	AK22
1003		溝	500茶色粘土を切り込む溝。	橙色土	1004→1003	平安後	AJ25～27
1004		溝	500茶色粘土を切り込む溝。	黄橙色土	1004→1003	平安後	AJ24～27
欠番							
1006			※1006は遺構番号重複のため、1041に変更。				
1007	267SX1007	小穴群		茶灰色土		平安後	Y19
1008		小穴群		茶灰色土		平安後	U19
1009		小穴群		黒茶色土	115→1009	平安後～	W18～19
欠番							
1011	267SD1011	溝	南北に走向。S-1017と関連か。	茶灰色土	1017→1011	平安後	U18
1012		小穴群		茶灰色土		平安	U19
1013	267SB700-柱痕	小穴	柱が遺存。S-700(柱痕部分。	黒茶色土		奈良～	U18
1014		小穴	柱が遺存。	黒茶色土		平安～	Y19
欠番							
1016	267SD1016	たまり		茶灰色土	1021→1016	平安後	T18
1017	267SD1017	溝	南北に走向。S-1011と関連か。	茶灰色土	1021→1017→1011	平安後	S19
1018	267SX1018	小穴群		茶灰色土		平安後	S18
1019		小穴	柱痕あり。柱材遺存。	黒茶色土		平安	T18
欠番							
1021		たまり		茶灰色土(灰色強い)	1021→1016・1017	平安後	T18
1022		小穴		灰色粘土	1017→1022	平安	S18
1023	267SX1023	たまり		茶黒色土	1040・1029→1023	平安中～	Y19
1024		小穴群		茶灰色土		平安	X20
1025		小穴群		茶灰色土		～平安後	S-T18～19
1026		小穴群		茶灰色土		～平安後	V20
1027	267SX1027	小穴群	畿内系土師器出土。	茶灰色土		平安	W21
1028		小穴群		茶灰色土		平安	W19
1029		小穴		茶灰色土	1029→1023	平安中～後	W19
欠番							
1031		小穴群		茶灰色土		平安後	V20
1032		たまり	南北に走向。	茶灰色土		平安	V20
1033	267SX1033	小穴	須恵器小皿出土。	茶灰色土		平安	V20
1034	267SX1034	溝×たまり	東西に走向。	茶灰色土	1043→1034	平安後	V20
欠番							
1036		小穴群		茶灰色土	1042→1036	平安	W22
1037		小穴群		茶灰色土		平安	X23
1038		小穴	掘立柱建物の柱穴の一つの可能性大。	茶色土		平安	Y22
1039	267SX1039	小穴群		茶灰色土		平安	Y20
欠番							
1041	267SX1041	たまり	遺構番号重複のため123-24地区のS-1006をS-1041へ変更。	濃茶色砂質土	1041→20	平安後(～遺構)	Y23～24
1042	267SX1042	たまり	南北に走向。W21・X21地区の平安後期遺物多少含む。混入か？。S-1042・1054・1080は一連のものか。	黒灰色粘質土	1041→115・1048	X期	U22～X22
1043		小穴		茶灰色土	1043→1034	平安後	V20
1044		小穴		茶色土		奈良～	V21
欠番							
1046		たまり		茶黒色土	1046→1023	平安前～	Y19
1047		小穴群				平安後	U22
1048		小穴群		茶色土	1042→1048		X22
1049		小穴	柱痕不明。柱痕あり。	茶色土		奈良～	U21
欠番							
1051	267SX1051	小穴群		茶灰色土		平安後	U-V21
1052		小穴	柱痕?あり。	茶灰色土		平安後か	V21
1053		小穴群		黒茶色土		平安	W22

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
1054	267S1054	たまり	遺物少ない。S-1042・1054・1058は一連のものか。	黒灰色土		平安前～中	V22
欠番							
1056		小穴		灰茶色土		平安前～中	U21
1057		小穴		灰茶色土		奈良～	T21
1058	267S1058	溝状	S-1054・1058・1076は一連のものか。	黒灰色土		VI～V期	U21
1059		溝状		茶灰色土	1059→928	7期か	X19
欠番							
1061		小穴群	平安前～の遺物多い。（1058のためとみられる。）	茶灰色土	1058→1061	平安前～	U・V21
1062		小穴		黒色土	1058→1062	古代	U21
1063		小穴群		茶灰色土	1042→1063	平安後は？	U～V22
1064		小穴群		黒色土	1042→1064	平安中～後	U～V22
欠番							
1066	267S1066	小穴	切り合いから平安後期の遺構と判断	黒灰色土	1042→1064→1066	平安後	V23
1067	267S1067	溝	南北に走向。	茶灰色土		平安後	T19
1068		溝	南北に走向。	茶灰色土		平安中～後か	V21
1069		たまり		黒灰色土		平安中～	T21～22
欠番							
1071		たまり		茶灰色土		平安前～中	S19
1072		小穴		茶色土	1072→1067	平安	T19
1073		小穴		黒灰色土	1073→1042	平安	V22
1074	267S1074	小穴群	黒色土層小穴。	茶色土	1074→1042	平安後	V22
欠番							
1076	267S1076	たまり	S-1054・1058・1076は一連のものか。	黒灰色土		平安前～中	U21
1077		小穴	上に石が二つあった。	黒色土	1077→1042		V22
1078		小穴		黒色土	1058→1078	平安前～中	T21
1079		小穴		黄茶色土→黒灰色土（柱痕）		平安後	AN26
欠番							
1081		小穴群		茶色砂（褐色土塊含む）		平安中頃	AM30～31
1082		小穴群		茶色砂（褐色土塊含む）		平安中～？	AM・AL30
1083		小穴群	磨所下明。	茶色砂（褐色土塊含む）		平安中（VII～VIII期）	AL32
1084		小穴	遺物は平安前～中	茶灰色土	500→1084	平安前～中	AK19
欠番							
1086		小穴群		茶灰色土		平安	AK・AJ19
1087		小穴群		茶灰色土		平安前～	AI19
1088	267S1088	溝	遺物は平安前～中		520→1088	平安前～中	AH19
1089		小穴		黒茶色土		平安後	AH22
欠番							
1091		溝状		黒茶色土	茶黒灰色土層→1091	平安前～中	AI19
1092		小穴群		黒茶色土		奈良～	AH18
1093		小穴群		黒茶色土		奈良～平安前	AH19
1094		たまり		黒茶色土		平安後か？	AG21
1095	267S1095	掘立柱建物	1間×2間は上の南北棟。井戸況は8を図とように検出。柱穴は4～6。S-425周辺、1096は別pitと判断。	灰色土		平安中か	AN19
1096		小穴	磨所下明。遺物なし。	茶灰色土			AR21
1097		たまり		茶灰色土	1097→520	平安	AR21
1098	267S1098	溝状		茶色砂		奈良～平安前？	AH19
1099		たまり		黒茶色土（黄色塊含む）		平安	AJ21
1100	267S1100	土坑		灰色粘土→黒灰色粘土→淡茶灰色土	1100→5068(色粘土	平安後	AH26
1101	267S1101	溝		黒灰色粘質土	500→1101	平安前三中	AJ～AN20
1102		小穴		黒茶色土		平安	AL21
1103		溝状		黒茶色土	S-520→1103	平安前～中	AH23
1104		たまり		黒茶色土（同じ中層じる）	1104→520	平安前三中	AH23
1105	267S1105	井戸[8]	灰茶色土→淡灰色粘土→灰色粘土（井戸内内）→黒色土			VI期造成、VIII期廃絶か	AC19
1106		溝状	S-1105の続きか？	黒茶色土		平安後は？	AH23
1107		小穴群		黒茶色土		～平安後	AG23
1108		小穴群		黒茶色土		平安中～	AL20
1109		たまり		黒茶色土		平安	AR23
1110	267S1110	井戸[4]	茶青色土→灰黄色土→黒色土			VIII～VIII期	AE・AF25
1111		溝×たまり	（S-664）	黒茶色土		平安	AH22
1112		小穴群	8%除去後検出した黒色土系埋土遺構。	黒茶色土		平安前～中	AL19
1113	267S1113	たまり×溝状	8%除去後検出した黒色土系埋土遺構。	黒茶色土		平安前～	AL18
1114	267S1114	小穴群	8%除去後検出した黒色土系埋土遺構。水晶（六角柱）出土。	黒茶色土		VIII～VIII期	AK19
欠番							
1116				黒茶色土	1116→1103	平安前～	AK20
1117	267S1117	小穴群		黒茶色土	1117→1098	奈良～	AH19
1118	267S1118	小穴群		灰色砂		平安後	AK23
1119		小穴		黒色土		平安	AK23
1120	267S1120	井戸[9]	茶褐色土→灰色砂→黄黄色土→黒色粘土→黒色土			平安前～中（VIII～IX期か）	AE20
1121	267S1121	小穴群	灰色粘土	茶灰色土	505→1121	VIII期～	AL23
1122		小穴群		黒茶色土		平安	AH20もしくはAH26
1123		小穴群	灰色砂			平安後	AH・AI21
1124	267S1124	小穴群	磨所下明。土師器耳皿	茶灰色土		平安中～後	AI21
1125	267S1125	土坑		茶灰色砂→黒色土		平安前～中	AH22

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

通番	遺構番号	種別	備考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時期	地区番号
1126		土坑		黒色土		～平安前	AB33
1127		小穴群		黒色土		平安前～中	AB33
1128		小穴群		茶色粘土		平安	AB33
1129		溝		黒色土	505→1129	9世C前～	AB33
1130	267SB1130	土坑		黒色土→黒灰色土(AD-AE24黒灰色砂に詰め)	160→1130	9世前切7	AD-AE24
1131	267SX1131	小穴群	柵(格子、文字?)	黒色土		平安前(9世前ヵ)	AE33～34
1132		小穴群	新旧遺物まじる。	茶色粘土		平安前～後	AE33～34
1133		小穴群		灰色粘土		平安	AE33～34
1134	267SX1134	小穴群		茶色土		平安中～	A132
1135	267SB1135	掘立柱建物	2間×2間。	灰茶色粘土(柱根材あり)→白色土4)			AF-AG24～25
1136		溝状	遺物なし。	灰色粘砂	1123→1136		A129～30
1137		小穴群		黒色土		奈良～平安前期	AS-AS27
1138	267SX1138	小穴群		黒色土		奈良～平安前期	AS27
1139	267SX1139	土坑状		黒色土		9世前	AS32
1140	267SB1140	自然流路か	地山に切り込む粗砂埋土の凹凸。	暗茶色土(AE25地区のみ)→暗茶色砂(上層の順序残しか、混入したか)			AE28～
1141		小穴群		灰色土		～平安前	AE32
1142	267SX1142	たまり		黒灰色土	1126→1142→505	9世前～	AL-AM32
1143	267SX1143	小穴群		灰色土		平安	AE32
1144		小穴群		黒色土		平安中～	AE32
1145	267SX1145	杭あり（ムーロ）	柱穴aに柱根材残存。	黒灰色土		古代	A124～25
1146		溝		黒色土		奈良～	AL31
1147	267SB1147	溝		黒色土	1139→1142→1147	9世C9世前	AL-AM32
1148		小穴群		黒茶色土		平安	AL-AM24～25
1149		小穴	木製品?本村?成木?出土。	黒茶色土		平安	AM26
1150	267SX1150	整地層	調査区北西部分の黒灰色土層。	黒灰色土		9世前後	AN30～32
1151		小穴群		黒茶色土		平安	AL-AM26～27
1152		小穴	柱材遺存。	黒色土		平安	AL26
1153		小穴群		茶色粘土		平安前～	AS-AS27
1154		小穴群		茶色粘土		奈良～	AS25
1155	267SE1155	井戸		淡灰色粘土→淡灰色土		又期	AS23
1156	267SX1156	溝	東西に走向。	茶灰色土		奈良～	AS25
1157		小穴群		黒色土	1157→505	平安	AL32
1158		小穴群		黒色土	1158→1142	平安	AM32
1159		小穴群		灰色土		平安	AM-AS19
欠番							
1161		小穴群		黒灰色土		平安中～	AF23
1162		小穴群		黒灰色土		平安	AF21～22
1163		小穴		黒灰色土		平安	AF21
1164		小穴		黒灰色土		平安	AF23
欠番							
1166		小穴群		灰色土		平安	AG22
1167		溝	南北に走向か。	黒茶色土		奈良～	AG22
1168	267SD1168	溝	南北に走向。古い絡溝か?	黒色土		平安前～	AF-AG22
1169		小穴群		茶灰色粘土(茶色粘土塊含む)		奈良～平安	AF23
欠番							
1171		小穴群		灰茶色粘土		平安	AF23
1172	267SB1125g	小穴	S-1135g柱穴と同跡。柱材あり。	黒色土		平安	AF24
1173	267SB1135d	小穴	S-1135d柱穴と同跡。柱材あり。	黒色土		平安中～後	AF24
1174		小穴群		黒色土		平安	AG23
欠番							
1176		小穴		茶灰色粘土(瓦敷)		奈良～	AG23
1177		小穴群		黒色土	1186→1177	平安後	AD-AE23
1178		小穴群		黒色土		平安前～中	AD23
1179		小穴群		茶灰色粘土		奈良～平安	AE23
欠番							
1181		小穴群		黒色土		平安前～	AF24
1182		小穴群		茶灰色粘土		平安前～	AF24
1183		小穴群		灰色土		奈良～	AF24
1184		小穴		黒色土		平安前～中	AF24
欠番							
1186		溝	南北に走向。	黒色土	1177→1186	平安前～中	AD-AE23
1187	267SX1187	小穴	奈良期遺物は少しあり。土師出土。	黒茶色土		平安前～中	AG21
1188		小穴群		灰茶色土		平安前～	AF-AG22
1189		小穴群		黒色土		奈良～平安	AS18～20
欠番							
1191		小穴群		灰茶色粘土		平安	AG24
1192		小穴群		茶色粘土		奈良～平安前ヵ	AG24
1193	267SB1193	溝	S9122F・1231と関連か。	茶褐色土		8世前～	AF25
1194		小穴群		黒色土		平安前～中	AG26
欠番							
1196		たまり		黒色土			AF19～20
1197	267SX1197	小穴	柱根木片残存。	灰色粘土		平安前～	AG26
1198	267SD1198	溝	南北に走向。	黒色土		平安前～	AF26
1199	267SX1199	小穴群		黒色土		平安前～	AG26
欠番							
1201		小穴群		黒灰色土		平安中～	AL28～29
1202		小穴群		黒灰色土		平安前～中	AS19～21
1203		小穴群		黒灰色土		平安前～中	AM-AN21～22
1204		小穴		灰茶色粘土		奈良～	AS22
欠番							
1206	267SX1206	小穴群		黒灰色土		9世前～	AS-AS23
欠番							
欠番							
欠番							

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
欠番							
1211		小穴	柱根木片残存.	白色土1（脚方）→灰色粘土（柱痕）			AG26
1212		小穴	柱根木片残存.	白色砂（脚方）→黒色土（柱痕）		平安	AG26
1213		小穴		灰黒色粘土		奈良～	AG26
1214		小穴	根石あり.	黒灰色土		奈良～	AH25
欠番							
1216		小穴群		灰黒色粘土		奈良～	AH25
1217		小穴群		灰色粘土		奈良～	AF26
1218	(267SB040n)	小穴群	SB040nを一部に含む.	黒色土		～平安前	AF26
1219	267SX1219	小穴		灰黒色粘土		平安前～中	AF25
欠番							
1221		小穴群		黒色土		平安前～中	AD-AE22
1222		小穴群		黒色土		平安前～中	AC-AH19～21
1223		小穴	奈良遺物多い.	黒色土→灰茶色粘土（遺物の分別はない）		平安	AG25
1224	267SX1224	小穴群		黒色土	SB003→1224	平安前～中	X18～19
欠番							
1226		小穴群		灰黄色土		平安前～中	X19
1227		たまり	遺物は平安中～.	黒色土	SB560→1234→1227	平安中～	AF27
1228		小穴	板石と思われる石が底から出土.	黒色土		平安前～中	AH25
1229	267SD1229-1231	溝状	南北に走向. S-1231と同一溝. S-337としても遺物取り上げ.	黒色土		古代	AH25
欠番							
1231	267SD1229-1231	溝状	南北に走向. S-1229と同一溝.	黒色土		平安前～	AH25
1232		小穴群		黒色土		奈良～平安	AH25
1233		小穴		灰茶色土			AH25
1234	267SX1234	たまり	遺物は平安前～中.	茶色土	SB560→1234→1227	平安前～中	AF27
欠番							
1236		小穴群	奈良遺物も多い.	黒色土		平安前～中	AE26
1237		小穴群	時代不明.	黒色土		平安	AH23
1238	267SX1238	小穴群	1234除去後検出. 遺物は平安前～中.	黒色土		平安前～中	AF27
1239		小穴		灰茶色土		奈良～	AE26
欠番							
1241		小穴群		黒色土		平安前～中か	AB-AC29～22
1242		小穴群		灰色土		平安中～後	AA19～
1243	267SX1243	小穴		黒色土		弥生～古墳～	AC19
1244		小穴	時代不明.	灰茶色土		奈良	AH21
欠番							
1246		小穴群	時代不明.	灰茶色粘土		奈良～	AD20-21
1247		小穴	遺物は奈良～.	茶色粘土		奈良～	AG24
1248		小穴		灰茶色土		奈良～	AG25
1249		小穴	時代不明.	黒色土		奈良～	AG25
欠番							
1251		小穴群	時代不明. 平安前～中の遺物多い.	黒色土		平安前～中	AD-AE24
1252		小穴		灰茶色土		平安	AC25
1253		溝状		黒色土		平安後	AH24
1254		小穴群		黒色土		～平安前	T-AA26～27
欠番							
1256		小穴群				奈良～	Y27
1257		小穴群		黒色土	1257→592	奈良～平安	X-Y27
1258		小穴群		灰茶色土		奈良～	X-Y25-26
1259		土坑		灰黄色土（黄色土塊含む）		平安後	Y22
欠番							
1261		小穴群		黒色土（柱痕）→白色土		平安	X-Y24
1262		小穴群		茶色砂		平安	X～AA22～24
1263		小穴群				奈良～平安前	X～AA22～23
1264		小穴群				縄期	X～AA22～23
欠番							
1266	267SX1266	小穴群		黒色土		平安中～後	T-U25～26
1267	267SX1267	小穴群		黒色土		奈良～平安	V-W25～27
1268		溝状	560に沿接して南北に走向.	黒色土		奈良～	W23
1269		小穴群		黒色土		奈良～平安	V-W26～27
欠番							
1271		小穴群		暗色土		奈良～平安	W26～27
1272		小穴群		灰茶色粘土		奈良～	V-W23～24
1273		小穴群		黒色土		奈良～平安中	U-V22～23
1274	267SK1274	土坑（井戸?）	上面の遺構に切られる. 井戸の可能性がある.	暗色砂（灰色粘土混じる）		平安後	V27
欠番							
1276	267SX1276	たまり	時代不明. 奈良遺物多い.	黒色土		縄～縄期	U22～23
1277		小穴群		暗色土		平安	V27
1278		溝状		灰色土		奈良～	W26
1279		たまり×溝状		暗色土		平安	T24
欠番							
1281	267SX1281	小穴群	奈良遺物多い. 白磁椀IV-2は混入か. 須恵器椀c（搬入品）出土.	灰茶色粘土		奈良～平安	W-X20～22
1282		小穴群		暗色土		奈良～平安	T～V 21～22
1283		土坑		黒色土		平安	AE27
1284		土坑		黒色土	1284→260	平安前	AC-AD24
欠番							
1286		小穴群		黒色土		奈良～平安	AB-AC24

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

通番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時期	地区番号
1287	267531287	小穴	5-1281出土の灰釉陶器椀が接合したため本遺構に帰属させた。	褐色土	1287→1282	平安前～中	Y21
1288		小穴	柱痕あり	黒灰色土	1288→1283	平安	AE27
1289		小穴	柱痕あり	黒灰色土	1289→1283	平安	AE27
欠番							
1291		小穴		黒色土	1291→1296	平安	AD27
1292		小穴		黒色土		平安	AD27
1293		小穴		黒色土		平安	AD27
1294		小穴		黒色土		平安	AD27
欠番							
1296		土坑状		黒茶色土	1296→560	平安	AD27
1297		小穴		黒灰色土	1297→560	平安	AE27
1298		小穴群		黒灰色土		平安前～中	AA+AB25～28
1299		小穴群		黒灰色土		平安中～後	S～W 18～19
欠番							
1301	267531301	小穴群		茶色土	1318→1301	平安後	S-T18～19
1302		溝		茶色土	7007→1302	平安	U19
1303		小穴群		黒色土	1303→560新粘	平安後か	A124
1304	267531304	小穴	場所不明。	黒色土		平安	AG30
欠番							
1306	267531306	小穴群		黒色土		平安後	Y～AB 20～23
1307		たまり		茶色土		平安	AA19
1308	267531308	小穴群		茶色土		平安	T-U20
1309		たまり×溝状		茶色土	1312→1309	平安後～	R21
欠番							
1311		たまり		黒色土	1318→1311	平安前～中	T20
1312	267531312	たまり×溝状		黒色土	1312→1309	平安後	R21
1313	廃土	調査後埋戻土	1次目遺構の調査後埋戻し後再発掘したもの。よって遺構ではない。			～	Y21
1314		調査後埋戻土	2次目遺構の調査後埋戻し後再発掘したもの。よって遺構ではない。			～	Y20
欠番							
1316	267531316	たまり×土坑		灰茶色粘土	1317→1316	平安後	S19
1317		溝	奈良～平安前の遺物がわずかに出土。	茶灰色土	1317→1316	平安前～	S18
1318	267531318	溝	奈良時代の遺物出土。灰茶色土層と同一。	茶灰色土	1318→1301	奈良	T18～20
1319		たまり		黒色土		平安	R20-21
欠番							
1321		小穴×たまり	赤っぽい土師器片多い。	茶灰色土		平安	S19
1322		小穴	灰茶色土層に切り込む。	淡灰色土		平安か	AC19
1323		小穴	灰茶色土層に切り込む。	淡灰黄色土		奈良～平安前	AB19
1324		小穴	灰茶色土層に切り込む。	淡灰黄色土		古代	AE19
欠番							
1326		小穴群		淡灰色土		平安	X27
1327		小穴群	遺物から12時期不明。	淡灰色土			X24～25
1328		小穴		灰褐色土		奈良～	W22
1329		小穴		淡灰色土		古代	Y22
欠番							
1331		小穴群		淡灰色土		平安	U24～T24
1332		小穴		灰黄色土		平安?～	U23
1333		小穴群		淡灰色土		奈良～	X20～22
1334		小穴		淡灰色土		奈良～	X20
欠番							
1336		小穴群		淡灰色土		奈良上平安	U～W20～21
1337		小穴	縄片のみ出土。	灰褐色土		古代	Y21
1338		小穴	縄片のみ出土。	淡灰色土		古代	Y22
1339	267531339	小穴		灰茶色土		平安前	Y22
欠番							
1341	267531341	土坑		灰褐色土	2c後～末		Y26
1342		小穴群	上面の腐りのこしか?	淡灰色土		平安中	Y22～23
1343		小穴群		淡灰色土		平安	AF26～27
1344		小穴		淡灰色土		平安	AG24
欠番							
1346		小穴	底部に木片あり。	淡灰色土		平安	AE25
1347		小穴群		灰褐色土		奈良～	AC～AD23
1348		小穴		灰褐色土		奈良～	AC25
1349		小穴群		淡灰色土		平安前～中	AG30
欠番							
1351		小穴群		淡灰色土		平安	AF30
1352		小穴群		黒灰色土		平安前～中	AH18～21
1353		小穴群		黒灰色土		平安前～	AL～AM23
1354		小穴群		灰色土		平安	AK21～AL22
欠番							
1356		小穴	柱痕片あり	淡灰色土		奈良～	AH20
1357		小穴群		黄灰色土		平安前～中	AH18～19
1358		小穴		黄灰色土		平安	AT20
1359		小穴群		黄灰色土		奈良～平安	AH21～22
欠番							
1361		小穴		黄灰色土(脱力)→黒色土(柱痕)		奈良	AH21
1362		小穴		黄灰色土		平安～	AH22
1363		小穴		黄灰色土	1363→1359	平安	AH22
1364		小穴群		黄灰色土	1364→1366	平安	AH23
欠番							
1366		小穴群		黒灰色土	1364→1366	平安	AH23
1367		小穴群	根ごり土器	黒灰色土		平安	AH24

大宰府条坊跡第267次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	備考	現土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時期	地区番号
1368		小穴		黒灰色土	1368→1372	平安前～中	AK23
1369		小穴		灰褐色土		平安	AH24
欠番							
1371		小穴	柱根材あり，S-401の掘り残し。	黒茶色土		平安	AG21
1372		小穴		黒灰色土	1368→1372	奈良～	AH23
1373	267S1373	小穴		黄灰色土		平安	A125～26
1374		小穴		灰茶色粘土		平安	AH25
欠番							
1376		小穴群		黒灰色土		平安	AH25
1377		小穴群		黒灰色土		平安前～	AH～A126～27
1378		小穴群		黒灰色土		平安	A131～32
1379		小穴		黒灰色土		平安	A124
欠番							
1381	267S1381	小穴	土師器小皿×小杯（手づくね，摩耗）	黒灰色土		奈良～	A124
1382		小穴	柱根材あり，遺物なし。	灰茶色粘土			AH26
1383	267S1383	小穴群	遺物は一段下げて取り上げ分	黒灰色土		平安中～後	AH～AL27
1384		小穴群	遺物は一段下げて取り上げ分	灰褐色土		平安	AL27
欠番							
1386		小穴群	遺物は一段下げて取り上げ分	黄灰色土		平安	AH25～26
1387		小穴群	遺物は一段下げて取り上げ分	黒灰色土		平安	AL25～26
1388	267S1388	小穴群	遺物は一段下げて取り上げ分	黒灰色土		奈良～	AH25
1389		小穴群		茶色土		奈良～平安	AK19
欠番							
1391	267S1391	小穴群		暗灰色土		平安中～後	AG27～28
1392	267S1392	小穴群		黒灰色土		平安	AH32
1393	267S1393	小穴群		黒灰色土		平安	AK24～25
1394	267S1394	3面遺構群概		灰茶色砂		平安前	AL28
欠番							
1396	267S1396	土坑状		茶褐色土	765-795（土敷道路）→1396	平安	AK21
1397		小穴群		黒灰色土		奈良～平安	AL25
1398	267S1398	溝	南北に走向。	黒色土	1402-1406→1398	平安前～中	AL～AK26
1399	267S1399	溝状		黒色土		平安前～中	AL24
欠番							
1401		溝状	遺物は奈良～。	黄灰色土		奈良～	AK25～26
1402	267S1402	土坑		黒色土	1402→1398	平安前～	AL26
1403	267S1403	小穴群	機所不明，奈良の遺物がほとんど。	黒灰色土		奈良～平安	AL～AK27
1404	267S1404	土坑状		黒灰色土		平安前～	AM26
欠番							
1406	267S1406	土坑状		黒色土	1406→1398	平安前	AM26
1407		溝		黒灰色土		VIII期	AK25～26
1408	267S1408	溝		黒灰色土			AK23～24
1409		土坑		黒灰色土			AK23
欠番							
1411	267S535	土坑状	上面遺構の掘り残し，S-535の一部。	灰色粘土		C期～	A131
1412	267S1412	小穴	上面遺構の掘り残し，獣骨頭部あり。	黒色土		平安中～後	A131
1413		小穴		灰白色土		奈良～平安	AH25～26
1414		小穴	柱	灰灰色土		平安	AH23
欠番							
1416		小穴		灰灰色土		奈良後～平安初	A123
1417		小穴		灰褐色土		平安	A123
1418		小穴		灰灰色土		平安前	A126
1419		小穴		灰黒色土		～平安	A126
欠番							
1421		小穴群		灰灰色土	1421→650	平安前	AM29
1422		小穴		茶灰色土	1422→905	平安	AH31
1423		小穴		灰灰色土	1423→945	VIII～IX期	AJ23～24
1424		小穴群		灰灰色土		平安前（VIII-1）	AM26～27
欠番							
1426	267S1426	小穴群	交差点北東側IC面検出pit。「玉名」墨書須恵器坏a。	灰灰色土		平安前	AL27
1427		小穴		灰灰色土		平安前	AJ22
1428		小穴群	通行痕	青灰色土		平安前	AI30
1429		小穴群		茶灰色土		奈良～平安	AH30
欠番							
1431		たまり		灰褐色土		平安	AH31
1432		小穴		灰灰色土		奈良～	AL21
1433		小穴群		灰灰色土		奈良～平安	AL22
1434		小穴群		灰灰色土		奈良～平安	AL～AM25
欠番							
1436		小穴群	S-785-T95除去後検出，地山に切り込む。	灰褐色土		～V～VIA期	AK25～26
1437	267S1437	土坑		灰褐色土		X期前後	AJ28
1438	267S1438	土坑		灰褐色土		平安前	AK28
1439		土坑		灰褐色土		平安	AJ27
欠番							
1441	267S1441	帯状硬化面	交差点中央分東西に走向。	茶白色砂	1441→765	VIII期～	AL28～30

■ 写真図版 ■

大宰府条坊跡第 267 次調査　第 1 調査面　北半部を北上空から望む

大宰府条坊跡第 267 次調査　第 3 調査面　調査区から四王寺方面望む（南から）

大宰府条坊跡第 267 次調査　二日市方面を望む（上が南）

大宰府条坊跡第 267 次調査　267SB700　検出状況　人が立つ場所が柱穴（上が東）

267SE005　井戸枠検出状況（西から）

267SE160　井戸曲物検出状況（東から）

267SE060 黒色土
土器廃棄状況　近景（北から）

報告書抄録

ふりがな	だざいふあと
書名	大宰府跡　2
副書名	大宰府条坊跡　第267次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ巻号	141集
編著者	井上信正、柳智子、塩野青平、下西大輔、大塚正樹、中島恒次郎
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号
発行年月日	2022（令和4）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	条坊 【概山推定要】	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	座標 X	座標 Y	調査期間 開始	調査期間 終了	調査面積 ㎡	調査原因
だざいふとようびちょう 大宰府条坊跡　第267次	左京13・14条2坪	そざく 朱雀2丁目	402214	2300050-267	55715	-44700	20070201	20080926	2,310	商業施設

所収遺跡名	種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
大宰府条坊跡　第267次	都城	奈良時代 平安時代	条坊路、掘立柱建物、井戸、土坑	須恵器、土師器、輸入陶磁器 白玉製丸玉、石製品	

太宰府市の文化財 第141集

大宰府跡　22

－特別史跡大宰府跡保存管理区域内発掘調査－

令和4(2022)年3月

編集　太宰府市教育委員会

発行　〒818-0198

福岡県太宰府市観世音寺1丁目11番1号

印刷　福岡印刷株式会社

〒812-0892

福岡県福岡市博多区東那珂1丁目10番15号